

はじめに

自校史を振り返ることが、教育機関で重要視されるようになって久しい。私立学校では長い歴史を持つ学校は勿論のこと、そうでない学校でも節目の周年ごとにまとめが刊行されている。国立・公立の学校においても二〇年ほど前から多くの学校で次々に沿革史が刊行されてきた。それはそれぞれの学校が自校の沿革をたどることを通して、その存在意義を確かめ、世間に問い、広げていくことが重要であるとの認識が広がったことによる。

本学園においては、「学園五十年を語る」（昭和二九年発行）、「私学人相山正式」（昭和五〇年発行）、「相山女学園七十五年史」（昭和五五年発行）、「相山女学園百年史」（平成一九年発行）が発刊されていて、それにより自校史を振り返ることができる。「百年史」においては、その編集方針として、相山の教育とは何であったのかその内容を検証し、自己確認し、教育の推進力の「鉱脈」を跡付けてその意義を継承するという主旨が編集後記に書かれていて、まさに「未来への指針としての学園史」となっている。

ところでこの「百年史」では、学園の年史である「糸菊」から様々な文言が引用されている。特に創設者のことばは数多く「糸菊」から引用されているが、当然のことながら紙面の都合上全文が引用さ

れることは稀である。そこで本書は、「糸菊」などの出版物の中で引用されてきた創設者のことば、および、創設者の没後現在までの歴代の理事長・学園長のことばを中心に、その全文を、時代ごとに、また学園のあゆみと日本・世界の歴史を対比させながら掲載した。その趣旨は、実際のことばを通して、その時代の生の姿を感じ取りながら自校史を振り返る資料のひとつとすることである。

ここに掲載したことばは、第一に教育目標・内容に関することば、第二に学園の節目に関することば、第三に教育に関する随想を念頭に選んだ。ことばの多くは「糸菊」からによるが、他の出典においてもできるかぎり原典を掲載するようにした。

この冊子が、明治・大正・昭和・平成という時代の流れの中で、学園の教育がどのように変遷してきたかを辿り、変わったことと変わらないこと、未来に生かしたいことなどを、実際のことばを通して考え、「相山」の教育とは何なのかについて、学園に関わる（関わった）一人ひとりが相山の教育の語り部になる、そのための参考資料として利用されることを期待するものである。

平成二十三年四月

相山歴史文化館

目次

ことば

明治・大正

名古屋裁縫女学校設立の趣旨	3
會員諸嬢に告ぐ	4
婦人と職業	5
衣服の起源	7
日本服の改良すべき點	12
女子の技芸教育	22

我國の女学校には我國の特色あるべし	25
女子教育の覺醒時代	28
相山高等女学校併設に就て	31
我邦固有の崇高なる婦人道	33

不徹底なる裁縫教授	37
本校十五周年記念式に臨みて	40

米國漫遊雜感	44
女子の運動熱勃興に就て	48
創校二十年の辭	51

昭和（終戦まで）

財團法人相山女子學園の組織成る	57
創立二十五周年	58
女子専門學校開校記念式に臨みて	

西曆

和曆

学園のあゆみ

1905	明治	38	名古屋裁縫女学校開校（相山女学園の創始）
06		39	『糸櫻』創刊 和風会発足

09		42	「名古屋女子技藝学校」を併置
----	--	----	----------------

10	大正	2	第一回同窓会（和風会總會）『糸櫻』を『糸菊』に改名
13		3	校主相山正明逝去 相山正式新校主就任

14		4	相山高等女学校開校
----	--	---	-----------

15		5	洋服試用
16		6	相山正式校長渡米 校旗校章制定

17		7	相山第一高等女学校開校 相山第二高等女学校開校（山添町）
18		8	名古屋裁縫女学校と相山高等女学校を「相山女学校」に変更
19		9	制服を制定

20		10	相山第二高等女学校室内プール竣工
21		11	相山女学園 財団法人として認可
22		12	相山女子専門學校開校
23		13	金剛鐘（カリヨン）設置
24		14	前畑・小島両選手ロサンゼルスオリンピック出場（前畑2位）

25	昭和	15	元
----	----	----	---

社会一般

日露戦争	
満州鉄道開設	

朝鮮総督府設置	
---------	--

第一次世界大戦始まる	
アインシュタイン「一般相対性理論」	
ロシア革命	
第一次世界大戦終わる	

国際連盟発足 初のメーデー	
ワシントン会議	
関東大震災	
メートル法実施	
治安維持法 普通選挙法公布	

第一回普通選挙	
世界的大恐慌始まる	

満州事変	
五・一五事件 満州国を承認	

創立三十周年記念式の辭	孝経幢除幕式の辭	61
梶山女學園々歌		69
孝経解題		70

大東亞戰爭開始せらる	75
創立記念日式辭	78

昭和（創設者梶山正式没まで）

十三徳目 實踐反省事項	83
戰災復興と民主化とに多忙を極めた一年有半	87
相山女学園教育方針（学園教育のあり方）	88
大學開設記念式挨拶	90
女子大學の門ひらく	92
陣痛こゝに四十有五年	94
『五十年史』序にかえて	94

$$\begin{array}{cccccccc} 4 & 4 & 4 & 4 & 4 & 3 & 3 & \\ 5 & 4 & 3 & 2 & 1 & 0 & 9 & 8 \end{array} \quad \begin{array}{ccccc} 3 & 3 & 3 & 3 & 3 \\ 7 & 6 & 5 & 5 & 3 \end{array}$$

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 10 8

学園創立30周年 孝経幢建立 学園歌制定

ベルリンオリンピック 前畑選手優勝 小島選手（6位入賞）

相山女子商業学校開校（相山女学校廃止）

相山女子専門学校の一部と体育館焼失

相山女子専門学校附属幼稚園開園

相山第一高等女学校生徒、この頃より学徒動員

幼稚園「戦時保育所」となる 学園の軍需工場化『糸菊』休刊

名古屋大空襲 相山第一高等女学校焼失 幼稚園休園

愛知航空機工場空襲により職員生徒爆死

國際連盟を脱退
 第一回芥川賞・直木賞
 二・二六事件
 日中戦争始まる（盧溝橋事件）
 東山動植物園開園
 国家総動員法公布
 第二次世界大戦始まる
 日独伊三国軍事同盟成立
 太平洋戦争始まる
 米機二機初めて名古屋空襲
 学徒出陣 女子勤勞挺身隊を創設
 B 29名古屋本格的空襲 東南海地震
 広島・長崎に原爆 ポツダム宣言受諾
 太平洋戦争終わる 國際連合発足

$$\begin{array}{cccccc} 5 & 5 & 5 & 5 & 5 & 5 \\ 8 & 7 & 6 & 5 & 4 & 3 & 2 & 1 & 0 & 9 & 9 & 8 & 7 & 6 \end{array}$$

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 24 23 22 21

相山中学校開校
 相山女学園高等学校開校
 校に改称
 相山女学園大学開学
 『糸菊』復刊
 相山女学園大学附属幼稚園として再開
 学園旗制定 学校法人相山女学園として認可
 にプール再建
 相山女学園大学附属小学校開校
 学園創立50周年 『学園五十年を語る』刊行
 孝経幢復興
 中・高新校舎竣工

日本国憲法公布
教育基本法・学校教育法公布
六・三制義務教育開始
新制高等学校発足
湯川秀樹 ノーベル物理学賞
私立学校法公布
朝鮮戦争始まる
対日講和条約調印 日米安保条約調印
NHKテレビジョン本放送開始
名古屋テレビ塔完成
ビキニ水爆実験「第五福竜丸」被爆
初の原水爆禁止世界大会（広島）開催
国際連合加盟
南極観測隊 昭和基地開設
ソ連初の人工衛星スプートニク
名古屋市営地下鉄開通
関門トンネル開通

創立記念日を迎えて	98
大学竣工式に臨みて	104
人間橋由来記	108

昭和（創設者相山正式没以降）

創立記念日を迎えて	111
創立六十周年記念式典に際して	116
創立六十四周年、体育館兼講堂落成を祝つて	119
創立六十四周年、家政学部二十周年	122
短期大学部開設を祝つて	122

七〇周年を学園反省の年に	124
--------------	-----

中高教育審議会の発足	125
中高一貫教育 教育目標―人間になろう	129
教育の中に人間尊重の精神を	129

今日なお新しい人間教育―学園創立75周年にあたって―	130
創立七十五周年記念式式辞	131
「七十五年史」序文	136

相山女学園の教育変遷「人間になろう」まで	139
----------------------	-----

5	9
6	0
6	1
6	2
6	3

6	4
6	5
6	7
6	9
6	9
7	0
7	2
7	3
7	5
7	6
7	7
7	8
7	8
8	0
8	1
8	2
8	3
8	5
8	6
8	7
8	8

34	35	36	37	38
----	----	----	----	----

伊勢湾台風襲来で学園の被害甚大	34
江坂選手 ローマオリンピック出場	35
星が丘キャンパスに大学家政学部完成移転 人間橋竣工	36

39	40	42	44	44	47	45
----	----	----	----	----	----	----

相山正式学園長（学園創設者）逝去	39
相山今子（学園創設者夫人）逝去	40
同窓会「いとぎく会館」竣工（山添キャンパス内）	42
大学短期大学部開学 大学図書館開館 中・高体育館兼講堂「和風館」竣工	44
大学文学部（国文学科・英文学科）開設	47

48	50	51	52	53	54	55
----	----	----	----	----	----	----

学園創立70周年『私学人相山正式』刊行	48
高・中図書館竣工 大学院家政学研究科（修士課程）開設	52
愛知郡日進町に日進グラウンド開設	53
中高一貫教育開始	53
学園創立75周年『相山女学園七十五年史』刊行	55

56	57	58	60	61	62	63
----	----	----	----	----	----	----

大学図書館増改築竣工	56
中・高第二体育館「相山スポーツセンター」竣工	57
大学会館 希望橋（のぞみはし）竣工	60
星が丘キャンパス 昭和61年度名古屋都市都市景観賞受賞	61
大学人間関係学部開設（日進キャンパス）	62

皇太子明仁 正田美智子さんと結婚	
安保闘争 カラーテレビ放送開始	
堀江謙一ヨットで太平洋を単独横断	
ケネディ米大統領暗殺	

東海道新幹線開業 東京オリンピック	
公害対策基本法公布	
アポロ11号人類初の月面着陸	

万国博覧会（大阪）	
あさま山荘事件	
沖縄返還 日中国交正常化	
第四次中東戦争でオイルショック	
沖縄国際海洋博覧会	
ロッキード事件	

日中平和友好条約調印	
------------	--

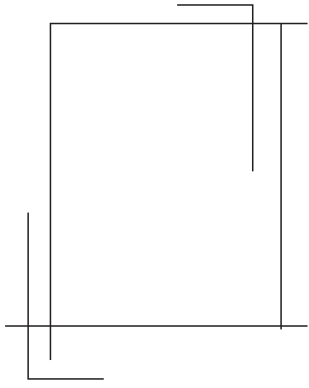
スリーマイル島原発事故	
イラン・イラク戦争始まる	

スペースシャトル打ち上げ	
--------------	--

東京デイズニールランド開園	
科学博（つくば） 日航機墜落	
男女雇用機会均等法施行	
チェルノブイリ原子力発電所事故	
国鉄民営化	
青函トンネル開通	

[illegible]

明治・大正



明治・大正

名古屋裁縫女學校設立の趣旨	明治三十八年「愛知教育」	3
會員諸嬢に告ぐ	明治三十九年「糸桜」	4
婦人と職業	明治三十九年「糸桜」	5
衣服の起源	明治三十九年「岐阜県教育会」	7
日本服の改良すべき點	明治四十年「糸桜」	12
女子の技芸教育	明治四十一年「愛知教育」	22
我國の女學校には我國の特色あるべし	大正二年「糸菊」	25
女子教育の覺醒時代	大正三年「糸菊」	28
相山高等女學校併設に就て	大正五年「糸菊」	31
我邦固有の崇高なる婦人道	大正六年「糸菊」	33
不徹底なる裁縫教授	大正八年「岐阜県教育会」	37
本校十五周年記念式に臨みて	大正八年「糸菊」	40
米國漫遊雜感	大正十年「糸菊」	44
女子の運動熱勃興に就て	大正十三年「糸菊」	48
創校二十年の辭	大正十四年「糸菊」	51

名古屋裁縫女學校設立の趣旨

維新以降百事駁々として、其歩を進め、文物制度の燦然たるものありと雖、其實歐米の文華を移植して、未だ我邦固有の國體人情風俗習慣によく調和せざるものあり。乞ふこれを女子教育に就て視よ、現時頗る進歩の觀あるも、未だその根底を牢うし、その目的に向て直進するに至らず、殊に女子の技藝教育に至ては、その進歩最も幼稚にして轉た嫌焉の念に堪へざるものあり。かの裁縫の如き未だ實用的教科の価値すら詳にせられず、教授の方法また甚だ進まず、随て世の父兄の囑望に添はざるもの甚だ多し。この外編物、造花、刺繡等の如き女子に最も適應せる技藝に在ても、その傳授の方法頗る遺憾とすべきものあり。惟ふに女子は、國民の半數を占むるものにして、其優遊逸樂すると其奮勵興起することによりて、國運の消長に關することの大なるは多言を要せざる所なり。今や軍國多事女子をして、奮勵興起せしむること最急務に屬す、而してその技藝教育の發達を圖るは、就中急務中の急務たり、されば之が教育を完からしむべき組織的學校の設立なかるべからず。然るに當市地方には不幸にして未だこの種の完全なる學校の起りたるを聞かず。憂國の士誰がこれを遺憾ならずとせんや。當市に於て本校を設立したる所以のもの實に茲にあり、而してその期する所は、從來の女子技藝教育の方法を改善確立し、技藝は容易にして確實に練熟せしめ、

以て實用上遺憾なからしめ、更に教化を深くし、以て女子の本分を完うする淑女たり、良妻賢母たるべきものを養成せんとするにあり。若し夫れ本校設立に際して、かの名士大家の氏名列してこれを招牌となすが如き、時弊を趁はざるは別に本校に確信あり自賴あるが故のみ、今日の時勢は決して空名に隨喜すべき時にあらざればなり、願くは世の教育家並に父兄諸君幸に前述表白せる本校設立の趣旨に對し賛同せられ、以て女子技藝教育の大に金城城下に於て發揮せらるるの機運に向はしめられんことを。

本校の特色

- 一、順序よく教授事項を配列して學習に便すること
- 一、從來の教授法を改良して教育的に教授すること
- 一、最も短日月に最も多くの事物を傳授すること
- 一、技藝の各方面に亘りて教授し實用的ならしむること

明治三十八年三月

名古屋市富士塚町二丁目

私立名古屋裁縫女學校

顧問 東京裁縫女學校校長渡邊辰五郎

校長 梶山正式

〔愛知教育〕第二二六号

會員諸嬢に告ぐ

梶山正式

創設以來未だ一年有餘に過ぎざる本校は、早くも三百名の生徒を收容し、本年一月以降工事中たりし新築校舎は、今や一棟先づ工を竣へ、やゝ設備の完全を告ぐるに至りぬ。嗚呼、一年前當時の入學生某嬢が本校の校舎を見て尼寺の古屋と誤りし奇談は今尚ほ諸嬢の記憶に新なるべし、寒風凜々たる嚴冬に小暗き障子を明け放ち外縁に座して自ら身を叱咤しつゝ、黽勉刻苦したる時代も亦諸嬢が一生涯忘るゝ能はざる所なるべし。今や之等は何れも過去の一夢と化し去り昔物語とはなり終りぬ、こたび新築校舎成れるを機とし茲に貴賓紳士の來臨を請ひて改めて開校の式を擧ぐるに會す欣喜何ものか之に若かむ。然れども諸嬢よ校舎の完備は未だ決して本校の榮譽とするに足らざるなり、内容の之に添ふものなくんば何の價か之あらむ。幸にして本校は從來その内容に於ては最も其の誇りとする所にしてよく私立學校の特色を發揮し主義常に貫して校風も漸次確立し溫雅優美の床しき間に充ち満ちたる活氣と進取の氣風とを保有し而して實學の旗幟轉々鮮明なるものあるを自覺せり、舊校舍破窓の下よく幾多の困苦を排してこの善良なる校風を開拓したる會員諸嬢の功績は蓋し本校沿革史上特筆大書して之を千載に傳ふるの價あるべし、會員諸嬢よ今後益々此の善良なる校風を助長し一は以て本校永久の基礎を固うし一は以て本會の根本を培養せられんことを祈る。

論 說

婦 人 と 職 業

相 山 今 子

近來我邦にも女子の職業教育が、大層勃興いたしまして東部に於ける幾萬の女學生中職業教育を以て目的とせる各種の技藝學校に通學せるものが、最も多きを占めつゝあるといふことは、大に注意すべきことであります。凡そ人間は資産のある人も無い人も貴い人も賤しい人も苟も世に生れ出でたる以上は、義務として夫れ相應に職業を営まなければなりません、職業は唯だ衣食の資を得る爲に必要なのではない、又單に收入を多くして財を増殖せしむるために營むのではありません、若し唯だ衣食を求むるが爲に職業を要するとか又單に財を増殖せしむるのが職業の目的であるのならば資産のあるものや資産の増殖を希はぬものは無職を當然とする譯であります、人の職業には是等の目的以外に實に貴い意味を持て居るものであります。

試に近郊に杖を曳いて四方の田園の景色を眺めて御覽なさい、我々の同胞が鋤を取り鋤を手にして如何に孜孜として其業を執つて居るか、朝は星を戴いて出で夕は月を踏んで歸りてもなほ且つ足れりとせず、夜は更に家に在りて他の仕事に従事するといふ有様であります、之を見て我々が獨り終日何の爲すこともなく飽食

論 説

暖衣貴重の光陰を徒費して、どうして心に愧ぢずに居られませうか我々が毎日用ふる器具調度は一つと多くの人々の額に汗して作られないものはない、然るに自分獨り何等社會に貢獻することなく空しく之を費してどうして忍びざるの感が起らずに居られませうか、たとひ家に多大の資産があるとしても今日衣食窮しないからといつても無職であつたならば、社會國家に對して何の面目がございませう、されば人は貴貧富に依らず必ず相應の職を求めて之に従事しなければなりません

我邦古來勞働を卑しむ風習がありまして婦女子などの家庭に在りて内職をすること等を愧ぢる様な習慣がございまして中流以上の家に生れたる女子等は何等の技能を持たないものが多いといふのは如何にも悲しいとであります、どうか斯ういふ風習を一日も早く打破したいものであります

然して右の如き陋習を一日も早く打破すると同時に我邦中流以上の婦人に適應せる職業を開拓せることは日の急務であります、裁縫、造花、編物、刺繡等が近來大に發達普及して之等の要求に應せんとしつつあるとは最も慶ぶべきことであります、併しながら是等諸種の技藝に關してはなほ研究の餘地が甚だ多いのでありますからどうか諸嬢と供に今後益々研究して大に婦人の職業を開拓し世の爲め國の爲めにいさゝかなりも貢獻したいことを存じます

學 術

衣服の起源

梶 山 正 弑

◎人間の身體は不都合なもの 人間の身體は實に不都合なものだ、寒ければ寒くないやうに、暑ければ暑くないやうに、年が年中、夫れ相應に衣服といふものを身に纏はなければならぬ。この世の中の人間が日々セツセと稼いで儲けた金の、少くも三分の一は、衣服のために消費せられつゝあるのである。之を他の鳥獸等の生活に比べると、誠に人間は餘計な所に精力を費さなければならぬ。造化の神は何故人間の身體ばかりこゝろに不都合なものに造られたであらう。併し之は強ち造化の神のみを恨むことの出来をい理由があるのである。

◎衣服は元寒暑を防ぐ爲めのものではあかつた 衣服

は元寒暑を防ぐためのものではあかつたと言つたらば誰しも一寸不思議に思ふであらう。併し衣服の起源に就て少しく研究したならば、それが全く事實であることを發見するであらう。従て衣食住の三つが必ずしも人間に缺くべからざるものでないといふことも了解するであらう。

◎太古の衣服 太古の人間がどんな衣服を着て居つたか、又何の爲めに着けて居つたか、數千年以前のものは殆んど一つも遺つて居ないから、今日では茫漠として知ることが出来ない。併し茲に、その太古用ひられた衣服はこんなものであつたであらう、それからどんな風に發達して來たものであるかといふことだけは、凡そ推究し得られる方法がある。それは先づ今日現に行はれつゝある世界各國人の服裝を調べて、之を比較して見るのである。世界には衣服の非常に發達した國と、半ば發達した國と、おほ極めて幼稚な國とがある。一軒の家に子供と大人と老人とがあれば、それ等を比較して、現在の子供が大きくあれば斯く大なる筋骨逞しき大人とあり、老いたる後は斯く白髪のお翁とあるべしといふことが想像せられ、又現在の老翁も數十年

の昔は斯かる血氣壯を人間であつた、又更に數十年前は斯かる愛らしき子供であつたといふことも推測し得らるゝと同じく、世界各國の發達せる衣服と、半ば發達せる衣服と、かは幼稚な衣服とを比較して見ると、現今の最もよく發達して居る衣服も元は斯かるものであつたであらう、又斯様な幼稚なものも末にはこんちに立派なものに發達するものである、凡て衣服は斯ういふ風な順序を経て發達して行くものであるといふことが、凡そ推測し得らるゝのである。

◎世界各國に行はれつゝある服裝 世界各國に現今行はれつゝある服裝を一々陳述するといふことは到底一朝一夕には出來ない。それで極くその概略を述べて見やう。所變れば風變るで、世界には年が年中身に一物も着けあいで、全く赤裸々で暮して居る人種がある。それは豪太利の極く南端で、その地方に於ては子供が生れると、生れたつきりで、何も纏はかいでそのまゝ成長して行くのである。而して大人にあつて後も無論そのまゝである。つまりこの國は衣服の無い國である。◎衣服の最も幼稚なる國 前に赤裸の人種のことを述べたが、それから一步進んだのが瓜哇やボルネオの住

民である。この地方では僅に腰のまはりにはのみ布を纏うて居る。之は布に限らかい、木の皮や荏のやうなものも纏うて居るものもある。言はゞ我邦の男子の褌の如きものである。

◎衣服のやゝ發達せる國 それから暹羅、マレー地方の島々に往くと、腰より下半身だけ風呂敷のやうなものを蔽うて居る。之等の國ではそれが習慣であるから、高貴なものでも斯の如き風をして居る。但し暹羅に於ては、近頃漸次佛蘭西の感化を受けて、上半分は佛蘭西風の服裝をして居るものも多い。殊に婦人の如きは、例の肩に瘡のあるやうな着物を着けて居るものが多い様にあつた。

次に亞弗利加の内地及び南洋諸島等に行くに、腰の廻りよりはもう少し高くあつて腋の下の所に布を捲いて肩より上を現はして居る。この國もそれが習慣であるから、それだけ匿して置けば、それで十分禮儀を充たして居るのである。

◎衣服の發達したる國 そこで、我が日本及支那朝鮮等の衣服を見ると、顔の部分、手の部分を出す外、他は悉く匿して居る。故に之等の國では之が習慣である

から、若し肩あごを脱いで居るものがあると、直に失禮であるといつて咎められる。併し、若し肌を出すことが失禮であるといふからば、手も顔も同じく肌の一部であるから、手や顔を出して居るのも禮を失ふ筈であるのだ。然るに手や顔は出してもよいといふのは畢竟習慣で、平常匿すべき習慣のついて居る所であるから現はしてはいけまいといふまでのことで、決して天然自然に極まつて居る譯のものではない。

又歐米の文明諸國では手も出すことを失禮であると思へられて居る。從來我日本では、手足を出すことは左程に失禮とは思はれなかつたのであるけれども、之等の歐米諸國と交際する様にあつてから、手に手袋を、足には足袋を穿たなければ互に失禮であると思ふやうにあつて來たのである。

◎眼ばかり出して居る國民 前述の如く歐米の各文明國では手の部分まで匿す習慣であるが、之だけ匿せば他に匿す所はいかといふと決してそうではない。即ち埃及及び土耳其地方に往て見ると、常に手や足を隠すのみならず顔もたゞ眼ばかり出して、他は悉く覆うて居る。故に一寸途中で人に遇つても、お互に、誰であ

るやら少しも分らないといふ有様である。

◎極端と極端 そこで一方の極端をいうて見ると、僅に腰の廻りのみに布片又は木皮等を纏ふものがあり。一方の極端をいうて見ると眼だけを出して他は悉く蔽うてしまふ所がある。而してこの腰の廻りをのみ纏ふものと雖も矢張り衣服の一種であると思ふべきであらぬ。何と云へば、衣服は、短いから衣服でない、長いから衣服である、大きいから着物だ、小さいから着物でないといふ理由は無いからである。

◎衣服の起源 現在の老翁は昔の子供である、現在の子供は未來の老翁である。現在のよく發達せる衣服も元は、現在或る野蠻國に行はれつゝある幼稚な衣服の如くであつたであらうといふことは推測せられ、現在の幼稚な衣服も、幾千年の未來には、現在の發達せる衣服の如く進歩するであらうといふことも想像が出来る。而して現今最も幼稚な衣服はどんなものかといふと彼の瓜哇ボルネオ地方で行はれつゝある腰部に纏ふ布片や木皮の類である。是が抑も衣服の起源である。◎衣服本來の目的 裝飾の爲めに起つたもの 之等腰部のみを被ふものが抑も衣服の源であるとすれば、衣

服の目的は決して寒暑を防ぐ爲めのものではなかつたといふ事が分る。何とあれば、寒いときには腰部のみ寒いといふ譯はない、必ず身体全体が寒さを感じる理である。暑いときも腰部のみ暑さを感じるといふ筈はちいのである。以て衣服といふものは決して寒暑を防ぐために起つたものではないといふことが分る。

既に衣服は寒暑を防ぐために起つたものでないとするば、何の爲めに起つたものであらうか。即ち所謂裝飾のために外からぬのである。裝飾といふことは如何なる野蠻國でも相應に發達して居るものであつて、彼の頸部に珠數の如きものを附けたり、手首や足首に輪をはめたり、耳に種々のものを懸けたりする。我邦にも此類の遺物が今日までいくらか遺つて居る。即ち腰部を木皮や莖や布のやうなもので纏ふのも、之等と同じく全く裝飾のために外からぬのである。

◎造化の神を恨むことは出来まい 之で大要衣服の起源も述べた積りである。衣服本來の目的も了解せられたことと思ふ。そこで、吾々の身體はよい、衣服を着なければ生活することが出来まいといふのは、之は造化の神が初めから斯の如く造り置かれたのでなく、

吾々は數千百年前の祖先から衣服といふものを纏ふ習慣をつけられたから、漸次身體の皮膚が退化して、外氣に對する抵抗力を減じて來たのである。つまり之は神の罪ではない自業自得である。

◎身體の退化 動物學者はいふ、彼の雞も元は野生の山鳥であつた、彼の家鴨も元は野生の鴨であつた、それを人間が飼養して、飛翔せしめまい習慣をつけたから、飛翔力が追々減少して現今の如く所謂退化したものである。又吾々が冬日に於て一度襟卷を用ひ初めると、夫れが習慣とあつて、偶々それを纏はまいと直ぐ風邪に冒されるやうにある。その他シャツでも、ズボン下でも、一度用ひる習慣をつけると、容易にそれを廢めることが出来まいことは諸君も日々御實驗のことと思ふ。是れ「着や着寒」といふ諺の起る所以である。學校生徒に日傘や襟卷を禁するがよいといふのも畢竟之がためである。

◎發達したる衣服の効用 衣服を纏ふ習慣を附けた爲めに、我邦を初め支那朝鮮並に歐米の開化した國の人間の身體が退化して甚だ不都合なものにあつたが、今更數百千年の昔に改めることは出来まいのみならず、

今日では衣服は種々お役目を持つやうにあつて、或は装飾のためにもあり、或は衛生上のためにもあり、禮儀のためにもあり、社會の階級を示すためのものにもあり、又時としては職業を示すためのものともあつて居るのである。故に今後は益々衣服といふものを發達せしめその種々ある目的を完全に遂げ得るやうに計らなければならぬのである。我が日本服に就ての意見はまた後日を俟つて述べることにしやう。

論 說

日本服の改良すべき點

梶 山 正 式

衣服本來の目的は寒暑を防ぐためのものではない。即ち裝飾にあるのだといふことは本誌第一號に詳しく陳述したのであるが今日では人間の身體が漸次退化して衣服を着なければ生活が出来ない言はゞ情けない體質になつて仕舞つたのである、随つて衣服の目的も寒き時に寒くないやうに即ち外界の冷たき空氣が直接肌に觸れて体温を奪ひ去ることの出来ない様に又暑き時には日光が身体に直射せぬ様に防ぐといふことが主たる目的に變じたのである。勿論衣服を着て容儀を整へるとか階級を示すとかいふことも大なる目的の一であるが身體の衛生上の必要から衣服を着るといふことが衣服の最も主たる目的であるといふことは言ふまでもない。されば衣服を調製する上に最も注意しなければならぬことは即ちこの衣服を仕立て上げたならば果して衛生に適ふ衣服が出来るといふことである。

衣服の種類は非常に澤山ある宛も國に依りろの言語が異なるが如く支那には支那服あり朝鮮は朝鮮服あり西洋には西洋の服あり隨つて我邦には亦他邦に見るべからざる固有の衣服がある、扱て斯の如く世界には國々

に種々異りたる衣服が現存して居るのである。茲に吾々が最も研究を要することは即ち是等諸種の衣服の中何れが人間の衣服として最も適切であるか、衣服としては何れが最も價値を有して居るかといふことである。併し之を解決せんとすれば先づ諸國の衣服の仕立方を知らねばならぬ、我々では日本服の外に所謂洋服及び支那服は研究科に於て授けつゝあるのであるが其他は餘り關係の密接でない所から未だ課しては居らぬ、随つてこの問題を解決するには其他の諸國の衣服をあらゐる説明しなければならぬ故に之は序を追て順次述べることにする。

今回は日本服の缺点を擧げて改良すべき点を述べたいと思ふのである、前にも申した如く衣服を調製するには衛生といふことを最も重きに置かなければならぬ、そこで先づ衛生上から視たる日本服の缺点を擧げて見よう、我が日本服は衛生上から視て甚だしき缺点を有して居るのである、予が諸嬢に向て大に記憶して置いて欲しいと思ふことは我が日本人の体格が一般に甚だ劣つて居るのは多く衣服の不完全から來たのであるといふことである、小學校を初め中學校、高等女學校等に於て年々体格検査をやる時に調べて見ると胸の扁平といふのが非常に多い、胸の扁平といふのは胸の板の様に平らで縦に細長いのが多い、而して体の前後の徑が甚だ少い、これは内部の諸機關殊に肺が壓迫せられてその位置を變じ發達不完全にして隨て身體の薄弱なことを示して居るのである日本人よかういふ體格の者が比較的に多い、それで外國人と競走等をやる時には實實的の事には意外に日本人の方が強いが長時間繼續する場合には何時も外國人の方が強い之は肺が弱いか

らである東京不忍池で年々自轉車競走があるがどうも外國人の方が遙かに勝を制する之等は固より技藝の訓練も大に關係するが亦体格の優劣も最も關係する、之等一斑に日本人の体格が劣等であるが之は日本の衣服が大なる原因の一つとなつて居る、某醫學博士も此説を唱へて盛に日本服の改良を絶叫して居る、

さて斯の如く日本人の体格が劣等であるのは衣服の不完全に起因することが多いのであるが然らば我々の日常着て居る衣服の何れの点が最も衛生上に適はぬのであるかといふと先づ

附・紐

日本人が産ると先づ如何様にして衣服を着せらるゝか、日本の服には附紐と稱する長さ紐があつて下前の附紐を左の八つ口から通して後ろに送り上前の附紐を右の腋の下を通して後方にて上前の附紐と手ごたへのする程相結ぶのが普通である甚しきは後方にて結ばずして更に前方に廻し又更に後方に送りて結ぶのである而して之が一枚ならよいが二枚も三枚も重ねて一枚毎に右の如く紐を締める、一体この附紐は大人と比較せると割合に上方に附いて居て之を結ぶと丁度胸を壓迫する様になつて居る、幼兒の體は軟弱なもので如何様にもなる、この胸を壓迫するために漸々天稟のよい身體を不具にして肺の位置を變じ不完全なる發育をなさしむる様になる

而して最早や五六歳に達したる時には如何に之を矯正せんと努めてもモ一効驗がない小學校に入つてから体操をやつてもモ一既に遅い遂に一代取り返し附かない不具者となり終るのである、

以上は着物の附紐のことであるが次に襠褌はつちんの附紐も最も害が多い襠褌の附紐は腰より上へ餘程手ごたへのするまで強く結ばないと直に下に下り落ちる、故に自然良くないと知りつゝも之を強く締める之れがやがて所謂鳩胸の原因になる女子には最もこの鳩胸が多い之れは湯卷をすることが一つの原因であらうと思はれる、女の袴は男に比して餘程上方に着ける習慣がある上方に着けた方が格好がよいからのことではあるが併し之が爲ために益々体格を悪くする、男子の袴の附紐は非常に長いもので幾重も幾重も體に巻き附けるるれでも下にすり下る、之は西洋のズボンの様子上よりつるといふことがないから自然長い紐で幾重も幾重も廻して固く締める必要がある、之が亦大に衛生上へ害があるのである、男學生の袴のつけ方を御覽なさい昔から行はれた様な紐の結び方では逆もすつていけないるれで無茶苦茶に腰に巻き附けて思ひ切り固く締めてるのすり下るのを防いで居る、甚だ衛生上宜しくない、前に申した着物の附紐、襠褌の附紐、湯卷の附紐、袴の附紐之等の附紐が我が日本人の體格を悪くしつゝあることを思へば附紐決して一小事なりとて忽せにすることは出来ない、吾人は一日も早く附紐の改良を斷行しなければならぬ

● 帶

次には帶である帶は着て居る着物の亂れを防ぐ道具である、然らば日本の帶のやうに窮屈なことをして幾重も幾重も廻す必要は少しもない殊に女の帶は普通のもので中高價なもので日本の婦人が少くとも七八圓の帶を持ち居らざるものは一人もないといつてもよい位であらう、一人七八圓として日本婦人三千萬人の帶の

代價を合算すれば實に二億一千萬圓の多きに上る、日本の婦人がこの帶を全廢すれば實に二億一千萬圓の節約をすることが出来るのである、之は經濟上の話であるがさてこの帶なるものが如何に我が日本婦人の體を苦めつゝあるか、試に日本の正服を着けたる婦人の有様を御覽なさい、彼等は宴席に就くも先づ如何なる山海の珍味も可成之を口にせざらんことを決心するではないか、之は若し多くを食ふときは獄中の囚人がサツクを以て苦めらるゝに似たる彼等の帶のために大に苦まなければならぬからである彼等が宅に歸りたる時を御覽なさい、先づ帶を解いて初めてヤレ／＼と大息する、ろの全身は帶のために汗流玉をなして居る、支那の婦人は纏足するといふて笑ふが却々日本婦人は巾廣き厚き帶を以て身體を不具になしつゝあるのである、日本婦人は二億一千萬圓の大金を投じて日々身體を不具になしつゝあるのである、吾人は衛生上經濟上一日も早く帶の改良を大に絶叫せねばならぬ

(未完)

糸 櫻

第貳卷第貳號

明治四十年六月二十日發行

論

説

日本服の改良すべき點

(承前)

梶 山 正 式

角 袖

身體が自由自在に活動すれば自然に健康となる、これを懶惰に保てば保つだけ身體を弱くするものであるから衣服裁縫の上に最も意を注がなければならぬことは之を着して身體を自由自在に働かすことが出来るやうにすることである、然るに今日の角袖といふものは大にこの目的に反して居る試に生徒の筒袖を着せる女學校に行き彼等が遊歩場に於ける活動の有様を見よ如何に輕快に活潑に嬉戯して居るか之を角袖の女學校生徒の何處となく鬱鬱に不快活なるに比ぶれば實に大なる差である昔源爲朝が長袖の輩何を兵法を知らんやと稱して賴長を嘲りたとあるが今尙ほ此朝廷の貴族的服裝が日本全國一般に行はれて居ることは誠に嘆はしいことと謂はなければならぬ、國運の消長は國民の元氣に依る國民の元氣には服裝も亦與りて大なる力があるものだといふことは前述の女學校の例でも分明である、又業務を執るにも多くの場合にこの袖が妨げる農工業の如き勞働には言ふまでもなく日常家庭に於ける些々たる仕事にも多く襦なまきを用ひねばならぬ、雜巾かけると

論 説

言つては襷をかけ掃除すると言つては襷をかけ火を炊くと言つては襷をかけ米を磨ぐと言つては襷をかけ洗濯すると言つては襷をかく、襷をかけない間は何程あるか、何故に早くこの無用の長物たる角袖が廢せられないのであらうか、思ふに日本の服裝ではこの角袖を廢しただけでは甚だ釣合がよくないので美術上に缺點が出来る、この美術上の缺點を補ふ所の他に良い考案を見出さなければ少くとも青年以上の女子には角袖を絶つことは行はれ難いであらう、幸にして近年小學兒童には筒袖流行し現今では男兒の角袖を着るものは殆どその跡を絶つに至つたは誠に慶ぶべきことである、之に反して少女には非常に長き袂を附して一尺八寸以上もあつて身丈とどちらが長いかわからない程である、吾人は一日も早くこの不經濟なる不衛生なる服裝を廢する工夫を講じなければならぬ

裾

裾が身體の運動を不自由にすることは前にも述べた所であるが日本服の裾も甚だ不完全であつて身體の運動を妨げることは袖に多くを譲らぬのである、日本の女子が歩行する所を見ると何時も内股でチヨコ／＼として甚だ不活潑なあるき方である、之に反して西洋婦人は男子より劣らず極めて活潑に闊歩する、それでは日本の婦人と西洋の婦人とは身體の構造が違ふかといふと、別に違はないといふことである、骨の數も同一であるといふことである、然らば何故に左様に歩行の有様が違ふかといふと、全く衣服の裾から來たのである、西洋服は裾が完全で何程大股に闊歩してもケマハシが充分にあつて、決して引つ張る等の憂もなく、又脛が

現はるゝといふやうな心配がないが、日本服の二枚重ねでも正しく着して帯を確りしめこむと九で兩足を布で縛り付けたやうなもので右足を出せば左足が引つ張る、左足を出せば右足が引つ張るといふ譯で、勢ひ小足に内股にあるかなければならぬことになる

又歩行中向ふから風でも吹いて來ようものならそれこそ大變だ、女子の最も恥づべき脛を露はして忽ち醜体を呈する、風の如きは常に吹くものであつて決して珍しいことはない而も何故にこの風を對する防禦策が講せられて居ないだらうか、風が少し吹くと裾の方に心配してあるかなければならんとは何たる不完全な衣服であらうか

これは日本古來の衣裳といふものゝ中、衣だけ残りて裳だけが廢れたから今日のやうな不完全な衣服が出來たので昔は貴賤によらず袴を着けたものである四季草にも「女の袴きること古は貴賤によらず着せしなり袴は禮服なれば女子とても着ざるとはあるまじきことなれども今は武家にては着ぬならはしになれり云々」とあるを見ても分る、又藤原時代まで平常如何なる賤婦も袴を着したものである、近來再び女子の袴も到る所の小學校女學校等に用ひられたるやうになつて前述の弊が余程避け得らるゝ様となつたのは喜ぶべきことである願くはこの袴若しくは之に類似したるものを獨り學生にのみ止めず更に一般の家庭に普及せしめ自由に活動し自在に潤歩し得らるゝ衣服にしたいものである

端折り

論説

三

論 説

四

前にも述べた如く我邦では古來貴賤の別なく袴を穿いたものであるが中古に於て之が廢れると同時に女子には「お引きすり」といふ習慣が始まつて今尚行はれて居る、それで晴れの時には「お引きすり」にし通常には「ついで」にして活動に便利にしなければならぬから自然に「お端折り」といふことが始まつて腰の所で三寸も四寸もたぐめて置く習慣が出来た、併し「お引きすり」といふことは、冠婚葬祭等の儀式の場に出づる時の外は全く必要のないものであるから通常服には「お端折り」といふを全く廢したいものである、經濟上から見ても衛生上から見ても甚だ不利なことではないか、之を廢するとお尻が大きく見えて醜いとか前が合せ悪いとかいふものがあるが之は習慣に過ぎないので廢した當座の苦情に止まるであらうと思ふ

ドローワーズ

西洋の婦人は男子のサルマタ様のものでドローワーズ Drawers と稱するものを穿いて居て衛生上容儀上大變によいが日本には僅かに一枚の褌があるばかりで今少し局部を擁護する工夫をしなければならん女子用猿股或はドローワーズを一般に用ふことにしたいものである

以上述べたる所は我日本服の缺点短所の大要を擧げたので、要するに日本服は古の貴族的衣服の變遷したもので西洋服は古の勞動服が發達したのであるから兩者各特徴があつて西洋服は一般に身体の形狀を摸擬して製作し活動に便利ならんことを努め日本服は儀式の場合、晴れの場合及び休息の場合等に都合のよい様に極

めて寛やかに極めて裝飾的に出来てある、將來世界の列強國と比肩して並進まんには宜しく貴族的衣服を捨て、勞働的衣服を着なければならぬ、それには順序があり階梯があるので今日西洋服が良いからといって直に我邦の衣服を捨て、西洋の服と全く替へて終うといふことは困難なことである況や家庭の構造等の關係も大にあることで一朝一夕には行はれ難いことであるが先づ日本服の缺點短所に對して順次之を補ふべく改良して行くことは吾人の務めであり諸嬢の責任である(完)



論叢

◎女子の技藝教育

相山 正式

我邦は、明治三十七八年の戦役以來一躍して世界の列強に加はり、社會百般の事業、皆改進黨張の運に向ひ、女子教育の事、亦大に革新を要するの機運に際會せり。而して一般の婦人も、慘憺たる大戦争に由り、新しき教訓を得て、漸く己れの地位を自覺し、身を立て、業に就んとする念慮、盛に興り、女子の中等教育を受くるもの、頗る増加せり。而して、一方に於ては、女子に抽象的學問を授けて、徒に空理空論に趨せ、女子の本分を缺き、往々家政を忽にし、女子に適する職業を捨て、顧みざるの傾向あるを憂ひ、近來、その弊を言

ふもの、益々多く、從來の教育法、漸く排せられて、女子實業教育の必要、盛に唱導せられ、隨て技藝教育に浴せんとする女子、浴せしめんとする父兄、日を追て増加せんとす。

抑も、維新以降、女子教育の事業は、幾度の蹉跌を重ね、批難の聲、朝野に喧しく、お轉婆、海老茶式部、等の新熟語は、構成せられ、當時、其局に當れるもの、頭腦を痛ましめたるもの、蓋し幾何なりしぞ。而して現時頗る進歩の觀あるも、未だ國民的要求を満足せしむる能はず。父兄の囑望に添ふに至らず。隨て教育者、亦その根底を牢うし、その目的に向て、直進するに足らざるもの、如し。

今日世に良妻賢母主義を言ふものと、職業教育主義を唱ふるものと、二派あるに似たり。前者を言ふものに之を聞く、曰く女子は、婚嫁して夫及び姑に對しては、良妻となり、子女に對しては賢母となる、是れ女子の天分なり。されば結婚の準備をなすは、學校の任務なりと、又後者を唱ふるものに之を聞く。曰く、女子の多くは、結婚すべしと雖も、亦必ずしも、結婚せざるべからざるの義務を有せず。周囲の事情は、或は彼等

をして、一生獨身生活を送らしむることあるべし。又たとひ結婚するも、種々の障害により、夫に死別生別するに至る場合尠からず。されば、女子は、何人と雖、獨立自營し得るだけの能力を有せざるべからず。故に學校は、女子に適當なる職業を授けて、獨立自營の準備をなさしむべき任務を有すと。兩者その言ふ所各々理あり、互に論難するが如し、而して、予熟々思ふに、兩者斯の如く論難するは誤れり。該兩主義は、互に背馳するが如くにして、決して背馳するものにあらず、何となれば、獨立自營し能ふ婦人と雖も、決して良妻賢母となる能はざるの理なく、良妻賢母となるべき資格を有するものと雖、決して獨立自營し能はざるの理なければなり。されば兩主義互に混和加味して、一方には、結婚の準備をなし、一方には、獨立自營し能ふだけの能力を授けんことは、最も肝要のことなるべし、即ち道德教育及び國民教育を兼ねたる、女子の技藝教育を振興せしむることは、國家の急務にして、今日各地方に設立せられたる高等女學校なるものと、東京その他に勃興せられたる女子技藝に屬する専門學校なるものと、混和折中したるものは、最時勢の要求に適合

十四

したるものなり。女子に、技藝を授けることが、單り彼等に日常生活上に必須なる能力を得しむるのみならず、其の教育上に及ばず價値の如何に偉大なるかは、既に業に、先哲の認むる所なり。今試に、技藝科の知育、情育、及び意育の三方面に分ちて、更にその教育的價値を列擧すれば、その知育方面に向て、技藝科の價値あることは、亦多言を要せざる所にして、直接に物体に觸れて、知覺を鋭敏にし、記憶、想像、判斷、推理等の諸能力を發達せしむることは、技藝科によりて、初めて到るべきなり。感情の方面に至りては、世人多く之に注意せざれども、その價値、極めて大なるものあり。日夜苦心して仕立て上げたる一着の衣裳が、その外部に於て、調和、均齊、對比、參差、等の要素を、悉く具備するのみならず、内部に於ても、均齊あり、調和あり、常に整然たる秩序と、統一とを保てるを見て不知不識の間に、如何に審美的の感情を養ひつゝあるか、之れ等の研究を重ねるに従ひ、眞理法則の應用、及び新發見を以て、無上の快樂となすのみならず、技藝界を以て、一大美術國となし、其の終世を通じ、快樂慰藉の泉源

となすに至るべし、意育方面に於ては、亦頗る多大の
價值を有す。勤勉といひ、綿密といひ、勇氣といひ、
之れ等道德上の貴重なる習慣は、如何に雄辨なる倫理
學者と雖も、決して國語のみを以て、授け得べきもの
にあらず。而も技藝科に於ては、能く之れ等の諸徳を
實踐せしめ、この良習慣を養はしむ、この外節約、利
用、正直、謙遜、等の諸徳、亦該科によりて、涵養す
べし。之れ等のことは、予が此所に喋々を俟たず、苟
も手工教育につきて、研究したるものは、亦首肯する
所なるべし。

斯の如く、女子の技藝科を、教育的に教授すると共に、
一方に於て、更に道德教育、及び國民教育を施し、人
倫の大義を授け、道德を進め、品性を陶冶し、以て良
妻賢母たるべき準備をなし、國民として、其の本分を
完うすべき資格を修養するは、是れ現代の一般父兄の
囑望にして、又一般の女子に取りても、最も幸福なる
教育法ならずや、今や技藝教育に浴せんとする女子、
浴せしめんとする父兄、日を追て増加せんとす。世の
教育家、徒に女子に空理空論を授くるの弊を言ひて、
何ぞ技藝教育の改善確立に思ひ至らざる (完)

我國の女學校には我國の特色あるべし

相山正式

▲國民は歴史の外に出る能はず

ざるを得ず、西力東漸の由來は如何、泰西諸國古來の

國民は歴史の外に出る能はず、積習の力本性となりて、また脱すべからざる桎梏を心に生ず、過去三千年我邦人は如何なる生活をなしたるか、如何なる風習を養ひたるか、如何なる思想を懷きしか、如何なる本性を示したるか、而して如何なる理想に向て進み來りしか、一たび首を回らして過去の事實に眼を注ぎ、その淵源する所に想を致さば、また吾人の進むべく依るべき將來の徑路は、釋然として自ら覺ることを得む。

▲世界の潮流と各國

然れども一國の運命も、遂に世界の潮流に支配せられ

育といはず、先づ本國の歴史に徴し、世界の趨勢に鑑みて、細心熟慮徐ろに大策を決するにあらずんば遂に不測の災害を蒙りて、一國の衰亡を免れざるべし、豈懼れて恐れざるべけんや。

東邊 渡 其節御校生徒諸君に御面會したるさ、きはその姉等に對面したるが如く、何となくうれしく歸りを忘るる程に有之候
縫 滋 其後貴兄と伊奈波社頭に撮影したる、女學生 其の如き兄弟に遇ひたるが如き感じ、致し別離の情禁じ難きもの有之候、只今にてもアノ時の有様目の前にちらつき居候
長 校 生 其の如き兄弟に遇ひたるが如き感じ、致し別離の情禁じ難きもの有之候、只今にてもアノ時の有様目の前にちらつき居候

▲本國の歴史と

世界の趨勢

とに鑑みよ、凡そ政事といはず、軍事といはず、實業といはず、教

▲我邦の現状は尙ほ百事草創の時代

なり、蓋し文物制度の燦然たるものと雖、その實
歐米の文華を移植して、未だ我邦固有の國體、人情、
風俗習慣には、調和せざるものあり。教育の如き維新
以來四十有六年、頗る進歩の勢ありと雖、一正一反、
未だその根底を牢うして邁往直進するに至らず。

▲乞ふこれを女子教育に就て 看よ

維新以來泰西の物質的文明に眩惑せる我國民は、深く
前後左右を顧慮するに遑あらず、歐米の制度をそのま
ゝに移植し、その教養方法は單に知識の一方に偏し、
女子教育の事業は知識の賣買に外ならざるの觀ありき
果然中道にして批難百出せり。

▲果然大蹉跌せり

斯の如き女子教育は、却て我邦固有の女徳を没却し、
貞節を輕んじ、勞働を賤しめ、舅姑に對する美俗を失
ひ、謙遜の良風を忘れ、虚飾に流れ、驕奢に陥り、人
情漸く輕薄に向へり。こゝに於てか識者その弊を嘆じ

糸 菊

遂に學界教育界に喧傳せられて、盛に討議せられつゝ
ありと雖も、未だその効果十分なるものあらず、視よ
かのいまはしき

▲「新しき女」なるものは大正

二年

の産物にあらずや、斯の如き似非的淑女類々として輩
出す、世の父兄たるもの女子教育の効果に對して、豈
疑はざらんと欲するも得んや、惑はざらんと欲するも
得んや、而して斯の如き結果を齎したる原因は抑も何
れに存せりや、乞ふ吾人をして試にそが斷案を下さし
めよ、是れ蓋しわが女子教育家が、我邦固有の歴史を
忘却したるがためなり、我邦古來の女子の美風を度外
視したるが故なり、本を忘れて末にのみ走れるが故な
り、されば教育家はこゝに覺醒し

▲我日本固有の理想的人格

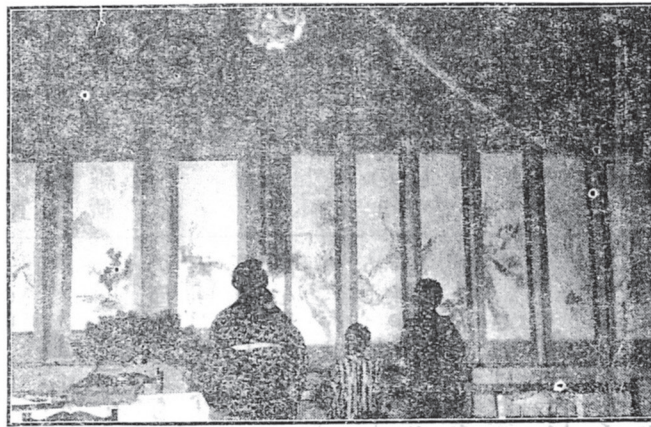
を實現せる女子を養はざるべからず、聽く英國のオッ
クスホード、ケンブリッヂ大學は、英國人士の理想的
人格を養成するを以て最大の目的とす、英國の學校
は英國特有の人格を養成するの要あるが如く、我邦に

三

は我邦特有の人格を養成せざるべからず、随て我が女子教育家は、我邦特有の理想的人格を實現せる女子を養成せざるべからず、何となれば、此國情を異にすればなり、本性を別にすればなり、今日の

▲高等女學校は學科の選定其宜しきを得ず

吾人は今日の高等女學校は學科の選定その宜しきを得ざるを信するものなり、何を以てしかいふ、今日の高等女學校は學科選定の方針を日本婦人の天職に置かず、最も中心學科とすべき家事科の如きは、纔に諸學科の末尾に附せられて極めて輕視せられたり、最も直接我が家庭に必要な裁縫の如きは、時間僅少にして卒業期に至るもその收得したる技術は殆ど何の用をもなさず、更に補習科に入り若くは他の方法に於て練熟せざれば、未だ安んじて婚家すべからず

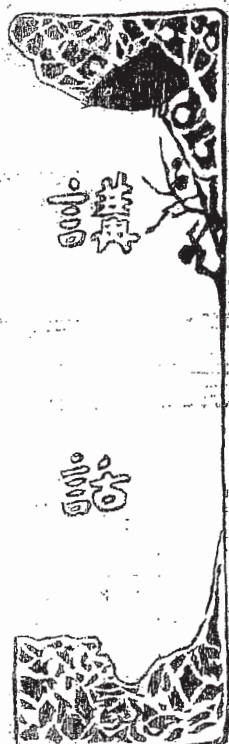


室列陳畫圖會覽展品織成月三年本

而して徒に高尚なる學問に走せて家庭に比較的肝要ならざる學科に多大の精神と時間とを費しつゝあり、吾人は信ず

▲日本の女學校は實科的ならざる可らず

高等女學校は學者を養成する所にあらず、即ち良妻賢母たる人格と實力とを涵養せざるべからず、随て諸學科は實踐し又は活用し得るやうに授けざるべからず、頭腦の教育をなすと共に手足の働きあるやうにせざるべからず、古人謂はすや「君子は口に納にして行に敏なり」と然れども今日一般の女學校にては事實上口に敏にして行に鈍なるものを養成しつゝあるを奈何せん、故に吾人は重ねていはん日本の女學校は實踐倫理を授けると共に家事科を中心として實科に重きを置かざるべからずと。



女子教育の覺醒時代

梶 山 正 式

維新以來我邦の女子教育の發展は凡そこれを五期に區分することが出来ると思ひます、即ち

第一期	開墾時代	自明治初 至全二十三年
第二期	移植時代	自全二十年前後 至全二十四年
第三期	低徊時代	自全二十一年 至全二十七年
第四期	勃興時代	自全二十八年 至全三十七年
第五期	覺醒時代	自全三十八年 至今日

我邦の女子教育は古來幾多の變遷を経て今日に至つた

のでありましてその由來は決して一朝一夕のよく盡す所ではありません、然れども維新前は概して不振でありました、たとひ一種の教育は各自の家庭に於て行はれたと申しましても之を社會の事業として顧みられたことは殆ど無いと申しても過言でないかと思ひます、嘉永六年捕賀の轟砲一たび響きて三百年泰平の夢に覺め爾來破竹の勢を以て維新の大業成り諸般の事業全く面目を改め教育の事亦官民擧げてこれを獎勵し又之を企畫いたしました、隨てこの頃より女子教育の事

業も亦漸く萌芽を現はして参りました。明治四年文部省が新設せられまして初めて布達を發し女子教育の必要を告げ次で東京に共立女學校の計畫をなし五年開校して東京女學校と稱し國語手藝英學雜工を教授いたし特に語學に重きを致し英語は外國女教師を聘して教授したと申すことであります、次で同年京都に新英學校及女紅場といふが設立せられました。然れどもこの後十二年の改正教育令の發布せらるゝまでは殆どいづれの地方も女子教育史に掲ぐべき事項はございませんで一向寂莫なものでございました、この時代を名けて我邦の女子教育開墾時代と申して敢て不當でないと思ひます。

明治十二年改正教育令の發布と共に栃木、岐阜、福島、山梨、群馬等の諸縣に女學校の設立を見るに至り十五年に東京女子師範學校の附屬高等女學校も設立せられましてこの時初めて高等女學校といふ名稱が現はれたのでございます、併しながら當時日本全國の女學生總數は僅に三百七十餘名に過ぎぬといふ有様で甚だ微々たる勢でありました、而してこの時代は歐化熱の最も盛な時代でありまして基督教最も勢力を占め女子教育

糸 菊

も亦其の信者に依りて大に鼓吹せられました、東京市にては東洋英和女學校、明治女學校、仙臺にて宮城女學校、廣島にて廣島英和女學校並に我名古屋市中に於て清流女學校の如きは何れも我邦の錚々たるものでございました。然れども要するにこの時代の女學校は何れも歐米の女學校をそのまゝ我邦に移し植ゑたものでありまして我國體風俗人情に添はぬ點多く遂には我邦固有の美しき婦徳と相牴觸するものあるに至り當時識者の最も憂慮したる所でありました、即ちこの時代を名けて歐米の女子教育移植時代と申す所以であります。

こゝに於てか我邦の女子教育は追々批難百出の的に立ちまして一大頓挫いたしましたして實に大危機にいたりました、而して明治二十一年より廿七八年日清戰役に至るまで女子教育として觀るべきもの甚だ尠く教育者は唯手を束ねて慎重の體度を以て考慮した時代でありまして之を稱して低徊時代と申したのであります。次で二十八年文部省は初めて高等女學校令を發布して各府縣に高等女學校の設立を勸奨し三十七八年日露戰役の頃までには實に空前の隆盛を來し遂にその校數全

三

糸 菊

國を通じて百を以て數へられ生徒總數は實に二萬に達しました、依りてこの時代を名けて我邦の女子教育勃興時代と申すのであります。

高等女學校は斯くも盛に設立せられまして日露戰役の頃までに非常の多數に上りましたが惜しいことにはその學科の配當教授の方法等が尙かの移植時代の面影をなして兎角皮想的の教育に陥り我邦の實際家庭に適合せず、これらの卒業生が動もすれば浮華輕跳に流れ虚榮に驅られ所謂お轉婆、ハイカラ式部が續々と産出せられ漸次我邦古來の婦人の美德を没却し去らうといふ形勢に立ち至りまして識者をして却て眉を顰めしめたのであります。

此間に於て隠然として女子教育界に一大勢力を示したものは東京裁縫女學校、女子職業學校の如き實科を主として授けた學校であります、最もこの二校はこの當時には幾分非教育的の弊もないではありませんでした、が兎に角に眞摯なる手段を以て我邦の家庭に實際的な技能を傳授することに努め知らず識らずの間に健實なる志操を養成し甚だ觀るべき効果を擧げたのであります、こゝに於てか徒に空理空論に走せ形式にのみ趣

四

ける高等女學校の教育に痛嘆せる世の父兄はその反動として之等の實科的な學校に女子を託するもの多く前述の二校のみにてその生徒數常に二千を越えたる事實に觀てもその一斑を推知するに足るのであります。

日露戰役後所謂去華就實の戊申詔書は發せられ女子教育の方法も大に鑑みる所あり文部省は四十四年を以て實科高等女學校を認可して眞摯なる女學校の勃興を希圖し各府縣また競て之が設立につとめ今や全國到る所に之を見ざるなしといふ有様となりました。

實科女學校は實にこの覺醒時代に至て起つた最も眞面目なる女學校であります、然るに實科の名があまりに卑近なるが爲に一種の虚榮心から世人動もすれば實科女學校を以て普通の高等女學校の下位にあるものゝ如くに思惟して之を輕視する傾があるのは甚だ遺憾なことであります。私は信じます今後この女子實科教育が隆盛に赴くにつれて我邦の地位は益々安固となり一家の運命も愈々鞏固となり一個人の幸福も之に依つて確實に享有せらるゝものであるといふことを

梶山高等女學校併設に就て

梶山 正 式

願れば吾人微力敢て自ら揣らず、私立名古屋裁縫女學校を創設してより、茲に十有二星霜、幸に外は江湖人士の深厚なる同情と、内は有爲なる教職員諸士の協力同心と、而して多數卒業生及び生徒諸姉の燃ゆるが如き愛校の精神とによりて、校運日に月に隆昌に赴き校基歳と共に益鞏固を加へ、卒業生を出すこと實に一千五百、在學の生徒五百に垂むとし事業漸くその緒に就くことを得たり。乏しきを育英の大任に受け、生涯を女子教育の重きに任しつゝある吾人は、この機會を以て更に挺身奮闘、一高等女學校を併設し從來の裁縫女學校と相對峙せしめ、兩々相俟つて大に女子教育の完美を期せむとす。蓋し兩校各その目的とする所は、高尚なる德操を涵養するにありと雖、前者は筋肉活動を主とせる教育機關にして、後者は精神活動を主とせる教育機關なり、更に別言すれば前者は女子に適切なる技藝を傳へて徐ろに人格の完成を期し、後者は日進の大勢に應じて精確なる知識を賦與しつゝ、漸次品性陶冶の目的を達成せむことを欲す。由來心身は兩者相關して離る可らざる密接の關係を有す、人格の完成を期するには宜しく心身兩方面より相呼應し相輔佐して一致調和の教育を施さるべからず。唯、人各天賦の個性ありて、身的陶冶を先とするを要するものあり、或は心的訓練を先とするの必要なものあり、今兩様の教育機關を設けて、子女天賦の個性と家庭の事情とに應じて各その往くべき道を自由に選擇せしめむとす、斯くして天稟の能力は自由に發揮せられ、聖代文運の惠澤に浴被すること

を得べし、兩校各赴くの道を異にすと雖、もとその目的とする所は同じく高尚なる徳操を涵養して我國普通の家庭に適合せる實用的女子を養成するにあり。而してこれ實に現代女子教育に對する社會的要求を満足せしむる所以なりと信ず。

惟ふに今日の教育事業中、女子教育ばかり困難なるはあらざるべし、蓋し女子は貞淑守節の徳操を養ふを以て樞要となす、吾人素より徳非く識淺く、材小にして、この重任に堪ふるものにあらずと雖、聊か女子教育に多年の經驗を有す、即ち一校を擧げて一家となし、自ら家庭的校風の中心となりて女子の修養進徳の上に多少の工夫を加へ得たりと信ず、冀くは孜孜努力して以て婦徳婦功に關する一切の事を教養するに遺憾なきを得むか、若夫れ各教科の教授に至りては家庭的校風に鑑み修身齊家を中心として各その目的を徹底せしめずむは己まざるべし。

堅實なる校風の樹立と振興とを期するはかの輪奐の壯美を極むる校舎を新設するよりも更に一層困難なり、吾人は多年裁縫女學校の經營によりて、私かに家庭的校風を樹立するに於て得る所あり、今や進むで高等女學校を併設して、更に本校の特色を永遠に保持し、善美なる校風を振作し、兩校相俟つて彬々として文質の全きを期せむとす。これ聖代文化に對する吾人が最大任務にして、また本校の社會に對する崇高なる一大義務なり。かくして他日君子の好述たり、良家の賢母たる淑媛踵を接して我校下より輩出せむことを切に望みて己まざるものなり。



我邦固有の崇高なる婦人道

梶 山 正 式

近時歐洲戰亂の結果は、我邦諸般の事業に尠からざる影響を及ぼしたることは言ふまでもなく、併せて精神方面にも多くの變動を來したのである、我女子教育上にも從來の良妻賢母の内容に多少の變革を加ふべきでないかといふことは、一般人士の深く考慮して居る所である、然れどもこれは重大問題であつて、輕々に附和雷同するやうなことがあつてはならぬと思ふ、或る教育家は、今回の歐洲戰亂に依りて、彼國の婦人が平素遂に試みなかつた男子の事業に従事して着々成功し、電車の車掌にあれ、郵便の配達夫にあれ、巡查にあれ、彈丸の製造にあれ、凡そあらゆる男子のなし來りたる事業に着手して、立派に活動しつゝあることを目撃し又は聞き傳へて、日本婦人も宜しく斯の如く仕立てざるべからず、今までの我邦の女子の教へ方は家のみを守りて御飯をたき食卓の用意をなし、子供を育て舅姑に仕へ、まるで下女同様のことを強いたのであつたが、之からは家庭の事は成るべく切り短かにすまして、更に何等かの職業に従事して、夫と共に働くや

うにせねばならぬ、今日の我邦の婦人は彼國の婦人の有する能力の半分をも持たぬなど、稱して、盛に從來の女子教育方針を罵倒する人がある、現に本年十一月東京に開かれたる全國高等女學校長會議にもこの議論が喧しかつたのみならず、この議論を主張せざるものは時勢後れかの感じがあつた位である。

併し退いて熟考へて見るのに、之等のことは餘程研究問題である、從來の日本婦人は左様に無能な者ばかりであらうか、左様に無氣力のもののみであらうか、愈々戦争となつて今日の英獨佛各國の如く、役立つ男子の殆ど全体が戦線に立たなければならぬといふやうな場合に遭遇したと假定したならば、我日本の婦人は果して何のなすこともなし得ないで、袖手傍觀茫然として、徒に泣き惑ふのみであらうか、電車の車掌に當るべき男子が無くなつたとすれば、諸姉は直に男子に代つて之等の仕事に従事するの能力や氣力が無いであらうか、その他郵便配達夫位が出来ないであらうか、砲彈の職工位は或る長き熟練を要する部分を除きては易々として當ることが出来るのではないからうか、否單に職工や配達夫位ではない、維新當時には政變に參與して大功を挙げたる婦人も尠からず、又自ら武器を手にして城を防禦したる婦人も多かつたではないか、若し夫れ古來の我邦の歴史を緇かば下毛野形名の妻を筆頭として、幾多の女丈夫は相次で輩出して紙面を飾つて居る、婦人が節操の爲には生命を鴻毛の輕きに比したるものも尠くない、之等は西洋の碧眼婦人には解し得られない潔きものが多々あるではないか、吾人は我邦が白耳義の如き境遇に立つたとしたならば、もそつと婦人の美談が顯出したであらうと云ふことを想像するものである。

今度の歐洲戰亂に於ける彼國の婦人の活動を見聞して、俄に我邦の婦人に成るべく外界の仕事に従事せんことを勧むることは、少しく輕忽の嫌があると思はれる、これ等の變事に處する覺悟も常々養つて置くことは必要であらうが、矢張り女子は家庭に飽くまで勵精することが、最も重大なる任務である、この任務さへ十分に果したならば、女子として家のため邦のため盡した功勞は、之に如くものは無いのである、而してこの大任務を果さんとすることは、決して容易の業ではない、他の事業に従事しながら、傍ら之を果すといふこと

は特別の家庭を除きては、決して出来ないことである、若し出来得るといふ人があるならばそれはその人の家庭の一面に或る欠陥を生じつゝあることを氣附かない人である、何故ならば、子供を養育するといふ一事でさへも外に出で、働きつゝ人手に依りて完全に教養することは出来ないからである、況んや家庭のことは子女教養の外に數多の仕事があり極めて複雑なものであるに於てをやである。

凡そ世代繼續といふことは、人世の大事である、子女を養成して、第二國民を健全有爲にするといふ事の尊さは、彼の車掌や郵便配達夫として活動せる女子の任務の尊さとは比較にならぬ、矢張り女子は結婚するのが幸である、結婚して大切なる子供が出来たならば、外界のことは夫に一任して一家の整理や、子女の教育や、婦人としての修養とかに力を盡すのが、即ち自己を益し國家を利する所以である、歐米の社會情態は、結婚せぬ女子が澤山あるから、茲に女子參政論等が痛切に感ぜらるゝやうになる、幸に我邦では殆ど全部が結婚し得られる情態にあるから、男子同様に選舉權を爭ふやうな變り者は稀なのである。

日本古來の婦人道ほど、氣高く尊きものは世界中にない、己の幸福を犠牲にして、夫を助け舅姑に仕へ、子女を教養する美しき潔き我婦人道は男子の大和魂と相並んで實に世界に誇るに足るのである、之を彼の平然として夫に荷物を持たしめて之を供に連れ他の男子に靴の紐を結ばしむる不遜極まる碧眼婦人に見せて一服の清涼劑とせよ、人の子に牛乳を與へて得意になつて居る碧眼婦人に、日本婦人が自己の乳を哺ます道を示してやるがよい、碌々赤髪を結ぶことを知らず、帽子で胡魔化して居る西洋婦人に、毎朝夫の起きない前にチャンと髪を結つて仕舞ふ我婦人道を説明して諭してやるがよい。

操は嚴冬雪ふるなかに

ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ

はまれは千尋暗なる谷に

ひそめる幽蘭かをり似るか

いさをは蒼溟波捲く淵に

かゝやく白玉光といつれ

嗚呼君見むざる無上のいさを

嗚呼君聞ぬ至高のはまれ

嗚呼君知れざる究竟の操
涙になさけに操に愛に

大なる國民君よりおこる
嗚呼君やさしき女性之力

(土井林吉)

たゞ茲に吾人が最も絶叫して、我が邦の婦人に猛省を促したいと思ふことは、現今の科學を應用して一層我邦の家庭を改良することである、我邦の家庭は甚だ世界の文明に立ち後れの姿である、婦人の大任務を果す方法を、もそつと講究して時勢の進運に伴はしめねばならぬのである、我邦の家庭は未だ數千年前の原始時代を距ること遠からぬとさへ極論する人がある、獨逸の家庭の所謂お勝手場は、科學の研究所であると言はれて居る、彼國人の朝食の用意は僅々五分間で出来るといふことである、我邦のおさんどんが火吹竹を口にして涙をこぼし／＼頬を膨らして居る有様とは、雲泥の差だと申すことである、若し歐米の如く少しく研究的態度を以て我邦の臺所なるものを改良したならば、五人や七人の炊事の如きは數十分にて煮焼洗滌一切をすますことは何でもないことのやうに思はれる、その他各室の構造、便所、風呂場等をも改善して、今少し衛生的經濟的にすることは最も急務の一である。

要するに家庭に於けるこの重大なる任務は決して傍ら仕事で完全に爲し遂げられないのみならず、家庭の任務さへ完全に盡し得たならば邦家のため此上なき大功勞者であるといふことを忘れないで、徒らに浮華輕忽なる西洋心酔者の言に誤られず、日本婦人は日本婦人の幾千年來磨き來つた美しき尊き婦人道を益發揮せしめ、進んで之を世界の婦人に鼓吹してやるだけの覺悟があつて欲しいものである。

最後に一言して置くことは余が茲に論したることは女子の職業教育論とは、自ら全然別である、余は女子の職業教育は他の理由を以て大に必要視して居るものであるが、紙面の許さるため後日に譲る、たゞ此点につき讀者の誤解なからんことを望む。

不徹底なる裁縫教授

私立梶山高等女學校長 梶山 正 式

我邦初等中等の學校に於て、女子の爲に裁縫の時間を比較的多く取つてあるに拘らず、その成績甚だ振はざるものあるは、誠に遺憾なことである、今尋常小學校卒業期に達せる女兒に對し、試に襦袢の裁方、標の附方、待針の打方仕立方等を問うて見たなら、恐くは完全に答辯し得るものは殆ど稀であらう、最も簡單なる襦袢を以てして尙且斯の如し、況や單衣その他の衣類に於てをやである。

予は十數年來我校に於て裁縫科教員養成の傍ら、該科教員の改善に留意し、追々研究の歩を進め、一面には東西の名士先輩の指導と忠告とを得て、漸く茲に不十分ながらも一つの成案を得た、即ち予は先づ失禮ながら現今一般の裁縫科教員の頭腦を根本的に改造し、教材の選擇方針と教授の主義とを、一大英斷を以て根柢から改革しなければならぬものだといふことをつくつく感したのである、今の時に於て、この英斷を施さ

ずんば、百の研究會も千の講習會も、結局何の効果なく、年々歳々相變らずの成績はか擧げ得られないものであるといふことを斷言して憚らない。

裁縫教授不成績の原因は種々あらうが、先づ思ひ出づるまゝに列擧すれば左の通りである。

(一) 教材研究の不足 教材は十分に精選しなければならぬ、教授時數は一週間に數時間に過ぎぬ、あれも必要これも必要と無暗に多きを貪りて普通衣類の裁方縫方全部に亙りて教授せんとしたるは非教育的の甚しいものであつた、之は從來の裁縫教授不振の正しく一大原因である。

(二) 注入教授 教育の目的から言つても、自立自主自ら工夫し自ら考案し創意創作の力を養ふことは最も大切なことである、日本服の仕立方は誠によく考へられたるものなれども、時勢の進歩に應じて改良すべき點も亦多い、現に仕立方が漸次變化し行きつ

ある、この時に方り徒に古人の考へたその儘を、工夫なしに受け取らせる靜的教授は甚だ宜しくない、從來の教授法は何れもこの注入的教授法であつた、随つて裁縫の基礎觀念と基礎技能とを確立することが出来ないで、全く應用の利かない器械的の人物はか養はれなかつた。

(三) 不法干涉 兒童の仕立た着物は家に持ち歸りて直に實用に供するのである、直にその所有者があつて着用するのである、これが抑も一大通弊である、餘り見苦しき仕立方では母姉から批評を受けるであらう、面目がない、己の價值を落すであらうと、この心が裁縫教員の頭に深く浸み込んで居る、隨て結果のみに重きを置く、斯くて兒童に壓迫を加へ、無理な要求をなし、次で教師の不法干涉となり、肝心の兒童の實力を養ひ、學科そのものゝ興味を喚起するが如きことは、第二第三に置かれて居た、これが實に裁縫教授不振の一大原因である。

(四) 頭を使ふことを忘れてゐた 從來の裁縫教授は縫ひ方仕立て方にのみ没頭して他の知識方面のことを輕視して居た、否教材選擇の方針を誤つてゐた

め、その餘裕がなかつたといふのが寧ろ適當であらう、頭を作り頭を練ることを忘れてゐたから矢張り器械的人物はか養はれなかつた。

(五) 布帛の制御法を教へなかつた 裁縫科成績の不良なる原因の一は、布帛の取扱方を十分教へなかつたことにもある、布帛の取扱方に慣れないと『布帛まけ』をする、布帛に吞まれる、無心の布帛も扱ひ慣れると、丁度生きて居るものゝやうに柔順に服従するやうになるものである、即ち布帛制御の方法を十分教へなかつたことは、正に從來の裁縫教授の一大缺陷であつたと思はれる。

(六) 運針教授の不徹底 裁縫教員は殆ど全部女子である、女子は幼少の折から針に親しんで、何時とはなしに串縫が出来るやうになつた、その經驗から針を持たせて置く内には「その内に覺はるその内に自得が出来る」といふ主義で運針教授の時間には、教師は一向活動しないで、袖手傍觀の姿であつたことが多い、その實は運針教授の時ほど教師の活動を要する時はないのである、一々手を取て或は模範を示し、或は指導しその呼吸を會得させるには容易でな

いのである。

(七) 教師の素養不足 専科教員は總じて普通學が乏しく、本科教員は總じて技能が未熟であるといふことは争はれない事實である、更に一般の女教師が人格的素養に缺けてゐることが多い、熱誠が足りない、飽くまで徹底的に教授して、眞に兒童の實力に仕やうといふ愛情に乏しい、又進取的に研究しやうといふ研究心が薄い、流儀の固執が多い、つまらぬ事を過大視して相争ひ相排する傾がある、今少し寛大なる雅量を養はなければならぬ。

(八) 父兄に心得違ひがある教師を裁縫の専門家のやうに心得て、兒童が縫つて持つて來たものを見ると直ぐ教師の批評が始まる、少し裁縫の心得のある母姉は、盛に教師を悪口し罵倒する、而して教師の進歩した方法を批難する。

又不當の材料品を供給して、教授の都合を顧みない、裁縫をあまりに重要視し過ぎて、裁縫科と他學科との關係も知らず、時間數も心得ず、たい裁縫を多く教へてもらひたしと要求する、之等は皆父兄母姉の心得違ひであるが、之に又迎合せんとする教育者

も誤りである。

尙他にも幾多原因はあらう、自分は太要右のやうなことが一番主なるものであると思ふ、どうか同志の士を得て、之等の原因を除去し、因襲の惡弊を根本的に打破し、該科教授が大に教育的效果を收め得る時期の一日も早く到らんことを切望して已まないものである。

(完)

▲本篇の筆者嵯山氏は、今や中京の教育會に於て其名聲噴々たる嵯山高等女學校及名古屋裁縫女學校の校長として兩校を經營して居らるゝ方で、本縣武儀郡の御出身であることは御承知の通りであります。

▲氏が裁縫教育の權威であることは云ふ迄ありませんが、しかし氏の今日の業績は偶然で出來たものではありません、氏が帝都にあつて準備の數年間は彼の有名な渡邊裁縫學校に通つて親しく裁縫の技術を專修されたのであります、之迄徹底しなければ決して一事業に成功するものではありません。

▲で私は裁縫教育振興策として技術上の研究を特に一般教育家に御勧めしたいと思ひます。(記者)

芥 菰

大正八年號



説 林

本校十五周年記念式に臨みて

梶 山 正 弼

光陰矢の如く、本校創立以來早く既に十五星霜を經過致しました、誠に夢の如き感じが致します。およそ物は古き故に貴からずで、單に年數を経たといふのみに止まつて、常に不健全であるならば、恰も病弱の人の如く、又國にしては衰滅に瀕しつゝある印度埃及の如く、殆ど之を祝する價值は無いのであります。而して學校もその通りであります、古いから必ずしも良いとは限らない、新しいから必ずしも悪いとは限らない、即ち之を創立した以上有意義にその責任を完うしつゝありや否が價值判斷の要件であります。

茲に本校創立當時の昔物語を致しませう、本校の創立せられたのは明治三十八年四月日露戦争當時で、丁度皆さんの内の一年生の人たちが誕生しました時分に本校も産れ出たのであります。その當時は校舎として

態々建てた建物は一もなく、たゞ今日の寄宿舎に充てられて居る十五號室「櫻の間」の廿四疊敷の所が最も大きい教室で、その他に十疊間が一間ありまして、天にも地にもたゞこの二つが唯一の教室でありました。職員としては私と私の家族と、外に岩下先生と申す女の先生と都合三人だけでありました、生徒は全部で九十名でありました、それが一ヶ月も経つと早くも百二十名となり、椽側にも一杯に皆机を並べて授業を受けました、それから遂に北隣の戸を借り受けて、一時凌ぎを附けました、翌三十九年に至つて愈狹隘を告げてまた如何ともすることが出来ないで、遂に教室を一棟新築致しました、即ち今日の寄宿舎の北の方の二階建の家屋でありまして、二階に教室が二つ階下に二つ出来まして、その六月落成し、その當時としては盛なる開校式を挙げました、之でやつと先づ収まりが附いたと思ふ間もなく、生徒数は益々増加致し、明治四十一年に又々増築の已むなきに至りました。そうこうして居る間に、又々之でも狹隘を告げて、遂に四十三年に、從來の校舎の前方にありし昔風の長屋門を取毀ちて、二階建校舎五十坪を増築しました、越えて大正三年に寄宿舎を設け、同四年にその三階を設けて和風堂と稱し、同五年に至りて更に高女校併置の計畫をなし文部大臣の認可を得て直に校舎新築に着手し、翌大正六年第一期工事を竣へ、同四月開校、翌大正七年二月第二期工事竣功し、次で高女部開校式を挙げ、本年又第三期工事を企て、本月漸く落成し、運動場も狭いながらも完成致しました、高等女學部のみに就ても、凡そこれ程急激に發展した學校は公立私立を問はず尠いと存じます、初め二百名定員であつたのが僅かに二ヶ年半を経ざるに八百名定員の認可を得て、實際の在學生五百名に垂んとして居るのであります。物事が順潮に行くといふことがありますが、本校は順潮どころではない、一、三、五、八、十といふやうに一足飛びに飛び越えては進展して參りました。即ち本校は斯の如

く極度に能率を増進し發揮して居るのであります。何れの學校にも記念式は擧げられます、たゞ過去十五年間最も有意義に送つた本校の記念式の如きは、平々凡々に日を送つた他の記念式に比して、最も喜ぶべき價値ある記念式であることを信じます。

斯の如く本校が著しき發展を遂げた原因は何れにあるかと申しますに、孟子は天の時、地の利、人の和といふことを申されましたが、本校にも確にこの三つのものが原因をなして居ると存じます、就中人の和といふのが最も大切な原因でありましたと存じます。第一先師先輩の援助、第二職員諸氏の予と一身同體となつて本校生徒教養の任に當られた事、第三卒業生諸姉の燃ゆるが如き愛校の精神、生徒諸子の刻苦勵精只管知徳研磨に餘念なきこと等が交々相待て本校の信用を増し、本校の内容を充實せしめた最大の原因であると信じます。

本校は斯の如き原因に依て斯の如く發展を遂げて參りましたが、然らば本校の内容効果は果して之を以て満足するに足るでありませうかと申せば、遺憾ながら未だしと申さなければなりません、今日我日本の世界に於ける地位責任は歐洲戦争以前に比べて一層重く一層大きくなりました、この場合國家の實力を作り出す基となる人即ち女子の教育は、國家の爲非常なる努力を要するのであります、即ち換言すれば、本校は將來益本校の特色を發揮して所謂存立の意義を愈完うせんことを努めなければならぬのであります。生徒諸子はこの理を理解してこの十五週年を一段階として、學校創立の精神を實行し、益奮勵努力して社會の同情と期待とに報ゆる覺悟を有せられんことを切望致します。

終に臨んで本校裁縫女學部と高等女學部との關係に就て一言致します、裁縫女學部は高等女學部の母であり

四

ます、何故とならば、本校の裁縫女學部は高等女學部を産んだからであります、産んだ人は母であります、尠くとも姉妹關係であります、この二つは二つにして一つ、一つにして二つ、門は二つあれども内容は通じて居るのであります、常に共々に聊かも輕蔑することなく、隔意なく、互に敬愛し 相依り相助け、單に在學中のみならず、卒業後に至るまで共々に相提携して參るやうに致したいと存じます、之が本校の大方針であります。今日以後兩校を總稱して椚山女學校と稱し、その内容を兩別して裁縫女學部、高等女學部と稱することに致します、本日十五週年記念を迎ふるに方り一言以て式辭と致します。

茶

菊

大正十一年號

米國漫遊雜感

(同窓會總會に於て)

相 山 正 式

今日は同窓會總會に兼ねて、不肖の歸朝を祝つて下さらうといふ、皆様の厚い御志から、本會發會以來嘗てない破格の御馳走をして、破格の盛宴を御張り下されましたことを、衷心から感謝いたします。同窓會も年々盛んになり、今日も出席者實に四百名近くに達して居るといふ有様で、追々我名古屋婦人界に、隱然一大勢力を成しつつあることは、誠に慶賀に堪へない次第であります。

さて今日は別段珍らしい御話もございませんが、たゞ私の米國漫遊中感じたことの一端を申上げて見ませう。私は勿論私の職責上第一に向ふの女子教育の情況を、視察したいと存じて参つたのであります、向ふに渡つて見ますと、我邦の女子教育とは大分様子を異にして

居ります、先づ米國には、別段女子教育といふ言葉が無いと申して良いほど、全然女子教育を男子教育と同様に取扱つて居ります、隨て上は大學より、下は小学校幼稚園に至るまで、或る一部分を除くの外、大抵男女共學で、教室も同じなれば、時間も一つで、席も混交して居り皆々向ふ所はたい一つといふ風に、一心不亂に勉強して居ります。

中等學校なども、それで少しも異様な感じがしないのみならず、ダンスなど男生女生手を組み會つて、盛に稽古して居ります、若し男生の對手に女生がないか、女生の對手に男生がないと、教師は直ぐ交渉してその對手を定めてやるのであります、之は弊害は勿論伴ふのであります、全然我東洋人とは習慣と思想殊に道

德觀念を異にする彼の國の國民には、これが普通で男女共學が良いとか良くないとかいふことは、テンで問題にして居らない人が多い、併し眞面目な宗教家などには、熱心にその反對論を稱へて居る者もございます。がその大部分は、男女共學を賛成し、是認し、寧ろ問題にして居らない様子であります。併しこれは我邦に於ては、直に適用することを許さないと存じます、何故なれば全く根本的に男女に對する道德觀念を異にして居り、たとひ理に於ては利点があるとしても、忽ち世間の物議の種子となるべきは、申すまでもありません、物議の種子となるべきことは御互に避くべきであります。

亞米利加の統計に依れば、大學の學生は男子よりも女子の方がその数が多い、而してその成績も概して女子の方が優れて居るといふことであります、私は加州大學の物理教室を參觀した時、最も感じたのは、同じ教室で、同じ講義を聴きながら、男學生より、女學生の方が、能く質問し、能く説明し、寧ろ男子の方が扣へ目である、これは一般社會がさうでもあるからでせう。女子の學問せる有様が、日本のやうに受身的で、形式

一二

的で、免狀さへ取れば良いといふやうな風とは違ひ、如何にも本眞劍に研究して居る、圖書館には、女學生が、盛に高尚な文學書や科學書を耽讀し、その態度が如何にも進取的である、研究的である、周圍の人が皆さうであるから、自分獨りその態度を失つたら、忽ち世の中から葬り去られるのであります。

私はワシントンの教育局に往き、スクール・ライフといふ雜誌の主任に面會し、長時間に亘りて、色々の質問をした、その時私が女子教育々々といふ言葉を連發するので、主任はこれを痛く氣にして『そう女子教育々々と言つて下さいませう、米國の女子は男子よりも多く教育を受け、社會的の事業は殆ど女子の手を俟てその成績を擧げて居る、男子はこれに對して相當の敬意を拂はなければなりません』と申して居りました、氣が附いて見ると、ナルホド男女間の關係が日本とは宛も反對であるのであるから、さう言はるゝも尤もだと思ひました。

斯かる有様で、亞米利加の女子は、如何にも權威があり、尊敬を拂はれて居ります、甚しきは、時として男子は宛然女子の從者の如く、奴隸の如く見ゆる場合が

あります、女子の靴の紐が解けると、男子が結んでやるとか、エレベーターの中へ女子が入り来ると、男子は直に帽子を取るとかいふことは普通であります。

斯かる社會に、斯かる教育を受けたる米國の婦人は、日常如何なる生活を送つて居るかと思ひますと、先づ米國の婦人は、日本の婦人に比して、一般に科學的知識が發達して居ります、隨て衣食住に關しても、多くの場合至極簡便に處理して居ります、男子の服は殆ど一切家庭で作るといふことは無い、女子の服も多くは洋服店から求める、家庭で仕立てるものもないではありませんが、それも簡單なものである、子供の服も同様である、それに仕入の服が、男子のも女子のも至極安價に求め得られるやうになつて居ります。

私が桑港の小學校を參觀した時、最も感じたことは、裁縫科が小學校時代にたゞ一ヶ年間のみ毎週二時間づゝ課せられるだけで、それで彼國の女子は、他日一家を理めて往く場合に、大した差支はないとのことである、日本の女子は尋常小學校の五年生から、高等女學校を卒業するまで、毎週四五時間づゝ教授を受け、それでも尙ほかつ實用に立たぬとか、役に立たぬとか、

非難せられるといふことは、日本の婦人問題の一つとして大に考慮して見る價值があるではないかと存じます之は仕入の服が非常に安價に求め得られること、ミシン機械を使用するまで、型紙を使用することなどが日本に比して都合よくなつて居るからだと思ひます、洗濯物が出來ますと、皆それ／＼専門の店へ送つてアイロンを掛けるものは掛け乾燥洗濯を施すものは施すといふ工合で、家庭ですることは極めて僅少であります而も家庭の洗濯の機械が便利に出來て居りまして勞力も時間も少くて出來る設備があります。

日本の婦人は自分の衣服や子供の衣服は勿論、主人の衣服に至るまで、常着も晴着も、その裁縫と洗濯とは殆ど一切、自ら處理して往かねばなりません、日本の婦人の生活改善の上には、まだ／＼多くの問題が横はつて居るのであります、掃除も、都會に住める人殊にアパートメントハウスに住める人は、家屋の周圍は勿論、階段等に至るまで、家番が掃除しますから、家族のものは自分の居間と近傍の廊下とを掃除すれば、足るのであります、且つ洋風の建物は塵埃があまり出來ないのであります、日本の家屋の様によく塵が立ち又

長い廊下を鏡のやうに拭き上るといふやうなことは、殆ど無い、障子の硝子も専門の人夫が、折々廻つて来て綺麗に拭いて呉れるのが常であります。

斯様な次第で女中を多く要せず、食物も、日本の様に御飯を炊くといふことはないから、朝飯の用意の如きは僅に五分か十分で出来る、主婦が幼児の世話などで疲れて朝寝をすることがあつても、主人獨り先に起きて瓦斯に火を附ければ、直に珈琲は暖まりパンも焼けるのでありますから、敢て主婦の手を煩はさずサツサと時刻に出勤することが出来るのであります。

主婦の仕事が、斯様に簡単に済むとすれば、活動的の婦人は家を外にして他の方面に力を伸ばすのは理の當然であります、米國の婦人は如何なる方面に活動せるかと申しますれば、皆さんも既に御聞き及びの通り、殆どあらゆる方面に活動して居ります、即ち學者として大學の教授の地位にあつて堂々とその蘊蓄を傾けて居るものがありますれば、國會議員として經世治民の事に參與し、政事運動も随分盛でありまして、彼の禁酒國としたのも全く婦人の力であつたのであります、教育者としては、大中小學校に無數働いて居り、殊に

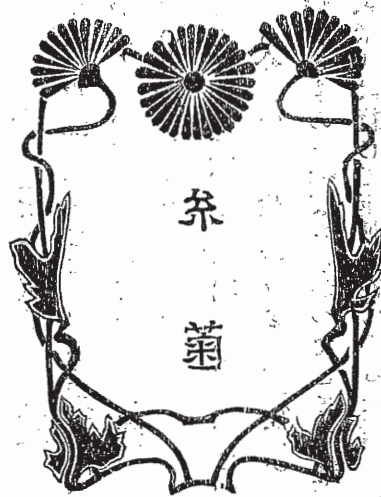
小學校教員は、その九〇パーセントまで女子であるといふ有様であります、社會的の事業は、悉く婦人の手に俟つて成功しつゝあるのであります。

要するに、米國の婦人は一般に實力に富み、性質が快活で、表情に巧みで、意氣も盛でドシ／＼あらゆる方面の事業に、その成績を表はして居ります、米國のと必ずしも良きことのみでありませんが、まだ男子と同一程度の女子大學を一所をも持たぬ我邦の女子教育の現況を思ふと、私共は覺るにその幼稚なことを悲まずには居られません。

サンフランシスの樹

一人の少年が、學校で始めて先生に、外國の地理を習ひ「桑港」はサンフランシスコと讀むんだと教はりました、港はみなでこうも讀みますから、少年は的切り「桑」と云ふ字はサンフランシスコも讀むのだなと思ひました。

或日のこと、少年はお母さんに連れられて、田舎に参りました。そして裏の畑に植ゑてあつた桑の樹を見下し「お母さん、お叔父さんの家にはサンフランシスコの樹がありますよ」と言つたので、皆の者は大笑をいたしました。



大正十三年號

女子の運動熱勃興に就て

梶 山 正 式

米國では近頃囚人運動會といふのを始めたといふことである。これは囚人なるものは身體に何等かの故障があつて、それから犯罪が來ることが多いやうであるから、運動會を行つて幾分でも精神を快活にし、身體の健康を圖つてやれば自然その惡心を除去することが出來るといふ學說に基いて、これを實行したのであるが、それで今日の所では大層好結果を擧げて居るさうである。

身體美を増すには、運動に待つ外はない、健康の愉快を味ふには運動に待つ外はない、精神の快活を得るには運動に待つ外はない、日本の女子が概して體格惡しく皮膚青白く所謂身體美に缺けて居るのは、要するに

運動不足の結果に外ならぬ。

日本の女子が美の盛りが比較的短く、家庭の人となると共に忽ち容色衰へて老人味を帯ぶるに至るも、要するに運動不足の結果である、日本の女子が優雅なる愛嬌に乏しく、沈鬱性のものが多いといふのも要するに運動不足の結果であると言つてよい。

元來遊んだり、舞つたり、歌つたりすることは人間の本能である、他の動物にもこの本能はあるが大體から観ると、下等動物より高等動物になるに従つてこの本能が強い、人間が最もよく遊ぶやうである、これに就ては色々の説がある、或は人間が有餘の勢力を遊戯を行ふことに依て調節するのであるともいひ、或は子供が大人になるまでには、野蠻人が文明人になるまでの徑路を繰り返すのである、それで子供に遊ぶことを禁ずるのは悲惨なことであるといひ、或は遊戯は生活の準備として身體を鍛練するのであるともいふ、何れにしても遊ぶことゝ歌ふことゝは人間の本能であることは疑ない、その本能を抑壓し遊びたいといふ慾情を制止すればやがて不自然な身體となり、不健全な肉體となるのは當然なことである、即ち日本の婦人は全くこの運動遊戯といふ人間の本能を抑へて一種の禁慾から今日の不自然な不健全な身體となつたものであるといふことは争はない事實である。

而して明治三十年頃の我國の女學生と今日の女學生との體格を比較すると、驚くべき發達を見せて、身長だけでも今日の女學生はザツと一寸程伸びて來てゐるといふのは、又一層從來の日本婦人が運動不足に陥つてゐて伸びるものを伸ばさなかつたことを裏書きして餘りあるものといつてよい。

歐米人は總じて運動を盛にする米國の婦人は又格別で馬にも乗るがボートも漕ぐ、もうお疲れでせうと却て

男子の方が婦人から聲かけられることが多いといふ、英國人は遊戲が好きで、窮屈な體操を好まないでクリケットやフットボールに熱中してゐる、英國の風景畫にはボールが飛んで居ないと完全でないといはれる程である。

近頃我國の運動界では競技が盛でダンスはあまり顧みない傾向がある、一体動物の遊びの中で最も自然的なものはダンス即ち「踊り」である、文明人は勿論、野蠻人でも動物でもよく踊る、よく踊れば鬱結した精神も一掃して快活となる、血液の循環をよくして、神経系を強くし、すべての動作が優美となり、女子には最も好まれ又適當して居るのである、たゞ社交ダンスは注意する必要がある。

我校には從來運動場が狭くて、運動も不十分であつたが第二校の實現と共に廣い運動場を有することになつたに就て、これから漸次體育の方面にも力を注ぐこととし、體操も競技もダンスも共に盛にして互に立派な身體美を養ふことにしたいものである。



創校二十年の辭

相 山 正 式

今更ながら、光陰の電光石火も管ならぬことは、眞に驚くの外ありません。本校の創立されたのは、まだツイ昨日の様に覺えますのに、早く既に二十年を経過いたしました。顧みれば、この二十年間に於て世界の大勢は實に一大變動をいたしました。我日本帝國もその世界的地位を向上いたしました。是は全く隔世の感があります。更に我が大名古屋市は、その間にまた極めて急激なる膨脹發展を遂げました、又眇たる私共の一身土にも少くとも肉體的に大に變化を免れませんでした。

この間に本校は先づ二葉の芽をかい割り、次で世の人の温かい保護の下に、安らかに健やかに成長發達いたしました。初めの程は御承知の如く、裁縫女學部だけの一本立ちであつたのでありますが、大正六年に至て高等女學部といふ一本をこれに添へ植ゑ込みました、而して同十三年即ち昨年に至り、第二高等女學部といふのを更に

〓(一)〓

Ⅱ(二)Ⅱ

一本植を込みました、爾來今日では枝も葉も幸によく生ひ繁つて、鬱然たる林をなして参りました。これ全内
は職員諸君の非常なる御心盡しの結果と、外は多數諸賢並に卒業生諸姉の容易ならぬ御援助の賜に外ならぬので
ありまして、誠に感謝の念に堪へぬと共に、本校にとつてこれは慶ばしいことではないのであります。

而して、私共が日夕忘れても忘れ難きは、故渡邊女學校校長渡邊辰五郎先生の御恩恵であります、私共は夫妻と
もに同先生の門下に御教を受け、創めて我名古屋市に來つて本校を設立いたしました、當時は全く渡邊女學校の
分校の形で開いたのであります、その後も先生には本校がどうかして健全に育つやう遙に東都の空から温かい
情を寄せて陰に陽に御懇切なる御指導を賜はりました、その後本校創立第三年といふ年に憾むらくは御病のため
に御隠れになりました、今日もし御在世であつて、本校の現状を御覽下されたならば、如何ばかり御喜び下さる
こととせうと、誠にこれが何よりも残念で残念でなりません、さうした因縁から本校は年々創立記念式の際には
こゝに心ばかりの祭壇を設けて、先生の御令嗣滋先生即ち現東京女子専門學校長から、先生の形見として御贈り
下された御像と先生の著書の木版を以て作られた火鉢とを安置し奉つて、せめてもの思に御霊の前に御禮の詞を
申述べるのを例として居ります。

又私の先輩で東京に於ては稻垣、横山、安東、棚橋等の諸先生、當市に於ては森本清藏先生、中村豊吉先生等
又内輪では中村敬一、服部正の兩君は本校のために多額の財を投じて敷地校舎の設備に充當して下さいました、
その他今日能々御臨席下さいました各位初め多數の先輩友人の御援助を受けたことは、殆ど校畢に暇がないので
あります、今日この記念日に際して厚く御禮申し上げます。

本校は、明治三十八年一月より同三月まで、恰も日露戦争の奉天會戰並に日本海會戰の前後で、日々戦況を報

する各新聞の號外を配達する勇ましい鈴の音を聞きながら、設置の準備を急いだのでありました、而して、その四月一日に無事開校いたしました、その當時も矢張り現在の位置で、稻葉家所有の舊い士族家敷を借り受け、其所に在つた普通の民家を、そのまゝ、教室に代用いたしました、その時分の學校の敷地は、僅に二百坪餘り家屋も百坪内外に過ぎませんでした、生徒數も九十名でありました、その後物變り星移つて現今では敷地も三校合計しては一萬坪を越え、校舎建物も一千七百坪即ち敷地に於て五十倍、建物に於て十七倍、生徒數も亦十六倍ほどに膨脹いたしました、誠に二十年前の本校を追憶しては轉だ感慨無量であります。

而して、その間に本校から社會に出した卒業生の數は、裁縫女學部三千百二十八名、高等女學部九百九十六名でありまして、これ等の卒業生は、何れも教養ある婦人として内にありては、家庭の改善福祉に寄與し、外にありては、社會の進展向上に貢獻し大にその實効を收めて居ります、在學生はこれ等先進の遺せる質素健實の校風を慕ひ益々行狀を慎み學業にいそしみ、只管自重以てその名聲を失墜せざらんことを努めて居ります、特に本校は常に自治自由を尊び教師の適當なる監督の下に何事も自律的に自學自習することを獎勵し、以て私立學校の特色を發揮せんことを努めて居ります、今日一同が歌ひます二十年記念の唱歌は別に大家の手を借らないで生徒の合作に成つたものであります、今日差上げる雜誌は勿論その表紙の圖案も繪はがきの意匠も皆生徒の自作であります、本校の徽章も本校生徒の考案になつたものであれば、本校生徒心得日々反省事項の如きも矢張り生徒が提案し生徒が協議し生徒が決定したものであります。

斯様にして本校は幸に御蔭に依て漸次發達はして參りましたが、然らばこれで完成したのかと申せば、まだまだ却々前途遼遠と申さなければなりません、第二高等女學部は今まさに工事の最中であります、或時期を劃し

て三校を綜合して理想に近いものになし上げるにはなほ餘程の年月を要します。又教育方法の如きも徒に理想のみ高くしてその實際はあまりに隔りが多いのは衷心慚愧に堪へない所であります。要するに過去二十年間、本校はたゞ理想に向て近づく道程の最初のホンの第一步を経過したるに過ぎないのであります。

思へば過去二十年間は誠に束の間でありました誠に一瞬間でありました。恐くはやがて三十年記念日も五十年記念日も瞬く間に参りませう。而して百年記念日と二百年記念日と次々に行はれて、愈々學校も完成し本統に理想の域に近づきその時こそは皆さんのお子さんも、お孫さんも、お孫さんのお孫さんも共々に袖を運ねて本校講堂に集ひ來られて、嗚呼私共の學校もこんなに立派になつた、これだけの賢婦人を出した、これだけの賢母良妻を出したと言つて互に手に手を取つて喜び合ふ日のあり得ることを期待してやまぬ次第であります。

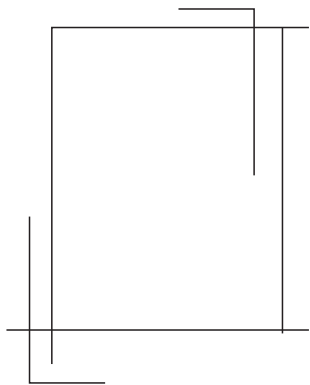
（四）

本校の徽章の由來 (その一)

本校の徽章は、二十年前創立の當時は袴の裾に波形のへ形の形をなした巾四分ばかりの黒のテープを附けてゐたものであります。それから明治四十三年に至つて、あまり附けにくいので、皆が困るさういふ説が出て、種々相談の結果細い黒の直線二本に改めました。その後大正六年に、高等女學部が併置せられた際に、又色々協議の結果高等女學部は裁縫女學部が産んだのであるから、その意味を表はさうさういふので、二本の黒線の間中に白線一本を加へ二機のテープを矢張り袴の裾に附けたのであります。それから暫くその時代が続いて、大正十年に至つて校旗の徽章を確定したいさういふので、その一月に學生徒からその考案を募集いたしました。所が意外に澤山の応募數があつて、百ばかりも集りました。それで一月十九日にその考案全部を運動場に掲示して、二十六日に投票いたしました。その結果一等賞に當選したのが三年生の木全俊子さんであつて、即ち現今一般に用ひてゐるものがそれでありませう。

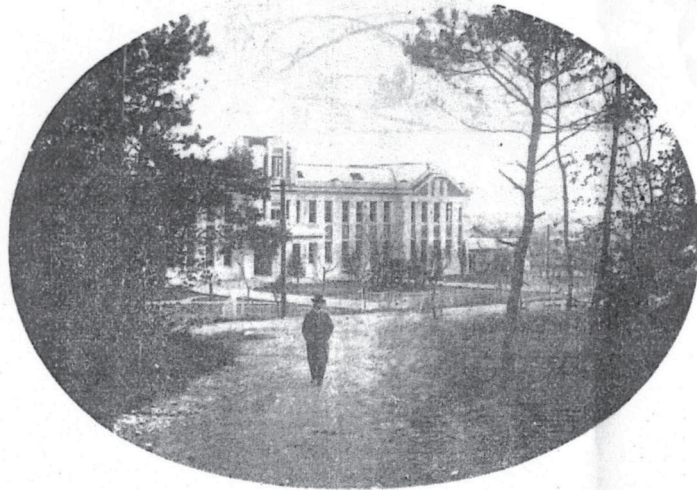
(由來 づ しく)

昭和（終戦まで）



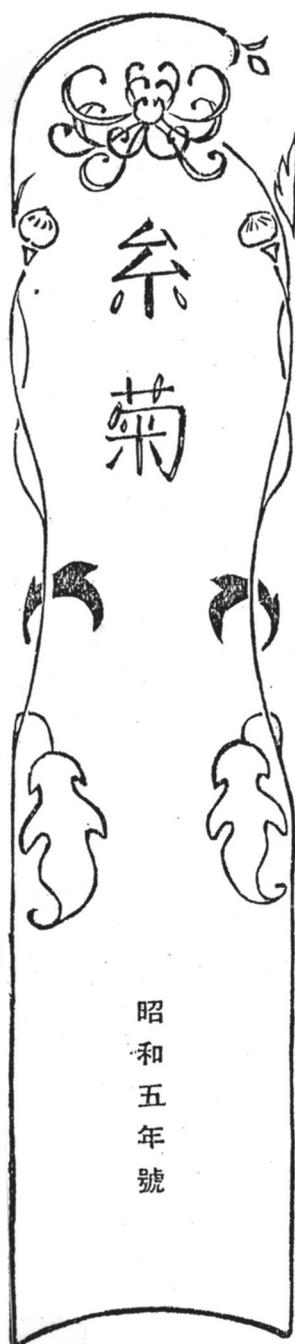
昭和（終戦まで）	
財団法人相山女子学園の組織成る	昭和四年「糸菊」……………57
創立二十五周年	
女子専門学校開校記念式に臨みて	昭和五年「糸菊」……………58
創立三十周年記念式の辭	孝経幢除幕式の辭
相山女学園々歌	昭和十年「糸菊」……………61
孝経解題	昭和十一年「糸菊」……………70
大東亞戦争開始せらる	昭和十六年「糸菊」……………75
創立記念日式辭	昭和十七年「糸菊」……………78

校學門專子女山楢



財團法人 楢山女子學園の組織成る

私立學校の設立は當に永遠の基礎の最確固たるものならざるべからず、本校が從來一個人の經營に屬せることは、これ永遠の策といふべからず、こゝを以て本校設立者は多年の宿望に依り、大正三年十二月財團法人楢山女子學園なるものを組織し、本縣を経て文部當局に申請し、本年五月芽出度く認可せられたり、こゝに於て楢山女子專門學校、楢山第一第二兩高等女學校、楢山女學校の各校は本財團の經營に移れり、而してこれがため設立者より提供せる寄附財産は、基本金十五萬圓 土地、建物器具、機械、圖書等約五十八萬圓にして、尙ほ今後數ヶ年間は本財團に缺損を生じたる場合は、從來の設立者よりこれを支出する内規なり、斯の如くにして確固たる本財團の組織全く成立せり、希くば今後本財團經營の各女學校が互に相俟てその本領を發揮し、未來永劫我邦女子教育界に燭燭の華を咲き出でんことを。



創立二十五周年
女子専門學校開校記念式に臨みて

梶 山 正 式

左は本年十一月一日記念式に際し申し述べた要領であります、在校生は勿論同窓生諸姉も母校の過去現在を知られ將來
愈々校運發展のために御努力を願ひます。

本日、本學園創立二十五周年記念式を兼ねて女子専門學校開校祝賀會を開催するに方りまして名譽ある多數各位の御臨席を辱う
致しましたことは、誠に無上の光榮とする所であります。さて、二十五年と申せば、一世紀の四分の一、悠久なる歴史の上から申
せば、ホンの束の間、ホンの一瞬間に過ぎないと申さば申さるゝでありませう、併しながら、この束の間、この一瞬間は實に最初
のスタートを切つた最も大切な一瞬間でありました、本校未來の運命は凡そこの一瞬間で卜とすることが出來ると申しても良い
と存じます。

故に一度平素御同情を蒙つて居ります各位に對して今日までの情況を一通り御報告申し上げ、更に今後一層の御援助を得たい希

〓(二)〓

望を持ちまして茲にこの式典を舉げた次第であります。

本校は元東京裁縫女學校即ち現今の東京女子専門學校長渡邊辰五郎先生を初め多數の先輩各位の御心盡しに依つて、明治三十八年四月を以て當市富士塚町に先づ名古屋裁縫女學校と稱して設置致しました、當時は日露戦争の真最中で私共は日々連戦連捷の勇しい號外配達の鈴の聲を聞きつゝ、その準備に没頭いたしました、この頃の我邦の女子教育の状態は今から思ひますと、誠に隔世の感があるほど極めて微々たるもので、我が金城城下に高等女學校が僅に二校、各種學校に屬するものが漸く數校に過ぎませんでした、この時に方り實能あり實力ある良き妻賢き母を養成せんことを標榜して呱呱の聲を擧げたのが即ち本校でありました。一体女子教育といふ事業は全く椽の下の方持ちの如き仕事でありまして非常な堅忍を要するものであることは豫て覺悟して居りましたが一意専念創立時代の經營に力を盡して参りました、その後御蔭を持ちまして非常な順調に進展致しまして大正六年には校運の發展につれて更に姉妹校の相山高等女學校を設置致し、從來の裁縫女學校と路をへだて、相對峙し一方は筋肉活動を主とせる教育、一方は精神活動を主とせる教育、兩々その向ふ所を異に致しつゝ、も結局は同じ高嶺の月を見て進むことに致しました、而して高等女學校併置後も矢張り源を實科教育に發して居るといふ點もあつたでありませうが本校の生徒は概して質朴、溫順、眞面目、勤勞を厭はぬといふやうな美風がありましたので、私共學校當事者はやがてこの空氣を以て校風を建設することに努力致して参りました。

この高等女學校併置は、大正六年であり恰も我邦はかの歐州戦争の餘波を受けて、所謂好景氣時代に入り女子教育も頓に勃興し女學校の數も年々増加致しましたに係らず大正八九年の頃には、本校の入學志願者は二百名の募集に對して實に九百餘名といふ多數の志願者があるといふ盛況に達したのであります。

越えて、大正十年四月私共は極めて短日月ではありましたが、米國の女子教育の情況を視察して歸りまして、所謂他山の石大に資する所がありまして、遂にこれが動機となつて、この市の東郊山近く水清き田代町山下の地を卜して、さ、やかながらも教育の理想郷建設の抱負をいだいて大正十三年四月更に第二高等女學校を設置致した次第であります。そしてこれと同時に一般世間の要求や思想の著しい變化を致して参りましたに連れて本校は特に各種の作業を奨励し所謂勤勞教育を鼓吹し、運動場を出来るだけ廣く取つて各種の運動を奨励し良教員を聘し普通教室、特別教室の完備を圖りました、併しこれは徒に理想ばかりで、實際は大なる距離のあることは偏に私共の行き届かないのと經費の不足のためで遺憾に堪へぬ次第であります。

然るに時勢は時々刻々推移して止みません、所謂良妻賢母主義や人格主義が唯口癖のやうに唱へらるゝ、空論の時代は過ぎて眞に

内容の充實した實力ある婦人を養はんことの要求が一般社會の聲として四方に喧しくなつて参りました。

而して必然の結果として高等女學校を卒業せるのみを以て満足せず更に進んで高等專門程度の學校に入學せんことを熱望せる女子が激増して來たことは恰もその昔小學校を卒業せるのみを以て満足せず年々歳々高等女學校入學志願者の激増せると同様の現象を呈して参りましたことは事實であります。而して今日我邦に高等教育を受けたる母が一人でも多く輩出することを圖ると共に高等教育を受けた婦人の一人でも多くが婦人の母性愛を中心とせる社會的事業に與りて力を盡すことはこれ世界の太勢に顧みて最重なる事業であります。茲に於てか本校は文部當局並に縣當局その他先輩各位の懇切なる指導を得て本年度より女子專門學校を開設するに至りました。

又これと同時に私立學校は單に一個人の經營に委すことはその基礎の鞏固なる所以でないといふ見地から、更めて七十餘萬圓の財産を私共から寄附行爲の手續を了し、こゝに相山女學園と稱する財團法人を組織し、昨年五月を以て文部省の認可を得まして、即ち今日では專門學校初め高等女學校、裁縫女學校何れもこの法人の傘下に經營することになりました。

要するに、本學園は二十五周年の今日に至つて漸く豫期の第一時期を劃したに過ぎないのであります、教育の内容から見ても時勢の要求と家庭の希望と學校の所見と追々接近して今後始めて本調子の教育が出來得る機運に達した譯であります。

私は不敏短才何の取り柄もない者であります、俗に瘠馬に米六俵と申す諺があります通り私の荷物としては甚だ重きに失して居ります。幸にして外には各位の御同情と御後援とがあり、内には眞に忠實熱誠なる職員諸氏が御援助下されて今日まで大過なきを得ました、これはこの機會におきまして衷心から厚く感謝の意を表する次第であります。私共は今日の記念式を以て第二期に入る門出と心得て居ります。

今後更に勇往邁進して益本校の内容充實を期したい考であります、來賓各位、父兄各位、並に卒業生諸姉におかせられましても今後一層の御心添を御願ひ致します、又在學生諸子は今後益御聖旨を奉戴して、愈徳操を磨き學業をいそしみ天晴れ模範の婦人として世に出でられんことを希望して己まぬ次第であります。

終りに臨み本日は監督官初め特に東西兩京より渡邊荻原兩先生の御貴臨を戴き又遠近より一千數百に餘る各位の御臨席を辱う致しましたことを、こゝに重ねて御禮申上げます。これを以て式辭に代へます。



創立三十周年記念式の辭

梶 山 正 弑

本日、本學園創立滿三十周年記念式並に孝經幃除幕式を舉行するに方りまして、知事閣下御代理官、並に大岩市長閣下を初め、多數貴賓の御臨場を辱うし、特に、東京より遠藤文學博士、東京女子専門學校長渡邊滋先生、並に本校創設當時格別御盡力に預りました稲垣知剛先生の御三方、又京都よりは元府立第二高等女學校校長萩原忠作先生、金澤よりも淺野貞子先生、又同窓會員として東京より數名の方を初め東西各地から、百里を遠しとせずして、態々御光來下さいました方が多數に上つて居ります、誠に御芳情の程何と

〓(一)〓

〓(一)〓

も御禮の申上げやうもない次第でございます、茲に學園一同を代表致しまして謹で深甚なる謝意を表する次第であります。

扱本學園は、こゝに御祀り致してあります、東京女子専門學校の前身たる、東京裁縫女學校長渡邊辰五郎先生初め、多數先輩各位の甚大なる御心盡しに依りまして、明治三十八年四月、時恰も彼の奉天の戦や日本海々戦の前後で日々連戦連捷の號外の勇ましい鈴の聲を聴きながら、富士塚町なる一民家を借り受けて、名古屋裁縫女學校と銘打つて呱呱の聲を挙げたのであります。之が抑もの濫觴であります。

爾來、星移り物變り今日伊太利・エチオピアの戦争の報導を手にしながら、茲に本學園三十周年記念の式典を舉げることを得まするのは、誠に無量の感慨に堪へない次第でございます。

過去三十ヶ年に於ける本學園沿革史上最も主なるものを挙げますれば、

大正六年四月 梶山第一高等女學校の設立

大正十三年四月 梶山第二高等女學校即ち現在の女專附屬高等女學校の設立

昭和四年五月 財團法人梶山女學園の認可

同 五年四月 梶山女子専門學校の開校

等であります。

更に現在に於ける梶山女學園の情況を三十年前に於ける裁縫女學校時代に比較致しますれば、

生徒數に於ては、初めは僅に九十人に過ぎなかつたものが現在では二千四百餘名、教職員數に於ては設立當時には僅に四名に過ぎなかつたものが、現在では七十八名、學校の敷地は、三十年前には僅に二百五十坪に過ぎなかつたものが、現在では富士塚町田代町の兩敷地總計一萬一千七百十五坪、建物の坪數は、三十年前にありては僅に百坪に充たなかつたものが、現在では二千五百七十五坪であり、教室數は三十年前には僅に三教室に過ぎなかつたものが只今では七十三教室になつて居り卒業生は最初の年度に出したのは僅に九名であつたものが今日は總計七千七百九十二名年々の經常費が最初の年がはつきりは致しませんが大體一千圓に充たな

かつたものが本年度の経費豫算は實に十二萬七千八百三十圓に上つて居ります。

以上單にこの數字のみに見しても、如何に本學園が三十年間に異常の膨脹發展を遂げたかは、我々當事者も唯だ驚いて居る次第でございます。

是れ偏に渡邊辰五郎先生初め、朝野多數の方々の容易ならざる御後援と、眞に忠實熱誠なる教職員各位の多大なる御努力の賜に外ならぬのでありまして、私は今日の式典を舉ぐるに際し、先づ是等の方々に衷心より感謝の意を表する次第でございます。

私は過去三十年間、甚だ不束の身で一向何の御役にも立ちませんでした、唯だ私は御蔭で私自身の爲に少からざる尊い體驗を得させて戴きました、一世紀の世といふ字は三十といふ字から出來て居りまして昔から三十年を以て一世紀とも申すことがあるさうであります。

私は茲に今日を以て本學園の一新紀元を劃することとし、過去三十年は全く私自身の修養と準備の時代であつた、是からこそ本統に私の體驗に鑑みて老骨ながらも驚馬に鞭打つて大に粉骨碎身の努力を拂うて、幾分なりとも教育報國の誠を盡したい存念でございます。

希くは來賓各位、並に卒業生諸子に於かせられては、今後とも一層の御心添へを御願ひ申上げる次第でございます。

又在學生諸子には、今後益々聖旨を奉戴して、愈々徳操を練磨し、天晴れ模範婦人として世に出でられんことを望む次第でございます。

孝經幢除幕式の辭

次に孝經幢建設に就いて一言申し上げたいと存じます、斯うした場合に、式辭の長いことは、來賓各位に對し、甚だ御迷惑なことは重々承知致して居る所ではございますが、簡單に一通りだけ、御話申し上げることを御許し願ひたいと存じます。

孝經幢は、昨年來約一ヶ年有餘に亘りまして、多數の先輩各位の御厚情と、御盡力とに依りまして、漸く落成致し、本日茲に多數貴賓の御貴臨を辱う致し、無事除幕式を舉ぐるの光榮に浴しましたことは、洵に私の一生中、空前の感激でありまして、厚く感謝申し上げます。

畏くも教育勅語に拜しましても、先づ克く忠に克く孝にと仰せられ、又吾々は吾々の祖先から常に忠孝一本の大義を説き聞かせられて、忠孝が道德の大本であるといふことは、上下共に實に國民的信念となつて來て居るのでございます。

然るに、顧みて、現在國民道德の實際を觀ますのに、我尊嚴なるべき國體觀念に關しまして、たとひ一部少數の者とは申しながら、頗る遺憾なる點がないとは申されません、更に、孝道に至りましては、口には之を説くものに乏しくはありませんが、見方に依りましては、年を遂うて頽廢に傾きつゝあると、言はざる言はれないこともないのであります。

維新以來、泰西の唯物思想乃至誤れる個人主義に累ひされて、親子の間をさへ、兄弟の間をさへ、徒に功利的解釋を加へて、更に異とせざるが如き、寒心に堪へないものがあるのであります。

若し夫れ、祖先崇拜の美風に至りましては、畏くも宮中に於かせられては、依然として古式に則り嚴かに之を執り行はせられ以て國民に之が儀範を垂れさせ給ふ御事は、洵に恐懼措く能はざる所であり、然るに之に反して民間に在つては、此の觀念が甚だ空漠で、時勢の推移に連れて、是れ亦年を遂うて衰頽に歸せんとする傾向は、決して絶無とは申されないのであります。

惟ふに斯の如く、我國民が道德的精神の墜落致しましたことは、其の因て來る原因が、何れにあるかと申しますれば、即ち申すまでも無く、近來我國民が泰西の文明に眩惑し、殆ど半世紀間、我を忘れて無批判に之を輸入し、即ち所謂西洋中毒に罹つて、遂に漸く我邦の美風良俗を破壊するに至つたのであるといふことは、苟も心ある人の均しく認むる所であります。

一體近代の西洋の歴史は、主として人間の慾望の發展であります、我國の歴史は惟神の道を承け繼いで來て居るのであります、西洋の文化は、科學の文化であります、日本の文化は皇の道の文化であります、世界の人類は、久しい間に亘つて、科學的文化の惠澤を享けたのでありますが、歐洲戰爭以來遂に其の弊に堪へざるに至りました、即ち所謂科學的文化の行き詰りであります。

而して、現今世界に於ける一大問題は、今後如何なる文化に依て、斯の如き恐るべき科學的文化の弊害から脱却することが出来るかといふことであります。

想ふに、此の極端なる物質的文化に一大變革を加へて、世界の人類の弱肉強食の弊害から救ひ出すの途は、唯だ一つ、我東洋の道德的文化の力に俟つの外に他に良策はないのであります。

而して、此の東洋の道德的文化の力を立派に保持するものは、唯だ獨り我大日本帝國あるのみであります、即ち言ひ換ふれば、我國の皇の道を措て他に救済の途はないのであります。

我國は、維新以來、西洋かぶれを致しました併し之は一時の過失に過ぎないのであります、此の間國運は、日に月に隆昌に趣き、國威は益々宇内に輝く所以のものは、實に我國皇の道の賜であります、萬世一系の 天皇を戴き、義は即ち君臣、情は即ち父子の、世界無比の尊き國體の賜に外ならぬのであります。

泰西の諸國は、此の際須らく範を我大日本帝國に求めて、大に反省すべき時代ではありますまいか、若し然らずして、尙吞噬是れ事とし、這般の伊太利・エチオピアの問題を擴大して再び歐洲戰亂を醸すが如きことがあつたとしたら、歐洲人は御氣の毒ながら自滅の外はありますまい、而して我國民は、亦人の振り見て我振り直せといふ如く、益我國體の本義を明にし、我國運の發展する所以の源が何れにあるかに就て十分の反省を要する時であります。

Ⅱ(六)Ⅱ

そこで、私は本學園の生徒諸子に我皇の道を解釋する一手段として、古來我邦の上下を通じて最も尊重して來つた孝經の精神を、十分に傳へたいものであることを思ひます。

嘗て元田永孚翁は、不世出の英主にまします 明治天皇に侍つて、支那の經書を御進講申上ぐるに方りまして「此書は我皇の道の訓解であります」と言上致しました、又昔熊澤蕃山は「四書の中の中庸を説明して中庸は我三種の神器の註釋である」と申しました、洵に古今好一對の千古の達識であります。

茲に於て私も、この口吻に擬ねて、孝經なる書物は元々孔子と曾子との問答を書せるものであるとしても、其の實全く我日本惟神の道の一註釋に外ならぬと申したのであります。

畏れ多きことながら、我國體が神に發し、天照大神の御存在が天地萬物の上にあらゆる惠澤を垂れさせられ、神武天皇が橿原宮に御登極の際は、先づ、皇祖皇宗の靈を祀らせられて大孝を御述べになり、爾來崇神天皇を初め、御歷代の天皇、詔ある毎に先づ皇祖皇宗の御神德を讃へさせられないことではありませんのであります。「孝は德の本なり教の歸て生ずる所なり」の大眞理は、漢學渡來以前に於て既に己に我皇室に於て御實踐遊ばされて居つたのであります。

其後も、連綿として今日に至るまで、絶えず御實行遊ばされて來て居るのであります、而も本家本元の支那に於きましては、孝行といふことはあつても、所謂「孝を以て天下を治むる」といふ孝經の大精神は後世殆ど實行せられたことはないとして良いのであります。

此に於て、孝經は我大日本帝國の惟神の道の註釋であると申しても、毫も不自然でないであります。

我國が今日旭日昇天の勢を以て、東洋の盟主たるの實力を發揮し、最早世界列強に伍して何等遜色なき堂々たる一大強國として國民的信念を確立することを得ました所以の源は、偏に我が神代の時代から三千年來長くも皇室に於かせられて、天の經たり、地の利たる孝道を、御實踐遊ばされて、其の間に深厚なる御德を御樹て遊ばされたる結果に外ならぬのであります。

我國民たるものは、畏くも我皇室から默々の間に示し給はりたる此の一大眞理を能く了解し、能く實行し、我國の礎を愈が上に

大盤石の安きに置き、延いては、世界の、非人道的、弱肉強食の苦から、幾億の尊き人類を救済するを得んことを、切望して止まぬものであります。

私は薄徳非才、敢て自ら揣らず、職に女子教育に任すること茲に三十年、何等盡す所なく碌々今日に至り、衷心慚愧に堪へない所であります。唯だ幸にも、過去三十年間、躍進又躍進の近代日本歴史の實物の活動映畫を、眼のあたり觀覽して参り、この光榮ある時代に、この光榮ある一國民として、生れ合せましたことを、無上の幸福とし、謹で 兩陛下並に大日本帝國に、感謝の誠を捧げたことの一念から、何かこの機會に一つの記念物を残したい、何が良いかと、選擇に苦みたる際、偶々昨年東京巢鴨學園に於て、本日御臨席を賜はりたる遠藤博士の御話に、ヒントを得ました。遠藤博士には、先年御郷里前橋市に、孝經碑を御建てになりましたが、之か同地方の、社會風教上に好影響を與へたることは、實に豫想外に甚大なものがあつたことを承り、私も此夏同地に伺つて、親しく之を拜見し、一種の崇高なる言ひ知らぬ感銘に打たれた次第であります。

又私は嘗て、米國に於ける、オリンピック大會から歸つた、本校水泳選手前畑秀子さんの、母の追善の爲に、碑を建て上げた當時の事など、想ひ起して、實に孝道ほど人を感動せしむるものはないことを、つく／＼思ひました、孝は實に百善の基であります、即ち、夫れやこれやの御指導や、經驗から、遂にこの度この幢を建てることに相成つた次第でございます。

孝經とは、御承知の通り、古文今文の兩様があり、更にその何れにも、古來幾多の學者に依り註釋本が數限りなきほど刊行せられ而も各、多少その字句を異にしまして、其種類又は出版物の夥しいことは、後程、御覽戴く、孝道展覽會に出品せられて居るものだけに見ましても、實に三百餘種に上つて居るといふことで想像が出来るのであります、斯様な次第でありますから、さてそのどれが正しいのか、何れに従ふべきかの選擇につきましては、實に尠からず苦心致しました。而して愈これを取り極めます迄には、勿論相當迂餘曲折があり、なか／＼此の経路を申し上げます。此の間に遠藤博士には種々有益なる御意見を伺ひ、又特に八木幸太郎先生並に中村豊吉先生には終始最も懇切なる御指導に預りました、結局學說としては、議論の餘地が多々御座いますけれども我國民に、古くから親まれたものは古文であり、又私共の、常に尊崇して措かぬ中江藤樹先生も、古文を用ひられて居り、

Ⅱ(八)Ⅱ

又遠藤先生も古文を信じて御いになり、最初の文を読みましても今文の方の「仲尼居曾子侍」と讀むよりは、古文の方の「仲尼居曾子侍座」と讀む方が何となく語呂がよく奥床しさもあるといふ御話もあり、彼れ此れして、全然學説は學説として切りはなし、古文を採用することに取り極めた次第であります、而して古文の中にも、足利本とか、太宰本とか、刊誤本とか、種々ございますが古來我國に傳はつて居るものゝ中で、最も由緒正しいと思はれますのは、先づ清原家のもの、所謂清家本であると思はれますので、清家本を取ることに致しました、其又清家本の中にも色々ありますが清家正本を取ることに致しました、文字の数は、總計一千八百五十七文字で、之を大体四つに等分致し、四枚の青銅に鑄造して、四方に張り付けたのであります、而して私の建幢に關する感想文は聊かながら幢の隅に書き附けて置いた次第であります。

終りに臨みまして、重ねて御禮申上げたことは、昨年來一年有餘に亘りまして、前述の通り遠藤博士、八木、中村兩先生の容易ならぬ御指導と御援助に對し、又數ヶ月に亘つて之が揮毫に没頭して下さいました神田久吉先生、又この幢の設計と監督とには高等工業學校長土屋先生、同教授城戸先生の一方ならぬ御盡力、又石工には才木藤助氏、銅工には中川勝次郎氏何れも熱誠なる御努力に預り、其他直接間接に幾多の諸賢に少からざる御配意を得たことに對し、厚く御禮申上ぐる次第でございます。

私の家には、今日なほ幸にも當年八十二歳の老母が健在致して居ります、併し子たる私は、平素一向に孝養も得致しませんので、今更孝道などを談ずる資格は、毛頭無いのでありますが、唯だ孝行は致したいといふ氣持だけは、有つて居ります、どうか本學園に學ぶ生徒諸子には、私の微意のある所を汲み取られて、日夜之を仰ぎ之を誦して、幾分でも自己修養の資に供せらるる所があるとしたら、誠に望外の幸とする所であります。

長々と御清聽を、煩はしましたことを感謝致します、以上所懷を申述べまして、創園三十年記念式並に孝經幢除幕式の辭に代へる次第でございます。

昭和十年十月三十日

椋山女學園長

椋 山 正 弑

梶山女學園々歌

長谷部親弘 作歌
片山颯太郎 作曲

生き生きと (♩ = 約112)

ア ア ワザハカタシアア
ミナハトホーシサレドハゲマバ
ナドカナラザランイタラデヤーマンワレナラス
コノニハヨワレラカカガヤケル
ゾーミライーレテアマリアリ
mp イザヤイザタユマスウマスアサユニ
mf オホミコトノリト
p テーコロラミカキffミラキタヘ
ヒカリアルヨノヒートタラ



【昭和十一年度】

孝經解題

楳山正弼

孝經は、如何なる書物であるかといふことに就て、その概略を述べて、諸子の参考に供しませう。

孝經の意義

孝經は、天子より庶人に至るまでの孝道を説いたもので、支那十三經の一である。孝の字は、老の字の省畫に、子の字を合せたもので、子が老人を負ひたる意を表はし、よく親に事へることである、經の字は文^{ふみ}を成す布帛を織るに、終始一貫して易らぬ縫糸の義

＝（一）＝

で、聖人の教訓をものせる書物も、條理正しく、萬世不易の道を説かれたものゆゑ、之を經といふのである。六經、十三經等の經文の如きがそれである。孝經は、孔夫子が孝の大道を説かれた聖典であるから、後世これを經に列して「孝經」と稱へたのである。

孝經の作者

孝經の作者については、古來種々の説がある、曰く孔子の作、曰く曾子の作、曰く後世の偽作、曰く孔子と曾子との問答を、曾子の門人の編纂せるもの、曰く子思の作と、又その他にも説があつて一定しない、史記の仲尼弟子列傳に「曾參は南武城の人、字は子輿、孔子より少きこと四十六歳なり、孔子おもへらく、能く孝道に通ずと、故に之に業を授け孝經を作る」と、又漢書藝文志に孝經は孔子曾子のために孝道を陳ぶ」と曰はれてゐる。

次に、古文孝經孔安國の序には、曾子の作とする説があるが、已に孝經の初に「仲尼閑居曾子侍坐」とあり、曾子自ら曾子といふのは、少しこの説の疑はしい點である。

又後世の偽作であるといふ説は、朱子の「孝經刊誤」その他にも述べてあるが、これにも亦疑問とすべき點が頗る多い、宋の司馬光の作と傳へらるゝ「孝經指解」の序に「孔子曾子と孝を論ず、而して門人之を書し之を孝經といふ」と述べてあるが、この説に従ふのが善いと思ふ。

孝經は、何時頃出來たかといふに、已に作者が判然しないのであるから、正確の年代を知ることが出來ない、けれども魏の文侯に（經傳のあつたことは、古來の學者が皆認める所である、魏の文侯は周の威烈王の時の人であるから、遅くとも今から約二千三百四十年前の頃までに出來たものであり戰國の頃は、已に行はれて居たものと認められる。

孝經の傳來

孝經には、古文孝經と今文孝經との別がある、古文とは周代の文字をいひ、今文とは漢代の文字をいふのである、孝經は戰國時代

を経て、秦の始皇帝の時に、有名な焚書の厄に遭つて、一時その影を没したのであつたが、河間の顔芝私かに之を藏して亡佚を免れ漢になつてから挾書の律が除かれたので、芝の子貞これを河間の獻王に獻じたので、始めて世に出でたのである、漢の文帝の時に大學の教科に用ひられ博士を置かれた、その後武帝の末に、魯の共王(一に恭王)が、その宮殿を廣めんがため、孔子の舊宅を壊つた所、壁の中から、論語、尚書、孝經など數十篇を得た、こゝに於て孝經は二本となり、顔氏の本は漢代の文字で書かれてあつたから、之を「今文孝經」と呼び、孔壁の本は周代の科斗の文字で書いてあつたので、之を古文孝經といふのである。

文と今文とは、多少經文に相違があるのみならず、章の別ち方や順序が不同になつて居る、古文の方は二十二章になつて居り、今文の方は十八章になつて居る、古文の方の庶人章と孝平章との二章を合せて今文の方では庶人章の一章となし、古文の方の聖治章父母生續章、孝優劣章の三章を合せて、今文の方では單に聖治章の一章となし、古文の闕門章といふのは、今文の方には入つてゐないものである。

而して古文孝經の方は、漢の武帝の時、孔安國が夙にこれが傳を作つたと言はれるが、久しく顯はれず、梁の時には、鄭注と並び行はれたが、久しからずして亡びた、隋の時に王劼が之を手に入れて劉炫に送つたので、劉炫は乃ちその得失を序して「孝經述義」を作つて之を公にした、併し之は劉炫の僞作であるとも言はれて疑ふものが多い。

今文孝經の注解には、所謂鄭注と言つて鄭氏の注がある、或は大儒鄭玄のものせるものとの説もないではないが、鄭玄の他書の注と合はない點があるので、之を疑ふものが多いから、特に鄭玄の注とは言はないで、鄭氏の注といふのである。

唐の玄宗皇帝は、開元七年群儒を召して、古文と今文との是非について質された、然るに劉知幾は孔傳を是とし、司馬貞は鄭注本を主張し、議論が容易に決しなかつた、そこで玄宗皇帝は自ら今文を主とし、汎く諸家の注解の長を採り、傍ら孔鄭二注を參酌して注を作り、元行沖に命じてその疏を作らしめ、開元十年これを天下に頒たれた、是が即ち有名な御注孝經開元本である、天寶三年に至り、帝は再び孝經に注して天下に頒ち、三年天下に詔して家毎に藏せしめ、同四年更に之を石に勒した、これを石臺孝經といふ。

宋の眞宗の時、咸平中、邢昺等は勅命により「孝經正義」を作つた。「孝經正義」は御注に基き、元疏に據つて作られ、後に十三

經注疏中に收められた、仁宗の時秘閣に存した所のものは鄭注、御注及び古文の三本であつたが、古文は經だけあつて傳はなかつたのを司馬光が「古文孝經指解」を作つて上つたのである、哲宗の時范祖禹も亦古文孝經説を上つた、斯くて古文再び世に現はれ、更に朱子に至りて、孝經刊誤なるもの作られ、又古文も相當に用ひらるゝに至り、爾來古文、今文の二家互に對峙して譲らないので、遂に歸著するところを知らない有様である。

我國に於ける孝經の傳來

我國には何時の時代に、この孝經が渡來したかは不明であるが、遅くも聖德太子の頃には已に渡來して居つた様であるが、大寶令には明かに記載せられて居る、孝謙天皇の天平寶字元年に天下に詔して家毎に一本を藏し、精勤誦習せしめられたことは有名な話である、天平寶字元年は皇紀一千四百十七年で、唐の孝經家藏天寶三年は皇紀一千四百四年に當り、その間の差は僅に十三年に過ぎない、蓋し當時は何事も唐に倣ひ、遣唐使や留學生の往來が盛で孝經を家毎に藏せしめることなどは、極めて昌代の盛事であると思召から、逸早く御採用になつたものであらう、この事はこれ實に我國體の淵源に關係をなすものであるから、國民として銘記せねばならぬことと思ふ。

降つて淳和天皇の天長十年には畏くも始めて、皇太子の御讀書始に孝經を用ひさせられ、以後はこれが恒例となつた、而して當初ま孔、鄭の二注本が行はれたが、清和天皇貞觀二年には孔、鄭の二注を廢し、専ら御注の今文を用ひられたのである、その後鄭注はしひたが、孔傳は傳へられた、圓融天皇の永觀中僧齋然、鄭注を齋して宋に渡り、之を太宗に獻じた所、太宗は大に悦び秘府に藏して置いたが、又彼の土に於て再び亡佚してしまつたのである。

鄭注はその後久しく世に出なかつたが、寛政年中、岡田新川が群書治要中から抜抄して世に出した、この書清國に傳はり、鮑廷博はこれを「知不足齋叢書」中に採録した、而して、孔傳も久しく世に現はれなかつたが、享保中太宰春臺、足利學校の藏本に基きその他の諸本も參酌して之を刊行した、これ亦清國に傳はつて鮑廷博の「知不足齋叢書」中に收められた、斯の如く孝經の古註本は

すべて我國に幸に湮滅を免れたのである。

鎌倉時代には、將軍の讀書始にも亦孝經を用ひられた、徳川時代には、大名の若君などは漢籍の習ひ始めに孝經が用ひられた、畏れ多いことであるが、我が三笠宮殿下の御幼少の御時代には、特に、皇太后陛下の御思召に依り、落合侍従に就て、親しく孝經を御習ひ遊ばされたと申すことである。

惟ふに孝經は、天子より庶民に至るまでの孝道を説いたものである、而も斯の如く現に、宮中に於かせられて、宮殿下御修學の上、重要な教科として、御採用遊ばされて居るのである、我國民たるもの、また陛下の思召の程を體し奉り、延いて一般國民にも之を及ぼし、家毎に人毎に汎く深く普及せしめたいものである、これやがて我國古來の良風美俗を維持し、我國民道德を益盛にし日本精神を發揚する上に効果少からざるべきを信ずるものである。

古文 孝經

孝經には前述の通り、古文今文の兩様があり、更にその何れにも古來幾多の學者に依り、註釋本が數限りなきほど刊行せられ、而も各多少その字句を異にして、その種類又は出版物の夥しいことは、昨年我が嵯山女學園に孝道展覽會を開いたとき、孝經諸本が三百餘種に上つた事實に視ても想像が出来るのである、本學園東山校門前に建立した孝經幢には、古文孝經を採用した、これはその時にも申した通り、學說としては勿論議論の餘地が多々あるが、唯古文の方は、古くから我國民に親まれたものであり、予が常に尊敬せる、中江藤樹先生も古文を用ひられて居り、又最初の文を讀んでも、今文の方の「仲尼居會子侍」と讀むよりは、古文の方の「仲尼閒居會子侍坐」と讀む方が、何となく語路がよく、奥床しくもあるやうに思はれるので、全然學說を離れて古文を採用した次第である、而して古文の中にも足利本とか、太宰本とか、刊誤本とか種々あるが、古來我國に傳はつて居るものゝ中で、最も由緒正しいのは先づ清原家のもの所謂清家本であると思はれるので、清家本を取ることにした、其の又清家本の中にも色々あるが、清家正本を取ることに致した次第である。



(昭和六十年度)

大東亞戰爭開始せらる

梶 山 正 弑

今次の歐洲戰爭が勃發した前後、ドイツのヒットラーは、イギリスのチエンバレンに對し、「戰爭回避のために、血の滲むやうな努力を拂つた、ヒットラーはダンチヒ問題を中心にして、イギリスに對し、十分な備へがあつたに係らず、飽くまで謙虚な態度で、些々たる問題のために、世界の兩大國の交戦することが、歐洲民族のために不幸でもあり、恥辱でもあることを説いて、何とかして、平和裡に解決せんことを主張したのであつたが、英國の頑冥なる、遂に納るゝ所とならずしてあの悲劇を演じつゝあるのである。

我帝國も亦太平洋の平和を熱望して、八ヶ月の長きに亘りて、隱忍に隱忍して、手を換へ、品を換へて、凡そ手の盡し得る限りを盡して、最後の瞬間に至るまで彼の反省を期待した、併し結局これは徒勞に終つた、ルーズベルトやハル長官の迷夢は遂に覺めなかつた。

＝(一)＝

Ⅱ(11)Ⅱ

昭和十六年十二月八日遂に日米交渉は決裂して、光々明々たる大詔は下賜せられた。我皇軍は時を移さず、ハワイに、グワム島に、マレー半島に、フィリピンに、香港に、その他各方面に部署を分つて、正々堂々と進撃し、僅に數日を出でずして、米英主力艦隊の大部分を撃沈撃破し、各地に敵前上陸を敢行して、敵の根據地を奪取し、忽ちにして太平洋の水、陸、空の制覇権は完全に我手に歸した、洵に感激の外ない次第である。

抑もこの度の大戦は我國が大義のために起つた軍である。天に代つて暴戾なる米英を膺懲するがための軍である。凡そ正義に抗することは出来ない、見よ、今に世界は百八十度轉換して、こゝに大和民族の押し樹てた錦旗の下に、三千年來の大理想、八紘一宇の大精神は、着々として現實に具體化せんとして居るではないか。我等の光榮と矜持とは蓋し之に過ぐるものはないのである。我々は大君の御楯となつて、歡び勇んでこの聖業完遂に邁進することを實に此上なき本望とする。さて本學園は、大海の一滴ながらも、この秋この際、如何なる進路を取るべきかに就ては、聊か所信を申し述べて見たいと思ふ。

言ふまでもなく、學生生徒は學生生徒の本領を忘るゝことなく、日々の課業を専心一意、益々致々として勉勵すると同時に、常に心身の修鍊に心を留めて、他日必ず一廉のお役に立つべく、心中の一劍を磨いて、これが準備を、をさ／＼怠らないことが本分であるに相違ない。

然るに今日は三千年來の眞に振古未曾有の非常時で、國家の隆替一にかゝつて此の秋にあるといふ重大時局に直面して居る。本年十月には、勅令を以て諸學校の修業年限を、三ヶ月乃至六ヶ月間短縮せられ、學校生徒に對して一日も早く社會に出で、報國精神に燃ゆる眞劍なる勤勞作業に助力して貰ひたい、所謂國家總動員で、國家要務に貢獻して貰ひたいことを要望して居るのである。

又本年八月には、全國の大學、專門學校、中等學校には學校報國隊が組織せられ、今やその活動の雄々しい第一步を踏

み出しつゝあるのである、その結果個人的には或は色々不便や不自由や困難なこともあらうが、この非常の時には、一身の利害を忘れ、一路國難に赴くことが、皇國の學徒として最も望ましいことである、既に本學園學生生徒も、軍事や産業の勤勞奉仕に参加したことは、これ迄に延べ人員數千名の數に達して居るが、誠に涙ぐましい活躍振りである。

最近我が情報局の發表に依れば、この種の勤勞奉仕は、既に獨逸や伊太利や英國等にも、盛に實行せられつゝあるとのことである、而して獨逸國女學生の模様を聞くに、女學生勞働奉仕隊は、戰爭のために馬匹を奪はれた農村に、力強い協力を致して居る、男子に代つて、耕作、播種、植付、施肥、除草、收穫等の手傳をする傍ら、手の足らぬ主婦や、病氣の主婦に代つて、家事を助け、幼小兒の面倒を見たりして、殊勝なる努力を拂つて居る、都會では、女性徵用令に依て動員せられた一般女子と共に、工場に赴いて増産の手助けをし、又市電や郊外電車の車掌、驛員の事務を助けて居るものも多數に上つて居る、特に幼兒保護のため幼稚園、農繁期臨時幼稚園に於てナチス婦人團の手を通じて力を入れて居り、女學生等も國家の幼兒に對する考へ方をよく認識して、指導者たる保姆のもとで、一生懸命に保育に専念して居るといふことである、敵國ではあるが英國の如きも、女學生は隊を組んで農場に働き、學校生活といふものを、單に學校だけの生活よりももつと廣い社會と結びつけて、総合的に考へることになつて來たといふことである、伊太利でも、女學生が軍人慰安所への奉仕や、空地利用の耕作、廢品回收の手傳ひ等に盛なる活躍振りを示して居るとのことである。

非常時世界の女學生は、何れの國も斯くの如く夫れ／＼活躍して居る。況や日本精神に依て盡忠報國の念を鍛へ上げられた我帝國の女學生が、歐米の女學生に比して優るとも劣る道理のあるべくもないことは、論ずるまでもない。

願くば、我學園の學生生徒諸子も、常住座臥第一線に決死奉公、生還を期せざる勇士の崇高なる心を心として、夢寐の間も輕佻薄蕩の譏りを受くることなきは勿論、本學園報國隊員として、この榮光の聖業に参加し、以て聊かたりとも新東亞建設に貢獻せられんことを、切望して已まぬものである。

Ⅱ (Ⅲ) Ⅱ



創立記念日式辭

(昭和十七年六月一日)

梶 山 正 式

大東亞戰爭開始以來、早くも茲に半ケ年、御稜威の下日に日に赫々たる戦果を收め、新世界建設の一途に邁進しつゝあります今日、學園直接關係者三千五百餘名一同に相會し、先づ謹んで尊嚴なる國歌を奏し、聖勅を拜し、和氣霽々裡に茲に本學園三十七周年記念の式典を舉行致すことを得ますのは、學園無上の光榮とし又慶びとする所であります。

本學園は、明治三十八年四月一日を以ちまして、當市東區富士塚町の一民家に呱呱の聲を擧げたのであります、一体この「明治三十八年」といふ年は、今年のこの「昭和十七年」にも匹敵して有史以來、特筆大書すべき我帝國が一大飛躍を遂げた記念の年でありました、即ちその正月の二日には、旅順港が到頭陥落いたしました、三月十日には永遠記念すべ

〓 (一) 〓

Ⅱ(二)Ⅱ

き奉天の大勝利を博しました。次いで五月二十七日に又奉天會戰と相並んで永久記念すべき日本海海戰が行はれました、而して本學園は三月十日の奉天の戰と、五月二十七日の日本海海戰との中間の、四月一日を以ちまして開校いたしましたのであります、従つて本學園は後に至つて考へて見れば、全く日露戰爭の一大記念塔として建てられた結果と相成つたのであります。

而して又本年は、昨冬宣戰の大詔を拜して以來、眞珠灣を屠つたのを筆頭に、ホンコン陥り、シンガポール陥り、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、ニューギニヤ次々と我が手に歸し、今や濠州も風前の燈となつて居ります、念ふに本學園は、有史以來曾てない我國一大飛躍の年に誕生して、今また茲に有史以來一大飛躍の記念の年に於て、この芽出度き創立記念日を迎へましたことは、實に一段と感慨無量なるものがあるのであります。

さて、本學園は以上申しました通り、今から三十七年前の春、富士塚町の稻葉氏の邸を借り受けて、之を假校舎として開校いたしましたのでありますが、最初は生徒數も僅に九十名、先生の數も僅に三人だけでありました、一体公立の學校は縣なり市なりで最初から校舎も建築し、器具機械も設備して、先生の顔ぶれも揃へて「サア教育して下さい」と所謂据ゑ膳で渡されるのでありますから大した苦心も何もしないものであります、私立の學校はさうは参りませんので、設備から職員組織から、一切合切全部初めから經營者の手に依て行はなければなりませんから、「月々火水木金々」如きではない、初は全く晝夜兼行不眠不休と申してよい程繁忙の生活を續けて参りました。

併し、幸に皆さまの御援助の御蔭で、校運は日に月に榮え、年一年と膨脹發展いたし、大正六年には、今日の第一高等女學校が新設せられ、同十三年には只今の女專附屬高等女學校が創設せられ、昭和四年には文部省から財團法人の認可を得て、その翌年女子専門學校が開校せられました、それから更に昭和十二年即ち今から五年前に、從來の裁縫女學校が名残り惜しくも發展的解消いたしまして、新に女子商業學校が誕生いたしました、そして又本年からは、年來の希望であつた幼稚園を開園いたしました、之は國民の教育は、上の方の高等教育も必要であるに違ひないが、之と同時に又「三ツ子

の魂百まで」と申す如く、下の方の未だ國民學校に入學する以前に於て、所謂人生の苗代時代から、皇國民鍊成を初めることが、遙かに教育的効果が多いといふ見地から、之を開園いたした次第であります、然るに、開園の發表三日にして、忽ち満員の盛況を告げ、その後數十百名の入園希望者を遺憾ながら御斷り申したやうな次第でありました。

斯くして、今や本學園に學ぶもの三千四百餘名、卒業生を出すこと一萬一千二百餘名、教職員の現在數百十餘名、誠に異數の發展を遂げ、斯界の一權威として蔚然東海に重きをなして参りました、今日この記念日に際しまして、遠く創設の當初に於ける恩師渡邊辰五郎先生の御配慮の賜を初とし、爾來春風秋雨三十有七星霜、内にありては財團役員、教職員各位の和衷協同異体同心となつて、孜孜としてその職責を完うせられたる御勞苦、外にあつては江湖の御同情特に卒業生諸姉の多大なる御後援の賜に對し、茲にこの機會を以ちまして、衷心より深甚の謝意を表する次第であります。

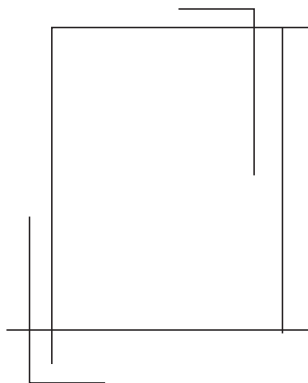
今や、我國曠古の大軍を東亞に南洋に進めて、世界歴史の偉大なる創造の過程にあります、東洋も西洋も南洋も、砲煙彈雨の間に世界の地圖は時々刻々塗り換へられつゝあります、時局の重大なる蓋しこれより甚しきはありません、私共はこの時局に鑑み、その職分を完うする上に、更に一大緊張を加へなければならぬと存じます。

希くば本學園に學べる生徒諸子は、本年四月制定せる本學園訓の趣旨に則り、只管に皇國婦道の修養と實踐とに邁進し本校傳統の美はしき校風を愈が上にも發揚せられ、以てこの日露戰爭大記念塔の頂上に、更に百尺竿頭一步を進めて、今日の大東亞戰の夫れこそ雲に聳ゆる大記念塔を重ねて建設して、未來永劫陸離たる光彩を添へられんことを切望して已まない次第であります。

こゝに本學園滿三十七周年記念日を迎ふるに方り、一言蕪辭を述べて式辭といたします。

昭和

(創設者 梶山正弼 没まで)



昭和(創設者梶山正式没まで)	
十三徳目 實踐反省事項 (昭和二十一年) 梶山女学園発行	83
戦災復興と民主化とに多忙を極めた一年有半 (昭和二十二年)「保護者會々報」	87
梶山女学園教育方針(学園教育のあり方) (昭和二十三年)「七十五年史」	88
大學開設記念式挨拶 昭和二十四年「糸菊」	90
女子大學の門ひらく 陣痛こゝに四十有五年 昭和二十四年「糸菊」	92
「五十年史」序にかえて 昭和二十九年「五十年史」	94
創立記念日を迎えて 昭和三十六年「糸菊」	98
大學竣工式に臨みて 昭和三十七年「糸菊」	104
人間橋由来記	108

實踐反省事項

梶山女學園

反省は向上の原動力であり、實踐は完成の過程である。その目的に向つて、いつも着實に實踐し、絶えず謙虛に反省することによつて、すべての物は創造され、あらゆる事は成就する。若きわれらの負ふべき新日本建設の任は重く、行くべき道は遠い。全學園生徒はこゝに十三項目について申合せ日常卑近の事よりはじめてその實踐と反省に資する次第である。

(一) 學習態度に關して

- 一、自發的研究的なるべきこと
- 1、研究的態度で未知の門を開いて行くこと
- 2、何事も徹底するまで研究する習慣を作ること
- 3、家事一切を生きた學問と考へ萬事科學的に觀察し工夫すること
- 4、お互同志協力して實際的に研究しその結果につきつとめて意見の發表をする

二、豫習復習を怠らぬこと

- 1、確信の持てるまで豫習復習に努力すること
- 2、家庭でも學校でも餘裕の時間には努めて豫習復習をすること
- 3、机に向はずとも教科書を擴げずとも頭の中で復習し得る習慣を作ること
- 4、豫習復習についても出来るだけお互同志協力すること

三、授業時間に於けること

- 1、始業の相圖と共に靜肅に着席し學習の準備を完了しておくこと
- 2、姿勢を正しくして勉強すること
- 3、積極的に眞面目に勉強すること
- 4、和やかな氣分朗らかな態度で指導を受けること
- 5、政治や時事問題に大なる關心を持つこと
- 6、先生の發問には氣おくれせず自ら信ずることを明快に答へること

7、不審の點は理解出来るまで遠慮なく質問すること

8、他人の質疑應答に留意して自己啓發の資とすること

四、自習時間に於けること

1、靜肅にしてみだりに席を離れたり私語したりせぬこと

2、單獨に眞劍に自習すること

3、自分の遅れてゐる學科について特に努力すること

(二) 父母及び家族に對して

一、父母に對すること

1、常に尊敬と感謝の念を失はぬこと

2、品行を慎み健康に注意して心配をかけぬこと

3、何時も素直に何事にも自ら進んで骨身惜まず働くこと

4、決して不平反抗的態度をとらぬこと

5、新しい知識を鼻にかけて生意氣にならぬこと

らぬこと

6、常に父母の喜びを念とすること

7、外出の際には行先を明かにして父母の許をうけること

8、居を別にする場合には音信を怠らぬこと

二、家族に對すること

1、お互に思ひやり助けあつて家庭を和やかな團樂の園たらしめること

2、長幼の序を守りお互に禮儀を重んずること

3、老人に對しては尊敬の念を以て仕へ親切に勞はること

(三) 師及び同僚に對して

一、師に對すること

1、尊敬と感謝の念を忘れず禮儀を厚くすること

2、勉學操行及び健康について十分に注意し決して心配をかけぬこと

【二】

3、教へられたことは必ず實行し命ぜられたことは喜んで應ずること

二、同僚に對すること

1、良友を求めると共に自らが良友たるやう修養を怠らぬこと

2、親しきになれて言葉遣、舉動等に禮を失はぬこと

3、友の忠告は感謝を以て受けること

4、見榮を張り矯慢に流れぬやう留意すること

(四) 日本人として

(外國及び外國人に對して)

1、人類愛にめざめ外國人に親切であること

2、廣く人類平等の見地から自惚を慎み狭量を戒め氣宇を濶大にすること

3、外國の長所を學ぶと共に我國傳統の美風を失はぬやう注意すること

4、外國人に對しては特に品位を重んじ

【三】

矜持を失はぬこと

(五) 社會人として

(一般公衆道德)

一、通行に關すること

1、歩道左側通行を嚴守すること

2、姿勢を正しくして元氣よく歩くこと

3、三名以上並んで歩かぬこと

4、交叉點では信號を嚴守し横斷歩道を通ること

5、道の真中で立話をしたり戯れをせぬこと

6、途中でものを問はれた時は親切に明瞭に答へること

二、乗物に關すること

1、乗降には一列勵行を嚴守すること

2、飛乗り飛降りさせぬこと

3、出入口に立たぬこと

4、車内では學校の名譽を重んじ言語舉動を慎むこと

(六)自由主義に關して

- 1、老幼に席をゆづり腰かけてゐる場合には荷物を持つてあげる
- 2、雨具を持つてゐる時には他人に迷惑をかけぬやう特に注意すること
- 3、公共物に關すること
- 1、道路、公園、圖書館、神社佛閣其他公共の場所を汚さぬこと
- 2、公共物は特に大切にすること
- 1、自由と我儘とを混同せざる
- 2、獨立自主の精神を養ひ依頼心を去ること
- 3、責任を重んじ何事も自發的にすること
- 4、常に他人の身になつて考へ多數の幸福を念とすること
- 5、自分の考へが間違つてゐることがわかれば憚ることなく直ちに正しい方にかへて行くこと
- 6、まちがつた差別感、優劣感を捨て、

(七)風儀に關して

- 誰とでも仲良く交ること
- 1、常に學園の名譽を思ひ何事をするにも自覺と誇りを以てすること
 - 2、服装を正しくしケバ／＼しい身なりをせぬこと
 - 3、俗惡な雑誌小説や無責任な噂話などによく注意しそれに引込まれぬやう用心すること
 - 4、交通道德を守り車内又歩行の時大聲の談笑を慎むこと
 - 5、學校の歸りには決して道寄りせぬ事
 - 6、映畫館、集會場等には必ず目上の人と同行すること
 - 7、夜は外出せぬこと、止むを得ぬ場合も一人では外出せぬこと
 - 8、許可又は相當の紹介なくして知らぬ人と用事以外の話をしたり一緒に歩いたりせぬこと
 - 9、未知の人より信書などを受けた時は

【四】

(八)容儀服装に關して

必ず父母師長に相談すること

- 一、容儀を正しくすること
- 1、校章を正しくつけそれ以外のものをむやみにつけぬこと
- 2、胸紐を正しく結び下袴の襷を整へること
- 3、破れ綻び等は直ちに繕ふこと
- 4、登校、下校の際は特に服装を整へ名札の出し入れに注意すること
- 二、質素を旨とし華美に流れぬこと
- 1、成るべく規定の服装を守ること、止むを得ざる場合は之に準ずる目立たぬ服装をすること
- 2、髪飾り化粧をせぬこと
- 3、頭髮は女學生らしく簡素に結ぶこと
- 三、清潔に注意すること
- 1、ハンカチ、衾カバー、靴下などを清潔にすること
- 2、頭髮の手入に注意すること

【五】

(九)禮儀作法、言葉遣に關して

- 3、爪を長くのばさぬこと
- 4、履物の手入をよくすること
- 一、禮儀作法は恭敬を本とし親和を旨とする
- 1、師に對し途上では親しみある態度で挨拶をし校内では會釋をすること
- 2、來賓に敬意を失はぬこと
- 3、學園の生徒はお互に途上挨拶を交すこと
- 4、校門の出入には敬虔な態度を要する
- 二、優雅(しとやか)にすること
- 1、常に女學生らしい品位を保ち他人に不快な感を与へぬやう慎むこと
- 2、教室内にもとより教室の出入、廊下の歩行その他すべての行動が荒々しくならぬこと
- 三、内には毅然たる節度を持すること
- 1、女子らしい態度行動の内にもしまりきまりを正しくして他人に乗ずる隙

【七】

- 二、自ら率先して行ふこと
 - 1、勤勞愛好、祖國復興の精神をもつて作業に従ふこと
 - 2、人真似に流れず自ら信じてよいと思ふ作業をすること
 - 3、美しく行届いた作業をすること
 - 4、各自の体の様子を考へて無理はしないやう友達同志は互にその點を理解し助けあふこと
- 三、敏速にすること
 - 1、集合、解散、作業の交代を敏速にすること
 - 2、無駄口をきかぬこと
- 四、其他
 - 1、服装は輕装とすること
 - 2、周密なる觀察と熱心なる研究心を以て従ふこと
 - 3、明朗な心ですること
 - 4、道具の後始末に氣をつけること
 - 5、作業中は絶えず周圍に氣を配り過失事故のおこらぬやうにすること
 - 6、作業後は手足を洗ひ口を嗽ぎ衛生に留意すること

(三) 朝會其他儀式に關して

- 1、容儀を正しくすること
 - 2、入退場を靜肅敏速にすること
 - 3、場内では決して私語側見をせず又足音などを立てぬこと
 - 4、正しい姿勢を保つこと
 - 5、儀式的空氣を亂したり會場を汚したりせぬやうお互に注意すること
- 一、至誠をこめて行ふこと
- 1、眞面目な心をもつて陰日向なく行ふ事
 - 2、他事を考へず私心を持たずに行ふ事
 - 3、終始無言ですること
 - 4、定められた仕事は責任を以て之を完遂すること
 - 5、作業範圍外でもなすべきことがあれば進んで行ふこと

(三) 勤勞作業に關して

一、學級役員に關すること

- 1、學級役員(級長、副級長、班長其の他の係)は常に教室を明るく心地よくする爲の推進力となること
- 2、級友は役員に協力して美しい級風を

(二) 當番の責任に關して

- 2、言語應答は特にはつきりするやう注意すること
- 四、言葉遣は上品にして明瞭なること
 - 1、女學生らしい言葉遣に注意すること
 - 2、方言を避けて標準語を用ひること
 - 3、正しい發音抑揚に注意すること
 - 4、語尾を明瞭にすること
 - 5、あまり大聲での話を慎むこと
 - 6、長上に對しては敬語を用ひること
 - 7、人の噂話、悪口を言はぬこと
 - 8、他人の感情を害ふやうな言語を用ひぬこと
 - 9、路上、車内では無駄口をせぬこと

(二) 清潔整頓に關して

- 作り上げるやうに努めること
- 二、當番に關すること
- 1、當番の日は平常より早く登校し又最後の戸締を見るなど責任を果してから歸ること
 - 2、能率を第一として陰日向なく働く事
 - 3、誠意を以て微細な點に注意すること
 - 4、人の嫌がる仕事を自ら進んで行ふ事
 - 5、道具は丁寧に扱ひ使用後は舊の位置に整頓しておくこと
 - 6、下校の際教室の戸締りをする事
- 一、机上、机内の整理、机列の整頓に常に注意すること
- 2、紙屑や鉛筆の削屑等を散らさぬこと
 - 3、校内の紙屑、布切など見つけ次第拾ふこと
 - 4、鉛筆を直接机上で削らぬこと
 - 5、上靴、下靴の區別をはつきりする事
 - 6、履物はよく塵を落し袋に入れて教室

【六】

保護者會々報

號刊復

戰災復興と民主化に

多忙を極めた一年有半

梶山 正 弑

一昨年三月十二、十九兩日にわたつて、創設四十年光輝ある歴史を語るわが梶山第一高等女學校々舎は、惜しくも戰災にかゝつて全焼した。また覺王山の女子専門學校、同附屬高等女學校、女子商業學校並に幼稚園の各建物は、同年四月以來數回にわたつて、或は近隣に多數の爆彈を受け、或は直接焼夷彈に見舞われ、屋根、窓ガラス等は大部分破損した。

かくて敗戦後、これが復興と學園の民主化とに多忙を極めて、早くもこゝに一年有半を経過した。その間、生活の苦難をはじめ數々の悪條件を克服して鋭意力を盡された幾多の保護者各位、教職員並に學園關係者各位、また卒業生、在學諸師の容易ならざる努力に對しては、誠に感

半完了の豫定である。

覺王山の各校舎が、幸にもその災禍は比較的少かつたので、四つの學校を併せて授業しても、

敢えて二部教授を施す必要もなく、生徒諸子は戰時中後れた學科を補うべく、何れも非常な熟意を以て「學問しなければ」という強い意慾に燃えて、政々元々と研學にめしんで居られることは、誠に嬉しい限りである。

學園の民主化については、先ず本學園の役員を改組して、社會の學識經驗者を初め、ひろく教職員、保護者、卒業生諸氏からも参加を乞うて、専ら鞏固な基礎と健全なる發達とを期すべく研究中である。學園教育に關しては、わが國教育制度の改革と相俟つ問題であるが、これには學園各校より三名づゝ並に學園財團役員より三名を選挙して「學園教育革新委員會」なるものを組織し、既に數回開會して着々審議を進めて居る。

何れにしても、平和なる文化祖國再建を目指して今後如何に更進すべきかは、この急轉直下の時局に直面して、重要中の重要な問題であるから、慎重の上にも慎重に審議を重ねてその萬全を期したいと考えて居る、今後とも各位の一段の御助力を希つてやまぬ次第である。

學園教育革新

委員會發足す

時局の推移に伴ひ學園の復興と内容刷新とを討議し研究を要する問題が山積して居りますので、學園長の要望により専門校、高女校、商業校各校の教授、教諭中より三名づゝの委員を選挙し

て學園教育革新委員會を組織し毎月數回開會することになつて居ります。

委員の顔ぶれ

專門校 三朋慶騰 森川良盛

梶山藤子

第一校 名和惠三 山口俊子

村上進一

附屬校 須田昌平 林 敏

官澤鈴枝

女商校 加藤兼松 木田勝良

安倍英子

財團評議員 高橋淺造 堀 桑吉

渡邊ひさの

本月は主として六・三・三・四の教育制度改正につれて本學園の採るべき將來の方針等について検討を續けて居ります。

新築校舍近く竣工

昨年三月當時の有志各位より、約四十一萬圓の寄附を得て別に本學園よりも四十萬圓を支出し合計約八十一萬圓の豫算を以て奥行五間、間口三十八間、二階建三百八十坪の校舍は、その後順調に進捗して來二月下旬には大体竣工することになりました。

この建築は普通教室十四教室で一時的のバラツク式のものでなく木造ではありませんが堅牢な本建築であります、學園全体の生徒もこれで初めて普通の通り安んじて授業を受けらるゝことになり、誠に有難いこと、誠に厚く感謝の意を表します。

◇...戰災を免れた長山校...◇



梶山女学園教育方針(学園教育のあり方)

一、本学園教育の理念

本学園教育の使命は新生国家の建設に最も深く内面的に参与するものである。而して新国家の性格は日本国憲法に、又教育の理想と目標は教育基本法に示されて居る。この理想実現こそ真に本学園の理念であり念願である。

二、封建的な良妻賢母主義を否定して、一般的教養の向上と個性の完成をはかる

我国の女性はいわゆる幾多の長所美点を持つており、この特質に着眼して、教育上これを重視することは今後とも大切である。しかしながら人間として完成し、男子と同様の一般的教養を身につけてこそ、良き妻となり母となり得るのである。故にその特質に着眼し、これを強調しつつ人間性を培って人格の完成に努力する。

三、真実を愛し真理を追求する精神を養う

真実を愛し真理を追求する精神は、正しい平和と文化とを建設する土台になるものである。学習の興味もこの精神と深い関係を持つ。本学園教育今後の方針は、特に生徒の学習と日常生活を通じて、真実を愛し真理を追求し、これを実現することを体験せしめ、合理的な思考や科学的処理能力、日常生活の合理化等に習慣づけて行くことにしたい。

四、社会人としての教養を深め道義心の昂揚をはかる

戦後社会的にも解放された子女に対して、社会人としての教養を深め道義心の昂揚をはかることは、本学園の教育のあり方として特に強くとりあげられねばならぬ。その為には自他の人格に対する敬愛の念を深め、自律と協力の精神を身につけさせることが大切である。政治問題、経済問題、社会問題に関する認識を深め、個人と社会との関係に対する正しい理解を与え、社会に於ける個人の責任を自覚させねばならぬ。

五、高雅な情操と宗教心の啓蒙をはかる

高雅な情操と芸術的な教養並に宗教的な心持を持つことによつて、はじめて人間はあたたかいしかも深みのある人間性をもつことが出来る。道義の頹敗した戦後の世相を見て特にこの感が深い。

信仰の上に立つてはじめて人生は永遠なものに連り、宇宙の根本法則を信ずることによつてはじめて人生に安心立命の境地が開かれる。しかしこの信仰は科学や理性に背反するものであってはいけない。新しい社会は科学と共に神を信じ豊かな情操をもつた人によつて構成せねばならぬ。社会及び家庭において女性がこの方面に担う役割は

特に大きいものがある。

六、勤労愛好の精神を涵養する

文化はすべて人類の勤労の産物である。まして戦後のわが国の建設は国民の勤労を措いて外に拠り所を求めることは出来ない。科学的精神も宗教的精神も働く精神と結びつけて始めて生活に生かされることとなる。従来の子教育においてとかく勤労精神特に公共のための勤労精神を忘れがちであったことは、不健全な思潮を生んだ大きな原因をなしていた点を反省しなければならぬ。

七、体育を尊重する

従来女子にはとかく体育が閑却される傾向が強かった。これは文化意識の不健全を語るもので、その結果は国民体位の低下となり、生活のあらゆる面に於て能率を低くさせたことは勿論である。

民主的文化国家の建設には国民の潑刺とした意気と強壮な身体とが必要なことはいうまでもない。我々は従来の体育を検討し、体育の生活化によって健康の増進と人格の向上をはかると共に、保健衛生の実施に努めなければならぬ。

結 論

要は日本国憲法と学校教育法に基づいて新教育理念の実現に努め、女性に男性に劣らぬ教養を身につけしめ、眞実を愛し眞理を追求する精神を養い、学術の研究と相まって社会人としての教養を深めしめ、高雅な情操と宗教心の培養をはかり、勤労愛好の精神を涵養し、体位の向上に努めねばならぬ。これがため我が学園は師弟相たずさえて、愛と尊敬のうるわしい空気に充ちた和風駘蕩の一大樂園を実現することを期待するものである。

大學開設記念式挨拶

(昭和二十四年十一月一日記念式場にて)



梶山正式

本日本學園大學開設記念式を舉行するに方りまして、各大學總長、知事、市長殿を始め來賓、父母、同窓會員等の各位には公私御多端の御中にも拘りませず、斯くも多數、御臨場の榮を賜わり、又文部大臣よりは、遙々御懇篤なる祝詞を寄せられ、我々學園一同、感謝措く能はざる所でありまして、茲に衷心から厚く御禮申上げる次第でございます。

さて、今から四十五年前、本學園はその濫觴として、誠に芥子の實にも似たる、小やかなる、所謂裁縫女塾として出發致しました、その後、幸に諸先輩の御同情と御援助とに依りまして、極めて健全に、極めて順調に生々發展致しまして、更に今次の學制改革に連れて、新教育制度に依る女子大學を開設致し、こゝに新發足を見ることに相成りました。

恩師、渡邊辰五郎先生始め、之迄本學園に御關係下されて、陰に陽に、御配慮を賜はりました各位には、慙かし御喜び下されて居ることゝ存じます。

熱々思いますのに、今や祖國日本は、時々刻々歴史の、嚴しき裁きを受けつゝあるのであります、嘗ての軍國日本は、正しく敗るべくして敗れました、在りし姿の日本は、亡ぶべくして亡びました、乍併今後、在るべき日本と、在らしむべき祖國とは、斷じて壊滅したものではありません、否斷じて壊滅せしめては相成りません、この際にこそ、日本人たるものは、この自信を失つては相成りません、一日も速に祖國日本をして、その品位と權威とを以て、國際社會に復活せしめなければならぬのであります、更に思いますのに、凡そ一國の運命を決するものは、武力ではなかつたことは、已にお互に目前に、まざ／＼體驗させられた所であります。然らば一國の運命を決するものは何か、即ち其の根本に於て、先づその國民の抱く精神、その國民の持てる理想、その國民の開拓せる文化が、夫れであらねばならないことを、此の際我々は改めて十分に認識しなければならぬと思ふのであります。

茲に於て、本學出發に方りまして、先づ何れの學部を選ぶべきかに就ては、學園内に於て、また色々の説がないではありま

せんでしたが、考慮を重ねました結果、先づ家政學部を置くことに決定致しました、之は、一つには本學園創設以來の歴史と傳統とに鑑み、又一つには「其國を治めんと欲するものは先づ其家を齊ふ」という古聖人の教訓を玩味し、更に又一つには一般女子の生活に、最も密接なる關係を有し、自然女子に通有的に興味を有する學科は何であるか等各方面の觀點から綜合して見て最適當なものは即ち家政學である、是れ即ち本學が先づ第一に家政學部を置くことに決心した所以でございます。

尙ほ今後、次々と他の學部を置くに致しましても、本學園當面の方針と致しましては、先づこの家政學部に全力を集注することに致した次第であります、そして私共はこの日常生活に最も手近な家政學部を通じて、我國民族文化と日本精神の根柢を、今一度掘り返し、學問文化の普遍と、人類基礎の確立に、たとい大海の一滴たりとも貢獻致したいと存じます。

而して本學設置に方りまして、私共が最苦心と努力を拂いましたことは大体二つあるのでございまして、即ち一つは教授陣を豊かにすること、今一つはその施設方面の完備ということであります。

幸に先づ學長には、我々の最も信賴せる我邦豫防醫學の泰斗でこれ迄屢々國際學術會議にも出席せられ世界の文化國の事情にも御通曉になつてゐる鶴見博士の御就任を得、その他教授、助教授等の教職員合計四十九名、夫れ々學界の權威の御來任を乞うことが出来、家政學部として先づ十分なる陣容を整えて、出發することを得たに信じて居ります。

次に施設の方は、從來の専門學校の校舎は勿論、取り敢えず新に一棟百七十坪二階建校舎を増築致し、被服學科に對しましては、纖維物理實驗室、被服工作室、纖維化學實驗室、纖維、メリヤス製造實驗室、染色精練漂白室、天秤室、暗室、乾燥室、食物學科に對しましては、調理科學研究室、食品化學研究室、營養化學研究室、組織及微生物研究室その他準備室、實習室、講義室、調理室、食物加工室、貯藏室等數十室の完備を期し、昨年十月以來六ヶ月間に亘つて、大學設置審査委員各位の綿密詳細且つ嚴重なる實地調査を受け之なら先づ申分なしと立派に折紙を戴いたのであります。

この上は各位の御援助の下に、往年本學園の學生であつた前畑秀子嬢が、國際競技に参加して、その眞價を發揮した當時のあの意氣と努力とを移して、やがて之を精神文化と科學研究の上に及ぼし學園同人、相携へて國民文化の向上と人類の生活文化達成に貢獻せんことを希つて止まぬ次第であります。

願わくば、本日御來臨を賜りました各位、竝に江湖の皆様方の、今後一段の御支援と御厚情に依り、如上本學設置の使命を完うせしめ賜わらんことを、こゝに重ねて念願する次第でございます。

本日、開學記念日に方りまして、一言蕪辭を申述べまして御挨拶に代える次第でございます。



女子大學の門 ひらく

陣痛こゝに四十有五年

梶 山 正 式

本學園創設の根本目標であつた女子大學は、昨秋以來七ヶ月に亘つて大學設置委員會の慎重嚴密なる審査の結果、本年五月十六日附の官報を以て、これが設置を認可せられ、愈々六月一日學園創立記念日の佳辰を卜して、芽出度くもその門は開かれることになつた、これひさえに本學園教職員諸氏の寢食を忘れ夜を日についての必死の努力と、保護者各位の絶大なる後援と、その他江湖諸彦の甚大なる同情の結晶の賜に外ならぬのであつて、先づ以てこゝに厚く衷心より御禮を申し上げる次第であります。これまで我が國には、大學令はあつても、女子に對する大學は、官公立にも私立にもたゞの一枚も認可せられてなかつた、これは女子に對する差別待遇の最も大なるものゝ一つであつた。然るにこの度教育制度の改正に伴つて、男女教育機會均等は初めて實現し昨年來女子大學は續々認可せられ、今日までに全國に二十數校が設置せられることになつたことは、返すも我が民主國家のため、日本女性向上のため、慶賀に堪へぬ次第である。

最近の世界年鑑その他の報導に依るに、アメリカ合衆國の大學は、他の如何なる國の大學よりも多數の女子學生を收容して居り、女子學生の數は男子學生の半數を超えて居る、アメリカ合衆國のカレッジユニバーシティーとの總數は、八百二十三校で、その中男女共學のもの五百六十校、女子のみを收容せるものは百四十二校、残りの百二十一校が男子のみを收容しているという情況である、女子は男子ほど急いで實社會に出る必要がないという事情があり、大學に於ける勉學の態度も、自然落ちついて居り、眞の教養をこゝう精神から、男子よりも堅實な勉強をして居ると見るものが多い、歐洲各國の女子大學も、これに次で相當數に上つて居るというところである、何れにしても我が國に於ても、前述の如く一躍二十數校の女子大學が誕生したことは、遅蒔きながらも誠に慶賀の至である。次に男女共學の問題は、理想としては結構であるが、我が國今日の社會狀態としては、時期尚早の感が深い、アメリカ本國に於ても、男女共學には、相當反對の聲が

高いようである、殊に東部地方に於ける清教徒の學校では、皆反對で例へばハーバート、イエル、コロンビヤ、プリンストン等の大學は、今なお共學制を採用していないのである、本校も創立初當からの傳統を續けて、飽くまで女子のみの大學といたし、學部は女子の生活に共通的に最も必要な、而も女子にとつて最も興味のある家政學部を置いたのである。

男子はおのずから男子の活動すべき分野がある、女子はおのずから女子の活動すべき分野がある、生理的にも精神的にも男子と女子とはその天分を異にしてゐる、この天分を異にせる男女を、同時に同一の場所で同一の指導者に依つて教育しなければならぬという道理はない、寧ろ女子は女子の生活に適應せる教育を、男子は男子の生活に適應せる教育を施すことが理想であらねばならぬ、本學園はこの趣旨によつて、女子のみを收容する大學を建設することにした。

さていよいよ大學は誕生した、學長鶴見博士初め教授、助教授、講師にはそれ／＼各學界に於ける權威者合計四十九名の就任の承諾を得た、けれども問題はこれからである、更に内容の充實を計らねばならない、刻々進歩する科學器具の購入、専門圖書殊に洋書の蒐集、研究室、實驗室、實習室の増設など、昭和二十八年の完成年度までに何としてもやり遂げねばならぬ、そうして折角本學後援者各位の期待と社會の信頼に副うよう努力せなければならぬ。また如何に施設が完成しても、學生の質が低下しては大學は害である、研究もすべ

て自發的にならねばならぬ、自己の専門の知識を極めるとともに、豊かな教養を身につけた人間としての完成を目標とする新制大學の精神を學びこるよう努力しなければならぬ、また教職員としても互に内省すべきことは、從來の講演式の講義を改め、新教育法の線に沿つて、學生の指導に積極的であることを希つて已まぬ次第である。

序にかえて

明治維新前はいうに及ばず、維新後も続いて私立学校が、わが国の文化向上に貢献して来たことは、私学にそれぞれの特長があり、かつ、各方面に大小多少の趣のある故を以て、普く世の人の認める所である。

本学園が誕生以来、足かけ五十年を経過したのを機会に、教職員各位の少からぬ尽力に依って、学園五十年史が編まれて、ここに活字に附せられることになった。もとより学園は永遠に存続するという前提のもとに、維持経営せられて居るので、五十年はホンの小さい一こまに過ぎないのではあるが、併しこの度の五十年史は、最初の五十年史である。俗に一寸八間という言葉のあるように、最初の一こまは、未来永劫のあり方とその運命を意味する最も大切な一こまでもある。それ故この度編まれた五十年史には、特に本学園が先ず如何にして創設せられたか、如何なる経路を辿って来たか、その成長発達の跡を顧み、本学園の精神・校風・伝統・使命・理想といったものを詳細に解明することに努められたものである。

私共の幼少の頃には、日本の文化が、欧米のそれに比して、如何に立ち後れていたかは、今日の若い方たちには到底想像だも及ばないものであった。一例を申せば、汽車の如きも、やっと、まだ東京横浜間に出来たばかりで、電信もなければ、電話もない、況や電燈や瓦斯の如きは、ズット後のことである。甚しきは火をとすのにマッチというものさえ見たこともないものが多かった。

加うるに当時は、社会一般に極端に官尊民卑と男尊女卑の風習が一世を圧して居た、即ち教育の方面で申せば、明治

三十年の頃まで、男子のためには中学校や各種の実業学校が追々設置せられて、最早や相当多数の生徒が勉強して居たのかかわらず、女子の爲には、高等女学校というものは、わが名古屋市に於てすら一校もなかったのである。三十二年に至ってヤット一校だけ鍛冶屋町に、名古屋市立商業学校が他に移転した跡の古校舎を利用して市立高等女学校というのが創立せられた。而も初めのうちは、入学志願者も至って少く、偶々志願するものがあれば、ヤアあれは一寸キジルシだ等と、変り者扱いにして冷やかされるという有様であって、市当局が勧誘これ努めて、やっと七十六名あったという「一つ話」が残って居る、今から思うと誠に夢のような事実であつた。

この間に立って、私共は思う所があつて、その当時としては最も時勢に適合して居て、最も手近で最も新しい試みとして、先ず手をつけたのが、あの東区富士塚町に於ける裁縫女学校、学校と申すよりは塾と申す方が相応しいさやかなものであつた。その内容は裁縫の外に修身・国語・数学・地歴・家事・音楽・図画・体操をも併せ課したものであつた。而して凡て形式を排して、むしろ人間として、又一個の女性としての完成教育を期し、学問よりは実力、知識よりは人格の涵養に主力を注いだものであつた。

当時の校舎と申すのは、代々徳川家の火事奉行を勤められた名門、稲葉家所有の古い長屋門附きの士族屋敷で、ただ畳数が百畳も敷き得る可成り広い住宅、たしか家賃一ヶ月十五円也で借り受けたのであつた。

即ちここで本学園は誕生したのであつたが、別段広告も宣伝も致さなかつたのに、当時の父兄の要求に合致して居た訳であつたのか、幸にも開校の当初から九十余名の入学者があつた。

その後は毎年というよりは、毎月生徒が増加して、その年の暮には、最早前に借り受けた家屋だけでは収容し切れなくなり、更に隣家をも借り受けて教室を増し、又高岳町にも一軒借りて、分教場を作ったりして、わずかにその場を凌いで居たが、翌三十九年の春には早くも、一棟やや学校らしい百坪ばかりの校舎が新築されるに至つた。

この時分は、私共夫妻は、朝から晩まで生徒と共に起居し、殊に生徒の大半は寄宿生であったので、日々夜々食卓を共にし、今から回想すると私共一生の内、最も印象深い、最も思出の多い、一番楽しい師弟共同の学窓生活を送ったのは、実にこの時代であったのである。

その当時は囑託の先生も数名あったが、先生同志互に相戒めて、凡そ何事も口で教育しないで、身を以て教育することを申合せ、校舎の内外の掃除から、日常の行動から、行き届かぬながらも率先垂範、躬行実践をモットーとしてその責任に当たったものであった。

その後時の推移につれて、大正五年には高等女学校を新設し、大正十年には米国に渡ってつづきに彼の地の教育事情を視察し、大いに得る所あり、即ち同十二年に第二高等女学校、昭和四年に新に組織を財団法人に改めて女子専門学校を設置し、同十三年に女子商業学校を、十七年には幼稚園をも設置した。越えて二十二年我が国教育制度の改革につれて、従来の財団法人を学校法人に改め、三つの中等学校を、中学校と高等学校の二つに切り換え、専門学校を新制大学に昇格させ、二十七年に小学校を開設し、初めて幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学と同一理想の流れの下に終始一貫教育を施し得る綜合学園を実現するに至ったのである。

而も過去五十年間の学園発達の歴史は、さながら我が国の女子教育の進歩発展の歴史の縮図に外ならぬのであった。今にして思えば、その昔市立高等女学校が新設せられた当時、入学生僅かに七十数名で、高等女学校等に入学させては却て生意気になるなど世人が信じて居た時代と対照して、うたた隔世の感に堪えない次第である。

今や時代の進歩につれて我国の中学校はもとより高等学校に学ぶ生徒数は、男女殆ど同数といって良い有様だが、昭和二十年終戦後は、愈々男女教育に対する機会均等が高唱せられ、遂に百尺竿頭一步を進めて女子大学というものが初めて認可せらるるに至った。

これまで女子大学というものが我国に一校も無かったということは、うそのような事実であった。本学園の女子大学は、即ち我国最初の女子大学として認可せられたものの一つである。これ迄の女子教育発達の歴史から推せば、恐らくは今後十年、二十年の後には、男女学生の数も矢張り相伯仲する時代が到来するであらうことは、火を見るよりも明かであると思う。

今日茲に本学園は創設五十年を迎えた。これまで本学園に關係して、この事業完成に援助の労を賜わった創立以来の幾百の教職員各位、又本学園発足に當って、何くれと御配意を賜わった東京家政大学の校祖渡辺辰五郎先生、並に側面からの文部、県、市当局初め父兄各位の絶大なる御後援に対しては、今更ながら誠に感謝感激の念に堪えない次第である。

本書編纂に關しては、本文は主として本学園高等学校主事須田昌平氏、その他の部分は各教職員の御協力の賜であつて、その御勞苦に対して心から感謝の外はないのである。

ここに学園五十年史刊行にあたってあえて一言述べて序に代える次第である。

昭和二十九年九月吉日

東山月窓庵にて

梶 山 正 弑

創立記念日を迎えて

(左は昭和三十五年六月一日本学園創立五十五年を迎えて
公会堂に於いて記念式を行なった際に於ける述懐談。)

梶山 正式

本日、ここに本学園創立五十五年記念式を挙行するに方りまして、来賓各位の御臨席を頂きましたことは無上の慶びとする所でございます。先ず以って衷心から、深甚の謝意を、表する次第でございます。

質素堅実をモットーとし、学園の徽章の示して居る通り、知、徳、体三方面を、十全円満に発達せしめ、人間教育という炬火を掲げて、その第一歩を踏み初めたのは、明治三十八年四月一日即ち二十世紀の、第四年の年のことでありました。

当時は我が国の教育界殊に女子の教育は、未だ全く、文字通り、混沌たる黎明時代でありまして、その時分の一般の女子は、小学校さえ卒業すれば、もう沢山で後はお針屋に通うのが普通でありました。

本学園は、その当時の父兄や、社会の要望に添って、先づ裁縫を主として、之に修身、国語、算術、音楽、体操等の教科を加味して、所謂その時分の実科女学校の体系を採って、出発したものであります。前にも申しました通り、女子の教育は、全く未開拓の時代ではありましたが、このジャングルの途を切り開

いて行くことは、一面には苦心の多い代りに、更に一面には却ってまた、一段と楽しい仕事で、この創業時代こそ、寧ろ最も希望の豊かな、楽しい楽しい毎日を送ったのでありました。

私共のことを申して恐縮ではありますが、私の一生涯を支配した座右の銘として、明け暮れ私共を激励し私を教訓して呉れた金言名句の一つは、之は皆さんも御承知の「叩け門は開かれん」というバイブルにある詞であります。詳しくいうと、新約聖書マタイ伝第七章に

求めよ、然らば考えられん、尋ねよ然らば見出されん、門を叩け、然らば開かれん、すべて求むるものは得、尋ねるものは見出だし、門を叩くものは開かるるなり。

とあります。

私は三カ年間、東京に於いてこの学園誕生に至るまでの準備を終り、開校の年の一月、名古屋に来て、先づ最初の仮校舎を手に入れることに苦心しました。私は岐阜時代の先輩稲垣知剛さんという方が、偶々愛知県庁の県視学であり、高岳町が御宅でありましたので先づ第一にそこに伺って、私の志を話しました。話して居ります内に、稲垣さんの奥さんが、それは私の内の裏通りに、富士塚町という町がある。丁度この裏合せの所ではありますが、そこに一軒借家がある様です。御案内しましょうということでした。それでは御願いますと行って、奥さんの後について参りますと、成るほどあるはあるは、間口が丁度二十間、奥行三十間、昔の士族屋敷そのまま、大きなお寺の門の様な門があり、その横に小さいくぐり戸があり、両方に長屋が建って居る。門の扉に、斜に「かし家」と大きく書いた紙がはってある。くぐり戸を押し開けて、中に入ると、その扉に鉄の重いフンドウが、鎖で下げてあって、私が入って仕舞うと、自動的にそのフンドウの重みで、その小さい扉が、ガラガラピシャッと閉まるのでありました。中に入ると正

面に、大きな玄関があつて、床を踏むと、どんどんと殊更に高い音がする様に作つてありました。何でも縁の下に、音の響きがする様に、わざと瓶が埋めてあるということでありました。段々奥に行くと、八畳間が三つもあり、六畳間が外に三つもあり、勝手場も、広い広い間が取つてありました。家賃は一ヵ月十五円ということでありました。十五円という皆さんは何とした安いことかと驚かれるでしょうが、その時分はお米が一升八錢か十錢、開校当時の月謝は、一月ただの五十錢という時代でありましたから、十五円の家賃ということは、その当時としては、相当なものでありました。家主は稲葉重治さんと申しまして、昔は徳川家に仕えて、火事奉行という、重い役をして居った人でありました。私がお目にかかつて、学校の校舎として使わせて貰いますが宜しいかといいますと、それは教育の為なら誠に結構です、どうぞ使つて下さいと立ち所に快諾されて約束は出来ました。「求めよ、然らば与えられん、叩け門は開かれん」でありました。

それから学校設置認可の手続きやら、机や黒板の設備やら、稲垣県視学さんが我が事のように、世話して下さいまして、開校の準備は万事手落ちなく全く終りました。

それから、別段広告も宣伝もしませんでした、ただ印刷物を市内の小学校等に郵送した丈で、三月の末に九十名の入学志願者がありまして、四月一日に八畳二間ぶつ通しのお座敷の中の床の前で、座つて開校式を行いました。

それから御話すれば切りがありませんが、学校は翌年は在学生徒が百六十人となり、翌々年は二百人となり、教室が段々狭いので、隣りの家も借り受け、高岳町の一民家も借りて分教場を作るといふ工合で、何時でも「求めよ、然らば与えられん」でありました。その後この稲葉さんの宅は、学園が全部買い取り

普通の机、腰掛式の学校建築に改造いたしました。

明治四十五年には明治天皇が崩御になり、次ぎは大正時代に入りました。

間もなく欧州戦争が始って、この時ばかりは日本は、どちらにも参加せずに、高見の見物でありましたから、自然にお金が欧米のどちらからも日本に沢山、入って来ました。日本は見る見るお金持ちになりました。この景気が手伝ったお蔭でこの頃から、日本の国民生活も大いに向上し、漸く女子の教育も盛んになって参りました。そして愈々時運も到来して、従来の学校を拡張して、大正五年には梶山高等女学校を設置しました。

そしてこの学校も忽ち満員になりました。

私は愈々本格的な女子教育時代が来た、一度欧米の女子教育の事情を直接視察に参りたいと思い立ちました。それから東京に参りまして、これも私の先輩で、岐阜の師範学校でお世話になったことのある、棚橋源太郎という、その当時は東京高等師範学校教授であつた先生にそのことを相談しますと、早速、文部省に同道して下さいまして、その結果文部省の督学官は、それは一つ便宜を計らうまいということ、文部省の嘱託ということで、亜米利加の教育視察に出掛けることになり、大正十年四月大洋丸という一万屯級の大きい船で出発しまして、四ヵ月間、桑港、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューヨーク、ボストン、ワシントン、の主な女子のカレッジやハイスクールを視察いたしました。七月に無事帰国いたしました。内の学校の生徒は二百人ほどわざわざ横浜まで迎えに来て下さいました。富士塚町の学校に帰って見ると、アメリカの学校を見た眼には、逆もとても、お話にならん、先ず学校はこんな市中の真中では、位置がよくない、どこか郊外に広い敷地を求めたいと存じ、それから毎日の様に、大曽根の方に行ったり、守山に

行ったり、或る時は勝川の方に行ったりして見ました。或る時、覚王山に参りまして、日蓮寺、今の日泰寺の松林の中を縫って、東の山を下りて行くと、丁度、今の愛知学院の校舎建築中でありました、見ると五十嵐さんという、予て知り合いの校長さんが、その工事の監督をして居られました。私はそこに行つて挨拶して、暫く話して、最後に私も、この辺に学校の敷地が欲しいがという話をしてそのまゝお暇して帰りました。所がどうでしょう、その翌朝私が事務室に居りますと、一人の坊さんが、ヒョッコリ尋ねて来られました。何だ坊さんが、何の用で来られたかと思つて御用を聞いて見ますと、この人は田代町丸山の、松林寺という寺の住職水野雷幢さんという方でありました。聞いて見ると坊さんは、私が昨日五十嵐さんと話して居る時に、（私は気が付きませんでした）その側に居られたそうで、私に昨日あなたは、この辺に学校の地所が欲しいと話して居られたが、私の寺の前に、良い土地がいくらでも有るから見にいらいしやいませんかという事でありました。私はそれではといつて早速そのお寺へ往つて見ますと、その時分はこの辺は見渡す限り田圃ばかりで、家は一軒も有りませんでした。それが今の山添町校舎のある一万坪の敷地であり、それからそれが端緒で話が進んで水野鐘三さんという方の御世話であの土地が手に入りました。

求めよ然らば与えられん

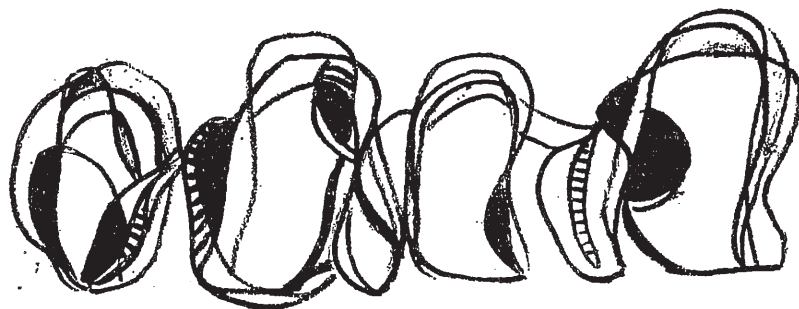
それから、校舎を、その当時としては理想的のものを建てたいと存じましたが、幸に、その時の高等工業学校長土屋さんという先生が高岳町に住んで居らっしゃいました。御心易い方でしたからその土屋さんとこの土地に来て後の高台、今は須田先生の御住宅その時は大根島でありましたが、其処に腰かけて、将来の計画を御相談しました。そうして出来上ったのが今日のあの玄関のある校舎であります。その時分自動車というものは、殆ど見た事もないという時代でありましたが、丁度洋行帰りの土屋さんの設計だけに、

今でも自動車が、二台や三台玄関に横づけになっても、支障がない、そして便利な風景の良い校舎が出来上りました。

大正十五年には、大正天皇崩御と同時に、昭和時代に入りました。昭和四年には組織を財団法人と致すと同時に女子の最高学府女子専門学校が開校せられました。これはなかなか困難な大仕事でありましたがここにお出でになる加藤録五郎先生の御尽力のお蔭で、遂に実現致しました。之が今日の大学の前身となった訳であります。これもまた「求めよ然らば与えられん」でありました。

もう余り長くなりますから、はし折りますが、それから女子商業が出来、幼稚園も出来ました。然るに昭和二十年には富士塚町の校舎は戦争のため一物も残らず焼野原になりました。その代りに、今度大学を移そうと準備中の、富士見台の二万三千坪の敷地が手に入りました。之も大部分は水野鐘三さんから分けていただいたのであります。本学園も今日では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の五校を経営して居ります。現在の在学学生は総計四千九百二十名、五千名に八十名足りない丈の盛んな学校となりました。この上は一日も早く、東山富士見台の校舎建設に、余力を注ぎたいと存じて居る次第であります。

求めよ然らば与えられん、叩け門は開かれん、であります。けれども之は何も私の力だけで出来たのでも何でもありません。ここにお出でになる来賓の方々は勿論、文部省、県市御当局を初め父兄や同窓会会員の方々や、一般社会の御協力の賜に外ならぬのであります。今更ながら感謝に堪えない次第でございます。では、長々とおしゃべり致しましたが、この機会に、今日御来会の皆様の御後援頂きました御厚意に對し厚く深く御礼申し上げます。之をもちまして、今日の式辞と致します。



大学竣工式に臨みて

(昭和三十七年十月十九日大学校舎、講堂、
並に橋梁竣工式に於ける梶山学長の式辞)

梶山学

予て、移転工事中でございました、本学園大学の校舎講堂並に、橋梁が、お陰で先ず一応完成を見るに至りましたので、ここにほんの聊かなる席を設けまして、竣工の式典を挙げることに致し、平素格別御後援を頂いて居ります各位に、御披露申上げて、先ず心から感謝の意を表したいと存じ、夫れ夫れ御案内申上げて置きましたところ、加藤元法務大臣殿、愛知県知事殿御代理、名古屋市長殿初め

多数の公私格別御多用の御中を、御差しくり頂きまして、まげて御臨席の栄を賜りましたことに對し、先ず以て衷心から深甚の謝意を表する次第でございます。

さて、本学園の本部は、千種区山添町にありまして御存じの如く、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、並に大学（この大学は四年制度の大学でありまして、短期大学は初めから設置しませんでした）この五つの学校を経営致して参りました。所が近時、追々過度の膨張を致して参りまして、昨今在学生総計五千有余を算し、愈々敷地の狭隘を感じ、校舎も手狭を告げて参りましたのと、今一つは、大学は、学校の性質上、矢張り別の位置に分離しておくのが、凡ての点に於て便利であるとの見地から、一昨年以來この地に移転の計画を立てまして、本校舎延べ七千六百平方メートル、集団給食実習所三百三十平方メートルの建築に着手致しまして、之を城戸建築事務所に設計を御願ひし、建築の方は岐建木村組に、その他は東海電興、川崎設備等に御依頼致しましたが、何れも誠心誠意忠実そのもので、殆ど昼夜兼行の突貫工事を続け、日夜百余名の人夫を督促して、御尽瘁下され、お蔭で予定の期日を誤らず、立派に完成を見るに至りました。

本大学は、家政学部だけの大学でありまして、此度の施設と、設備とに依りまして、少

くとも今日の場合、最も完備した先ず理想に近いものとの自信を以て、再発足を続けて居る次第でございます。

本学は家政学を通して、一面には科学の蘊奥を極めると同時に、一面には人間として常識に富み、正しく清い、美しい、而も温い情操豊かな人格を養って、他日家庭人としても、又社会人としても、幸福な人世を送られることを期待して居るものであります。

次に、只今御渡り願いました橋の由来について、一言申し添えておきたいと存じます。

このあたり、一帯の地は、昔から尾張藩累代の御猟場でありました。この御猟場は、鳴海日進村地方から続いた丘陵地帯で可なり広い区域で、毎年一回、その日は藩士等ばかりのこと、市町村民全部総出で行なわれたのでありまして、御猟と申すよりは、寧ろ一つの非常訓練を行なうのが目的であった様であります。その日は皆で、東の方から猪や鹿を追って来て、この辺に富士見台、雪見台、御殿山と申す藩主最愛の休憩所のある所まで追い詰めて参り、お立場と申す所で藩主の前で、これらの獲物を生捕りにするのが恒例であつたと申すことであります。

昭和三十五年の春の某日、私は竹馬の友小林橋川氏(当時名古屋市長)と、杖を曳いてこ

の丘に立ち、大学建設の構想を述べ、尚この学園の敷地が、二つの丘に分れて居りますので、これを結ぶに橋を以ってし、名付けて「人間橋」と称することに致したいと語りました。小林氏は、即座に手を打って賛成し、「完成の暁には、その渡り初めに是非僕も参列するよ」と、笑って固い約束をせられたのでありました。然るに同氏は昨春不、幸病を得て遂に空しく不帰の客となられまして、まことに私としては遺憾に堪えない次第でございます。その代りに今日は、杉戸市長さん初め多数の皆様にお渡り願って有難うございました。昔から人口にかいしゃして居る古人の歌に

人多き人の中にも人はなし 人となれ 人となせ人

と言うのがありますが、人間完成これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である。「諸君よ人間になろうではないか」と言うのがこの橋の銘名の由来記でございます。

何れにしても今日は各位の一方ならぬ御後援に預りまして、これまで兎に角竣工致しましたことは、返す返すも感謝の外ない次第でございます。どうか今後も引き続き倍旧の御支援を賜らんことを希いまして、之をもちまして私の式辞といたします。

人間橋由来記

このあたり一帯の地は 尾張藩累代の御獵場であつた 中でもこの富士見台はここに隣れる雪見台 御殿山などと共に最も遠望のきく景勝の地点で藩主最愛の休憩所のあつた所と傳えられている 本学が建設せられる数年前までは 当地方としては珍らしい昔ながらの鬱蒼たる深山であつた

昭和三十五年の春某日 予は竹馬の友小林橋川氏 当時名古屋市長と杖をひいて この丘に立ち本学建設の構想を述べなほこの学園の敷地が二つの丘に分れているのでこれを結ぶに橋を以てし 名づけて人間橋と称することにしたと語つた 小林氏は即座に手を打つて賛成し 完成の暁にはその渡り初めには是非僕も参列するよと笑つて固い約束をせられたのである 然るに同氏は昨春不幸病を得て遂に空しく不帰の客となられたまことに遺憾のきわみである 予はもとより 不才不敏言うに足りないものではあるが ただどうかして一人前の人間となるべく日夜努力だけは怠らなかつたつもりである 古人の歌に 人となれ人 人となせ人 というのがある 人間完成こそ学園創設の精神であり 学校教育終局の目標である

諸君よ 人間になろう

昭和三十七年十月吉日

梶山女学園長 梶山正式

人間橋由来記

このあたり一帯の地は 尾張藩累代の御獵場であつた 中でもこの富士見台はここに隣れる雪見台 御殿山などと共に最も遠望のきく景勝の地点で藩主最愛の休憩所のあつた所と傳えられている 本学が建設せられる数年前までは 当地方としては珍らしい昔ながらの鬱蒼たる深山であつた

昭和三十五年の春某日 予は竹馬の友小林橋川氏 当時名古屋市長と杖をひいて この丘に立ち本学建設の構想を述べなほこの学園の敷地が二つの丘に分れているのでこれを結ぶに橋を以てし 名づけて人間橋と称することにしたと語つた 小林氏は即座に手を打つて賛成し 完成の暁にはその渡り初めには是非僕も参列するよと笑つて固い約束をせられたのである 然るに同氏は昨春不幸病を得て遂に空しく不帰の客となられたまことに遺憾のきわみである 予はもとより 不才不敏言うに足りないものではあるが ただどうかして一人前の人間となるべく日夜努力だけは怠らなかつたつもりである 古人の歌に 人となれ人 人となせ人 というのがある 人間完成こそ学園創設の精神であり 学校教育終局の目標である

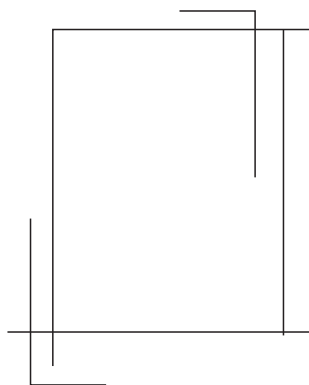
諸君よ 人間になろう

昭和三十七年十月吉日

梶山女学園長 梶山正式

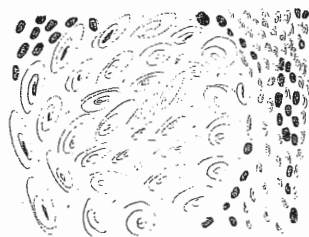
昭和

(創設者 梶山正弋没以降)



昭和(創設者 梶山正式没以降)

創立記念日を迎えて 昭和三十九年「糸菊」	111
創立六十周年記念式典に際して 昭和四十年「糸菊」	116
創立六十四周年、体育館兼講堂落成を祝つて 昭和四十四年「糸菊」	119
創立六十四周年、家政学部二十周年 短期大学部開設を祝つて 昭和四十四年「糸菊」	122
七〇周年を学園反省の年に 昭和五十年「糸菊」	124
中高教育審議会の発足 昭和五十年「糸菊」	125
中高一貫教育 教育目標―人間になろう	129
教育の中に人間尊重の精神を 昭和五十三年 梶山中高等学校だより「すぎやま」	130
今日なお新しい人間教育―学園創立75周年にあたって― 昭和五十五年 梶山中高等学校だより「すぎやま」	131
創立七十五周年記念式式辞 昭和五十五年「糸菊」	136
「七十五年史」序文 昭和五十五年「七十五年史」	139
梶山女学園の教育変遷「人間になろう」まで 昭和六十年「梶山女学園大学文学部人間科学研究会」	139



創立記念日を迎えて

（昭和三十九年六月一日、本学園創立五十九周年を迎えて
公会堂において記念式典（二回）を行なった際の式辞）

相山女学園名誉学園長

相山正雄

同 副学園長

相山正弘

本日の学園創立の記念日に当たりましては、学園はまだ喪中でもありますので、例年のような外部からのお客様はあまりお招きしないで、ごく内輪のPTA、同窓会、旧職員並びに現在の職員、学生生徒の方たちだけで記念の式をあげることになりました。

省みますれば、本学園が誕生いたしましたのは明治三十八年（一九〇五年）でありますから、今年は五十九周年になります。この長い年月の間、本学園の創立から今日の発展をみるにいたるまで、終始一貫して生涯の精魂をかたむけて参りました前学園長が、今年の二月に逝去いたしましたことは、誠に痛恨の極みでありました。一つの学園の創立者が、六十年近くの長い間、続いて学園の建設発展に当たるといふことは、世の中にも極くまれな例であったと思います。しかしながら、歴史の流れはまことに厳しいものであり、ここに星霜移り人は去りの感慨、無量のものがあります。

前学園長は毎年、記念日には、学園創立当時の苦心談から発展への苦労と喜びを語るのが常でありました。皆さんの中にはまだ昨日のことのように覚えておいでの方もあられるでしょう。私はそのような話の中に、学園の

精神をよみとり、伝統を理解するのが、記念式の大きな意義であったと思います。

時代は変って今年からは体験として語ることができなくなりました。私は歴史としての二、三のお話をしてみたいと思います。

本学園創立の一九〇五年は明治の日露戦争の二年目でありました。そのころの社会状態、とくに教育はどうであったかを考えて見ますと、明治の初年以來小学校の義務教育が次第に普及して、小学校に入らない子どもはほとんどなくなるほどになっておりました。しかし小学校以上の女子の中等教育となりますと、ほとんど全く省みられない状態でありました。

男子に対しては東京大学のような最高学府までも完備していたのに、女子には中等教育は全く不必要であり、あるいは有害であると考え、当時の多くの人々は考えていました。

本学園が明治三十八年(一九〇五年)四月一日、裁縫女学校として発足したのは、裁縫という一つの技術を看板にかかげることによって、生徒を募集するという点に意味があったと思われれます。いわゆる学問を学び、人間としての教育を高めるということを第一の看板にしては中等学校を名古屋につくることは不可能であり、また入学する生徒もないという社会状態でありました。

女子にはお針仕事が大切であるという社会一般の考えにのって、ともかく女子の義務教育以上の学校を造ろうということでありました。

前学園長はお針仕事の学校をおこすために、東京の渡辺裁縫女学校に留学して勉強をしました。男子が女学校でただ一人まじって勉強することは、当時としてはよほどの勇気がいったと思われれます。

とにかく女子に、より高い教育を身につけさせることを一生の仕事としたいという理想にもえていたのであります。

ところで、ここにもう一人同じような理想をもった人が時を同じうしてありました。しかもそれは女性でありました。その女性こそは私の母（副学園長の祖母）ですが、当時渡辺女学校を卒業した、いうならば才媛でありました。

明治三十年代に岐阜の片田舎から単身、女性の身をもって東京に遊学するということは、おそらく今日日本からアメリカへ行く以上の勇氣と力が必要であったであらう。ともかく同じ理想をもった二人が意氣投合して結婚しました。そうして、いよいよ名古屋市東区富士塚町に民家を借りて、先生三名、生徒九十名という裁縫女学校が始まったのでありました。

私の母は戸籍上では（一八八六年）明治八年の生まれになっていますので、それによれば今年は八十八才の米寿に当たります。もう学校へ出てくることはできませんが、おかげで健在で、今は亡き夫のめい福を祈る日々を送っております。

以上申しのべました二人の全霊こめての精進に加えて、多くの優れた教職員の努力の甲斐あって、大正五年、（一九一六年）には高等女学校を新設いたしました。これは男子の中等学校に当たる学校で、本当の意味での中等学校の誕生でありました。その後大正十三年、（一九二四年）には、第二高等女学校ができ、さらに昭和四年、（一九二九年）には女子専門学校ができました。

第二次世界大戦の間は、ほとんどすべてが窒息状態にあり、富士塚町の校舎は戦火により全焼し、山添の校舎は軍需工場と化しましたが、戦争が終わると新しい時代が参りました。新学制がしかれ、本学園には中学校高等学校ができ、幼稚園を開き、また小学校、大学を設置して総合学園となったのであります。

大学院はまだありませんが、女子総合学園の実現をみるに至って、女子にも男子と同等の最高の教育を、という理想が組織の上では完成したといってもよいでしょう。

次に、大学設置当時の模様を少しお話してみよう。それは本学園の教育目標なり理想なりを知るのに役立つと思うからであります。

戦前には女子の大学というものが、制度上許されていなかったのです。前から日本女子大学校などというのがあったのですが、それは大学ではなく、大学校という名をむりにつけた専門学校でありました。

戦後、新憲法ができ、民主化と共に男女同権となり、新学制がしかれ、女子も大学に入ることができるようになり、また女子大学の設立もできるようになりました。当時名古屋にありました主な女子専門学校の、愛知県立、名古屋市立、金城と、それに本学園の四つの専門学校は、新学制度を機会に、四年制の大学に昇格することを計画いたしました。

本学園では当時四年制度によるか二年の短期大学にするかということで、いろいろ相談しました。外部からは、女子には四年は長すぎる、あるいは女子には二年で十分であるという意見から短期大学とすべきであるという要望もありました。けれども本学園では、それらの要望をしりぞけて、四年制大学に進むことに決定するのに、ほとんど迷わなかったのです。それは本学園の理想が、女子により高い教育を、ということにあったからです。

名古屋から、前にのべたように、四つの女子大学の申請が文部省に出されました。文部省は大学設立の基準によって、設備の実情は、備品の実際はと、審査がずい分きびしいものでありましたので、どうかと心配していたのでありますが、幸いにも本学園は金城大学とともに審査をパスして、わが国最初の女子大学の一つとして発足することができたのであります。

県立校は短大となり数年おくらせて大学に昇格しましたが、市立は現在もお短大であります。こうした話の中に本学園の理想をよみて下されば幸いです。

さてこのような話をするのは回顧趣味ではないのでしょうか。

本学園が今後如何に進むべきかを考えるためであります。伝統は尊重すべきものです。しかし後むきに伝統をながめているだけでは発展はありません。伝統は前向きに進む時の方向をきめるものであります。本学園は幼稚園から大学まで一応組織と形をとのえることに成功しました。このような前の代に続いて、私は形を生かしつつ、さらに実質的な内容的な教育の向上をはかることこそは、この世代の使命であると考えます。

生徒の数がふえ、学校の大きくなることを私学発展という人たちが多いのですが、私は、それはそれとして、むしろほんとうの私学の発展のめちは、私学でなければできない、公立、国立をはるかにしのぐ特色あるすぐれた教育をすることが、本質的な発展であると考えます。したがって、この時代は少くとも当分は学校の拡張というよりは内容の充実に全力をあげるべきであります。率直に申して今日本学園は多くの問題をかかえております。これらの問題を勇氣と決断で解決しながら進まなければなりません。

この際本学園の最高の目標は力のすべてを学生生徒の教育の充実としあわせのために、また教職員の研究としあわせのためにそぐことであります。

代が変わってまだ三ヶ月、なかなかその仕事が続につきませんが、皆さん方の心からの御協力をお願いしたいと思ひます。

「私学はいかなる意味においても営利団体ではない、学生生徒と職員の幸福のためのものである」とは私の信念であります。一步步々、理想的な学園になるよう皆さんの御協力を得て共に進みたいと思ひます。

勉学的なふんい氣をもち上げて、人格形成の独自の場にして下さい。私は、「前むきに、上むきに、そして内むきに」というのを学園進路のモットーにしたい、また皆さま方には「学校は五つ、しかし学園は一つ」という心持ちで進んでいただきたいということを申しのべて、本日のお話といたします。



1.5 渡辺八重子

創立六十周年記念式典に際して

（昭和四十年十月三十日、本学園創立六十周年を迎え本学園大学講堂において記念式典を行なった際の式辞）

梶山女学園名誉学園長 梶山正雄

本日ここに、梶山女学園創立六十周年の記念式典をあげるに当たりまして、かくも多数の来賓の方々の御参会を得ましたことは、私どもこの上ない光栄と喜びとするところでございます。御多忙の中を、わざわざ心にかけてお出でいただきましたその御好意に対しまして厚く厚くお礼申し上げます。高い席から誠に恐縮ですが、一言ごあいさつを申し上げたいと存じます。

さて、今年は本学園創立六十周年に当たります。人生でいえば、還暦に当たる記念すべき年でございます。竹に節がありますように、区切りのよい年ごとに、反省したり、将来を考えたり、社会の皆さまに感謝申し上げる機会をもちますことは、誠に意義のあることと存じます。本学園が誕生いたしましたのは、明治三十八年でありまして、東区富士塚町の武家屋敷を借りて、ささやかな学校として発足してから六十年、今日では、大学、高等学校、中学校、小学校、幼稚園と一貫した総合学園にまで発展いたしました。現在、全学園の教職員数は約三百名、学生生徒児童園児は合わせて約五千五百名でございます。ここまで参りますまでの創設者の苦

心は筆舌に尽し難いものでありました。また、永年労苦を共にされた多くの教職員の御功績、PTA、同窓会の方々の御協力は誠に大きなものでございました。それと共に、私どもが今日ことに感じますことは、六十年の歴史を通じて、社会からうけました御好意と御援助がいかに大きなものであったかということでもあります。国、県、市関係並びに公職者の方々の暖かい御指導と御援助、県下高等学校、中学校、小学校、また幼稚園のみな様方の御理解ある御後援と御配慮さらに私立学校関係の方々のいつも変らぬ御指導と御友情など、これら無くては本学園の今日はなかったものと存じます。また、新聞社、銀行、建築関係、その他社会の主要な方面のお蔭なくしても学園の発展はあり得なかったことでありましょう。これらのみな様方に、私どもは改めて厚い感謝の真心を捧げたいと存じます。

六十年の歴史を省みて、その中に流れる学園の理想と申しましょうか、建学の精神と申しましょうか、そういうものをくみとって見たいと思います。一面からいえば、それは「女子により高い教育を」ということでありました。女子には高い学問は要らないという世間の風潮であった明治三十年代に、より高い教育をというわけで、女子にとりつき易い裁縫女学校をまず作ったのでありました。大正五年には高等女学校を、昭和四年には、女子専門学校を開きました。専門学校を開設しても当時は志願者が極めて少なく、数名しかないような年が続きました。このような状態の時に、なぜ専門学校を作ったかといえば、社会常識よりも一歩ずつ進んだ水準の学校を創設して、「女性により高い教育を」と努力することが信念であったからであります。戦後、学制の改革と共に、大学が設置されました。これも「女性に最高の教育を」という前学園長の精神でありました。以上のような理想の中心を貫いているのは、「人間性ゆたかな人間を」という教育理念でありました。大部

分の女性が家庭に入ることといえば「人間性のたかな家庭婦人」という理念をふくんでいたのも自然でありましょう。私どもは、これらの建学の精神を体して、今後の本学園の教育を発展させたいと考えております。そして、この建学の精神が本学園存在の意義であると確信をいたしております。申し上げるまでもなく、私学の道は必ずしもたんたんとしたものではありません。本学園の前途にも幾多の困難やけわしさが横たわっております。これは全学園一丸となって進むことによって乗りこえなければならぬと信じます。

人生でも、還暦ともなれば、孫のある年代でございます。本学園の卒業生はすでに三万六千余名を数えますが、その中で、祖母、母、孫と三代にわたって本学園に学ばれたり、また現に学びつつある方が、かなり多数あります。今日は、三代目が在学中である御家族のみな様を十五組お招きいたしました。御家庭にとりましても、学園にとりましても、まことによろこばしい限りでございます。

なお、本学園がとくにお世話になりましたPTAの方々に感謝状を差し上げたいと存じます。また、永年勤続の功績顕著な教職員の方々には、学園としてはすでに六月一日の創立記念日に表彰申し上げましたが、今回は同窓会から感謝状を贈呈し、ともに感謝の微意を表わすことになっております。

今後とも、一層の御指導と御後援を来賓のみな様にお願ひ申し上げます。私ども学園教職員一同は一致協力してさらに努力を重ね、社会の御期待にお答えする覚悟でございます。

最後に、学生諸子には、ただ今申しのべました趣旨を体し、いよいよ研さん精進に努められるよう心から希望してやみません。

これをもってごあいさつを終わります。ありがとうございました。

創立六十四周年、体育館兼

講堂落成を祝つて

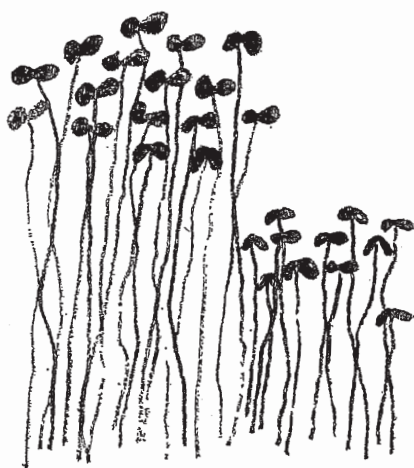
(昭和四十四年十月二十一日)
山添の祝賀式の式辭

学園長 梶山正雄

本日ここに学園創立六十四周年の記念式を、体育館兼講堂の落成祝と兼ねて行うことになりました。多数の来賓の方々をお迎えし、みなさんともにお祝いできますことは、誠に喜ばしいことでございます。例年、記念式は六月一日に行っておりますが、今年はこの体育館兼講堂の落成、大学の二十周年

短期大学の開設などのお祝が秋に予定されていまして、この記念式も今日になったのであります。

今年入学なさった方々も多数おありですので、例年のことではありますが、まず学園創立当時のことを短かくお話したいと思ひます。本学園の創立は明治三十八年、東区富士塚町の民家に呱呱の声をあげました。今から六十四年前のことです。この富士塚町の附近は戦後全く変化して、今日では創立当時のおもかげをほとんど残してありませんが、当時は名古屋市の静かな下町でありました。ここに名古屋裁縫女学校として発足したわが学園は、六十余年の間に幾多の変遷を経ながら、発展して今日のような幼稚園から大学までの総合学園となりました。その間、創設者の前学園長夫妻、多数の教職員の方々の努力は絶大なものであります。星移り、人変るにつれて、こうした先人の苦心のあとが遠くなりがちであります。私たちはこれら先人の遺業に深く感謝をし



伊藤直子

なければならぬと思います。それとともに、創設以来の学園の理想であります「女性により高い教育を」ということ、教育の目標であります「人間たれ」という標語を確認したいと思います。

本日は体育館兼講堂の落成式でございますので、わが体育館の歴史について少しお話しして見たいと思います。本学園に体育館が設けられたのは昭和十二年でありました。その頃、体育館を持っていた学校は市内でも少なかったのです。この体育館は本学園の誇りの一つとなっていました。ところが、昭和十五年六月二十四日未明、突如として火災に見舞われ、灰となってしまいました。原因不明のまま天災とあきらめたのでありますが、新築僅か三年半で失ったことは、学園一同の大きな傷手でありました。とくに、前畑、小島さんのオリンピック出場の貴重な記念物が焼失したことは、とり返しのつかないことでありました。

しかしながら、まもなく職員、父兄、同窓生の方々の復興への強い希望と一致協力によって、一年後には再び新しい体育館の落成を見ました。これは最初のと比べてほとんど同じような建物でありました。先日までここに建っていましたのがこの体育館であります。

復興した体育館を中心にして、体育が盛んに行われるようになりましたが、これも束の間のこと、日本は太平洋戦争へと突入し、学園の生徒は工場に動員されていき、校舎は軍需工場に徴用されることになりました。そしてわが体育館は風船をつくる秘密軍需工場と化しました。風船と申しましてゴムの美しい風船ではありません。風船爆弾といって、爆弾を風船につけて空高く上昇させ、気流にのせてアメリカまで飛ばし、アメリカ本土のどこかで爆発させるという軍の新兵器のことです。大きな紙を何枚もこんにやく糊ではり合わせて、体育館の天井までとどくような大きな風船を毎日毎晩作る工場になっていたのです。これは秘密工場で、学園のわかれ入れも入室できない状態でありました。こうなるとはもはや体育館ではなくなってしまうというべきでした。

やがて戦争が終り、アメリカ軍が進駐してきて名古屋もその占領下になりました。そしてわが体育館はアメリカの兵隊のバスケットボール練習場として、なかば徴用されたのであります。当時、われわれが、戦後のつかれ

と、食料不足とで栄養不良となり、しなびたようになっていく中で、若いアメリカの兵士たちが体育館の中を元氣一ぱいに走りまわっている様子をみんなであましくながめていました。こうした戦後の日本の縮図が、学園の中にもあったのです。

占領が終り、アメリカ兵が去ったあと、体育館は再びわが学園の専有物にもどりました。昭和二十五年には、第五回の国民体育大会が愛知県で開かれまして、わが体育館はそのバスケットボール競技会場となり、全国から集まった選手たちによって華を咲かせました。これは市内の数少ない体育館の一つであつたからです。

その後、体育館は学園の体育の中心として活用され、また諸種の行事にも利用されてきました。近年は、以上お話したようなことは、ほとんど忘れられていたのですが、旧体育館は実に三十年の長い間、いいかえれば学園の歴史の後半を、社会の変遷にもまれつつ歩んだ学園の一部として働いてきたのでありました。悪い夢もあり、楽しい思い出もある体育館でありましたが、漸く老朽を感じるようになり、ここにすべてを脱皮して新体育館ができたのであります。

来年迎えます学園六十五周年記念事業の一環として、多くの方々の御協力によること多大なものがあつます。ここに厚く御礼を申し上げます。講堂を兼ねていますので、不便なことも伴いますけれども、今後体育の場として、また行事の場として、生徒のみなさんが活躍できることができましたことは本当にうれしいことでもあります。

今年は星ヶ丘の大学家政学部二十周年に当たります。また文科系短期大学を開設いたしました。これらも今日の記念式に当り、みなさんと共に喜びあいたいことがらでございます。

例年、永年勤続の教職員の方々を表彰、感謝申し上げます。今年も、あとで申し上げます方々にこの誠意をつくしたいと存じております。なお、今日の祝賀に当り、とくに松本道子バレエ団の御出演によって花を添えていただけることになりました。御好意に対して厚くお礼を申し上げます。これをもって私の式辞といたします。

創立六十四周年、家政学部二十周年

短期大学部開設を祝つて

(昭和四十四年十月三十一日、大学の祝賀式の学園長式辞)

本日は、学園創立六十四周年の記念式を兼ねまして、本学家政学部開設二十周年と短期大学部開設の祝賀の式を行うことになりました。多数の来賓の方々をお迎えして、教職員学生のみなさんともにお祝いできますことは誠に喜ばしいことでございます。

本学園が明治三十八年に創立されてから、六十余年の間に幾多の変遷を経ながら、今日のような総合学園となつたのであります。その間創設者の前学園長夫妻、多数の教職員の方々の努力は実に大きなものであります。今日、こうして大学の二十周年、文科系短期大学の開設を祝うにつけても、先人の遺業に深く感謝しなければなりません。それとともに、「女性により高い教育を」という創設以来の目標と、「人間になろう」という学園の教育の標語を確認しなければならないと思います。

本日は大学の二十周年でありますので、その創設当時からのことを少しお話して見たいと思います。大学の前身は、梶山女子専門学校でありました。この専門学校は昭和五年に学園の最高学府として設けられたのであります。当時はまだ女性に高等教育は不要であるという世の風潮があり、女子の大学はわが国に一つもないという時代でありましたから、文字通り女性の最高学府でありました。しかし三年の本科生は入学者が極めて少なく、年々僅かに数名でありました。現在、家政学部の山口久子先生はその一人で、山口先生の同級生も僅か五人であつたと記憶しています。このような少人数で財政的にも困難があつたにもかかわらず、十年間維持し続けました。その甲斐あってやがて専門学校の入学者が次第にふえて参りました。

昭和二十四年、新学制ができると同時に、大学に昇格したのであります。旧学制では、女性には大学へ進学する道が閉ざされていたのですが、新学制はこの道を開きました。女子大学が始めて日本に誕生し、本学園の大学もその一つとなつたのであります。初代の学長には、名古屋大学の鶴見一三教授が就任されました。鶴見学長は

極めて人格高く、ユネスコを通して平和主義に徹した方で、本学の初代学長として誠にふさわしい方でありました。当時、山添町にありました木造校舎で創設の苦心をいたしました。昭和三十七年星ヶ丘の新校舎ができて、ここに移り、年々順調に進んで参りました。ここに創立二十周年を迎えて、美しい校舎、立派な教職員、真摯な学生の三つ揃えるに至りましたことは、本当にうれしいことでもあります。その間に大学発展の推進力となりました前学園長はもとより、梁前学長始め教職員、学生のためまね努力と、山添の各学校、同窓会、PTAの援助などのお蔭をうけて参りました。そして現在、小川学長始め各教職員、学生、ますます向上に努めておられますことを見るにつけても、本学の前途洋々たるを感じます。

さらに本年は、本学園に文科系の短期大学を開設することができました。大学というものは、単科大学では限界がある、複数の学部をもつ風格のある大学にしたいという念願を私はもっていました。家政学部が理科系であるから文科系の学部がほしいと思っていたのであります。文と理が車の両輪のようになって調和をもった格調の高い大学にしたいのであります。現代は自然科学がめざましい発達をしておりますが、それだけに人文科学を大切に尊重しなければならないと考えます。こうした考えのもとに、まず第一歩として短期大学として文科系部門を発足させたのであります。近い将来には四年の文学部ができることを念願いたしております。幸に極めて識見高い経験豊かな教授方、求學心に燃える新進の優れた先生方をお迎えすることができ、さらに多数の向學心豊かな学生諸子をお迎えして、開学の第一年をなかば過ぎたところであります。開学早々として、未だ不備の点多々ありますが、可能な限りの努力をして、立派なものにしていきたいと存じます。短期大学の開設に当りまして各方面の多大の援助、激励をいただきました。ことに同じ構内の既設の家政学部のみなさんには多大の理解と後援をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げますとともに、今後もし引き続き御協力をお願いしたいと思います。今日、全国的に大学は多くの問題がございます。根本的なこともあり、枝葉のこともあります。私立のこともあり、国立のこともあります。真に日本の将来を考え、教育と研究のことを考えるならば、そしてさらに学園一体となって努力するならば、本学が立派な大学として発展することは疑いませぬ。それから、山添の方に先日新しく体育館兼講堂が完成し、二十一日に落成の式をいたしました。この機会にみなさんに御披露しておきます。以上で私のあいさつを終わります。

(前の山添における式辞と重複するところは省略しました)



武藤妙子

七〇周年を学園反省の年に

梶山女学園長 梶山正弘

今日の私学は、大変きびしい情勢のもとにおかれておりますが、それだけに私学の問題は、過去には一度もみられなかった程大きくクローズ・アップされてきています。

ところで本年は、学園が創立されてからちょうど七〇周年を迎えますが、こうした今日の私学をめぐる状況下にあつて、私学である本学園の研究・教育上果たす役割と使命は、ますます重大になってきつたとはいえます。そこで、学園としては、この創立七〇周年を、これまでの学園のあり方を総反省する機会にしたいと考えています。

学園の中学校と高等学校については、すでに一昨年から、中・高教育審議会という審議機関を設け、そこで半年あまりの検討をすすめた結果、本年度はじめに、学園の教育理念「人間になろう」の今日的意義を再確認し、「中・高一貫教育のために」のなかで、「健康できたえられた体力、科学的系統にもとづいた基礎学力、市民社会のモラル、人間的で豊かな情操」の四つを目標に設定し、学園の中・高の教育方針として確立しました。この教育方針は、現在、日頃の教育活動のなかで、少しずつ生かされてきつておりますが、教科指導、生活指導、指導組織などについては、さらに具体的な検討を加えている段階であります。

このように、中学校と高等学校については、現在までに、すでに検討をすすめてきておりますが、幼稚園から大学・短大にいたる学園全体の問題については、まだ具体的にすすんでおりません。学園全体については、総合的に審議する機関をつくり、「総合学園のあり方」「学園の今後すすむべき方向」などの検討をすすめてまいりたいと考えております。なおこれらの検討には、できるだけ多くの英智を集めたいと考えていますし、七〇周年が学園の歴史にとって意義ある年にしたいと思っています。

昭和創設者 梶山正弘以降

「中高教育審議会」の発足

これまで厳しい社会情勢や教育環境に左右されない「魅力ある学校」を目指して、研究と実践を重ねてきた一つの到達点として中学校と高等学校が実現したのが「中高一貫教育」であった。昭和五十三（一九七八）年、梶山女学園中学校と高等学校は画期的な人事交流を成し遂げ、校長は「中高兼務」となって事実上の「中高一貫教育」が開始された。

一九六〇年代に私学を襲った生徒数の急増急減ショックの苦い経験から、学園は、こうした社会情勢に振り回されない、梶山独自の教育の確立を目指すことにした。そのため、学園創立六十五周年を終えた昭和四十八（一九七三）年、梶山正弘新学園長より「中高一貫教育」を念頭に置いた、中高の将来のあり方を検討する委員会の設置が提案された。これにより、同年十一月八日、「中高教育審議会（通称―中高審）」が発足した。

教育目標―人間になろう

梶山の教育理念は、「人間になろう」という「人間教育」が目標である。

現代の機械文明の社会では、「合理的・科学的」の名のもとに、大きなメカニズムが人間を圧倒し、人間が人間性を喪失していく傾向が強い。そして教育が本来の姿を失い、受験本位の教育の中で、その成果により、学校がランク付けられて、教師も生徒もこれに疑問を懐きながら、受験体制の中にまぎこまれていく現状である。

その点、梶山は中学↓高校↓大学の制度に立脚した人間教育が可能である。

では「人間になろう」「人間教育」の人間とは、いかなる人間像を目指すものであろうか。

「各人が人格として互いに尊重し合い、個性を発揮し、次の世代をになう自主的・自立的な人間」、このような人間の育成こそ梶山の教育理念であり、教師の教育観の根底におかなければならない。

すなわち「健康できたえられた身体、科学的体系に基

づく基礎的な学力、社会的存在の認識の上になつてモラル、豊かな情操」をもつた人間の育成を目標として、教育活動を推進する。このような人間性の回復を求める教育は、社会で要望する人間の未来像であり、また幸せをつかむことができる人間の基本的条件である。

では次に各項目について考察する。

(1) 体力の増強 (2) 学力の増進 (3) モラルの確立 (4) 情操の育成

(1) 体力の増強

全国的に見て、児童・生徒の体位は非常に向上してきた反面、体力的には、ひ弱で、持久性、敏しょう性等に乏しいと言われる。梶山の生徒もその例外ではない。全体的にやせ型でスマートであり、体力の点で入学時より高学年になるにつれて、低下する傾向もみられる。人間生存の第一条件である体力が、向上の一途をたどらねばならない年齢において、このような状態になっている原因はどこにあるのだろうか。

子供が遊び場を奪われ、受験勉強に追いつてられ、一般には、機械化の進展に伴い歩くことすら厭う風潮を生み出した結果といえよう。

こうした社会的環境の中で「生きる」ことの意義と、健康な身体の重要性を強調することが大切である。すな

わち、人間が生きて喜びを感じ、さらに人間一人一人の労働が、文化を継承し、新しい文化を生み、育てるものであり、それを支えるのが健全な身体であることを理解させる必要がある。

体育の時間での訓練のほか、全校生徒を対象にした体力の増強を、計画的、持続的に実践し、またスポーツを生活の中にとり入れて、その楽しさをわからせ、積極的に参加させることによって、体力づくりにつとめると共に、集団(チーム・ワーク)の中での自己の重要性を把握させることが大切である。

他面、日常生活で保健・衛生に留意し、換気・清掃等身近な生活環境にも気をくばり、さらに大気汚染・食品公害による身体への直接的、間接的影響にも絶えず目を向けて、健康を維持する態度を育成しなければならぬ。

(2) 学力の増進

全体に学習意欲が低く、基礎的な学力すら身につけていない生徒がみられる。このような無気力の空気を打破し、学習意欲をおこさせるには、生徒に勉学への自覚をもたせねばならない。

まず、現在、教育が受験本位に陥り、知識のつめこみの傾向が進んでいる中で、梶山では科学的体系に基づく

基礎学力の修得・充実を教育の基本とし、学問が人間にとっていかに大切なものであるかを知らせる。すなわち、社会生活の中で物事を正確に把握、理解して、正しい判断をくだし、行動するためには、科学的裏づけがなければ不可能であることを熟知徹底させる。単に覚えることだけが学習ではなく、学問は生活全般の基盤であることを理解させる必要がある。

そのためには、授業内容を豊かにするとともに、生徒が積極的に授業に参加できるような内容・体制がとられ、とくに「わかる授業」が行われることによって、生徒に知ること、解決すること、の喜びを自覚させ、自主的に学習活動へ参加させることが可能になる。こうしたことが実践され効果をあげるには、教師は、つねに研究を重ね、努力してゆかねばならない。

(3) モラルの確立

服装違反、掃除のサボ……不異交、万引等の記事が新聞を賑わす……しかもそれを是正しようとしないうる無気力なムードもある。これは知性とモラルの欠如の結果である。こうした現状を変革するには、人間教育の根本精神に立脚した強力な指導体制をつくり、知性をたかめ、モラルを確立することである。

まず、生徒に人間が社会的存在であることを認識さ

せ、自己尊重の精神を育てる。自分を大切にすることが、必然的に他人を尊重する精神になるという自覚を高めねばならない。このようにモラルは社会的なものであるという認識の上にたち、H・Rなどの集団的な話し合いの中で生活上の目標をたて、一人一人の実践を通しモラルが確立されるのが望ましい。

そして教師は人間尊重の理念に基づき例えば、身近な遅刻・掃除のサボリ等も決してその当人だけのことではなく、こうした無責任な行為がクラス・学校の空気を乱し、その為、他の生徒が大きな被害をうけていることを認識させるように、集団の討論や個人指導を行って積極的に指導していくことが大切である。こうして培われたモラルは、単に学校生活の場だけでなく、社会生活のなかで、実践され生かされなければならない。

(4) 情操の育成

物質的に豊かな現代社会の中で生まれ育った若い世代は、自然や文化から受ける恩恵に対して、無感動になりがちである。他面受験体制の歪められた教育の中で、幼児期より競争にあけくれ、生徒は個性を失い、友人間で、H・Rで、そして社会の中で、自己を愛する心をなくし、無感動と無気力におちいり、心の豊かさ、人間らしさを喪失し、強烈な刺激を求める傾向にある。これは

現代のメカニズムが生み出した帰結である。こうした環境におかれた生徒に、生きることの喜びと希望を教え、ものごとに対して、感動する心を育てあげる。それが人間教育の一要件である。

物質文明社会にあって、精神的に豊かに生活するためには、自然界の一存在である人間として、自然の美しさに感動し、さらに文化をつくり上げてきた人間として、文化に心を動かす、すなわち、美しいもの、善いものを積極的に求め、さらに創造する心を持たなければならない。このような感受性、創造性を育成する教育が必要である。

ものごとを成し遂げる、ものをつくり上げる、友情を育てる、すぐれた音楽・美術・文学等に接することにより、生ずる感動が、豊かな情操を育成することに留意すべきである。こうした情操は、健全な身体、知性、さらに自他を愛するモラルに裏づけられて成長するものである。

教育のなかに人間尊重の精神を

梶山女学園長 梶山 正弘

「人間になろう」の理念

本学園は、「人間になろう」という本学園の創設者梶山正式元学園長の言葉を、学園の建学の精神として今日も受け継ぎ、さらに発展させようとしております。「人間になろう」ということは、言い換えれば人間尊重の精神でもあります。ここでは、この人間尊重の精神について考えてみたいと思います。

ルネサンスのヒューマンイズム

人間尊重の精神でまず思い浮かぶのは、「古典に帰れ」を合い言葉として、近世のすぐれた文化を生み出したルネサンスです。ルネサンスが、近世の幕明けとして積極的な役割を果たしたばかりでなく、広くルネサンスが時代を超えて普遍的性格を具備しているのは、ヒューマンイズムを基調としたためであったといわれています。ヒューマンイズムつまり人間尊重の精神こそは、ギリシア・ラテンの古い時代から唱えられていたことですが、人間疎外が叫ばれている現代社会においても積極的な意義があるのです。

教育の人間化

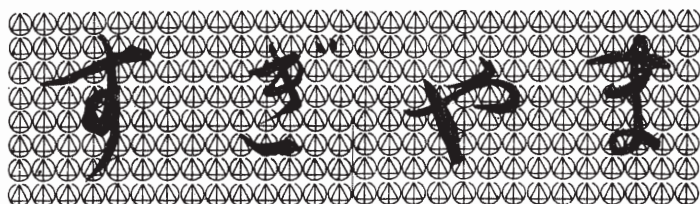
目を、今日の世界の教育動向に転じてみますと、70年代の欧米では、教育の人間化ということが提唱されております。特に、1957年ソ連が世界で初めて人工衛星を打ち上げたとき、それをスプートニク・ショックとして受け取ったアメリカでは、学問の最先端の水準を学校教育のなかに導入しようとして、教育の「現代化」とか「科学化」と呼ばれる多くの改革が試みられ

ました。その結果、教科書の内容は非常に高度なものとなり、そのため「ついてゆけない子」つまり「落ちこぼれ」を大量に排出し、教育現場にかつてない混乱をひき起しました。こうした教育現場の混乱を救おうとしたのが、学校教育のなかに人間尊重の精神を、という教育の人間化路線であるのです。この教育の人間化路線は、70年代の欧米の主要な潮流となっています。

研究・教育の人間化

コロンビア大学のウィリアム・マクギル総長は、次のように、高等教育機関の人間化を主張しています。「大学は、人間そのものの研究にその全精力をそそぐべきである。今日の大学は、心理学・社会学・政治学など人間のための科学が片すみの方に追いやられてしまっているような『近代科学』の権威によって支配されているのが実情である。ところが『近代科学』の開発した核の使用は、政治的、社会的な決定にゆだねられている。もし間違えば、地球はたった100人のテロリストによって破壊されてしまう。もしわれわれが、今、人間そのものを見直さなければ、われわれの生存も奪われてしまうであろう。」このように学問研究の中心ともいうべき大学においても、教育の人間化が最重視されつつあります。

こうした世界の「人間化」という流れのなかにあって、本学園が「人間になろう」という教育方針をかかげて歩むのは、大変意義深いものと考えております。そして「人間になろう」を実践しようではありませんか。



題字 井村紹快

学校だより 第13号

1980年11月1日

編集・発行 相山女学園 中学校
高等学校

〒464 名古屋市千種区山添町2-2

TEL (052) 751-8131(代)

今日なお新しい人間教育

——学園創立75周年にあたって——

学園長 相山正弘

上層子女の学校として

相山女学園は、今年創立75周年を迎えました。本学園は、明治38年(1905年)名古屋市東区の富士塚町の武家屋敷に、名古屋裁縫女学校として開校したのに始まります。当時日本は日露戦争の真最中で、多くの犠牲者を出しながら、戦勝によって国威を世界に示し始めた時期にあり、経済的には、重工業段階の産業革命の完成期にあたり、天皇制絶対主義体制の下での資本主義経済の確立期でもありました。

教育の面でみれば、明治5年(1872年)の学制発布以来、幾多の変遷を経ながらも、初等教育段階の小学校への就学率が、90パーセント以上に上昇した時期がありました。そして、その時期は、男尊女卑の社会的風潮の下にありながら、むしろその風潮を支えるものとして、お針仕事など、限定された内容で、しかも、上層の子女を対象とする、女子のための中等教育機関が求められ始めていた時でもありました。そのことは現在、愛知県下で著名な私立女子校の多くが、この時期に相前後して創設されていることをみても、明らかであるといえましょう。

官尊民卑に抗して

こうした歴史的、社会的背景のもとで、創設者相山正弑・いま(通称今子)夫妻の意欲と情熱、苦勞と努力によって、90余名の入学生を迎えて、名古屋裁縫女学校は誕生したのです。当初は、学校というよりは、私塾と呼んだ方がふさわしいような、ささやかな形での発足でした。創設以後、本学園の歩んだ道は、官尊民卑の文教政策のもとで、つねに、困難な険しい道でしたが、それでも校長をはじめとする教職員の努力によって、高等女学校、専門学校の設置、戦後の教育改革により日本で最初に認可された女子大学など、一貫して、女性により高い教育機会を提供することにより、男性と対等な教育水準を維持する役割をになってきた

のでした。このように、本学園の歩んだ歴史は、日本の女子教育発展の歴史のまさに縮図であったといえましょう。

進取の気風あふれる相山

学園は、世間に先がけて、洋風の服装の採用、大正10年の校長渡米、外国航路の船で神戸から横浜への修学旅行、「金剛石」のメロディーをかなでるチャイムの輸入、前畑秀子選手のオリンピック制覇の一つの布石となった屋内プールの建設などに特徴的にみられるように、つねに進取の気風で、時代の変化に、先見性的に対応して教育を進めてきました。学園史のなかには戦時体制下において、体制に協力してきた側面もみられますが、次代をになう子女の教育において、この先見性と広い視野は、そのときどきの生徒諸嬢の人間形成に大きな役割を果たしてきたに違いありません。

相山正弑と「人間になろう」

本学園が、現在教育理念としてかがけている「人間になろう」は、創設以来、言葉として継承されてきたものではありません。「人間になろう」という言葉が学園史のなかではじめて具体的に登場するのは、比較的新しく、昭和37年、大学キャンパス内の陸橋を「人間橋」と名付けた由来を述べた「人間橋由来記」であります。このなかで、創設者相山正弑は、「人間になろう」という言葉を「人間完成、これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である」と意義づけています。

創設の精神という点からみれば、本学園は裁縫女学校として発足しましたが、裁縫という、きわめて実科的な側面を標榜しながらも、その根底では、むしろ一般的な教科をも課し、寄宿生活などを通して生活面での触れ合いを通じて人格全体の完成を目指しておりました。さらに、大正デモクラシーの開花のもとで「本校は、つねに自治自由を尊び」、生徒に「なにごと

言 頭 卷

創立七十五周年記念式式辞

梶山女学園長 梶山正弘

本日、ここに本学園創立七十五周年を迎えますにあたり、本学園後援会、大学振興会、各校PTA、同窓会の会長、副会長の方々、長年本学園にお勤めいただいた旧職員のみなさま、非常勤講師の先生方、毎日学園をお務め場所として私共がお世話になっている方々、それに、専任の教職員、学園の理事、監事、評議員のみなさま方にお集まりいただきまして、時節柄、ごく内輪の集まりではありますが、記念の式と祝賀会を開催できますことは、この上もなく光栄に存する次第でございます。学園が、こうしてめでたく七十五周年を迎えますことができましたのも、今日お集りのみなさま、お一人お一人のお力によるものでありまして、心から感謝申し上げます。

七十五という数字は、日本ではあまり重要視されていませんが、クォーターという数え方をする西欧では、百の四分の三ということで、大変大事な節目とされています。これを四百メートルの陸上競技のレースに例えて考えてみますと、第三コーナーを回って、いよいよホームストレッチにかかる、そして先頭集団が一気に最後の勝負をかけるときを迎えたと考えられます。

しかも、社会的には、子どもたちの数が、急増して、その後急減するという、いわゆる第二次ベビー・ブームを迎え、送り出す時期にあたります。この、最後のクォーターにあたるホームストレッチでの障害をのり越えて、レースの中で一歩抜け出せなければ、本学園の百周年はあり得ないというきびしい状況にあると、私は考えています。

私は、本学園の七十五周年を、過去を振り返るだけのものとしてとらえるのではなく、百周年をめざす、最後のクォーターを迎えた区切りの年度として意義づけてとらえたいと考えております。

私学が、国公立の亜流に流れたり、国公立学校の補完物と化するならば、その存在の積極的な理由は何もなくなってしまう。私学がまさに私学として存在できるのは、国公立の諸学校にはない、独自の特徴を世に問い、それが、広く世に受け容れられるかどうかにかかわっていると私は思います。では、本学園が世に問うところの独自の特徴とは何でしょうか。ここで、今後の学園のあり方を考えていく上で、本学園の歴史と伝統のなから、どのような点を継承し、発展させねばならないか、という点について、私の考えを申し上げたいと思います。

梶山女学園は、明治三十八年、一九〇五年名古屋市東区富士塚町の武家屋敷に、名古屋裁縫女学校として開校したのに、その起源をさかのぼります。明治三十八年といえば、日本は、今、二百三高地」が、映画化され、さだまさしの「防人の歌」がヒット中ではありますが、まさに日露戦争の真最中であり、数多くの戦争の悲惨な犠牲を背景にしながらも、帝国主義的な国威を世界に示し始めた時期でもあり、経済的には、重工業段階の産業革命の完成期でもありました。

これを教育史の面からみますと、明治五年の学制頒布以来、幾多の変遷を経ながらも、初等教育段階の小学校への就学率が、90パーセントをはるかに超えた時期でもありました。そしてその時期は、男尊女卑の社会風潮の下にありながら、むしろその風潮を支えるものとして、お針仕事など実科的なものに限定された内容で、しかも当時の上層の階層の子女を対象とする、女子のための中等教育機関の設置が求められ始めていた時期でもありました。このことは、現在愛知県下有名な私立女子学校の多くが、この時期と相前後して創設されていることをみても知られるのであります。

こうした歴史的、社会的背景のもとで、創設者梶山正式・いま(通称今子)夫妻の、意欲と情熱、苦勞と努力によって、九十余名の入学生を迎えて、名古屋裁縫女学校は誕生しました。当初は、学校というよりは、私塾と呼んだ方がふさわしいような、ささやかな形での発足でした。創立以後、本学園の歩んだ道は、官尊民卑の文教政策のもとで、つねに、困難な険しい道でしたでしょうが、それでも校長をはじめとする教職員の努力によって、高等女学校、専門学校を設置、戦後の学制改革により日本で最初に認可された女子大学など、一貫して、女性により高い教育機会を提供することによっ

て、男性と対等な教育水準を維持する一翼になってきたのです。このように、本学園の歴史は、日本の女子教育発展の歴史の縮図であったといえます。

学園は、世間に先がけて、洋風の服装の採用、大正十年の校長渡米、外国航路の汽船での修学旅行、「金剛石」のメロディーをかなでるチャイムの輸入、前畑秀子選手のオリンピック制覇の一つの布石となった屋内プールの建設、などに特徴的にみられますように、つねに進取の気風で、時代の変化に、先見的に対応して教育を進めてきました。学園史のなかには、戦時体制下において、体制に協力してきた側面もみられますが、次代をになう子女の教育において、この先見性と広い視野は、そのときどきの生徒諸嬢の人間形成に果たしてきた役割が否定されるものではないでしょう。

「人間になろう」という本学園の教育理念は、創設以来、言葉として継承されてきたものではありません。「人間になろう」という言葉が、学園史のなかではじめて具体的に登場するのは、比較的新しく、昭和三十七年、大学キャンパス内の陸橋を「人間橋」と名づけた由来を述べた記念碑の「人間橋由来記」です。このなかで、創立者梶山正式は、「人間になろう」という言葉を「人間完成、これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である」と意義づけています。

創立の精神という点からみますと、本学園は、裁縫女学校として発足しましたが、その内容は、「裁縫の他に、修身・国語・数学・地歴・家事・音楽・図画・体操をも併せ課し」「むしろ人間として、また一個の女性としての完成教育を期し、学問よりは実力、知識よりは人格の涵養に主力を注いだ」(『学園五十年を語る』)ものでありました。さらに創設者梶山正式は「この時分、私も夫妻は、朝から晩まで生徒と共に起居し、ことに生徒の大半は寄宿生であったので、日日夜夜食卓とともにし、今から回想すると私も一生のうち、もっとも印象深い、もっとも思い出の多い、一番楽しい師弟共同の学窓生活を送ったのはこの時代であった」と述べております。こうした教育環境のなかで、はぐくまれた校風は、「温雅優美のゆかしき間に、みちみちたる活気と進取の気風」であったといえます。こうして本学園は、その発足の当初から、裁縫というきわめて実科的な側面を表面にしながらも、その底流では、むしろ一般的な教科をも課し、生活面でも触れ合いを通じて人間全体の完成を目

ざしたものでした。さらに、大正デモグラシーの開花のもとで、「特に本校は、つねに自治自由を尊び」、生徒に「なにごとも自律的に自学自習することを奨励」し、その一例として「いとぎく」の表紙の図案が生徒の手になることを、あげています。このように、大正末期には、生徒の、のびる可能性を信じ、自律的に自学自習させることによって、人間完成の教育が一貫して追求されてきたことは、「人間になろう」という本学園の教育理念が、まさに学園創設の精神、つまり建学の精神として貫かれていたといえましょう。そしてこの精神こそが、「人間になろう」という教育理念として、今後学園のよき伝統を継承し、発展させなければならない課題として、今日のわれわれに、提起されていると思います。

「人間になろう」ということは、われわれにとって古くて実は新しい課題である、とらえることができます。「古典に帰れ」を合言葉にしたルネッサンスは、ギリシャ・ローマの合理主義と人間尊重の精神を生かすことによって、新しい文化を創造しました。今日の日本をみれば、機械文明の発達による人間性の疎外、核戦争の危機、学歴偏重社会と受験戦争の激化、資源の有限性など、極端な表現にこと欠かないような、人間性の喪失状況の中であって、「人間になろう」ということは、単に個人の精神主義的な修養の目標であると解釈されるだけでなく、人間性の復権、人間尊重のヒューマニズムの精神として、社会思想的意義が、理解されなくては、ならないと思います。こうした人間尊重の観点から、理解されてはじめて、「人間になろう」は、その今日的意義を明確化させ、未来への課題と展望をきりひらかせることになるのです。われわれは、「人間になろう」という言葉の積極的意義をいくら強調しても、決して強調し過ぎることはないと考えております。

この「人間になろう」という精神が、今日の社会的風潮の中にあって、あらためて、学園の教育の中に一貫して生かされ、真の人間教育によって、今後の学園の発展が約束されると、私は信じております。

本学園は、創立七十五年にあたり、特別の委員会を設け、その企画にあたっていました。記念事業としては、大学の図書館の大増築、高中では、やはり図書館の増築、小学校の改築の事業を行います。

つつあります。内容面でいえば、大学における将来計画委員会、中高では、「総合学園の一貫としての中学校・高等学校のあり方検討委員会」など、前向きの方角での検討の段階に入っております。

それから、編集委員の大変なお骨折りにより、「梶山女学園七十五年史」が完成いたしました。本日お帰りに、お持ち帰りいただきますことになっておりますので、ご覧下されば幸いに存じます。

さらに、本日は長い間、本学園のためにご尽力をいただきました方々の中から、白石清吉郎後援会長、大野昭一大学振興会長、橋本正同窓会長、故山崎敏夫先生の蔵書をご寄贈下さった山崎貞子夫人、創設当時から親子三代にわたって写真を撮影して下さった奥村写真館のみなさまに、心ばかりの感謝の意を表したいと存じます。

また例年の如く、十年以上ご勤務いただいております教職員の方々の中で、五年毎のきりの年にあたられます方々にも感謝の意を表すことになっております。

最後に、本学園創立七十五周年記念にあたり、学生・生徒・児童・園児への記念品として、ハッピーに折った日本手拭を作成いたしました。これは、今から六十五年前の、創立十周年のときに作製されたものにちなんでいるわけでございます。これも今日、記念品とともにお持ちいただきたいと存じます。

それでは、大変長くなりましたが、以上をもちまして、私の言葉とさせていただきます。



序 文

相山女学園は、本年創立七十五周年を迎えた。本学園は明治三十八年（一九〇五）、名古屋市内の富士塚町の武家屋敷に、名古屋裁縫女学校として開校したのに、その起源をさかのぼる。明治三十八年といえば、日本は日露戦争の真最中であり、数多くの戦争の悲惨な犠牲を背景に、国威を世界に示し始めた時期であり、経済的には、重工業段階の産業革命の完成期にあたり、天皇制絶対主義体制下での資本主義経済の確立期でもあった。

教育史的にみれば、明治五年（一八七二）の学制頒布以来、幾多の変遷を経ながらも、初等教育段階の小学校への就学率が、九十パーセント以上に上昇した時期であった。そして、その時期は、男尊女卑の社会風潮の下にありながら、むしろその風潮を支えるものとして、お針仕事など、限定された内容で、しかも、中以上の階層の子女を対象とする、女子のための中等教育機関が求められ始めていた時でもあった。そのことは、現在、愛知県下で有名な私立女子校の多くが、この時期と相前後して創設されていることをみても知られるのである。

こうした歴史的、社会的背景のもとで、創設者相山正式・ゆま（通称 今子）夫妻の、意欲と情熱、苦勞と努力によって、九十余名の入学生を迎えて、名古屋裁縫女学校は誕生したのである。当初は、学校というよりは、私塾と呼んだ方がふさわしいような、ささやかな形での発足であった。創設以後、本学園の歩んだ道は、官尊民卑の文教政策のもとで、つねに、困難な険しい道であったが、それでも校長をはじめとする教職員の努力によって、高等女学校、専門学校の設置、戦後の学制改革により日本で最初に認可された女子大学など、一貫して、女性により高い教育機会を提供することにより、男性と対等な教育水準を維持する一翼をになってきたのである。このように、本学園の歴史は、日本の女子教育発展の歴史のまさに縮図であったといえよう。

学園は、世間に先がけて、洋風の服装の採用、大正十年の校長渡米、外国航路の汽船での修学旅行、「金剛石」のメロディーをかなでるチャイムの輸入、前畑秀子選手のオリンピック制覇の一つの布石となった屋内プールの建設、などに特徴的にみられるように、つねに進取の気風で、時代の変化に、先見的に対応して教育を進めてきた。学園史のなかには、戦時体制下において、体制に協力してきた側面もみられるが、次代をになう子女の教育において、この先

見性と広い視野は、そのときどきの生徒諸嬢の人間形成に果たしてきた役割が否定されるものではないであろう。

「人間になろう」という本学園の教育理念は、創設以来、言葉として継承されてきたものではない。「人間になろう」という言葉が、学園史のなかではじめて具体的に登場するのは、比較的新しく、昭和三十七年、大学キャンパス内の陸橋を「人間橋」と名づけた由来を述べた記念碑の「人間橋由来記」である。このなかで、創設者相山正式は、「人間になろう」という言葉を「人間完成、これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である」と意義づけている。

創設の精神という点からみれば、本学園は裁縫女学校として発足したが、「その内容は裁縫の他に、修身・国語・数学・地歴・家事・音楽・図画・体操をも併せ課し」「むしろ人間として、また一個の女性としての完成教育を期し、学問よりは実力、知識よりは人格の涵養に主力を注いだ」（『学園五十年を語る』）ものであった。さらに創設者相山正式は回想する。「この時分、私も夫妻は、朝から晩まで生徒と共に起居し、ことに生徒の大半は寄宿生であったので、日日夜夜食卓をともにし、今から回想すると私も一生のうち、もつとも印象深い、もつとも思い出の多い、一番楽しい師弟共同の学窓生活を送ったのはこの時代であった」という。こうした教育環境のなかではぐくまれた校風は、「温雅優美のゆかしき間に、みちみちたる活気と進取の気風」であったという。こうして本学園は、その発足の当初から、裁縫というきわめて実科的な側面を表面にしながらも、その底流では、むしろ一般的な教科をも課し、生活面での触れ合いを通じて人間全体の完成を目指したのであった。さらに、大正デモクラシーの開花のもとで、「特に本校は、つねに自治自由を尊び」、生徒に「なにことも自律的に自学自習することを奨励」し、その例として、現在まで継続している、「いとぎく」の表紙の図案が生徒の手になることをあげている。このように、大正末期には、生徒ののびる可能性を信じ、自律的に自学自習させることによって、人間完成の教育が一貫して追求されてきたことは、「人間になろう」という本学園の教育理念が、まさに学園創設の精神、つまり建学の精神として貫かれていると、歴史的に規定しても妥当であろう。そしてこの精神こそが、「人間になろう」という教育理念として、今後学園のよき伝統を継承し、発展させなければならない課題として、今日のわれわれに提起されているといえよう。

「人間になろう」ということは、われわれにとって、古くて実は新しい課題であると考えることができる。「古典

に帰れ」を合言葉にしたルネッサンスは、ギリシャ・ローマの合理主義と人間尊重の精神を生かすことによって、新しい文化を創造した。今日の日本をみれば、機械文明の発達による人間性の疎外、核戦争の危機、学歴偏重社会と受験戦争の激化、資源の有限性など、極端な表現にこと欠かないような、人間性の喪失状況がある。こうした状況のなかにあって、「人間になろう」ということは、単に個個人の精神的な修養の目標であると解されるだけでなく、人間性の復権、人間尊重のヒューマンイズムの精神として、社会思想的意義が、理解されなくてはならないであろう。こうした人間尊重の観点が理解されてはじめて、「人間になろう」は、その今日的意義を明確化させ、未来への課題と展望をきりひらかせるのである。われわれは、「人間になろう」という言葉の積極的意義をいくら強調しても、決して強調し過ぎることではないのである。

本書は、本学園の創立七十五周年にあたり、編集された学園史である。序文がやや長くなったが、今まで述べてきた点から、ぜひ本書をご覧いただきたいと考えて、あえてやや長い序文とした。

本書は、本書編集委員の教職員各位の手になる、長期間を要した労作である。編集委員各位に心から感謝の意を表する。

昭和五十五年十一月八日

梶山女学園長 梶山 正弘

昭和六十一年六月

梶山女学園の教育変遷

「人間になろう」まで

梶山正雄

昭和六十年以来数回にわたって、文学部の人間科学研究会の主催により「学園の歴史を語る」という一連の話をしてきました。その話の中の、「人間になろう」という標語が成立するまでの教育理念の歴史についての部分を文章化したのが本文であります。録音されていた話の内容を整理し、補足したものであります。

この講演の企画とその文章化の勧告をして下さった中川晋介教授に厚く感謝の意を表したいと思います。

まえがき

本学園の大学が星が丘に移転した昭和三十七年、道路にかけた橋を人間橋と命名し、その由来記の中に、創設者学園長の名において「人間になろう」と呼びかけました。それ以来これが本学園の建学の精神、あるいは理念とされてきました。私はこの「人間になろう」という言葉は意味深厚でよい標語だと思いますし、今後も学園の遺産として大切にしたいと思っています。しかし、この言葉はあまりに観念的で、教育の現場に結びつき難いようです。

私はかつて幾度か式辞の中でこの「人間になろう」という標語をのべたこともあり、また高校の小冊子に書いたこともありましたが、単にお題目のように唱えていたに過ぎない感じがします。私自身が、他人に「人間になろう」と呼びかける資格のある「人間」ではないというひけ目を感じますが、それは別として、「人間になろう」という標語が成立するまでの歴史を知ることが先ず必要だと思いました。その意味で、以下、明治三十八年に本

学園の最初の学校が創立されたときから、創設者の教育方針、目標、あるいは理念が大正、昭和につれてどのように変遷したかという歴史をたどって見たいと思います。

一、創設当初

明治三十八年、名古屋裁縫女学校を創設したときの、いわゆる建学の精神を最もよく示しているのは、その年の三月に生徒募集のために出された設立趣旨の文であります。その要点の概略は「現時、女子の技芸教育はその進歩最も幼稚にして、かの裁縫の如き未だ実用的教科の価値すら詳にせられず、教授の方法また甚だ進まず、技芸教育の発達を図るは、急務中の急務なり。当市地方には未だこの種の完全なる学校の起りたるを聞かず。当市に於て本校を設立したる所以のもの実にこゝにあり。」この趣旨の文はかなり長文ですが、その要点は以上のようなことでありました。裁縫、技芸に練熟させることによって、女子の教化を深くし、良妻賢母たるものを養成することが目的であることも述べられています。

また、本校の特色として、次の四ヶ条が示されていました。

- 一、順序よく教授事項を配列して学習に便すること
- 一、従来の教授法を改良して教育的に教授すること
- 一、最も短日月に最も多くの事物を伝授すること
- 一、技芸の各方面に亘りて教授し実用的ならしむること

こゝに示された特色からも、本校創設当時の目標というか、精神というか、そういうものがわかれると思います。

明治時代の半ば過ぎ、文部省は女子の中等教育向上の施策として高等女学校令を制定しました。この高等女学校は、女子には家事裁縫を主として教えればよいという思想を排し、男子の中学校と同様に修身、国語、地理、歴史、数学、理科、英語など一般教養に重きをおき、裁縫などの家政科目はかなり軽く扱ったものでありました。これに対して、女子にはその天職から考えて裁縫などが最も重要であるから、女学校は裁縫や技芸を主

として教えるべきであるという考えの人も当時かなりあったようです。本校はこの後者であったのです。このことは、創立後数年の間に本校の校友会誌上でのべられた高等女学校に対する厳しい批判から察することができま

す。

創立当時名古屋には高等女学校が二つありました。一つは名古屋市立高等女学校で、明治二十九年設立、初代校長は棚橋絢子氏、公立学校の校長に女性を据えたことは当時としては随分進歩的であったと想像します。この学校は後に市立第一高等女学校と改称し、現在の菊里高等学校に連なるものです。他の一つは愛知県立高等女学校で、明治三十六年武平町に設置されたものであります。後に県立第一高等女学校と改称し、現在の明和高等学校の前身の一部であります。

この二つの高等女学校は、明治時代には極めてエリート的な存在であつたし、創立当時の本校の理想とは別のものであつたので、本校と競合する点は全くなかつたと思います。

明治四十年には熱田町に町立高等女学校が設立され、間もなく熱田町の名古屋市合併と共に市立となり、やがて市立第二高等女学校と改称されました。このように公立の高等女学校がふえましたけれども、裁縫、技芸を主体とする本校とは別の存在でありました。たゞし、前に記しましたように、高等女学校というものに対する厳しい批判が本校の校友会誌にいく度か出されています。この事情を理解するのには、市内にいくつかの高等女学校があつて、それらと理念的な競合をしていたとすればわかり易いかと思います。

なお、つけ加えておかなければならないことがあります。裁縫技芸教育が本校創設の精神であつたということを以上のべましたが、いわゆる裁縫塾のような実科だけということではなく、修身、国語、算術などの教養科目も授業に取り入れていました。しかし、一週間三十六時間の中、二十二時間を裁縫、技芸に当て、残りを各教養科目にということであつたのですから、裁縫技芸が最重点であり、特色であつたということは否定できま

せん。

二、創設後の数年

開校後一、二年のうちに校風というものができてきました。これは校長夫妻が裁縫教育への情熱を燃やすとともに、家族的な雰囲気の中で女の道を教

育した結果であります。明治三十九年二月紀元節の日に、卒業生と在校生をまとめて和風会という会をつくりました。これはいわば校友会に当るもので、和を大切にする心持ちを会名にしたものです。そして糸桜という雑誌を発行することになりました。この糸桜2号に次のような文章が出ています。

「主義常に一貫して校風も漸次確立し温雅優美の床しき間に充ち満ちたる活氣と進取の氣風とを保有し而して実学の旗幟転た鮮明なるものあるを自覺せり」

温雅、優雅、活氣、進取の雰囲気の中に、裁縫、技芸という実学の旗じるしを掲げているのがわが校風であるというわけであります。

明治四十年には、和風会の中に実践部というものをつくり、礼儀や作法を教えることになりました。十月発行の糸桜には次の文が出ています。

「和風会実践部の期する所は我等の採るべき礼儀作法を研究し之を躬行実践し以て淑女として良妻賢母として日本婦人として敢て愧ずる所なからしめんとするに在り。」

こゝに良妻賢母という言葉が出ています。わが国の女性の理想像を良妻賢母として、裁縫技芸教育に加えて礼儀作法を習熟させるという学校の方針が定着したように見えます。糸桜(明治四十年六月)に掲載された「吾が理想」と題する一生徒の作文の内容「内にありては良妻賢母として、出ては忠実なる技芸家として一生を終りたく思ひます」に、生徒の受けとめ方が見られます。

このような良妻賢母主義に併せて、職業教育主義を認める方針がありました。糸桜3号(明治三十九年)には、婦人と職業と題する相山今子の論

説に、次のような文があります。

「中流以上の家に生れたる女子等は何等の技能を持たないものが多いといふのは如何にも悲しいことであります。どうか斯ういふ風習を一日も早く打破したいものであります」

明治四十一年の「愛知教育」にのせられた論説には次のような文があります。

「良妻賢母主義と職業教育主義は、互いに背馳するが如くにして、決して背馳するものにあらず、何となれば、独立自営し能はざるの理なければなり。されば両主義互いに混和加味して、一方には、結婚の準備をなし、また一方には、独立自営し能ふだけの能力を授けんことは、最も肝要のことなるべし。」

本校に師範科を設けたのはこの線に沿ったものであります。

なお、このころの本校の教育方針、あるいは教育の精神を、裏側から明示していると思われる論説がいくつか発表されています。一つは高等女学校に対する批判、他の一つは「新しき女」への批判であります。これらの批判の文は、当時の本校の思想を知るのに大いに役立つと思います。

「白菊」大正元年。「私は今日の一般の高等女学校といふものが、家事科や裁縫科を最下位に置きて、これを軽視しつゝあるの事実を看て、甚だよくない兆候だと存じます。さまで必要でない幾何や代数や生かじりの英語に尠からぬ時間と精力を費して居るのであります。」

「糸菊」大正三年。「高等女学校は……その学科の配当教授の方法等が我が邦の實際家庭に適合せず、これらの卒業生が動もすれば浮華輕佻に流れ虚栄に駆られ所謂お転婆、ハイカラ式部が続々と産出せられ漸次我邦古来の婦人の美德を没却し去らうといふ形勢に立ち至りまして……。」

このほか、大正二年の糸菊にも高等女学校批判の文が出ています。次に「新しき女」への批判の二例を挙げておきます。

「糸菊」大正四年。「私は……未だよくこの新しき女なるものゝ如何なる女かは存じませんが彼の西洋には女子に選挙権を与へよと叫ん

で……、何事も真似の上手なことを以て有名なのは我國民である。婦人の中にも何西洋人に負けるものかと、入らぬ処へ力こぶを入れて追々左様なるいまはしき風が東都を中心として、やゝ勢い強く吹き荒んで居るのであります。学校では窓の戸を密閉して左様な風の吹き入らぬやう、極力防御はして居りますけれども、やゝもすれば……。」

「糸菊」大正二年。「視よかのいまはしき「新しき女」なるものは大正二年の産物にあらずや斯の如き似非的淑女頻々として輩出す……是れ蓋しわが女子教育家が我邦固有の歴史を忘却したるなり、高等女学校は学科の選定其宜しきを得ず、比較的肝要ならざる学科に多大の精神と時間を費しつゝあり、」

以上のほかにも、大正元年の「白菊」に、女子解放論を非難し、女子の三大本分は「舅姑に事へてよく定省の誠を致し、夫に事へてよく貞節を盡し、子を養ひてよくこれを教育するといふ三ヶ条件である」と説き、「新しき女」を排しています。今日から見れば妙でありますけれども、これは歴史の流れの中のことで、当時としては常識的な思想の一つであったと思います。

三、大正四年よりの数年間

大正四年に訓育を強化するために報徳会というものをつくりました。これは生徒と卒業生を以て組織する、となつていますが、それまであった和風会とは別の会であります。その綱領は次の通りで、聖旨とあるのは教育勅語のことです。

報徳会綱領

- 一、会員は、聖旨を奉體し、智恩報徳の主意を服膺実行すべし。
- 二、会員は、至誠を旨とし、勤儉力行の風を養ふべし。
- 三、会員は、私徳を励み、公德を重んずべし。
- 四、会員は、和衷謙讓の氣風を重んじ、我が国古来の婦徳を發揮せんこ

とを努むべし。

五、本会は、学問と宗教の異同を問はず、汎く道義を講究して修養に資すべし。

六、本会は、実践を主とす故に会員は、本会の趣旨及び綱領の実践を努むるのみならず、本会にて議決せる実行問題は熱心履践を努むべし。

報徳会の集会は毎月一回行つて、先ず教育勅語を奉読し、次に実行問題を検討決議し、時には名士の講話を聴いて、各自の修養の助けにするというものでした。実行すべき徳目として次のようなことが定められていました。

- 一、左側を通行すること。
- 二、教室を清潔にすること。
- 三、便所を清潔にすること。
- 四、他人の人格を尊重すること。
- 五、礼儀を正しくすること。

綱領にはむつかしい言葉が使われていますが、実行は身近かなもの、生徒が具体的に受けとめてできることをさせたのであります。

また、大正四年に和風堂という講堂ができてからは、毎日講堂に全校生徒を集めて朝会が行われ、校長初め各先生から訓話をするのが例となりました。

大正六年には相山高等女学校が併設されました。その前年に高等女学校をつくることを決心し、申請して認可されたのですが、このことは、前に記したように高等女学校というものに対して極めて批判的であり、女子教育は裁縫などの実科教育を主とすべきであると主張してきた校長の考え方の大きな変化であります。私はこの変化は極めて賢明であったと思います。変化の原因についてはこゝではとりあげません。その後の歴史を見ますと、この時から十年後には、社会の要求の大勢は高等女学校に向い、裁縫女学校の影が甚だしく薄れた社会情勢を迎えます。本校でも大正十四年には裁縫女学校の名が消えました。この意味から言って、校長の考えの変化は見

通しがよかったと思います。

女子教育についての基本的な考え方には変化が無かったのですが、察するところ、高等女学校設立に踏みきることについての心の複雑な屈折は大きかったと思われます。糸菊(大正五年)に高等女学校を本校に併設することについての論説がのっていますが、かなり論旨に苦しさがかゞわれます。次の文の中に、「裁縫女学校は筋肉活動を主とせる教育機関にして」という句があります。

「高等女学校を併設し従来の裁縫女学校と相對峙せしめ、両々相まつて大いに女子教育の完美を期せむとす。蓋し両校各その目的とする所は、高尚なる徳操を養ふにありといえども、前者は筋肉活動を主とせる教育機関にして、後者は精神活動を主とせる教育機関なり、」

当時学校で教えていた裁縫はかなり高度のむつかしい系統的なもので、相当に頭を必要とするものでしたから、裁縫には精神活動は要らないと思わせるようなこの文章は不用意であつたと思います。どうしてこのような文章が出てきたのでしょうか。それまで高等女学校を非難してきた立場を、こゝで変えるという校長の英断のかげにあつた心苦しさの結果のように思えます。高等女学校をあくまで批判の対象として、いつまでも裁縫女学校だけにこだわっていたら、それ以後の本学園の発展は無かつたにちがいないと思います。

このようにして高等女学校をつくり、これは文部省の規定通りの一般的な教育を主とした学校にしたのですが、女子の本分とか、天職についての基本的理念には変化がなかったことを、次の文から察することができます。

「糸菊」大正六年。「日本古来の婦人道ほど、気高く尊きものは世界にない、己の幸福を犠牲にして、夫を助け姑に仕へ、子女を教養する美しき潔き我婦人道は男子の大和魂と相並んで実に世界に誇るに足るのである、」

一方、教育勅語を奉じての訓育が大正四年以来強調されるようになりました。

「糸菊」大正九年。「抑も我国の道德は、勅語にも仰せられてある通り、忠と孝とその根元をなして来て居る、即ち忠を行へば孝となり、孝を行へば忠となる。斯様に忠孝一致を体現し得るのものは、我国を描て他にその例を見る能はざる所であります。我国民の道德の標準は、過去にも、現在にも、未来にも、我尊き教育勅語を描て他には絶対に無いのであります。」

教育勅語の中には、いわゆる日本古来の婦道というものは全く出ていないし、義勇奉公以外は男女共通の徳目ですから、したがって本校の創立後の訓育方針であった良妻賢母主義に教育勅語の徳目を加えて巾が広くなりました。教育勅語を重んずることは、当時全国どの学校でも行われていたことです。本校で重んずるようになったのは特記すべきことではないのですが、高等女学校ができてから両陛下の御真影が下附され、紫色のふくさに包んだ教育勅語の巻物と共に、祝日や入学式などの式典に恭しく扱われるようになってから、教育勅語の重さが本校に定着したものと思われれます。

四、大正十年より昭和十年まで

大正十年に校長のアメリカ視察が行われました。この視察によって、かなり博い知識を得ましたし、考え方に巾ができました。女子教育の基本的な考え方は変らないまゝ、巾が広くなったと言つてよいでしょう。このことがこの後の教育方針や施策に顕著に出て参ります。

アメリカで得た新知識は、渡米前には意想外のものが多かったようであります。アメリカには女子教育という特別なものが無い、一般に男女共学で、多数の女子が大学で勉強している。私立の方が公立より優れており、社会的に地位が高い。裁縫などは殆んど学校の授業に無い。女子も男子と同じように非常に活発である。その他日本では想像もしなかったようなことを見聞して帰ったのであります。学校ばかりでなく、社会も博く観察して、たとえば、男女とも服は自分で作る必要が全く無く、店に各種の既製

服がいくらかでも売られていることなどを意想外の感じで見ております。自分自身もサンフランシスコの店で既製服を一着買ってきました。今日では、日本でも男の洋服は百貨店などでいくらかでも既製のものを求めることができますが、大正時代には洋服屋に一々寸法をとってもらい、生地を選び、注文して作ってもらわなければならなかったのです。アメリカの学校で裁縫の授業が無いことの理由がわかったようです。

帰国後これらの新知識をとり入れるのには、やはりまだ日本的な枠がありました。たとえば、男女共学については、アメリカと日本とは道德觀念がちがうので問題があるとしておりますし、裁縫の授業についても、日本では衣服類はすべて家庭で自ら仕立て、処理しなければならぬので、女性にとって非常に大切な科目であるとしていました。しかし乍ら、教育方針や施設などに著しい変化が出てきました。外国航路の汽船を利用して船旅の修学旅行を行ったり、富士登山、後には白馬岳登山をしたり、しかも校長自ら引率してこれらの行事を指導することが行われるようになります。施設の面でも、細かいことを記せば、たとえばそれまで汲み取り式であった学校の便所を、多大の費用をかけて全部水洗便所にしたり、寄宿舎の風呂をそれまで薪で焚いていたのを、電力に変え、タンクで沸かした湯を蛇口から供給するというアメリカ式の近代的設備に変えました。当時水洗便所のある学校は名古屋では本校だけではなかったかと思ひますし、富士塚町の住宅街でも本校だけでした。

覚王山近くの田代町に大正十二年、相山第二高等女学校をつくったのですが、このころからスポーツを大いに奨励するようになりました。当時他校には無かった屋内プールをつくることによって、前畑、小島選手のような優れた選手を育てたことは周知であります。陸上競技、テニスなどにも非常に力を入れました。これらもアメリカ視察の影響で、家庭内の従順、貞淑な妻の座を女子の目標としていたそれまでの教育方針の巾を広げたものであります。また、毎朝鐘の音で金剛石の曲を生徒に聴かせてから授業を始めるという教育方針もこのころから始まりました。

アメリカ視察の成果の一つは、女子専門学校の創設であります。もともと本校は創立以来、女子の高等教育には消極的でありました。大正元年の論説には、「私は女子の高等教育機関を設備することに就ては、不必要視するものではありません。併しこれは極めて少数の特別の境遇にある女性、又は特別の性質を持てる女流に対してのみ設備すべきものだと思ひます。」とのべ、この文の後には、「男のような女もあるのです、これらの女子は高等教育を受けてその特色を発揮するのにも悪くはありませんまい。」という皮肉までのべられています。アメリカでは女子も男子と全く同じように大学へ進学して勉強している姿を直接視察してきたことが、昭和五年梶山女子専門学校を設立開校した背後にあったと思います。

しかし、我が国の婦人の天職は良妻賢母であるという基本精神は、そのまゝ専門学校の教育方針になっていました。開校当時の式辞の中には、いわゆる良妻賢母主義や人格主義をたゞ口ぐせのように唱えるのは空論としながらも、次のようにのべています。

「高等女学校教育の多方的修養を基礎とし、婦人の天職たる母性の資格を陶冶向上せんこと、これ本校の主要目的である。

世には女子に男子同様の専門教育を施すことの必要を云為するものがあるが、本校はどこまでもその論旨を異にして居るのである。母性を中心とし、母性を尊重し、女子本来の天職使命を完了せるに必要な高等教育を施すことが、本校究竟の目的である。」

昭和六年以降、満洲事変、上海事変、犬養首相暗殺、血盟団事件など、軍部と右翼団体の血生臭い事変や事件が起り、軍国主義的な空気が次第に強くなってきました。この時代になりますと、糸菊誌上にも次のような右傾的な文がのるようになりました。

「糸菊」昭和八年。「嫁ぎゆく教え子に贈る。御身は実に光輝ある皇国の婦人であることを呉れ呉れも忘れてはならぬ。……皇国の婦人は、古来崇高なる犠牲的精神に富んでいた。……この醇厚なる美俗は、男子の「みづくかばね草むすかばね」……の忠勇義烈の日本精神と相

並んで、世界に例なき崇高なる魂である。」

昭和十年には、学園の創立三十周年の行事が盛大に行われ、その中心事業として孝経幢を建設して、孝道を強調いたしました。孝は教育勅語の中の重要な徳目の一つであり、孝は百善の基であるというわけであります。この二年前には、学園長自身がその母の八十才を祝って鳩杖を贈る行事を全校生徒に示して、親孝行の大切なことを教えました。これに対して、全職員、生徒が母と題する和歌を一首づつつくって集め、「千代のいのり」という本にまとめました。これには千七百余首の母を詠んだ歌が収められています。孝道についての熱心な教育の一端が見られます。

「あゝ業はかたし、あゝ道は遠し」の学園歌が制定されました。この歌の中の「朝夕に大勅語を則として心を磨き」という句に、教育勅語を中心にした教育方針が込められています。

教育勅語について当時の訓練方針として示された文があります。

本校ノ訓練ハ教育ノ大本タル教育ニ関スル、勅語ノ聖旨ヲ奉體シ忠良ノ臣民タルト共ニ有為ノ婦人タラシメントスルニアリ

このような訓育は、抽象的なことを言うだけでなく、身近に実行できることを生徒に指し示して、実行させ、反省させるよう、校長はじめ先生たちが努力していたのであります。冥想会というものを開いていましたが、そのテーマは、(一) 父母ニ事ヘテ孝ナラザルカ、(二) 兄弟ニ友ナラザルカ、(三) 朋友ト交リテ信ナラザルカ、(四) 学ヲ習フニ専心ナラザルカ、などが挙げられております。主に教育勅語の徳目でした。

五、昭和十一年より敗戦まで

昭和十一年には、二二六事件が起り、日本の右傾化、軍国主義化は昭和十六年に向って急速に進んでいきました。教育界では昭和十二年の文部省の「国体の本義」の発行から、国体明徴、教学刷新の強化が進み、大学、専門学校の修業年限短縮、大学の軍事教練強制など有無を言わせず暗い方へ押し流されていきました。本学園も影響を受けざるを得ず、訓話や式辞

に軍国調が濃くなり、陸軍墓地清掃奉仕などが行われました。しかし幸いに、女子校であるために、割合明るい気分を維持していました。

しかしながら、昭和十六年の終りに太平洋戦争が始まり、十七年になりますと、本学園にも戦時色が急速に濃くなってきました。東条首相が軍隊のために「戦陣訓」というものをつくったのになぞらえて本学園では、「学園訓」をつくりました。

「糸菊」昭和十七年。

希くば本学園に学べる生徒諸子は、本年四月制定せる本学園訓の趣旨に則り、只管に皇国婦道の修養と実践とに邁進し本校伝統の美はしき校風をいやが上にも発揚せられ、今日の大東亜戦の夫れこそ雲にそびゆる大記念塔を重ねて建設して、未来永劫陸離たる光彩を添へられんことを切望してやまない次第であります。

学園訓

本訓

- 一、本学園の生徒たるものは、謹んで、教育勅語に示させたまへる大御訓を奉体し、誓ってこれが実践に邁進すべし。
- 一、本学園の生徒たるものは、特に、皇国婦道を修養錬磨し、日本女性の長所美点を發揮することを努むべし。

- 一、本学園の生徒たるものは、常に強固なる意志と強健なる身体とを鍛錬すべし。

- 一、本学園の生徒たるものは、宜しく絶えず学業に精進し、知徳を磨き日本的修養を深め且つ高くすべし。

文中に「本校伝統の美はしき校風を発揚せられ」という句が出てはいませんが、創立以来提唱した貞淑な良妻賢母主義と、皇国婦道の修養、実践とは異質のものであり、結局良妻賢母は軍国主義のためのものに変容していききました。

このような学校の軍国主義化は全国的に起ったことであります。やがて戦局が更に厳しくなるにつれ、本校の生徒は軍需工場に勤労働員

され、学校は工場化されて、もはや教育の場ではなくなりました。そして昭和二十年八月に敗戦の日を迎えたのであります。

六、戦後の三年間

戦争が終って生徒は学校へ戻ってきました。富士塚町の学校は戦災で失われてしまったので、その生徒は山添町の校舎に収容しました。世の中は全く混乱状態で、アメリカ軍の占領下にあり、学校も教育の道しるべを全く失った状態でした。そこで昭和二十一年の一月に、本校生徒の道しるべとして、十三徳目実践反省事項というものを定めました。これはたとえば、学習態度に関して、とか、父母に対すること、師に対すること、など、身近な十三の徳目を示し、各徳目について総計百三十五の更に細かい小徳目を示したものであります。いずれも常識的な小徳目で、戦前に掲げたような良妻賢母主義は全く見られません。

昭和二十二年、二十三年には、学制改革に伴って本学園に中学校、高等学校が開校されました。そして、教育基本法の精神に従って本学園の教育方針が定められました。

相山女学園教育方針 昭和二十三年四月

一、本学園教育の理念

本学園教育の使命は新生国家の建設に最も深く内面的に参与するものである。而して新国家の性格は日本国憲法に、又教育の理念と目標は教育基本法に示されて居る。この理想実現こそ真に本学園の理念であり念願である。

- 二、封建的な良妻賢母主義を否定して、一般的教養の向上と個性の完成をはかる。

- 三、真実を愛し真理を追求する精神を養う。

- 四、社会人としての教養を深め道義心の昂揚をはかる。

- 五、高雅な情操と宗教心の啓培をはかる。

- 六、勤労愛好の精神をかん養する。

七、体育を尊重する。

この教育方針は、本学園の戦前の方針と精神に比べると、九十度乃至百八十度転換したのと言つてよいでしょう。教育勅語が消されて、教育基本法の理想の実現をそのまゝ本学園の理念といたしました。封建的な良妻賢母主義を否定して、男子と同様に一般的教養の向上をはかることにしました。封建的な良妻賢母とは、戦前本学園で説いていた日本の伝統的美風としての良妻賢母に当るものであります。これらは非常に大きな変化でありました。

たゞ、これに関して次のような説明文がついていたことを注目したいと思います。

我国の女性はうるわしい幾多の長所美点を持っており、この特質に着眼して、教育上これを重視することは今後とも大切である。しかしながら人間として完成し、男子と同様の一般的教養を身につけてこそ、良き妻となり母となり得るのである。故にその特質に着眼し、これを強調しつつ人間性を培つて人格の完成に努力する。

この文には二つの注目すべき点があります。第一は「我国の女性はうるわしい幾多の長所美点を持つており」という句であります。この句の中に戦前の良妻賢母の像が残像として感じられます。しかし、この文の後半の「男子と同様の一般教養を身につけてこそ、良き妻となり母となり得るのである。」という句には、新しい民主的な理念が感じられます。第二は「人間として完成し」という句で、こゝに「人間」という語が出てきたことです。戦前の教育は「人間として」ではなく「女として」であつたのですから、大きな変化であります。

このころの象徴的な変化として学園歌のことを記しておく必要があると思います。学園歌の中の「大勅語を則として」という句を「真理の道を踏みわけて」と訂正しました。学園の方針が教育勅語から離れたことを示す一挿話であります。因みに、この訂正は、実は私が提案して訂正したので、未だによく覚えているのですが、この訂正はあっさりと発表したので、訂

正したという記録が残っておりません。そのため今日では学園歌は始めから「真理の道を踏みわけて」であつたと思われており、「七十五年史」の昭和十年学園歌制定の記事にも戦後の訂正された歌詞が載せられています。念のためこゝに附記しておきます。

七、昭和二十四年より十数年間

昭和二十四年に大学が創設されました。本学園の専門学校は家政系であつたことが最大の理由で、また家政学が女子には最適であるという考えで、家政学部ができました。大学の開学について学園長がのべた文の一部を次に掲げます。

「糸菊」昭和二十四年。「さていよいよ大学は誕生した、学長鶴見博士初め学界に於ける権威者合計四十九名の就任の承諾を得た。けれども問題はこれからである、更に内容の充実を計らねばならない、また如何に施設が完成しても、学生の質が低下しては大学は零である、研究もすべて自発的にならなければならぬ、」

文中の「学生の質が低下しては大学は零である」、「研究もすべて自発的にならなければならぬ」という句に、学園長の期待がうかがわれます。学問の研究という精神はそれまで本学園には無かったのですが、大学創設に全面的に協力して下さった名古屋大学の田村学長はじめ堀田、戸刈両博士その他外部の先生方によって本学園にもたらされたものです。

開学の翌年、学園創立四十五周年の学園長式辞の中に次のような文があります。

「糸菊」昭和二十五年。「私も時々実験室や、実習室を廻つて見ますが、殆んどの室に往つても、聞ゆるものはペンの音か、ピンセットの音か試験管の響のみという有様で、……実に能く勉強せられて居る、私は廊下を歩きながら、斯んなことを想う、将来或はこの中から、日本のキューリー夫人が現れるかもしれぬ、女の湯川博士が出るかも知らん、イーエ之は決して夢であるとは断定は出来ぬ、……」

この文のなかに学園長が大学に対して持っていた夢とも言えるべきものが表われています。こうした学問的、研究的な雰囲気、これが大学創設の精神であったと言ってもよいと思います。大学では朝会などの行事が無いので、訓育に当るものは無く、各教授、助教授などがそれぞれの専門の授業と研究をすることがすべてでした。学生の生活指導のために指導教員制度というものを作りましたけれども、訓育からはほど遠いものでした。しかし、先生方の熱心な研究的雰囲気が生徒を育てたと思います。

大学開学の昭和二十五年には、学園長は七十才でありました。戦前の教育方針から戦後の新しい民主主義的教育方針に潔く転換し、学園を新しい日本に順応して発展させた卓見と苦心は、前にも書きましたが、見事なものでありました。この後は方針の著しい変化が見られません。そして、八十才前後になって「人間になろう」という言葉が出てきたのであります。

八、大学の星が丘移転の前後

昭和三十七年に大学が星が丘に移りました。この二、三年前から「人間になろう」という言葉が学園長の頭の中にできており、人にも語るようになっていました。昭和三十七年、大学内に作った橋を人間橋と名付け、橋のたもとに建立した石碑に「人間橋由来記」と題して、「人間になろう」の句を記したのであります。時に学園長は八十二才、翌々年二月に没する一年三ヶ月前のことでありました。この由来記の終りの部分を左に掲げておきます。

予はもとより不才不敏言うに足らないものではあるが、ただどうかして一人前の人間となるべく日夜努力だけは、怠らなかつたつもりである。古人の歌に

人となれ人 人となせ人

と言うのがある。人間完成、これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である。

諸君よ、人間になろう。

かくして「人間になろう」という言葉が、創設者の最後の遺訓と言ってもよいものになったのであります。「人間になろう」とは誠に意味深厚でありますので、学園の貴重な遺産であると思います。文頭にも書きましたように、私はこの遺産を大切に、学園発展の基礎にすべきだと思うのですが、あまりにも意味深厚であるために、美化し過ぎて虚像となり、教育の現場から離れたお題目になる恐れがあります。

九、学園の歴史から見た「人間になろう」

本学園の明治三十八年以来の教育方針、あるいは教育理念の変遷の要点をまとめて見ると、次のようになります。

- 一、創設当初 裁縫、技芸などの実用教育主義。
- 二、創設一、二年後より 良妻賢母主義。
- 三、大正四ころより 教育勅語尊重。
- 四、昭和八年以後 スポーツの奨励。皇国婦人を理想像とする傾向。孝道の提唱。昭和十一年以降次第に軍国化の影響浸透。
- 五、昭和十七年以後 戦陣訓にならって学園訓を制定。
- 六、昭和二十一年以後 昭和二十一年十三徳目の実践反省事項指示。同二十二年に、新しい相山女学園教育方針が制定され、封建的な良妻賢母主義を否定し、教育勅語抹消。
- 七、昭和二十四年 大学を設置して大学には研究的精神と成果を期待。
- 八、昭和三十七年 人間橋由来記に「人間になろう」の標語を掲げる。

以上のように整理して見ると、本学園の教育方針が戦前と戦後では大転換があったことがわかります。これは日本国全体に起った転換であります。また、細かい点では本学園らしい移り変わりがありません。このような

変化の後で出て来たのが「人間になろう」ですから、「人間になろう」を学園の建学、あるいは創設の精神とするには大きな無理があります。創設の精神は当初はやはり裁縫、技芸を教えることであつたし、その後は裁縫、技芸教育による良妻賢母主義になったのですから、いわば「女になろう」であつたのです。女を男女平等の目では見ていなかったし、男と女を区別する以前の「人間」という概念が無かつたと思われまゝ。大正になって教育勅語を奉戴するようになってから、男女共通の徳目が教えられるようになりました。教育勅語には良妻賢母の思想は含まれていませんが、学園の教育方針はやはり良妻賢母主義、戦時に向つては母性主義が主でありました。「人間として完成し」という理念が初めて出てきたのは戦後の昭和二十三年であります。したがつて「人間になろう」という理念は戦後のものとするのが素直な歴史の解釈であると思います。

このように戦後、「人間」という理念が出てきたのは、戦後間もなく施行された教育基本法の精神に沿つたからであります。教育基本法第一条の「教育は、人格の完成をめざし」に沿つたものと言つてよいと思います。戦前にも、学園長の訓話の中に、「人多き人の中にも人はなし人となれ人となせ人」という古歌を時々引用していましたが、当時はこの「人」を女に関しては、やはり古来の良妻賢母としていたので、今日的な意味での「人間」は戦後本学園に生まれたと言つてもよいと思います。

こゝで一言断つておきますが、良妻賢母という言葉を何度ものべて悪い主義のように扱ってきました。これはとくに封建的な良妻賢母のことであることを念のため記しておきます。新しい時代の良妻賢母は良夫賢父と共にあつて良いし、悪妻愚母が良いのではないと思うからです。

十、「人間になろう」の解釈

「かれは人間として立派だ」とか、「かれは人間ができてゐる」というときの「人間」は、「人間になろう」という標語の人間と相通ずるものがあるようです。人間性、人間味、人間的などの語もこの標語に関係があると

思われます。このように使われる「人間」は、さて具体的にどういうものかと質問されても、簡単に答えることができません。前に私が「人間になろう」は意味深厚であるとのべたのは、この理由からであります。

前にのべました昭和二十三年の学園教育方針の中に記されている教育目標の、たとえば、「真実を愛し真理を追求する精神、高雅な情操と宗教心、勤労愛好の精神」など、更にまた昭和三十八年の大学竣工式の式辞の中の、「人間として常識に富み、正しく清い、美しい、而も温かい情操豊かな人格」などの句や文に、創設者学園長が抱いた理想の人間像の持つべき精神や性格が示されているように思われます。一応尤もな理想像と思われまゝですが、しかし、今日社会の価値観の多様化、社会生活の急速な進歩により、理想の人間像も多様化して単純に示すことは無理になつてゐると思ひます。たとえば、前述の「正しい」ということについても、ある人が正しいと思ふことも他の人は正しくないと考へる事柄がたくさんあります。「常識に富み」を大切だという人もあれば、常識には多少劣つても独創力の非常に優れた人を求める声もあります。

結局「人間になろう」ということは、あまり穿さくしないで、意味深厚な標語として観念的に唱へるより仕方がないということになりそうです。

創設者の学園長が八十才を過ぎてこの標語を出したのは、その信念のまゝとめとして出したのでありますが、それについて多少推察も混えて私の解釈を附加しておきます。この標語は「人間になろう」であつて「人間になれ」ではないことに深いわけがあると思われまゝ。古歌の「人となれ人となせ人」を引用し乍ら、「人間になれ」としなかつたことはなぜでしょうか。「人間になろう」という呼びかけは、「自分自身も人間になろうと努力してきた、みなさんも私に見習つて人間になろうと努力しなさい、」という意志の表われであります。実際に創設者は若いときから随分修養に努めてきました。たとえば、部屋に「持己嚴待人寛」という座右銘を掲げていましたし、学校には「從隗始」を掲げて職員と共に実行に心懸けるといふ風でした。若いころには、時に新聞に悪口を書かれたり、税務署にいじ

められたりしたこともありましたが、それらをいつも自分を磨く材料にしていた。アメリカ視察、カラフト、朝鮮、満州、などの視察によって、視野を広くする努力をしました。また、有島武郎の「惜しみなく愛は奪ふ」、山本有三の「真実一路」など、多くの小説の類を愛読して、その中に出てくる「女」について勉強していたことも、私は覚えております。こうして、年齢とともに知命、耳順、従心を経て、八十才の円熟した境地に達しました。八十才で判断力や見通し力は若いころよりやゝ衰えた感じがしましたが、人間としては誰からも尊敬される円熟の境地であったと思います。このときに至って始めて「人間になろう」と呼びかけたのであります。

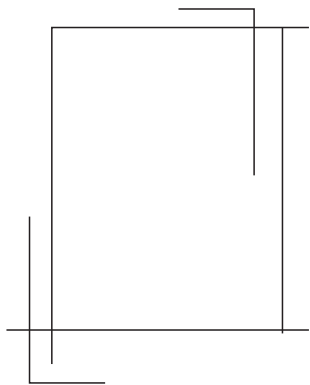
十一、「人間になろう」についての宿題

昭和三十七年以来「人間になろう」が本学園の理念として唱えられてきました。しかし乍ら、私が感じますのは、この理念と学生、生徒との具体的な結びつきの困難さであります。大学で見えますと、入学式、卒業式の式辞や祝辞には「人間になろう」という言葉が必ずといってよいほど出てきますが、学生は四年間の在学中に平常の授業で「人間になろう」とい

うことの意義を習ったり、これに重きをおいた講義を聞いたことは無いでしょう。家政学部の手帳にこの標語が出ていますが、たゞお題目のように出ているだけです。「人間になろう」が観念的で、具体的に何かみどころが無いために、学生にとっては直接心に結びつかず、『学園の理念は「人間になろう」という高尚なものであるようだ、』という程度に受けとめているのが現実であります。これをどうしたらよいかが、今後の宿題であると思います。

幼稚園、小学校から、中学校、高等学校、さらに大学、大学院と、いずれにも通ずる学園の理念というものは、観念的なものにならざるを得ないでしょう。具体的にしようとするれば、大学、高中、幼小は当然内容の異なるものになるでしょうが、二十一世紀に向けて魅力的でわかり易い目標が生まれてよいと思います。北海道大学の「ボーイズ・ビ・アムビシアス」というクラーク博士の言葉が、同大学の歴史的遺産として尊敬されつつ、同大学が発展したように、「人間になろう」が本学園の創設者の曾って呼びかけた言葉として語りつがれ、本学園の各学校がそれぞれ更に新しい具体的目標へ発展をしていくことを私は期待しています。

平成



平成

人間を人間として認める	平成五年「糸菊」	153
これからの教育	平成十年「糸菊」	154
不易なもの	平成十一年「糸菊」	155
ミレニアムと教育	平成十二年「糸菊」	156
学園運営の基本方針	平成十六年「糸菊」	157
人間教育・女子教育は個性である	平成十七年「糸菊」	159
百周年記念式典あいさつ	平成十七年「糸菊」	161
ルソーの『エミール』を読み直す	平成二十年「糸菊」	165
著名人の名言・名文句から学ぶ「人間になろう」	① 平成二十一年「糸菊」	167
人間になろう	平成二十一年 相山女学園 発行	169
著名人の名言・名文句から学ぶ「人間になろう」	② 平成二十二年「糸菊」	186
相山女学園のシンボルと教育理念「人間になろう」	平成二十二年度 大学・大学院入学式後の講演要旨	188

言 頭 卷

人間を人間として認める

梶山女学園長

梶山正弘

冬休みに、久しぶりに、ルソーの『エミール』を読み返してみた。『エミール』は今から二百五十年ほど前に書かれた本であるが、何度読み返してみても、いつも新鮮な印象を受けるのである。

「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」だから教育においても、子どもを自然の発育にまかせ、教師はただ外部からの悪い影響をふせいでやる、これがルソーの考えである。ルソーの教育は消極教育といわれる。しかし中世まで、子どもは愚かな者で、アメとムチできびしくしつけなければならぬと考えられていた子ども観に対して、ルソーは「子どもの発見者」として、教育思想史上大変高く評価されているのである。

「自然にかえれ」という言葉に象徴されるように、ルソーはこよなく自然を愛しただけでなく、自然の尊さを強調し、「植物は栽培によってつくられ、人間は教育によってつく

られる」として自然教育を説くのである。

ご承知のように、梶山女学園は「人間になろう」という言葉を、教育理念として掲げている。『エミール』を読んで、この「人間になろう」という言葉を考えてみると、人間は本来よい者として生まれていることを、まず念頭におかなければならないと、つくづく思われる。つまり子どもをまず認めることである。

ところで、「児童の権利に関する条約」という条約が一九八九年十一月二十日、国際連合総会において採択され、一九九〇年九月二日発効したが、日本は、現在のところ、条約の承認に関する国会での審議が全然進んでおらず、批准していないのである。つまり日本は国際的にみれば子どもを認める形式ができていないのである。経済大国となつた日本は、何かにつけて国際的に摩擦に直面している時期に、このように世界から孤立するような態度をいつまでもとっていてよいのであろうか。

私はよく「人間になろう」という言葉を述べているが、まず人間を認めることを念頭においているつもりである。しかし、すべての面からみて完璧といえるであろうか。「児童の権利に関する条約」における日本の態度のように、ずれている点はないだろうか。ルソーを読み返すたびに、反省の気持ちを忘れてはならないと思うのである。

言 頭 卷

これからの教育

理 事 長

太 田 正 光

一昨年、昨年と中央教育審議会が二回の答申を提出し、今後の教育の在り方について指針を示しました。終戦直後大きく方向転換した日本の教育が、五十年を経た今日、再び見直されようとしています。

昭和二十二年四月、学校教育法が施行され、六・三制が実施されました。翌二十三年には新制高校が発足し、椋山女学園高等学校も開校しました。椋山女学園大学を含め、多くの新制大学が開学したのは昭和二十四年のことです。

以後、今日に至る半世紀の間に、教育の普及、高度化により、社会の知的水準は著しく向上し、わが国は目覚ましい発展を遂げました。しかし高度成長のあとのバブル崩壊により日本経済は大きな打撃を受け、経営破たんが相次いで、心理的にも不安感が増大しています。政党政治も混乱の中にあり、日本の将来を危惧する声が高まっています。

今後も日本が豊かで生き甲斐のある社会を維持して行くためには、優れた人材が不可欠であり、従前にも増して教育に力を注がなければならないと思います。

しかしこれからはどのような教育理念、教育方針を持つべきか、大きな問題です。中教審はその答申で、今後の教育は「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことを目指すべきだとしています。

「ゆとり」とは何か。それは束縛されない時間があることと心に余裕があることだろうと思います。自由な時間があっても塾通いを強制されたのでは何もありません。生徒が自主的に学べるようにしたい。心に余裕を持たせ、知性や情操を高めさせたい。そのためには、生徒が自分の能力、適性に応じて自らを育てる意欲を持つことが必要であり、学校は生徒に選択の機会を多く与え、教員は生徒の素質を見出し、育てることが求められます。

「生きる力」とは何か。中教審では、主体性、人間性、体力を指していますが、私はバイタリティを強調したいと思います。とくに女性にとって社会へ進出して行くために最も必要なのは、自信とたくましさ即ちバイタリティではないでしょうか。

このため今、平等、画一の教育から、一人一人に着目した教育への転換が求められています。

巻頭言

不易なもの

学校法人 梶山女学園

理事長 太田 正 光

今年、梶山女学園大学は開学五十周年を迎えます。昭和二十四年に新制大学の制度が発足し、本学はその当初から認可されて大学となりました。高校は既に昨年、新制高校五十年の歴史を刻んでいます。戦後の教育改革から半世紀を経たわけですが、いま日本は国を挙げて教育論議が盛んになりました。

教育は国や民族の発展の基礎であるばかりでなく、広く世界人類の融和と繁栄を高めるものでありましょうし、何よりも一人一人の人間に意義ある人生を与えてくれるものであります。

これとともに教育は、その時代の精神を反映し、社会と深いかかわりを持っています。社会の態様や価値観の変化に伴い、教育の目指す方向が変わります。かくして今日の教育は今日の社会に寄与する成果を上げますが、反面長期的

な視点を欠いて古来の伝統を承け継いだ不易な教育の基本がおろそかになる危惧を感じる例も少なくありません。その一つとして、ここでは家庭教育に触れたいと思います。

日本の親は子供の教育に熱心ですが、近年の少子化と経済的豊かさの中で愛情過多と学歴偏重に陥るとともに、家庭における教育姿勢が変化して、現在の家庭教育は適切に行われているかどうか問題になってきました。

家庭教育には履修要領などはありませんから、親の子育て理念に任せられ、親の言動がすべてであり、また家庭によって多様であります。しかし共通的に言えることは、子供の時に親からどのように躾けられたか、叱られたか、励まされたか、範を示されたか、これらのことが感銘を受けた記憶として、しっかりと心に残るようなものであつてほしいということです。そうすれば、その子供が親になった時、次の世代に対しより良い家庭教育を与えることができるでしょう。家庭教育は受ける立場から与える立場へ移り変わるサイクルの中で進化するものだと思います。

家庭教育では母親の役割は大きなものがあります。良妻賢母は古い言葉ではありますが、母親が良い家庭教育を行うことの重要性は、どのような時代になっても変らない不易なものであります。学園の「人間になろう」の精神には、女性が母親として子供を立派な人間に育てることも含まれているのではないのでしょうか。

巻頭言

ミレニアムと教育

学校法人 梶山女学園

理事長 太田 正光

今年、西暦二千年、新しいミレニアムが幕を開いた節目の年とされています。千年紀は正確には二〇〇一年からなので、最初の数字が一から二に変わるのはいまだ印象深く、大きな歴史の流れを改めて感じる年となっています。

有史以来の人類の文化、文明を千年のタイムスケールで論ずるのは長すぎるようにも思われますが、振り返って千年前を考えると、京の都で王朝文学が生まれ、これが今日も変わらぬ文化的価値を持ち続けている例から見ても、私どもの世代が生み出したものでも、価値あるものは残り、あるいは発展して、後世の人々に役立っだろうという期待を抱かせてくれます。

それでは教育についてはどうか。教育の根源的重要性は万古不易のものであり、その積み重ねにより人類

は進化してきました。ここでは教育を教育システムと教育理念の二つについて考えたいと思います。

まず教育システムですが、これは人間社会の発展に伴い、前のミレニアム（西暦千年～二千年）の間に急速に整い、今日では立派な体系ができました。大学の起源はヨーロッパで七百年程前のことであり、日本では明治初期に小学校から大学までの学制ができて百余年を経たところです。

これから千年先にどうなっているかは分かりませんが、教育は緩やかに大きな流れで動いてゆくの、百年程度の将来までには今日提起されている課題（高度なレベルの教育の振興、新しい教育手段の導入など）に対応した教育システムとなっていることでしょう。

次に教育理念について一言。教育理念とは教育の基本的考え方であり、教育が目指す人間像を示すものです。古来、中国では孔子の教えが教育の拠り所となっていました。日本では明治以来、教育勅語による指導が強く行われていました。戦後、教育基本法が制定されましたが、その条文だけでは不十分です。

今日では社会の価値観が多様化し、基本的、共通的な理念に対する意識が薄れていますが、後世にも継承されるような教典を作るのも大切なことではないでしょうか。

巻頭言

学園運営の基本方針

学校法人 梶山女学園

理事長 梶山 孝 金

私は昨年四月、第十四期理事会のご推挙により、理事長に就任致しました。二〇〇五年は学園創立100周年という記念すべき節目の年に当たります。この学園の新たな将来の基礎づくりの指針として、私は三つの「基本方針」と、八つの政策課題を理事会に提示し、ご承認を得てスタートしました。

「基本方針」は、学園運営にとって特に重要であり、すべての学園関係者の皆さんに理解していただき、暖かいご支援を賜りたいと思いますので、ここに改めて掲載し、巻頭の言葉に代えさせていただきます。次第です。

■学園運営の基本方針

1. 建学の精神「人間になろう」の新たな意味づけを

時代は科学技術と経済中心の時代から「人間」中心の時代へと確実に変わってきています。本学園がこのように変化する時代や社会の要請に的確に応えながら、個性ある魅力に満ちた私学として存立していくためには、建学の精神「人間になろう」をさらに確固たるものにする必要があるのではないかと思います。

本学園の100年の歴史は、そのまま日本の女性の能力や地位の向上の歴史と重なっている面があります。それは梶山女学園の歴史が、女性が人間として自立し、知恵や教養の豊かな存在として、自らや自らの周りの人々の人生を生き活きと輝かせる生き方を支援するという一貫した創設者正式・いま夫妻の情熱の歴史でもあったからです。

この度、私は100周年記念事業の一環として「梶山人間学研究センター」の設置を提案していますが、これは建学以来受け継がれてきた情熱の到達点と、さらなるその飛躍をめざす学園にとって最も重要な建学の精神、教育理念を理論的もしくは学問的に追究するための拠点にしたいとの考えから出たものです。新しい世紀に求められる「人間」のあり方や、「教育」のあり方を本質的に考えながら、その成果を教育に反映させ、また地域や社会や時代そのものに向けて発信しつづける核となってもらいたいという強い思いが込められています。

2. 女子総合学園の魅力を最大限に引き出すシステムづくりを

本学園の歴史は、創設者以来の深い人間愛にもとづいた徹底した女性に対する教育であり支援でした。このことは本学園の最も基本的な特徴であり、個性であると言っていると思います。本学の教育・研究のアイデンティティもその一点に収斂してると言っても過言ではありません。

私は、二十一世紀が明らかに「女性の時代」になるだろうと確信しています。それは少子高齢化の進行する中で、男女共同参画社会の実現をめざす日本の社会や経済が、多くの女性の優れた能力を必要としているという理由とともに、一方で、閉塞状況にある近代的な「知」が、その一種の行き詰まりを打開できる重要な鍵を女性が握っているのではないかと考えるからでもあります。

さらに、本学園が100年間近く築きあげてきたもう一つの顕著な特徴は、学園が幼稚園から大学・大学院までを擁する女子総合学園であるということにあります。

しかし、これまでわれわれはこの「女子（女性）」「総合」学園という個性を、真の個性であり、長所ですらあり得ると考えたことがありませんでした。

私は、この「女子（女性）総合学園」という個性を意識的に真正面から捉えなおし、その実質的な魅力を磨き上げ

ることができれば、他の私学の追随を許さない個性輝く私学としてその存立を世に問うことが出来るはずだと確信しています。

したがってわれわれは、この女子総合学園の真の魅力を引き出すシステムづくりに向けて、全教職員の力を結集することが必要だと思います。

3. 学生・生徒・児童・園児が主役の学園創造・教育実践を

椋山女学園は、特定の宗教団体がバックにあつて助けてくれる訳でもなく、事業会社や実業家が支えてくれる訳でもありません。収入のほとんどは、学生・生徒・児童・園児の学納金であります。つまり学園の主役は、学生・生徒・児童・園児に他なりません。学生たちが学園の主役でなければならぬのです。「学園の主役は学生たちである」と考えることが、われわれがさまざまな課題や困難に突き当たった際の判断の最も基本的な指標になるわけです。

われわれも、教職員も、この基本的な指標である「学生たちこそ学園の主役である」という軸を決してぶれさせることのないように日々の活動を実践していかなければならないと思います。

巻頭言

人間教育・女子教育は個性である

学校法人 梶山女学園

理事長 梶山孝金

本年は、学園の創立100周年という記念すべき大きな節目の年であります。1905年（明治38年）創設者梶山正式・いま御夫妻によつて「名古屋裁縫女学校」として開学された本学園は、今や、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、大学院を有し、園児、児童、生徒、学生の総数 約8000名を擁する全国でも有数の「女子総合学園」と成長しました。思うに、本学がこのように順調に発展して来られたのには、2つの大きな理由があると考えます。第1は、建学の精神「人間になろう」を「教育理念」として掲げ、常に人間教育を問い続け、大切にして来たことであり、第2は、「女性により高い教育を」という理想を掲げて「女子教育」ということに徹底的にこだわり、「女子総合学園」を一つの個性として堅持し、あえて共学化しなかったことだと思えます。

創設の精神という点から見れば、本学園は確かに形式的には裁縫女学校という実技学校として発足しましたが、「そ

の内容は裁縫の他に、修身、国語、数学、地理、家事、音楽、体操をも併せ課し：凡そ形式を排して、むしろ人間として、また一個の女性としての完成教育を期し、学問よりは実力、知識よりは人格の涵養に主力を注いだものであった。」と創設者は後に回想しています。確かに創設者梶山正式は、それぞれの時代的な背景なり要請の下で、裁縫、技芸という実技的な教育を主軸に据えて女性の社会的地位向上の突破口としましたが、しかしそれに止まることなく、根底には常に「人間としての完成を目指す人間教育」もしくは「人格形成を目指す人格教育」への姿勢と理想を手放さなかったのであります。さらに、創設者は、その後も常に、生徒の伸びる可能性を信じ、自律的に自学自習させることによつて人間完成の教育を一貫して追求して来ましたが「このことは「人間になろう」という梶山女学園の教育理念が「人間橋由来記」に述べる如く、まさに学園創設の精神としてずっと貫かれていて、と歴史的に規定してもいいでありましょう。かくして、この「人間になろう」が学園の「建学の精神」を一語で象徴的に表す標語（モットー）とされ、それを教育の目標とすべく各学校が一貫して追求する「教育理念」として継承されているのであり、このことが学園発展の根幹になっているのであります。

日本の女子大学の数は約90校ありますが、最近、短大から四年制大学へ改組転換すると同時に共学化するケースが目立ちます。アメリカでも、かつて200校以上あった女子大学が現在では約70校に減少しています。しかし、「いまアメリカでは女子大学の意義が見直されており、今後その数は増えるだろう」と樂觀視する人が出て来ています。その背景には、ヒラリー・クリントン上院議員（前大統領

夫人)やオルブライト前國務長官など女子大学を卒業したリーダーの活躍があると言われています。女子大学の数は全米の大学全体の8%未満であるにも拘わらず、『ビジネス・ウィーク』誌が選ぶ「優れた女性50人」のうち30%が女子大学の卒業生であるとのこと、また、博士号を持つ女性性は女子大学が共学卒の2倍に上り平均収入も高い、と米国女子大学連盟は報告しています。

女子大卒業生の活躍が目立つのには、それなりの理由があると言われます。①共学ならば男子学生が行う活動も女子大では必然的に女性が行うことでリーダーシップや責任感、積極性、自主性などが身に付く。②異性を意識することなくジェンダーフリーな落ち着いた環境のなかで伸び伸びと自分を表現することで、自尊心、自立心や個性が育まれる。③男性的職業とか、女性的役割などといったステレオタイプの性別意識が薄いため、一般的に法曹界や教育研究の分野、理系の分野のレベル向上に資する、等の理由が指摘されています。このように、女子大学には「女子大学特有の積極的機能と存在価値」があるのです。高等学校以下においても私共がこれまで共学化に踏み切らなかったのは、まったく同趣の理由からであります。

アメリカのみならず、あの男女同権を看板とする中国でも、近年、女子大学・女子教育の復活ないし再生が計られています。私を知るだけでも既に北京、南京、西安などには可成り大きな女子大学があります。また本学と留学生交換協定を結んでいる上海師範大学は、最近、女子だけの学部「女子文化学院」を開設し、20倍を超す志願者を集めて注目されており、昨年10月、私は同大学創立50周年記念祝賀式典に招待され出席しましたが、その折開催された

「記念シンポジウム」(アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、日本、韓国、中国などから49大学の学長・理事長が参加)で私が行った基調講演「椋山女学園大学の経営と教育理念」は、上述のような背景があつてか、好評を得、また興味を持たれたようであります。

このような観点に立つとき、「人間になろう」という教育理念の下に「人格形成」と「実力養成」の教育を創設以来一貫して実践してきた私共としては、「女子教育」は決して時代離れしたものではなく、あえて極論すれば、「時代を超え、体制の違いを超えたグローバルな潮流である」と捉え、そしてそれはむしろ一つの「個性」であると考え、小さくともキラリと光り輝く価値ある存在として社会に貢献していきたいものであります。

時代と共に社会は今後ますます大きく変化していくでしょう。その変化の方向は、間違いなく、物質的・経済的な豊さを追求する「科学技術文明中心」の社会から、環境・生命・平和を守り調和を図りながら心の豊かさを追求する「人間中心」の社会へ、というものだと思います。そして世界中で「人間とは何か」が問い直されるようになる、いや既に問い直されているのかも知れません。このような時代の曲がり角にあつて、次の100年に向かう私共「椋山女学園の使命」は、新しい時代にマッチした「人間になろう」の理念を創造し、それを教育・研究の場に還元することだと考えております。つまり、再び「人間になろう」という学園創設の精神と教育理念への原点回帰、つまり「椋山ルネッサンス」を興すこと、これが私共に課せられた今後の課題であります。

百周年記念式典あいさつ

本日は梶山女学園創立一〇〇周年の記念式典・祝賀会を挙行するにあたり、大変お忙しいなかを学園関係のご来賓の方々、長く本学園にお勤めいただいた旧職員の皆様、現教職員の皆様、非常勤や嘱託、派遣などの立場で学園にお勤めいただいております皆様、かくも大勢の皆様のご臨席をいただき、式をこのように盛大にいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

例年ですとこの場で永年勤続者の表彰を行っておりますが、本日は一〇〇周年ということで内容が盛りたくさんになっておりますので、今回は前もって当事者のみで表彰式を済ませていただきました。どうかご了承下さい。

さて、梶山女学園は、本年、創立一〇〇周年を迎えます。

た。一口に一〇〇年といいますが、この一世紀の長い時の流れの中で、国家にしても社会情勢にも激しい移り変わりがあり、本学園もその影響を受け、幾多の変遷をくぐりぬけてきました。こうした尊い長い歴史を経て到達した学園創立一〇〇周年を迎えるにあたり、私がお挨拶を申し上げますことになり、その責任の重さを痛感するとともに、感無量で身の引き締まるのを覚えます。

本学園は明治三十八（一九〇五）年、名古屋市内の富士塚町の武家屋敷に、名古屋裁縫女学校として開校したのに、その起源をさかのぼります。明治三十八年といえば、日本は日露戦争の真最中であり、経済的には、重工業段階の産業革命の完成期にあたり、絶対主義体制下での資本主義経

済の確立期でもありません。

教育史的にみれば、明治五年（一八七二）の学制頒布以来、それでも小学校教育の義務化などが追い風になって、幾多の変遷を経ながらも、初等教育段階の小学校への就学率が、九十パーセント以上に上昇した時期でありました。そして、その時期の女子には、男尊女卑の社会風潮の下にありながら、中以上の階層の子女を対象とし、しかもお針仕事など、限定された内容の、女子のための中等教育機関が求められ始めていた時でもありました。そのことは、現在、愛知県下で有名な私立女子校の多くが、この時期と相前後して女学校として創設されていることをみても知られるのであります。

こうした歴史的、社会的背景のもとで、創設者梶山正式・いま（通称今子）夫妻の、意欲と情熱、苦労と努力によって、九十余名の入学生を迎えて、名古屋裁縫女学校は誕生したのであります。当初は、学校というよりは、私塾と呼んだ方がふさわしいような、ささやかな形での発足であったそうです。

創設以後、本学園の歩んだ道は、官尊民卑の文教政策のもとで、つねに、困難な険しい道でしたが、それでも校長夫妻をはじめとする教職員と関係者の努力によって、高等女学校、女子専門学校、女子商業学校、女子専門学校附属

幼稚園などの設置へと進んでいきました。

学園は、相次ぐ校舎の建築、キャンパスの拡大化など、外的条件整備をすすめる一方、日常の教育充実を図るだけでなく、教育事業を次々と展開していったのであります。

世間に先がけて、洋風の服装の採用、大正十年の校長渡米とその成果と思われるいくつかの改革、例えば、外国航路の汽船での修学旅行、富士登山、白馬登山や、カリヨンの輸入により「金剛石」のメロディーの演奏と瞑想、スポーツを大変重視し、前畑秀子選手のオリンピック制覇の一つの布石となった屋内プールの建設、などに特徴的にみられるように、つねに進取の気風で、時代の変化に、先見的に対応して教育を進めてきました。次代をになう子女の教育において、この先見性と広い視野は、そのときどきの生徒諸嬢の人間形成に果たしてきた役割はきわめて大きなものがあつたといえましょう。

さらに、大正デモクラシーの開化のもとで、一部の私立学校や国立学校の付属校などで盛んになった自由教育運動の影響はほとんど受けていなかったといえますが、それでも「特に本校は、つねに自治自由を尊び」、生徒に「なにごともし律的に自学自習することを奨励」していました。このように、大正末期には、良妻賢母と教育勅語を標榜しながら、他方で生徒の伸びる可能性を信じ、自律的に自学

自習させることによって、人間完成の教育が一貫して追求されてきたことは、「人間になろう」という本学園の教育理念が、まさに学園創設の精神、つまり建学の精神として底流に流れてきていたと、歴史的に規定しても妥当であると思います。

第二次世界大戦末期には、開園したばかりの幼稚園は休園となり、女学校の生徒は学徒動員され、中には犠牲者も出ましたし、さらには富士塚町の校舎は空襲で全焼してしまいました。

こうした苦難を乗り越えて学園は、戦後の学制改革により新制中学校、新制高等学校、日本で最初に認可された新制の女子大学・家政学部設置、大学附属小学校の設置、中学校・高等学校の校舎改築、大学の星が丘キャンパスへの移転と発展していったのです。

その後、昭和二十五年に再開した幼稚園はお蔭で地域の支持を得て、徹夜で並ぶほどの志願者があり、入園児確保の面からみればほぼ安定して推移したのでした。昭和二十七年に開校した小学校は二十四の瞳（十二人の児童）という小規模でスタートし、しばらく慢性的な募集難が続いておりましたが、志願者百名程度になり、二学級編成と安定したのはつい最近のことです。

大学では、家政学部食物学科に管理栄養士専攻を置き、

短期大学部、文学部、大学院家政学研究科、人間関係学部それぞれの設置し、家政学部は生活社会科学科を増設・家政学部を生活科学部に名称変更、大学院家政学研究科を生活科学研究科に名称変更、大学院人間関係学研究科、文化情報学部（短期大学部閉学）、大学院人間生活科学専攻博士後期課程、国際コミュニケーション学部、現代マネジメント学部をそれぞれ設置など、戦後日本の高等教育拡大の波に乗って拡大の一途を続けたのであります。

こうして学園は一貫して、「女性により高い教育機会を」提供することにより、男性と対等な教育水準を維持する一翼を担ってきたのであります。このように、本学園の歴史は、戦前には日本の女子教育発展の歴史のまさに縮図であったといえ、戦後は男女共学が必ずしも真の男女同権が図られているとはいえない現状のなかで、女性により人間的な教育機会を提供している女子教育の特徴が認められるといえましょう。

「人間になろう」という本学園の教育理念は、創設以来、言葉として継承されてきたものではありません。「人間になろう」という言葉が、学園史のなかではじめて具体的に登場するのは、比較的新しく、昭和三十七年、大学キャンパス内の陸橋を「人間橋」と名づけた由来を述べた記念碑の「人間橋由来記」であります。このなかで、創設者梶山

正式は、「人間になろう」という言葉を「人間完成これこそ学園創設の精神であり 学校教育終局の目標である」と意義つけております。

現在、私たちは自然災害、地球環境問題、戦争やテロの危機、教育現場ではいじめ、不登校、学級崩壊など、また社会では今まで考えられなかったような事故や凶悪な犯罪が多発するなど、人間の生命そのものが脅かされるという状況になっております。こうした状況にあつて「人間になろう」ということは人間尊重のヒューマニズムの精神を、学園教育のなかで活かしていくことであつて、人間性を重視する今日的意義はきわめて大きいといえましょう。

そしてこの「人間になろう」の「なろう」とは学生・生徒・児童・園児、自らが高める努力をする主体性、自主性が強調される意味がこめられていると私は考えております。学園は次の一〇〇年をめざしてさらなる発展を期して皆様とともに、明日からあらためて努力してまいる所存であります。今日ご参列いただきました皆様のいっそうのご支援ご協力をよろしくお願いいたしまして私の式辞とさせていただきます。

平成十七年十一月十一日

学校法人梶山女学園理事長 梶山正弘

巻頭言

ルソーの『エミール』 を読み直す

学校法人 梶山女学園

理事長 梶山 正弘

私は「人間は教育によってつくられる」(ルソー、今野一雄訳『エミール上』岩波書店一九六二年⁵⁵)というルソーの言葉が大好きである。昨年の暮れ、久しぶりにルソーの『エミール』を読み返してみた。今から二五〇年近くも以前に書かれたこの名著は今でも新鮮で、説得力がある。冒頭の言葉は『エミール』という本の中で述べられている言葉である。『エミール』とは、訳者の今野一雄が『エミール』という生徒を、生まれたときから結婚するまで、一人の先生が自然という偉大な先生の指示に従って、どんなふうにみちびいていくか、というのがこの本の主なことです。(同書 pp.5-6)と書いているように、ルソー自身が二十一年間にわたってエミールという子のいわば家庭教師

をしてきた記録である。

ルソーは「人間は教育によってつくられる」(同書 p.24)と述べた少し後で、次のように続ける。「わたしたちは弱いものとして生まれる。わたしたちには力が必要だ。わたしたちはなにももたずに生まれる。わたしたちには助けが必要だ。わたしたちは分別をもたずに生まれる。わたしたちには判断力が必要だ。生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になつて必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。」(同書 p.25) しかもルソーはほんとうの教育とは教訓を与えることではなく、生徒が自ら学ぶのを助けることであるという。「わたしたちは生きはじめると同時に学びはじめ。わたしたちの教育はわたしたちとともに進める。」(同書 p.33)そしてルソーは「学ぶ」教師として「自然」「人間」「事物」の三種類をあげる。この三種類の教師が矛盾している場合には弟子は悪い教育を受けることとなり、決して調和の取れた人にはならないという。

「完全な教育には三つの教育の一致が必要なのだから、わたしたちの力でどうすることもできないものにほかの二つを一致させなければならない。」(同書 p.35) 自然という先生は人間の力ではどうすることもできない。つまり人間

巻頭言

の側から自然という先生の目標に近づくことだという。別の言い方をすれば次のようになる。「教育は生命とともに始まるのだから、生まれたとき、子どもはすでに弟子なのだ。教師の弟子ではないのだ。自然の弟子だ。教師はただ、自然という首席の先生のもとで研究し、この先生の仕事じゃまされないようにするだけだ。」(同書p.59-60)

こうしてルソーは子どもの自然性を基本原理とし、その自然な発展を保護し、それをさまたげるものを除去するのが真の教育であると主張した。子どもの生活にはおとなと違った意味があると唱えたルソーは「子どもの発見者」であるといわれている。

私たちが植物を栽培するとき、「水遣り」をして大事に育てる。しかし植物の専門家に聴くと、「水切り」も大事であるという。植物は水が切れると、何とか自力で生きのびようとする力がつくのだという。これが自然の摂理かもしれない。人間の場合に当てはめると、自力で生きようとするのを、支援し、悪い影響から守ってやるのがルソーのいう教育なのであろう。ルソーはこの教育を「消極教育」という独特の言葉を使っているが、大人が上から教え込むことを排する消極教育の主張は被教育者への発達課題であり、今日私たちが傾聴すべき理念であるといえよう。

ところで話が急に飛ぶが、昨年の暮れにテレビを視聴したら日本一に輝いた中日ドラゴンズの落合博満監督に関する番組が放映されていた。落合監督は、その著『コーチング論』の中で「指導者は教えるものではない。見ているだけでいい。」と述べている。やる気のない選手は二軍に落とされたり、自由契約にされたりするから、自覚した選手は、やる気を起こし、必死になつて練習をする。その結果、練習量十二球団一といわれるような選手の自発性が芽生えて、日本一の強い球団に成長したといわれる。何かルソーの消極教育に通ずるものがあるのである。消極教育という用語は、マイナスのイメージがあるので私には適切な用語とは思えない。消極的に「守る」ようにみえて、実は積極的に「攻め」ているのであって、「消極教育」ではなくてむしろ「積極教育」とさえ思えるのである。

このようなルソーの教育論は、「人間になろう」という教育理念をめざす本学園の幼稚園から大学院までの各学校教育段階における人間教育に生かされていると思えるし、今後ともさらに生かされていくべき理想ではないだろうか。またそれだけでなく本学園の教職員で構成される教育システムの運営にも大いに生かされるべきではないだろうか。

巻頭言

著名人の名言・名文句から 学ぶ「人間になろう」①

学校法人 梶山女学園

理事長 梶山 正 弘

「人間」については、古今東西でいろいろな立場から論ぜられてきており、著名人の名言・名文句から私たちも学ぶところが多い。

まず、「人間」とは何であろうか。ルソーはこの人間を「わたしたちは弱いものとして生まれる。わたしたちには力が必要だ。わたしたちはなにもたずに生まれる」と述べている。人間以外の動物は、本能によってのみ外界に対応し、生きている。人間以外の動物の仔は生まれ落ちると、すぐに立ったり、歩いたり、泳いだり、本能の力によって親と同じ行動をすることができ。親と同じ行動ができるのに長くかかる鳥でも、一か月余りで飛ぶことができる。しかし、人間の赤ちゃんは一年ほど育たないと親と同じ行動、つまり歩くこともできない。

では人間は他の動物とどこが違うであろうか。フランクリンは「人間は道具をつくる動物である」と述べる。歴史的にみると、人類は二本足歩行によって、前足を手として活用できるようになり、道具を作り、それを使った労働によって外界に対応できるようになった。人類は道具を使用して、ものを生産することによって、進化の過程で、本能のみに頼らず、外界と対応する能力を身につけ、動物のなかで、もつとも強い存在となったが、逆に本能だけでは生きてゆけない、保護されなければならない弱い存在にもなった。

この過程で人間は単なる群れの集団ではなく組織的な社会を構成した。セネカは「人間は社会的動物である」というのである。

さらに人間はコミュニケーションの手段として言語をもつようになった。言語学者シュタインタールは「人間は言語によつてのみ人間である」と規定して人間というものを説明した。言語はコミュニケーションの手段であるばかりではなく、思考の手段ともなった。

では、わたしたちがどうすれば「人間になる」ことができるのだろうか。ドイツの哲学者ヤスパーズは「哲学とは何か」のなかで「人間であるということは人間になることである」と述べている。これは人間を自己が本来あるべき自己への途上にいる存在とみなし、本来的に生きるための自己形成

巻頭言

を課題として課せられているものとみなす実存主義の哲学からきているのである。

古代ギリシャではソクラテスは死刑執行が翌日に迫った日に「大切にしなければならぬのは、ただ生きることというだけではなくて、よく生きることなのだ」と述べて「よく」生きることを強調している。

さらにわたしたちは「よく生きる」「人間」になるにはどうすればよいのであろうか。人間にとって外界に対応するのに必要な能力は、人類が労働を基礎とした精神活動によって獲得してきた科学、技術などの文化遺産と社会規範とを、教育（＝学習）によって獲得してゆかなければならない。「人間とは教育されなければならない唯一の被造物であります」「人間は教育によって人間になることができます」とは、ドイツの著名な哲学者カントの言葉である。「人間は教育によって人間になる」ことをきわめて明快に説いたカントの、この短い二つの言葉のなかには、「人間になる」ための教育に対する切々たる願いがこめられている。人間は教育によってはじめて人間になると同時に、教育は、人間のみの固有の営みであって、教育という営みは、人間以外の動物にはみられないのである。

日本では、貝原益軒が『懐愚録』の冒頭で、「人生まれて学ばざれば生まれざると同じ」と書いており、他の動物と異なっ

て人だけが学ぶ能力があり、学ばなければ草木に等しくなってしまうというのである。三木清は「人が学問するのは、本来自由独立である人間が真に自由独立になるためである」と語り、また下村湖人は「人生は不断の出発であります。生まれたときが出発であるばかりでなく、それからの刻一刻が新しい出発であります」と述べ、いずれにしても「人間は学ぶことによって人間になる」ということは共通しているといえよう。

つまり、「人間の人間たるゆえんの第一は、理性的であるということですよ。」（平塚益徳）

ではどのようにすれば「理性的な人間」になるために、学ぶ意欲ができるのだろうか。それはアメリカのエッセイスト、ロバート・フルガムの言葉「不思議だな、と思う気持ち大切にすること」であり、日常の平凡なことを大事にしてそこに驚きと好奇心があり、その発想から出発して深く考えることを育てようというわけである。そのことを古代ギリシャのアリストテレスが『形而上学』の書き出しの言葉として、「すべて人間は、生まれつき、知ることを欲する」として、本来人間には好奇心が備わっているものだと言っている。

デューイが『学校と社会』のなかで言う「興味こそは自然の資源であり、投資されざる資本であって、子どもの活動的成長はこれらの興味をはたかせることにかかっている」として「学ぶ」「人間」の原点を示すのである。

人間になろう

梶山正弘

1 人間とは何か

人間とは何か。この問いは、おそらく人間発祥の起源から問われ続けられてきたであろうし、これからも人間が存在し続けるかぎり問われ続けるであろう。

生物学における「ヒト」の分類名は動物界・脊椎動物門・哺乳綱・霊長目・ヒト科・ホモ属・サピエンス種と称され、通常「属」と「種」だけで「ホモ・サピエンス」と呼ばれている。ヒト科のなかで、もともと古いとされているのは、アウストラロピテクス属とされている。

一九二四年、イギリスの古生物学者、レイモンド (Raymond, A. D.) は、南アフリカのサバンナ (大草原) で約二百万年前の高等霊長類 (サルとヒトのなかま) の化石を発見し、アウストラロピテクス (南のサル) と名づけた。そのもっとも大きな理由は、脳の大きさが約500cc程でチンパンジーの脳の大きさとほとんど違わなかったからであつたらしい。しかし、発見された四肢の骨の形状などから、アウストラロピテクスは直立二本足歩行していたことが知られたのである。

では直立二本足歩行はどんな意味があるのだろうか。二本足で歩くことはニホンザルやクマやカンガルーなど一時的にはできる。リスは直立したり、前足を手としても使える。大昔の恐竜のなかには、小さな頭と太い尻尾でバランスをとり二本足歩行する種類がいたといわれている。

しかし、直立二本足歩行が通常の運動様式となるには、骨盤や足の骨や筋肉など体構造と運動能力の準備が伴わなければならないとされている。こうして「ヒト」は直立二本足歩行により、その生息的条件を整えていったのである。けれども直立二本足歩行だけ「ヒト」といえるかという点、人類学者の間では、一時大論争が展開されたといわれている。

直立二本足歩行は、前足を自由にし手として活用させることを可能にした。手は最初食物を拾ったり、ものを投げたり、棒をつかんだりする運動器官として活用された。手はものに触れることによって外界を掌握する感覚器官の

働きをもするようになった。この二つの働きをする手と脳のつながりについて、久保田競は『手と脳』で説明する。手での外環境の変化を身体に感じて、手を使用するとき、脳がかならず働いているという。脳はニューロン (神経細胞) の集合体であつて、ニューロンがお互いに網の目のように接し合っており、ニューロン間で神経パルスの受け渡しを行うのである。

アウストラロピテクスはやはり「あたま」はサルのであるが、「あし」はヒト的であり、直立二本足歩行をしていた。ところが、一九五九年東アフリカのオルドワイという所でリーキー夫妻 (Louis Seymour Bazellet Leakey, Mary Douglas Leakey) は礫石器を伴った典型的なアウストラロピテクスの頭蓋骨を発見してホモ・ハビリスと名付けた。つまりホモ・ハビリスは道具をつくり使用していたのである。

運動機能と感覚受容機能を備えた器官として手を獲得したかれらは、より多くの食物を手に入れ、その経験から先の尖った棒や角の鋭い石が役立つことを覚えてに違いない。やがてかれらは、石を打って角づけすることを発明し、はじめて道具を作りはじめたのである。

「人間は道具をつくる動物である」とは、フランクリン (Franklin, B.) が『サミュエル・ジョン伝』のなかで述べている言葉である。しかし、これまでできてきたように人間だけが道具をつくる唯一の動物とは必ずしもいえないこととなり、「人間」をホモ・サピエンスに限定することができなくなったのである。しかも最近、野性のチンパンジーが木の枝を適当な長さに折ってそれを使って穴のなかのアリを樹脂のあまみでさそい取って食べたり、木の実のからを棒を使ってたたき割って食べたり、ニホンザルが芋を海水で洗って食べるなどの事実が発見され、道具を使うことが人間と他の動物と区別する決定的な相違点とはいえなくなつてしまった。しかし問題は道具の質であり、脳の進化とからんでおり、労働による生産が他の動物と異なる重要な要素である点はかわりない。

梶山正弘著『人間教育の本質』福村出版 一九九三年 参照

(出典『梶山女学園総合クリエイティブセンター研究論集 創』第七号

二〇〇五年)

2 人間にとって自然とは

自然と人間

動物は、本能によってのみ外界に対応し、生きている。しかし、人間は本能のみならず、労働によって外界に対応することをはじめ、労働によって外界に対応し、精神活動、文化を具備することによって、人間ははじめて他の動物と区別される存在となったことは前にも述べた通りである。けれども同時に人間は、周りからの保護を受け、教育を受けて自立しなければ、本能のみでは外界に対応して生きていくことができない弱い存在ともなったのである。人間が自然といかに適応し、いかに対応していくかということは、人間として生きていくための不可欠の要件なのである。

ルソーはいう。「植物は栽培によってつくられ、人間は教育によってつくられる（中略）。わたしたちは弱いものとして生まれる。わたしたちには力が必要だ。わたしたちはなにもたずになまれる。（中略）生まれたときにわたしたちがもっていなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。わたしたちの能力と器官の内部的発達とは自然の教育である。この展開をいかに利用すべきかを教えるのは人間の教育である。わたしたちを刺激する事物についてわたしたち自身の経験が獲得するのは事物の教育である。

だからわたしたちはみな、三種類の先生によって教育される。これらの先生はそれぞれの教えが互いに矛盾している場合には、弟子は悪い教育をつける。そして、決して調和のとれた人になれない。それらの教えが一致して同じ目的に向かっていている場合だけ弟子はその目標どおりに教育され、一貫した人生を送ることができる」（ルソー『エミール』p.24）

やや引用が長くなったが、ルソーは、『エミール』のなかで、自然という偉大な先生の指示に従って、子どもの発育に応じて、教師は生徒が事物についての知識を自分で見出すのを助けてやるべきであると述べている。これがルソーの自然教育の原則であるが、子どものよい面をのばすという意味で、ルソーは「子どもの発見者」とされている。

自然への対応

人類は動物段階の先祖から前述の猿人（アウストラロピテクス）、原人（ホモ・エレクトウス）、旧人（ホモ・ネアンデルタールレンシス）、新人（ホモ・サピエンス）へと進化してきた。新人の段階になると後期旧石器時代に始まり、中石器時代、新石器時代、金属器時代（青銅器時代、鉄器時代）へと歴史的に発展している。中石器時代までは人間は野性の動物や自然の植物をそのまま食べて生活していた。この時代までは、採取、狩猟経済の時代であって、自然に適応して自然を利用していたのであった。

この時代までは、人間は動物の一種として、動物生態学という「食うもの」と「食われるもの」という食物連鎖関係の一部となっていた。「どんなに強力な存在になろうとも、人類は一つの動物種として、残りのすべての植物や動物とかかわっていたのである。その意味において、後期石器時代にはいっても、なお人類と残りすべての生物との関係は、同じレベルのものであり、水平的関係である。そこには、生態系学的・生物学的法則が支配したに違いない」（渋谷寿夫『教育にとって自然とは』p.34）

ところが、新石器時代に入って農業がはじまると食糧生産の向上と安定さが出てきた。そしてこれはたんに生産量の問題だけでなく「ひとたび農業が始まって、植物が栽培され、動物が飼育されるようになると、人類のこれらの動物、植物に対する関係は支配と従属の関係、あるいは上下の関係にかわる。人類は生物や家畜を自分の管理のもとにおく。社会の意味がこれらの生物を支配しようとする。あるいは、作物や家畜に働く生物的法則をつうじて、人類の社会法則が貫かれる。家畜や作物は、たんなる生物進化の産物ではなく、社会発展の産物なのである」（前掲書p.34～35）

このように人間は農業によって人類と他の生物との関係を基本的に変えたのである。つまり、人間が自然に適応するだけでなく、土を耕すことによって自然の宝庫のカギを初めて開けることになるのである。

今日のように工業が飛躍的に発達した日本において、農業が斜陽化しているなかで、木村尚三郎は今こそ農業を建て直すべきであると次のように述べる。「いくら科学や技術、バイオが発達したといっても、人間はまだ木の葉の一枚つくれない。人間の誇る技術力など自然を前にしてはじつさに小さい。

だから農業は人間を謙虚にする。私たちは、資源を見つめれば見つめるだけ素直な気持ちになる。お互いに力を合わせて、自然のリズムを汲み取りながらよりよい共存関係を保つていこうとする」。(木村尚三郎『耕す文化』の時代 p.163) 人間同士が心を合わせ、労働にいそしみ、絶えず自然と調和をとって謙虚に生きていく、こういった生き方はやはり農業からしか生まれえないというのである。

風土と人間形成

風土により人間観、教育が異なるといわれる。この点に注目したのは中谷彪である。中谷は『風土と教育』のなかで、アメリカと日本の教育文化を比較している。彼はアメリカの風土と日本の風土の違いは、肉食か米食か、言い換えれば、牧畜文化か稲作文化かの違いではないだろうか考える。

日本民族は、採集、狩猟の生活から牧畜の生活を経験しないで農耕の生活に発展した。ヨーロッパのように三千〇四千年牧畜を経験した民族とは、人間観も文化も異なったものを受け継いでいる。例えば、農耕民族は定住生活が基本であり、とくに日本が島国であるという地理的条件もあったので、旅をする機会にも恵まれず、閉鎖的で排他的な社会をつくることになった。また、日本人は自然を人間の味方と考えてきた。一時的あるいは地域的には自然の災害に遭遇したことはあっても、自然を決して敵とは考えず、むしろ自然を生活のなかに取り入れようとしてきた。そして、自然界に存在するすべてのものに神が宿ると考えてきた。また、自然のもとに人間は平等につくられているという人間観が生まれていたともいわれる。さらに、冠婚葬祭をはじめあらゆる生活の場において、農民は協力しあって生活してきた。能力が平等との考えは、努力すれば出世につながるという考えにもつながるし、能力別学級編成などは差別であるという考えにもつながる。

一方、牧畜を経験したヨーロッパやアメリカの文化は、ギリシア思想とユダヤ教―キリスト教が根幹をなしてきた。神は唯一絶対の存在で、人間は罪ある者で救世主に救いを求める存在であると考えられた。しかし、人間は神の前では無力であっても、自然物よりは優位な存在であり、他の動物を殺して食べる権利があると考えてきた。さらに人間は自然をその征服の対象と考

えてきた。アメリカのフロンティア精神などはそのもつとも典型的なものである。

また、人間の一人ひとりみな異なった存在であり、能力も決して同一ではないと考える。ヨーロッパでは家畜の改良のために血統を重視してきたが、人間もそれぞれ個性的であると考えられてきた。アメリカの教育において学業成績によるランクづけや学級編成、英才教育などが当然のことのように進められているのは、この個性主義の人間観に基づくものと考えられる。

人間は神の前に罪深き者として悔い改めようと心がけるが、他の動物とは断絶を強調するところから、人間的なものを追求し、人間中心主義の考えが生まれたとされる。この人間と動物とを区別する断絶の論理は一方でヒューマンイズムの思想を生んだが、他方で例えばヨーロッパでの非ヨーロッパ人など他人種、他民族より優位を強調して殺戮、征服、植民地支配などを繰返す差別主義につながった。ヨーロッパで長い間、上流階級の子弟と一般庶民の進学する学校が異なっていた複線型の学校系統が存在したのはこのためであるといわれる。

このようにみてみると、風土という自然のなかで、人間がどのような生活をしてきたかということが、その生活にふさわしいそれぞれの文化を生み、異なった自然観、人間観を形成してきたといえよう。このような背景がそれぞれの国の人間形成にもおおいに影響しているのである。

今日の環境問題

台風、火山爆発、地震、津波、雪害など自然の猛威とたたかい、科学や技術の力によって自然を征服することが人間の幸福につながるという考え方は、人類の発祥から今世紀の半ばまで続いた一つの有力な自然観であったことは前にも述べた。そして、近年の科学・技術のめざましい発展と先進国の高度経済成長とによって、自然の資源を原材料や燃料として、工業生産規模が飛躍的にのびた。

その結果、人間にとってかかってない物質的に豊かさをもたらした反面、排ガス、排水、廃棄物の量がおそろるべき速度で増大し、地球環境はかつてない勢いで大きく変化してしまった。人類の生存そのものが脅かされている状況

である。

河村武は、『環境科学1』のなかで次の三つの問題を指摘している。その一つ、化石燃料を中心とするエネルギーの利用が酸性雨や二酸化炭素問題による地球温暖化や、熱帯雨林などの減少による生物の生態系の変容などの問題につながり、深刻な状況である点である。第二は、自然破壊の問題に加えて、地球上の人口が爆発的に増加しつつあるという問題がある。現在六十億を超すとされる地球の人口は、将来とも増え続けるものと予測されているが、天然資源や食糧資源は有限であり、不足や枯渇に追い込まれることは必至である。第三にもう一つ、発展途上国における別の環境問題がある。食糧不足、住居や教育施設の不足、自然災害、疫病などの問題である。一九六〇年代、先進国による開発途上国への援助が強力に進められたが、事態はほとんど変わらなればかりか、先進国と発展途上国との格差をさらに拡大する結果になったと言われる。

こうした問題に対し、平成九年十二月京都で開かれた気候変動枠組条約第三回締約国会議において京都議定書が全会一致で採択され平成十七年二月に発行した。しかしアメリカやオーストラリアなどが議定書に参加しておらず、日本は京都議定書では基準年一九九〇年に比して二〇〇八年から十二年にかけて温室効果ガスの総排出量を6%少なくすることになっているのに、二〇〇三年ですでに8.3%増加しており、二〇〇三年からさらに14.3%削減しなければならなくなっているのである。こうみてくると京都議定書の目標が国際的に果たされるのか、はなはだ疑問である。

もし京都議定書の約束が実現されないとどうなるのであろうか。地球の温暖化はますます進行し、平成十三年に公表された、気候変動に関する政府間パネルによれば、二十世紀の百年間に、世界の平均気温は0.6度上昇し、そうすると南極大陸の水が溶け、ツンドラの永久凍土が溶け、平均海水面が10〜20cmそれぞれ上昇し、北半球の中高緯度では大雨の頻度が増加した可能性が高いなど、さまざまな気候の変化がおこることである。その結果、人類だけでなく生き物すべてに影響を及ぼし地球の生態系が崩壊してしまうといわれている。

これに対し次のような議論が始まっている。大気中の温室効果ガス濃度の

安定化のためには、京都議定書の第一約束期間以降も、さらに長期的、継続的な温室効果ガス排出量の削減が必要になる。

二〇〇四年（平成十六年）十二月にブエノスアイレスで開催された条約の第十回締約国会議（COP10）では、中長期的な地球温暖化対策に向けた議論が行われた。さらに、先進国と途上国との信頼関係を築く上で、途上国の関心が高い「適応策」については、途上国への資金支援や人材育成支援を内容とする「適応策と対応措置に関するブエノスアイレス作業計画」が採択された。二〇〇五年（平成十七年）五月にはCOP10で開催が決まった「政府専門家セミナー」が開催され、中長期的な将来の行動に向けて、効果的で適切な対策を展開していくための行動について情報交換が行われた。（『環境白書』による）

（出典『相山人間学研究』創刊号 二〇〇六年）

3 人間と文化

道具の使用

人間が作った道具は、それがいかに幼稚にみえるものであっても、人間の意志によって意図的に作られたものである。例えば、石器時代、一人の人間が獲物を捕えるために、石を砕いて槍を作ろうとすると、獲物がそこにいなくても、そこに獲物があることを頭のなかで想定し、自分がその槍を使って獲物といかに効果的に闘えるかを考えて作ったであろう。

人間の道具作りは、まず脳のはたらきが手の労働に先行し、手の労働が脳のはたらきをうながす。考えては作り、作っては考える、この繰り返しによって人間として進歩してきたのである。人類学者江原昭善は、『夢をかたちに』⁽¹⁾のなかで次のように語る。「石器をつくる。その石器を石で作った粗雑な道具とみてはいけな。手間がかかっても、いつか役立つことを予測しながら作業した結果が石器なのである。その有用性は仲間伝播し、子どもに伝承される。この未来への予測性・見通しは精神活動の反映であるし、伝播・伝承は文化そのものである。コトバが芽生えたのもこのときである」。

このようにして、精神や文化の存在をつくりだした、人間と道具の関係は、人間の脳の働きをさらに進化発展させるとともに、人と人との関係を社会化させ、今日の人類社会の基礎となったのである。

社会の成立

人間と道具の関係は、親子雌雄などの個体間関係や順位制度といった動物的な群れの状態から、協業と分業、分配・供給・運搬などの仕組みが集団につけ加わり、いわば人間の社会といえる状態へと変化させることとなった。

道具は、その製作使用方法と人間の行動様式を継承させる教育的なはたらきをし、人間関係に変化を生じさせ、知的な認識方法をも発達させた。このことについて、小原秀雄は『人（ヒト）に成る』^②のなかで次のように述べる。「新しい道具の改良には、必ず思考が伴った。道具の製作は少なくとも初歩的労働と、技術（技能）との素朴なありかたが関係して生じ、さらに芸術的な創造でもあって、おそらく喜びが伴っていたと思われる。また思考においては、科学の初歩的な機能である法則的認識が加わり、それらの伝達もなされたと思われる。獲物を追う狩猟では、知能的な方法をとるにつれて、自然（動物）への認識の力は発達していく。罠の使用や火による獲物の追い落とし、さらにイヌをもちいた追跡などでは、とくに動物に対する法則的認識は発達したであろう」。

こうして人間は自然の法則にしたがって自然に働きかけ、道具を使ってものを生産する。自然を労働の対象とし、社会的な営みを行うことによって、人間は自然をもとり込んで社会化したのである。つまり、後に詳しく述べるが、自然に存在するものをまさに「採って食べる」採集や狩猟の段階から、「作って食べる」農耕と牧畜の段階に発展させた人間は、自然の存在に手を加え、加工し、そのことによって生産力を飛躍的に発展させたのである。この時期になると物物交換も始まり、流通経済を伴った社会が形成されるのである。

直立二本足歩行と並ぶヒトの特徴は脳の大型化であるが、脳の進化は形態上、容積が増加し、球形に近くなっていった。そして脳細胞が増加し、大脳皮質が増加し、神経線が複雑化した。大脳の進化に伴って、前に述べた手と脳をむすぶ回路を発展させて、言語の使用、思考などを通じ人類文化の創造

と継承などを可能にした。また逆に、労働、学習、思考などは、大脳の大変を必要とし、身体の側がそれに対応するように進化してきたという関係にあるのである。

顔面および歯の退化については、人類の火の使用に関係が深い。人類がいつ頃から火の使用をしてきたかははっきりしないが、火を使って調理した料理は、動物性食物にしても植物性食物にしても、その繊維をやわらかくし、栄養をとりやすい状態にした。生のまま繊維をかみ切るりっぱな歯やあごは必要でなくなり、歯やあごが次第に退化していったものと考えられている。火の使用による効果は、調理することのほか、暖をとること、灯りすること、動物から身を守ることに役立つことなど、人間の生活圏の飛躍的拡大をはかるのに役立っている。

文化とは

「文化」という語は「自然」という言葉と対比して使われることがある。自然は人間の作為の届かない没理想的な事象であるのに対し、文化は人間の理想に基づく作為的な事象であるというわけである。文化は人間が創造し、観賞する、人間だけの所産物である。

もともと「文化」(Culture)という言葉はラテン語の cultura (耕す) という語を語源としている。たしかに、文化は農耕から芽生え発展した。農耕は、人間に定住生活をうながし、地域ごとの集団生活を意義づけし、地方ごとに異なった傾向も出始めることとなる。温かい気候に恵まれた土地と寒冷な土地では作物も異なるし、そこから生まれる文化も違ってくる。その土地の違いによって、食習慣、地酒、祭り、宗教、方言など生活様式全般にいたるまで、その他独特の「地方文化」が出発点となっている。

農業の始まりは飛躍的に生産力を高め、今述べたような文化をそれぞれ地方ごとに画期的に開花させた。こうして地方文化から始まった文化は、地域間交流、さらには国際交流へと進み、普遍的に理想的価値が追求されるようになり、科学、道徳、芸術、宗教などの文化の発展をみたのである。そして文化は社会発展の原動力の一つの尺度とされ、同時に地方での社会発展の原動力ともなり得たのである。

ところで人間は、生産方法や、社会のなかで生まれてきたルールなどを遺伝による本能によって、生物的に継承することはできない。人間は文化の創造と継承というものを意識的行為によって可能なものにしたが、その意識的行為は、進化の過程で、本能の弱体化をもたらしたのである。この本能の弱体化こそは、人類を、より人間化したことを意味するのである。そして文化は、人間にとってその人間的な欲求を高度に満足させるための手段として機能しているのである。だから人類は、それまで築きあげてきている文化遺産を発展的に継承させるために教育というものを重要視するようになってきた。

さて、文化は精神的なものと物質的なものの二つの方向に発展し、前者は文化（狭義）と、後者は文明と、それぞれ呼ばれている。人間は、歴史的にみると、前にも述べたように、文化を獲得する程度に応じて生物的本能を失ってきた。しかし、その反面、文化というものは、人間にとって、その人間的な欲求を高度に満足させるための手段として機能してきたといえよう。

デュルケイム (Durkheim, E. 1858～1917) は、人間において価値のあるもの、いわば文化的なもののすべては社会生活の結果であると考えてきた。そして文化は社会的所産であるから、社会的秩序を維持したり、それらを継承・発展させたりする機能を持っている。文化は経済、社会の土台の上に構築される上部構造なのである。だから、社会体制によっては、社会改革や革命のために寄与することにもなるのである。

いずれにしても、文化は、社会発展の一つの尺度とされると同時に、他方では文化は社会発展の一つの原動力ともなりうるのである。社会事象を「人間と人間の関係」という視点からみようとすれば、そこに「社会」があるが、同じ社会事象を、人間の「行動様式」や「表現様式」という視点からみれば、そこに文化という事柄が浮かびあがってくるのである。日本の現代の文化についてみれば、そこには過去から今日にいたるまでの歴史と、未来を展望する縦の系列（文化の発展）と、東洋文化、西洋文化の影響、受容という横の系列（文化の交流）のなかにあり、さらに悲観的、楽観的説など、さまざまな主観的要素なども入りまじって複雑な様相を呈している。

文明の発達

著名な歴史家トインビーは、文明というものは容易な条件のもとではなく、むしろ困難な条件のもとで発生した、という仮説を立て、この仮説の正しさを明らかにするために、過去に文明が栄え、その後衰退した地点の例を次のようにあげている。

「かつてマヤ文明の活躍舞台であった地方は、いまふたたび熱帯性森林地帯になっている。セイロン島のインド文明はセイロン島の雨の降らない地域で栄えた。この地域はいま、インド文明の灌漑施設の廃墟がかつてここに栄えた文明の証拠として残っているが、全く不毛の地になってしまっている。ペトラとバルミラの廃墟は、アラビア砂漠の小オアシスの上に立っている。太平洋のもっとも辺都な地点の一つであるイースター島はその石像群によって、かつてポリネシア文明の中心であったことが立証されている。北アメリカの歴史において、もっとも重要な役割を演じたヨーロッパ人植民地開拓者が入植したニュー・イングランド地方は、あの大陸のもっとも荒涼とした、またもっとも不毛な地方の一つである。最近まで瘴気（しょうき）に満ちた荒野だった。ローマのカンバーニヤ地方のラテン諸都市が、ローマの興隆に大きな貢献をした。これに反して、好適な条件に恵まれた、カプア地方は、一向に振るわなかった。さらに、ヘロドトス、オデッセイア、およびエジプト記から例を挙げる。生活の容易なニヤサランドの原住民は、遠く離れた、気候の厳しいヨーロッパから侵略者がやってくるまで、未開の野蛮人の状態にとどまっていた」^③。このようにトインビーは、文明というものは、容易な環境のもとではなく、逆境との戦いのなかから生まれたとするのである。

さてここで話題を現代文明に変えよう。日本は、戦後復興から四十年あまりの間に、まさに「ハングリー」な環境の中で、きわめて急速な経済成長をとげ、時計、カメラなど精密機器から、さらに自動車や家電からITなどのハイテクノロジーにいたるまでの分野で、世界のトップレベルにのし上がってきている。住宅問題などの実感の伴わない面もあるが、それでも経済成長によって、国民の生活は飛躍的に向上したといえる。しかし日本経済は、公害問題や、前に述べた自然環境破壊問題、貿易摩擦、生産の空洞化、人手不足、バブルの崩壊、格差の拡大などの困難な試練と課題をかかえている。

文化摩擦

経済成長によってなりあがった「強い日本」は、いま世界から袋叩きにされようとしているが、その原因は実は経済だけではない。国際社会のなかで生きようとしている日本は、集中豪雨の輸出が問題とされ、牛肉、オレンジ、米の輸入制限から、資本輸出問題、原油の高騰、外国企業やヘッジファンドの参入、サブプライムローンの問題などにいたるまで、経済摩擦に直面している。ところがこのように純粋に経済的な問題も、実は日本的な商習慣の問題である場合も少なくなく、したがって構造協議の対象とされ、その源は文化摩擦であるという側面がみられる。

前に、文化は地方文化から出発したと述べたが、それが国際間の問題になると挨拶の仕方、身振りなど、言葉はもちろん生活様式にしても、風俗、習慣にしてもまったく異なる場合だって少なくない。だから国際化とは、文明を理解吸収するだけでなく、他国の文化との差を知ることではないといけない。私たちは案外、地方の文化、日本固有の文化を世界に説明できるほど、日本の文化を理解していない場合が多い。それ以上に他国の文化を理解することは決して容易ではない。しかし、他国の文化を理解しないで私たちは国際社会で生きていくことができない。それほどまでに、経済摩擦の根源ともいえる文化摩擦の問題は大きいのである。

文化遺産

教育は、人間の社会生活に本来備わっている機能である。教育という機能のなかで、人間が次の世代に継承・発展させようと意図してきたのは、社会生活のルールなどのほかに、人びとが額に汗して働いた結果築きあげた成果、つまり文化遺産を主要な内容としていた。人間は前の世代までに築きあげた文化遺産を本能によって受け継ぐことができず、教育と学習によって受け継ぐ。そして受け継いだ世代の人間は、この文化をさらに発展させ、それを遺産としてさらに次の世代に受け継ぐ。これが人間の社会の発展でもある。

科学・技術と人間

ここでは、文化遺産のもっとも典型的な科学・技術の教育について触れる。

今日われわれは、「科学・技術革新」の時代といわれるほど、急速な科学・技術が進歩するなかで、その恩恵を受けて生活している。科学・技術の急速な進歩は、社会における生産力を高め、それを通して、生活を豊かにし、人間に物質的な幸福をもたらすことができる。しかし反面、科学・技術の進歩が社会のなかで特定の目的に利用されることがあり、テロや核戦争の脅威、環境破壊などによって、「科学」のために人間の生命がおびやかされたり、人間に不幸をもたらしたりする。

今日のこうした科学・技術の進歩と、その社会的利用の状況のなかで、科学・技術の進歩の成果を人間の幸福に役立てるために、研究者や技術者として働こうとする人びとばかりでなく、すべての人びと、とりわけ、教育が対象とする若い世代の人びとにとって、科学・技術そのものと、それととりまく情勢とに関心を持たざるを得ない状況になってきている。だから、科学・技術が急速に進歩し、それらの影響の大きい今日、科学・技術の教育は、単に科学・技術そのもののだけでなく、それらを取りまく周囲の状況を正しく把握する課題がとりわけ大きくなっているといえよう。それだけに今日の若者の「理科離れ」「応用力の不足」の状況は深刻であるといわざるを得ない。

- (注) 相山正弘著『人間教育の本質』福村出版 一九九三年 11～35ページ参照
- (1) 江原昭善『夢をかたち』富士通経営研修所 一九九一年 217ページ
 - (2) 小原秀雄『人(ヒト)に成る』大月書店 一九八五年 134ページ
 - (3) トインビー『歴史の研究3』社会思想社 一九七五年 390～391ページ
- (出典『相山人間学研究』第3号 二〇〇八年)

4 人間と教育

教育の起源

「教育によってはじめて人間になる」

「人間とは教育されなければならない唯一の被造物であります」「人間は教育によってはじめて人間になることができます」とは、ドイツの著名な哲学者

者カント (Kant, J. 1724 ~ 1804) の言葉である。人間と教育との関係をきわめて明快に説いたカントの、この短い二つの言葉のなかには、人間性のための教育に対する切々たる願いがこめられている。

人間は教育によって初めて人間になると同時に、教育は、人間のみの固有の営みであって、教育という営みは、人間以外の動物にはみられないのである。シートンの『動物記』などをみると、他の動物の世界にも、親が子に教え、導いていると表面上受けとられるような現象がみられるが、あくまでこれは、本能の営みであって教育的な営みであるとはいえない。

一般に動物の仔は、下等動物ほど親の姿に近い成熟した姿で誕生し、生まれおちて数時間以内に立ったり、歩いたり、泳いだり、といった親と同じ行動をとることができる。親と同じ行動をとるのにかなり手間のかかる鳥類でも、ひな鳥は、数十日間で巣を飛び立つことができる。けれども人間の赤ちゃんは生まれてから数か月経なければ立つこともできないし、約一か年かなければ歩くこともできない。人間の赤ちゃんは、それだけ未成熟な姿で生まれてくるのである。

人間以外の動物は、本能だけによって外界と対応しなければならぬから、こうした外界に早く対応できる先天的な能力を発展させ、それを遺伝的に継承してきているのである。ところが、人間の生活は前に述べたように本能だけによって支配されているわけではない。人間は、外界への動物的な対応から、人間的な対応へと、その対応関係を変化させ、動物のなかで、外界に対して、最も強い対応力を貯え、幾百世代、幾千世代にもわたってそれを継承・発展させ、本能のみに頼らない資質を貯えるにいたってきたのである。

こうして、人間は、その築きあげた外界への対応力によって、動物の一種でありながら、同時に動物をこえる存在に発展させたのである。しかし、人間が動物をこえる存在になったからこそ、逆に外界に対応する本能を一部退化させるという矛盾した結果を招き、そのために、社会からの保護、とりわけ教育が必要とされる、一面で弱い存在になっているといえる。人類が築きあげた文化遺産を、親がいかにも習得していたとしても、それは子にいつさい遺伝されない。子はすべて一から再習得し、さらに親をこえていかなければならないのである。だからもし社会的保護、とりわけ教育がなければ、単な

る「動物」に帰してしまい、その後たとえ人間社会に復帰しても、ほとんど人間性が開発されることはないであろう。

ルソー (Rousseau, J. J. 1712 ~ 1778) が、「わたしたちは生きはじめると同時に学びはじめ。わたしたちの教育はわたしたちとともににはじまる」と述べているのは、この意味においてとくに重要なことであるといえよう。さらに、最近では、誕生以前の子の発育というものが重視され、サリドマイド障害児や母体の風疹のように、胎児の発育にとって、その環境である母体の影響が大きいことが注目され、精神面でも胎教の重要性が叫ばれているほどである。

要約すれば、教育というものは、人間以外の動物にはみられない、人間だけの固有の営みであり、同時に、誕生とともにそれ以後欠かすことができない営みであるといえることができる。

教育の機能

人間は、生産力の発展による生活の向上と文化の発展に伴い、生産諸関係を変化させながら、社会的価値を次の世代に継承・発展させるという、社会生活に本来備わっている教育の機能をより意図的、組織的なものとしてきた。人類の歴史の発展とその過程のなかで、人間の生活や文化が一定の水準に到達してくると、これを次の世代に伝え、発展させようという意図がさらに強くはたらくようになり、意図的な教育がより組織化されてくることになる。そして、近世以前の社会においても貴族や僧侶の階級のなかでは、それが学校という形で組織化されはじめ、近代国家の成立とともに、国民的な学校制度が成立し、さらに、社会教育なども制度化されるようになる。こうして、今日の人間は、近代的な教育制度のもとに成立した教育機構によって、社会による一定の価値志向をとめないながら、教育されているのである。

このように、人間社会には、いつの時代にも、どここの場所においても、教育という営みが続けられてきたのである。教育は社会生活に本来備わっている基礎的な機能であり、社会的な価値を次の世代に継承・発展させるはたらくべきであり、人間社会成立の当初から今日にいたるまで続いている機能なのである。

無限の可能性 教育とは何か

この問いに答えることは決して容易なことではない。「教え、育てること」と答えてみても、それは、単に文字を解釈したにすぎず、教育とは何であるかという本質に触れた回答になっていないのである。

教育という語を歴史的にたずねてみると、孟子の『蓋心上篇』のなかに「得天下英才而教育之、三之樂也」（天下の英才を得て、これを教育するのは三樂なり）とあり、「教育」という言葉がみられる。その意味は、今日のそれと大差はない。

英語の education の語源は「導き出す」という意味のラテン語 educere であるといわれる。また、ドイツ語の Erziehung も本来「導き出す」という意味からきている。ヨーロッパでは外から「教える」というよりも、内に秘めたものを「導き出す」という意味で、education なり Erziehung なりの用語が使用されているのである。

東洋にも「導き出す」という思想は古くから存在していた。日本にも以前から伝わる「易」を例にあげてみよう。易は一般に「占い」として知られているが、その本質は人生哲学であるといわれる。易のなかに「山水蒙」というものがあり、それは教育について説かれているという。山から出てくる水は、本来たいへんきれいなものである。このきれいな水は、よごすこともできず、きれいなままですらに大きな流れに変えることもできる。いずれになるにせよ、これが教育であるというのである。そして、一方、山というものは徳をあらわし、水は知をあらわすという。山があつて水が湧き出るように、徳があつてこそ知恵が生かされるというのである。そして蒙は、つたかずらが木におおいかぶさっていることをいう。教育というものは、おおいかぶさっているものをとり除き、本来の姿と木ののびる可能性を開発することにあるという。

「山水蒙」には、このように深い意味があり、詰め込み教育や受験準備教育の弊害が問題とされる今日においても、教育というものの本質に深くせまる課題を提起している点で、積極的な意義がある。教育が対象とする人間は、本来、汚れない美しいものであつて、のびる可能性を秘めたものであり、教育はその美しいものの、のびる無限の可能性を導き出し、おおいかぶさっている障

害物を取り除いて、人間を形成するものであるという。

教育について、このように内にあるものを「導き出す」という考え方は、西洋にも、東洋にも、共通する発想であつたのである。

「導き出す」思想

次に西洋の場合をみてみよう。education なり Erziehung の語源が、「導き出す」という意味からきているという基礎には、西洋におけるヒューマニズムを基調とした教育思想史からの発想があつたことはいうまでもない。

中世のヨーロッパでは、ローマ教会の教義に対して、絶対服従をせまられ、個人の欲望はいっさい禁圧されていた。人間は、罪ある愚かなものであり、神の救いを必要とすると思われた。子どもも、罪あるもの無知なものと思われ、アメとムチとによってきびしく教育されねばならないとされた。このような児童観、教育観が中世ヨーロッパにおいては支配的であつた。

近代ヒューマニズムの基調となつた近世ヒューマニズムは、中世の児童観、教育観を根本的に変えた。そのよりどころとなつたのは、「古典に帰れ」のスローガンのもとに人間尊重の精神を啓発したルネサンスと、ローマ教会絶対視に対する抵抗を示した宗教改革とであつた。教育思想の面でみれば、問答法または助産法によって知恵を「導き出す」ソクラテスや善のアイデアを探求するプラトンなどのギリシア的ヒューマニズムを原型とするものであつた。

古代ギリシアでは紀元前六世紀頃から、トロフエー (τροφή || 養育) という語のほかに、パイディア (paideia || 子どもを導く教育) という用語が使用され始めたといわれる。導くという概念の発生は人間を「善い」方向に引き上げることであり、何が「善い」のかという「徳」の尺度が生まれたことを意味するのである。そのためわが国ではこのパイディアという言葉を使った単に教育と訳さないで、教育は人間の徳とのかかわりなしにはあり得ないという意味からとくに「人間の教育」と訳されている場合が多い。ところで古代ギリシアは、アテネやスパルタに代表されるポリスと呼ばれる都市国家群から成り立っていた。アテネでは、奴隷制を基盤としながらも、市民による直接民主主義が成立しておりソクラテスやプラトンという有名な哲人も活躍していた。スパルタでは、いわゆるスパルタ教育という兵士の教育が行われ

ていた。ソクラテスは、弟子と問答することによって知恵を「導き出す」ことをその教育方法としたので、「問答法」とか「助産法」などと呼ばれた。この方法で教育された弟子のプラトンは、その著書のほとんどがソクラテスを主人公とする発答形式をとっている。プラトンはソクラテスの発問の形で「人間の善とは何か」などという問題から教育へのつながりに発展し、基本的には善のアイデアは「エロス」との関係において考えられることになり、人間の教育もこの関係を抜きにしては考えられないというのである。要するに、プラトンは、パイディアが「人間の教育」の問題であることを示した最初の思想家であるといわれている。

次に目をローマに転じてみると、帝政時代のローマにおいて理想的人物はいわゆる「弁論家」であった。弁論家は単に弁舌さわやかだけでなく、教養によって裏づけられた円満な政治家で、説得力のある話術を身につけている人物を指すのであって、要するに人間として卓越した人物を意味していた。この理想像の「善さ」を教育的に追求したのは「弁論家原論」(Institutio Oratoria)を著わしたクインティリアヌス(Quintilianus, M.F. 35? ~ 96?)であった。これはほんの一例にすぎないが、古代ローマにおいてもパイディアの思想が存在していたといえるのである。

ギリシア、ローマのヒューマニズム精神にその起源を求めたルネサンスの背景のもとで『大教授学』を著わしたコメニウス(Comenius, J.A. 1592 ~ 1670)は、すべての人の権利の平等を原則に、未来の社会の担い手として、すべての子どもに学校教育の機会が与えられなければならないと主張した。コメニウスや、ベーコン、ロックら先人の思想を受け継いで自然主義の教育を提唱したのは、前出のフランスの啓蒙思想家ルソーであった。

ルソーはその著『エミール』の冒頭で「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべて悪くなる」と述べ、子どもの自然性を基本原理とし、その自然な発展を保護し、それをさまたげるのを除去するのが真の教育であると主張した。子どもの生活にはおとなと違った意味があると唱えたルソーは、「子どもの発見者」であるといわれる。

ルソーの自然主義の提唱を、教育実践を通じてヒューマニズムの本質にせまったのは『隠者の夕暮』『リーンハルトとゲルトルート』などの著者ペスタ

ロッチー(Pestalozzi, J.H. 1746 ~ 1827)であった。ペスタロッチーは教授法の分野で、直観教授法を確立した教育者として知られているが、直観し、体験し労作する生活によって、全人間が開発されなければならないと主張した点がむしろ強調されるべきであろう。

ペスタロッチーのヒューマニズムの教育思想は、幼児教育の道を開拓したフレーベル(Fröbel, F. 1782 ~ 1852)や教育学を科学として確立する方向を示したヘルバルト(Herbart, J.F. 1776 ~ 1841)らに受け継がれ、さらに一九世紀後半以後、社会的ヒューマニズムの教育思想として多面的に展開されていくことになる。

こうして、ヒューマニズムに根ざした教育思想は、それぞれの時代を反映して、それぞれの特徴をもって展開されてくるが、近代ヒューマニズムの基調となった近世ヒューマニズムの人間観、教育観、とりわけ子どもの、のびる無限の可能性を信頼した児童観は、子どもを「罪ある者」「愚か者」と見ていた従来の児童観のコペルニクスの転回として注目されているのである。

教育の本質

これまで、子どもの持つ無限の可能性を信じ、その可能性を最大限に伸ばしてやるという子どもの側、教えられる側の立場に立つことの意義について触れてきたが、一方、教育というものは、基本的にはいつの時代においても、人間(社会とおとなの側)が人間(子どもの側)にはたらきかけて行う人間形成作用が含まれていることは間違いない。

人間(社会とおとなの側)が、対象とする人間(子どもの側)にはたらきかけるとした場合、社会の後継者を養成するという意味から、前にも述べたように当然のことながら一定の方向をめざす意図がはたらくことになる。しかし、人間形成作用全体からみれば、ルソーの自然の「教育」のように、人間の意図をまったくはたかせない場合もある。

さらに今日のいわゆる「情報化社会」のなかでは、とくに無意図的な、社会による人間形成作用も否定できない。クリーク(Kriek, F. 1882 ~ 1947)などのように、無意図的な人間形成の作用を「教育作用」の一つの類型とみなす見方も存在する。このような広い意味の「教育」については、これを形成

と呼び、教育というものについては、意図的な人間形成に限定する狭義の見方をするほうがその本質を解明する上で適切であろう。それは、われわれが人間の教育を抽象的一般論として論議するのではなく、今日の制度・政策のもとにおける教育現実のなかで明らかにしようとするとき、教育における意図の意義がむしろ強調されるべきであろうと思われるからである。

では、教育を意図的な人間形成と限定して考えた場合、いったい何が意図されるかが問題となる。意図には当然一定の価値観が伴う。山から流れ出た清水を、本来のきれいなまままで大河の流れにすることもできるし、汚い流れに変えてしまうこともある。同様に、人間は生まれたとき、汚れを知らない美しいものであつて、それを美しいままでのばすのも、汚れた存在にするのも教育次第であるという。それは、教育が意図する価値観によるものである。

いずれにしても、教育の意図には、一定の価値観を伴うわけであつて、望ましい価値観とは、人間の幸福のために資するものであり、それは、人間の知的、道徳的、情操的、身体的に調和のとれた全面的な発達、いいかえれば全人的な開発がめざされるものでなければならない。

このようにみてくると、「教育とは何か」という問いに対して、だいたいの次のように要約することができよう。教育は、人間の社会生活に本来備わっている機能であり、社会的な価値を次の世代に継承・発展させる機能である。今日われわれがめざす教育とは、無限の可能性を導き出す、いいかえれば全面的な発達を意図した人間形成である、と。

参照 相山正弘著『人間教育の本質』福村出版 一九九三年 38〜48ページ
(出典『相山人間学研究』第2号 二〇〇七年)

5 人間の発達と教育

人間の発達

ここで、人間の発達の問題に触れてみたい。まず発達と教育の関係から始めよう。

前に、教育は全面的な発達を意図した人間形成であると述べてきた。ここでいう発達とは、教育の目的概念である。しかし、一方で教育は、つねに子どもの発達段階を考慮しなければならず、この意味では発達というものは、教育の方法上の問題となる。このように、発達は、教育の目的概念であると同時に、教育の方法上の問題でもあるというわけである。発達を教育の目的概念だけでとらえようとすれば、教育の過程がつかめないし、発達を教育の方法上の問題として限定しようとすれば、教育の意図が明らかにできない。だから、発達と教育との関係が、目的概念と、方法上の問題との両者の統一的な概念として把握される必要がある。

教育という営みは、未熟な低い人間的諸能力をいっそう熟した高い人間的な諸能力まで発達させるといことが、何らかの形で含まれている。だから、教育事象に接近しようとすれば「教育をする社会の方から教育を見るだけでなく、教育される被教育者の側から見るの」でなければならない。それは、被教育者を無視したのでは片手おちであるといったことではなくて、じつは社会からの接近そのものが、被教育者のことをさしおいては対象をつかんだことにならないという内面的・構造的な連関において必要なのである」。(小川太郎『教育科学研究入門』一九六九年p.40〜41)

発達と教育との関係のとらえ方をこのようにおさえた上で、そもそも発達とは何かという課題に論を進めていこう。発達には、身体的な発育、成長そのものをさす場合と、練習と経験によって得られる身体の機能の増進を含めた場合とがある。さらに、「歴史的・社会的文化の選択的な獲得による知的、道徳的、美的、身体的な変化の過程を発達という」(勝田守一他『岩波小辞典教育』一九五六年p.189)場合もある。教育の立場では、成長、成熟という生態的な変化の過程を発育と呼び、それを基礎としながら、文化的な価値を付与するものを発達と規定して区別している。子どもの発達をピアジェ(Piaget, J. 1896〜1980)は「社会化」の過程としてとらえ、ワロン(Mallou, H. 1879〜1962)やヴィゴツキー(Vygotskii, L. S. 1896〜1934)は「個性化」の過程としてとらえており、「一見正反対のようにみられるが、社会化も個性化も自他未分化の段階の相補的な側面としてとらえられるべきであろう」。

ところで人間の発達には一定の節がある。「アヴュロンの野性児」や最近疑問視されているが「狼に育てられた子」は、人間社会に復帰してもほとんど言語を習得することができなかった。しかし一八二八年、ドイツのニールンベルグの小高い丘の古城の地下牢のなかで発見されたカスパー・ハウザーは例外であった。カスパー・ハウザーは、一定期間人間社会のなかで生育した形跡があり、その後社会から隔絶されていたため、救出されてからドイツ語はもちろん、ラテン語をも習得し、法律家の法律書記を務め、自叙伝まで書く超人的な能力を発揮した。

ハヴィーガースト (Havighurst, R. J. 1900 ~ 1991) によれば、人間の発達過程で言語の習得には一定の決定的な時期があり、その時期を逃してはもはや言語の習得は永久に不可能になるといわれる。また幼児・児童期にバイリンガル能力を身につけた子はバイリンガルのまま十一歳を通過するとバイリンガル能力は大人になっても残るが、十一歳前に帰国するなどしてバイリンガル環境がなくなると大人になったときバイリンガル能力は全く失われてしまうといわれる。このように人間の発達過程には一定の節があり、それは発達段階と呼ばれている。

発達段階の区分の仕方は、おおよそ次の三つの形がみられる。第一は、胎児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老人期などに区分される、いわゆる外的な教育制度の年齢を指標する区分の仕方である。第二は、口唇期、肛門期など、人格全体から抽出された特定の精神的機能の発達の区分の仕方である。第三は、たとえばピアジェの「群」と「束」という構造のモデルとしてのとらえ方や、レオンチェフ (Leontiev, A. N. 1903 ~ 1979) の脳の機能的器官による「活動の一般的構成」としてのとらえ方、ワロンやヴィゴツキーらの再体制化の過程としてのとらえ方などである。

いずれにしても、発達段階は下位から上位にすすみ、諸段階の順序は一定である。前にも述べたように、教育は、この発達段階をさしおいては、対象をつかんだことにはならないのである。

遺伝と環境

人間の発達には、教育ばかりでなく、広く外的な要因、つまり自然的、歴史的、

社会的要因によって規定される。発達は内面的なものを含むが、外から規制される面も含む。発達を外から規制する事象を総称して、広い意味でこれを環境という。

環境が問題とされるようになってきたのは、二十世紀初頭の「遺伝か環境か」という生得説、後天説の論争からであった。この論争の背景には、歴史的に長い間展開されてきた哲学的認識論の背景があった。それは、デカルトの「生得観念」説や、カントの「先駆的範疇」や「先駆的図式」に代表される生得説と、ロックやルソーらに代表される経験論との論争であった。さらにダーウィンの進化論による生物学的遺伝の理論もその一つの背景をなしていた。

ドイツの心理学者シュテルン (Stern, W. 1871 ~ 1938) は、遺伝と環境の双方の影響を認める輻輳説を唱えた。しかし、「輻輳」というとらえ方で単純化してしまったため、「発達の具体的な事実のなかで遺伝と環境の役割の詳細な分析を妨げる結果を招いた」(中内敏夫他『現代教育学の基礎知識』一九七六年)といわれる。

ゲシュタルト心理学のコフカ (Koffka, K. 1886 ~ 1941) は、成長あるいは成熟としての発達と、学習としての発達という二つの発達の形態を考える二元論的な考えから出発した。しかしコフカの考えは、発達と教育との関係の問題提起をした点で一定の評価をされている。

ゲゼル (Gesell, A. L. 1880 ~ 1960) は、有名な双生児の階段のぼりの研究にみられるように、成熟説に傾いてはいるが、「成熟による発達が学習経験により、いわば軌道修正を受ける」とする。

ピアジェは、前に述べたように、子どもの発達を「社会化」の過程としてとらえ、人間が環境に対して必ずしも受け身ではなく、能動的に環境にはたらきかけ、環境を同化させる側面を指摘し、環境との間に均衡のとれた関係が成立していく過程が発達であると考ええる。

旧ソビエトの心理学では、環境に対する主体の重要性を認めるが、それよりも、遺伝的なもの、生得的なものとみられるものも、成熟によって自然に発現するのではなく、そのおかれた歴史的、社会的環境によって支配を受けていると考えられている。レオンチェフは「歴史的に形成された人間の特性、能力および行動様式を個人が再生産することによって、先行世代の精神的な

発達を成果を個々人が習得し、わがものにする」という原理を構築した。そしてレオンチェフの原理は、ヴィゴツキーの教授Ⅱ学習理論に展開されるのである。

こうして、遺伝と環境の関係の問題は、多くの発達理論の蓄積によって今日の水準に発展したといえるのである。

認識過程の基礎

条件反射

教授Ⅱ学習の過程は、教授者（教師）の側の教授と、学習者（子ども）の側の学習とが有機的に統一された、人間形成過程であるといえよう。しかしながら、現在の教育学では、この教授Ⅱ学習過程が、必ずしも十分に科学的に解明されているとはいえない。ことに、大脳生理学の業績、哲学・論理学における認識論、心理学における発達理論、学習理論などから、教育学は学ぶべき点が多い。ここでは、まずこうした隣接諸科学から学びつつ、教育学としての教授Ⅱ学習の過程への科学的アプローチを試みたい。

教授Ⅱ学習の過程の解明にあたっては、まず学習者の主体的条件、とりわけ身体的、生理的条件の把握から始めるのが妥当な道であろう。有名なパブロフ（Pavlov, I. P. 1849～1936）の説く条件反射という現象は、きわめて簡単な現象である。林麟は、これを次のように説明する。

「犬に食物を与えると、犬は唾液を出す。人間でも同じである。ただそのままではよくわからないから、犬の唾液腺で、頬の内面へ出口が出ている耳下腺というものを、手術によって外の頬の方へ出口をまわして縫っておく。この手術はそうむずかしいことではない。こうしておく、犬に食餌を与えながら見ていると、唾液は頬の外へ滴々として落ちてくるからよくわかる。

さて、こうしておいて、唾液を目標として、次のような実験をやってみる。まず犬になにかベルの音を聞かせる。あるいは突然に光を見せる。あるいは犬の皮膚に針をさして刺激をしてみる。犬はこんなことで唾液を出すわけではない。ところが、ベルの音を聞かせると同時に、食餌を与えて唾液を出させる。こういうことを何回もやったあとで、今度はこのベルだけを聞かせてみる。すると犬は、少しも食餌が与えられないにもかかわらず、必ず唾液を分泌する。つま

り初めは無関係であった刺激が、いまは唾腺の活動を起こさせたのである」。

食物を口に入れると唾液を出すという現象は、動物が生まれもっている生理現象で、これを反射または無条件反射という。ベルの音を聞かされて唾液を出すのは、動物が生得的にもっている反射ではなくて、ベルの音と食物とが有機的に結合されるような一定の実験を行ったあとでしか起こらない、そして実験を中止すればしばらくして消滅する、いいかえれば環境のなかの一定の条件のもとで獲得される反射であり、これを条件反射という。

では、この条件反射は、身体のみで、どのような生理現象として起こるのであるか。目、耳、鼻など感覚諸器官から入った外界からの刺激は、求心性の神経を通じて、信号として大脳皮質などに伝えられる。その感覚中枢で受けとめられた信号は、運動中枢に連絡され、その運動中枢が唾液反射の命令を発するものとみられている。無条件反射の場合、感覚中枢と運動中枢との間に存在する連絡は、動物と外界との恒常的つながりに基づいて、進化の過程で遺伝子の一部ともなっているものである。条件反射の場合、この連絡は、動物と個体が環境のなかの一定の条件のもとで獲得した、不可変なつながりに基づいており、動物と外界との一時的なつながりの反映であって、遺伝とは関係しない後天的なものである。したがって、条件反射の現象は、環境のなかで後天的に獲得される現象であって、すべての精神活動、とりわけ認識活動の基礎をなすものである。

コーンフォース（Cornforth, M. 1909～1980）は、これについて次のように述べる。「精神活動の土台は、条件反射の形成である。精神生活は、諸事物が動物にとってある意味をもちはじめるときにはじまる。そしてそのことは、動物が、条件反射の形成の結果として、一つの事物と他の事物とのつながりをつけることを学びはじめるときに起こる。ある事物は、その存在と他の事物とのつながりを学んだとき、動物にとって意味をもつ」（コーンフォース『認識論』一九五五年p. 25）こうして、すべての認識活動は、条件反射を基礎として始まるのである。

感覚・知覚

大脳生理学では、条件反射が大脳の一部のはたらきによって起こることを

すでに明解にしている。さらにベルの音を聞かされて唾液を出す犬の条件反射は、大脳皮質などで行われることなどもわかつている。このことは大脳皮質などを外科手術などによって除去した犬が、生命を保ち、唾液反射を起こしながら条件反射の現象を一切起こさないことから、必要十分に証明されているといわれる。

一般に条件反射を基礎として発展する精神活動は、高等動物では大脳皮質などを中心とする神経系統のはたらきによる。「大脳皮質は、外界に対する最も複雑な諸関係の器官である」とパプロフはいう。パプロフは、精神活動の物質的基礎、つまり身体的基礎は大脳皮質のはたらきであることを、生理学の立場から明らかにした。さらにその後の研究によって、条件反射は、皮質下中枢（脳幹網様体）も関与していることがわかってきた。ところで、時実利彦の『脳の話』（岩波書店 一九六二年）などが注目を集めているが、教育学としては、認識論の科学的基礎を解明している点で、条件反射の大脳生理学理論から出発すべきであろうと思われる。

そこで、まとめていえば、外界との可変的なつながりを形成する条件反射は、大脳皮質などを中心とする神経系統の活動である。条件反射の積み重ねによって、外界から受ける刺激は神経系統のなかで信号としてはたらき、それによって行動を規制するはたらきが生ずる、という質的な変化が起こる。このはたらきが、一般に意識と呼ばれるものである。意識の最も基本的なものは、感覚的意識つまり感覚である。すなわち、感覚は、条件反射の形成によって、動物が感覚器官で受ける刺激が、その動物に信号としてはたらくときに生まれる初歩的な形態である。

パプロフは、感覚は客観的な外界から受けた主観的な信号であり、その感覚のなかに信号の体系つまり信号系が形成されているとする。動物は、この信号の形成によって、生活のなかで経験を積み、その経験から学ぶ能力を身につける。このような感覚的意識の過程で感覚は知覚へと移る。知覚とは、外界の「複合した関係を持った複合した対象を感覚的に気付くこと」（前掲書『認識論』p. 30）であり、感覚から生まれる信号系の発展過程である。感覚・知覚は、認識の感性的な段階である。

言語と思考

認識の感性的な段階から理性的な段階に発展させるには、一つの大きな飛躍がある。そこには、具体的に特殊なものから、一般的で普遍的なものを抽出する機能が飛躍的に発展しなければならぬ。その飛躍的な発展は何によって可能となるのだろうか。それは、前に述べたように人類だけがもっている言語によってであるといわれる。もともと、言語は、道具による生産と、それによる社会形成の過程で、人間の脳（とりわけ大脳皮質など）によって社会的伝達の手段として発展したものである。

パプロフは、言語を「信号の信号」系つまり第二の信号系とみなした。第一の信号系は具体的に主観的な感覚・知覚であったが、第二の信号系は、これを一般化し、抽象化し、普遍化する言語である。この言語の機能は、人間にとってさらに思考を生み出す。逆にいえば、人間は言語なしには思考することはできない。そして思考は、その結果として観念を生み出す。観念は、事物の現象を把握する知覚から、それらの事物の相互関連や原因、結果などにいたる思考の結果生まれるものである。これを認識の面でいえば、この段階ではじめて理性的な段階に到達したといえるのである。

しかし、認識はまず感性的な段階があり、それが完成してしまってから、理性的な段階に到達するという機械的なものではない。感性的な段階がいくらか成立すると、理性的な段階も成立しはじめ、そして感性的なものも依然として成立をやめないのである。さらに理性的な認識の段階から出発して、個々の具体的事物とその関係を類推することもできる。論理学で、前者を帰納法と呼び、後者を演繹法と呼ぶのは周知のことである。

人格の完成

教育という作用には、おおざっぱにいうと「人格の教育」にあたる側面と「知識・技術の教育」にあたる側面との二つの側面がある。最近、「人格の教育」にあたるドイツ語のエルツィーウンク（Erziehung）やロシア語のボスビターニユ（Воспитание）が「訓育」と訳され、「知識・技術の教育」にあたるドイツ語のビルドウンク（Bildung）やロシア語のオブrazovanie（Образование）が「陶冶」という訳語が使

用されている。

訓育という言葉は、もともとせまい意味で、道徳的な行動様式を習慣づけるという意味に解されていたが、最近では広く、「人格の教育」という意味に理解されている。陶冶にも「人格陶冶」などという用法があり、必ずしも用語の規定が明確になってはいない。英語の education や日本語の「教育」は、この二つの両側面を備えた包括的な意味に用いられているが、包括的な意味というだけに「人格の教育」そのものが包括的な概念であるというので、「教育と陶冶の理論」という用語も使用されているのである。このように、用語、訳語ともに、その意味が十分定着しておらず、若干あいまいであるが、いずれにしても、教育作用には、「人格の教育」にあたる「訓育」の側面と、「知識・技術の教育」にあたる「陶冶」の側面との二つの側面があることだけは間違いない。

けれども、訓育と陶冶とは、教育の領域概念ではない。学校教育のなかで、領域概念として考えられているのは、教科指導と生徒指導（生活指導）とである。生徒指導（生活指導）は、教科外の活動の指導といわれるように、教科指導の領域外の指導領域である。ところで、われわれが教育作用にせまろうとするとき、訓育と陶冶の二つの側面を区別して、それぞれの特性を考慮し、しかも両者を統一的に把握することはきわめて重要である。

今日の学力問題も、このことをぬきにしては考えられない。川合章は今日の学力問題の第一の特徴として「子どもたちが学習意欲を失いがちである」点を指摘して次のように述べている。「教師の授業を少々くふうしたくらいでは追いつけないような生活意欲、学習意欲の喪失傾向をどうするかという点にせまることなしには、今日の学力問題は語れない。かりに道徳を人間の生き方の基本と規定しようとするれば、今日の学力問題はじつに同時に道徳問題だという点に大きな特徴がある」。（川合章『子どもの発達と教育』一九七五年 p. 74）

訓育と陶冶の問題は、同次元で論ずるべきではないが、両者を統一とした、つまり、ほんものの知性に裏づけられた道徳こそが、包括的な意味での「人間の完成」につながるといえよう。

全面的な発達

「教育は人格の完成をめざし……」とは「教育基本法」第一条の規定である。「教育基本法」は、法的には「憲法」第二十六条の「教育を受ける権利」をはじめ、国民の生存権、自由権など基本的人権の規定を受けて構成されている。

「教育基本法」第一条は、人格の完成をめざす要素として次のように続く。「平和的な国家および社会の形成者として、必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とあり、これを受けて第二条で五項目の教育の目標をうたっている。

（教育の目標）

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

三、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

四、生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

この教育目標には、「平和的な国家及び社会の形成者」となるための人間が、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養う」知的、道徳的、情操的、身体的資質、「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養う」自主・自律という民主主義の精神を理解し、実践できる資質、およ

〔出典『相山人間学研究』第四号 二〇〇九年〕

び「勤労と責任を重んじ」る資質「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」主体的な資質、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養う」環境保全に寄与する態度、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」愛国心に関する態度をそれぞれ調和的に兼ね備え、究極的には「人格」全体の「完成」をめざすという、いいかえれば全人的に開発が期待されているのである。ここでいう四の環境保全に寄与する態度と五の愛国心に関する態度については平成十九年十二月の教育基本法の改正によって新しく挿入された内容である。

このように、「教育基本法」第二条の教育目標一では、古くからいわれた「真善美」とか「知情意」とか「心身」など、人格を構成する諸要素の全体的な発達、つまり知的、道徳的、情操的、身体的に調和のとれた全面的な発達が期されているのである。この人間の全面的な発達の概念は、今日における人間尊重の概念であり、社会的にそれを保障するためには、個人の価値の尊厳に根ざした民主主義の原理によって貫かれるべきであって、その価値観は、世界の人類の歴史と教育思想の発展のなかで、一つの集大成された今日的意義をもつ概念である。

しかし、現実的には、今日の教育政策と入学試験制度のもとで、テストのためだけの「知識」が強調され、「自分さえよければ」という利己的な考え方が生まれ、結果的には一面的にしか発達していない、あるいは、一面的にさえも発達していない状況は、全面的な発達の期待に反するものである。

とはいえ、一人ひとりの子どもはすぐれた特性をそれぞれそなえており、その個性を大いに伸ばすことは必ずしも一面的な発達を意図することにはならない。一面的な発達が基礎となつて全面的な発達へと発展する可能性があるからである。けれどもこれは単なる段階論ではなく、全人間的なものが開発されるようなすぐれた社会を築く、変革への過程のなかで、その主体となるものが究極的には、全面的な発達の可能性をひらくものといえよう。

あとがき

「人間になろう」冊子は、『人間教育の本質』の中から本書の名と内容にふさわしい部分を抽出しつつ新たに書きおろして編集したものである。

なお、『人間教育の本質』は、私が細々とすすめてきた教育学研究活動のもとに、執筆してきたものの中から、『人間教育の本質』のテーマにふさわしい内容の著書・論文を抽出し、その一部あるいはほとんどの部分を組みかえ、全面的に加筆、訂正をし、足りない部分については新たに書きおろして編集したものである。

本書に使用した著書・論文は次のとおりである。

- ・『アメリカ教育の現実』福村出版 一九七五（昭和50）年
- ・『教授Ⅱ学習の過程』秋元照夫、相山正弘編著『教授Ⅱ学習論と教科の指導』福村出版 一九七五（昭和50）年 所収
- ・『人間と教育』秋元照夫、相山正弘、田中俊雄、中井良宏、伊佐治大陸、甲斐進一共著『人間の教育』福村出版 一九七七（昭和52）年 所収
- ・『教授Ⅱ学習の過程』秋元照夫、相山正弘編著『教授Ⅱ学習と教科教育』福村出版 一九七九（昭和54）年 所収
- ・『子どもと環境』佐藤信雄、高桑康雄、勝野尚行、相山正弘編著『現代の教育』福村出版 一九八〇（昭和55）年 所収
- ・『明治初期におけるアメリカ教育研究』『相山女学園大学研究論集』第十三号 一九八一（昭和56）年
- ・『進路指導はどのように進めたらよいか』高野桂一、中留武昭編著『現代の教育原理』学術図書出版社 一九八二（昭和57）年 所収
- ・『人間の教育』相山正弘、甲斐進一、中井良宏、向井一夫共著『人間教育の展望』福村出版 一九八五（昭和60）年 所収

〔注〕相山正弘著『人間教育の本質』福村出版 一九九三年 48～58ページ参照

- ・「教職員の本務」『講座日本の教育経営 第五巻 教育経営と教職員』ぎょうせい 一九八六（昭和61）年 所収
- ・「学校の役割」田浦武雄、潮木守一、日比裕編著『現代教育の原理』名古屋大学出版会 一九九〇（平成2）年 所収
- ・「人間と教育」平光昭久、甲斐進一編著『教育の本質と目標』協同出版 一九九一（平成3）年 所収
- ・「環境と人間」梶山正弘、田中俊雄編著『地球環境と教育』ミネルヴァ書房 一九九二（平成4）年 所収

今回、本書をこのような形で刊行することをお許しいただいた各出版社、発行所に対しお礼申し上げる次第である。

巻頭言

著名人の名言・名文句から 学ぶ「人間になろう」②

学校法人 梶山女学園

理事長 梶山 正 弘

昨年の糸菊で、人間の赤ちゃんは未熟な姿で生まれてくる。「人間は学ぶことによって人間になる」と述べてきた。では、人間はいつから学び始めるのであろう。ルソーが、「わたしたちは生きはじめると同時に学びはじめる。わたしたちの教育はわたしたちとともににはじまる」と述べているのは、この意味においてとくに重要なことであるといえよう。

そして一つ一つの達成は終着を意味するわけではない。「生きることは生涯をかけて学ぶことである。」という言葉はローマ時代のセネカが「人生の短さについて」のなかで、ストア哲学の視点から生涯にわたって学ぶべきことを説いているのである。そして高村光太郎は「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」と述べて足跡によるさらなる

前進を促している。

こうして人間がある段階まで達成して得られるのは前回も触れたが、「理性」なのである。

「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。」とヘーゲルは述べる。ヘーゲルは、哲学の使命は、理性的なものを根源にまで立ち入って追求することであると同時に、現実的なもの、あるものを概念的にとらえることであって、彼岸的なものをたてることではない。つまり哲学は、世界を認識する学問であってそれを変革するものではないというわけである。

これに対して、「知は力なり」と知行合一を唱えたのはベーコンである。苦勞して得た知は力となり、これを達成できた喜びは、苦勞のし甲斐であって真の喜びである。成し遂げて得る喜びこそ、まさに本当の生きがいである。

五木寛之さんは本学園大学開学六〇周年の記念講演で「現代の日本人は心の不況、命・たましいのデフレに向き合っている。」と表現し、鬱、嘆き、悲しみを経験しなければ本当の喜びは生まれてこない。人間は嘆き、「悲しむことで成長し免疫力を向上させる」と話した。(〇九年十二月六日 中日新聞) まさに五木寛之さんが到達した究極の人間論である。

松下幸之助は「一人ひとりが人生の主役」であると述べ

ている。現実の社会には、さまざまな職業や地位があるが、どんな職業、立場にあっても、生き生きとして輝いて生きている人とそうでない人がいる。輝いて生きている人はそれぞれが人生の主役であり、主人公であるという自信と誇りと生きがいを持って自分の道を歩いているといえる。それは一人ひとりの尊さが真に打ち立てられる社会でしか達成されることではないのである。

一人ひとりの尊さが真に打ち立てられるためには、ペスタロッチーはこう述べている。「子どもの善への意志は、けっして言葉によって生みだされるものではない。それは子どもにたいする行き届いた配慮によって、そしてこの配慮によって子どものなかに呼び起されるさまざまな感情や力によって、生みだされるものである。」

ペスタロッチーの開いたシユタンツ孤児院にやってきた子どもたちは、貧しくて無知であるだけではなく、道徳的にも退廃しているものが多かった。ペスタロッチーは彼らと全生活をともにし、「彼らとともに涙をながし、彼らとともに笑った」。子どもたちの人間不信や道徳的退廃を克服するために、言葉による説教などはなんの役にも立たなかった。彼が子どもたちを愛し、日々の必要に配慮することによってのみ、子どもたちに人間への信頼の感情が生まれ、愛や善の徳が子どもたちの内面に根づくことを、身を

もって体験したのである。ここにペスタロッチー教育の原点があったといえよう。

教育の原点としてもう一つ思いつくことがある。最近学校でも、社会でも、職場でも生き生きとして輝いて生きている女性が多くみられるようになってきたといわれる。男女雇用機会均等法以来、女性の短大離れ、四大志向などの傾向、また反対に「草食男性」化に象徴されるようなさまざまな社会現象の変化が生まれてきているのである。

生き生きとして輝いて生きている女性が生まれてきているのは、女性を人間として教育してきた原理がようやく実ってきたからであろう。その原点は、成瀬仁蔵が日本女子大学校創設のために、『女子教育』のなかで第一に挙げたのは「女子を人間として教育すること」であった。

人間として教育することについて、宗像誠也は、「教育とは人間の尊さを打ち立てることである。」と述べている。人間の尊さとは人権の確立であると主張しているのである。ここまでを結論づけるとすれば、どうなるのであろうか。「人間は造物主が作った傑作である。だが誰がそう言うのか。——人間がである——」ガヴァルニはこうまとめたのである。

つまり私たちは限りなく「人間になろう」を追及していくということであろう。

平成二十二年度梶山女学園大学・大学院入学式後の講演要旨

梶山女学園のシンボルと教育理念

「人間になろう」

梶山女学園理事長 梶山正弘

「梶」という字

一、「梶」という字はいわゆる漢字ではなく日本で創られた国字である。意味はもともと日本固有の裸子植物門マツ綱マツ目スギ科のスギ属（学名 *Cryptomeria japonica*）を表しており、このなかには「ホンスギ、ヤマトスギ、エゾスギ」などの品種を含む四十種ある。

二、漢字の流入とともに日本でこの樹木を表す漢字がなかったため、よく似た植物を表している「杉」の漢字を当てたのが一般的となっていた。もともと漢字の「杉」はシダ植物門にあてた中国の文字であって日本のスギを表してはいなかった。ただ日本のスギを英語では Japanese Cedar という。いずれも植物分類体系からみれば誤りであるが、言葉というものは一般に通用していれば必ずしも誤りであるとはいえない。

三、「梶」は日本の人名、地名、神社名や地蔵の名前など古くから固有名詞に多く使用されてきた。例えば、大伴家持の和歌に「梶の野にさ躍（おど）る雉（きじ）ひちしろくかな哭（ね）にしも泣かむ隠（こもり）妻かも」（万葉集十九卷四一四八）などがあり、万葉時代の歴史を後世にということ、平成十三年、富山県高岡市の伏木中学校正門に「梶の森公園」が完成し、上記の歌の歌碑が建てられた。また出雲国風土記にラン科の植物の名として「梶」の文字が登場する。また平成九年度の大河ドラマのなかで毛利元就の養母としてお梶の大方殿が登場した。

四、さて最近中国では教育部の要請により二〇〇五年から「峠」「井」など使用頻度の高い日本の国字三十三文字が漢字として認められ、

「梶」もその中に入っていて表意文字である「杉 shan 1」とは異なる、現代中国人の観点から表音文字として「chang 1」という発音が当てられている。

学園章

現在梶山女学園各校の校章の基本となっている学園章。この学園章は大正十年に在籍していた生徒から公募され、当時三年生の木全俊子さんの作品が選ばれて制定されたものである。中央の三角と縦の線は「梶の樹」を、縦の線と外円は「山」を表している。三角は教育の目的である「知育・徳育・体育」の三方向を表し、中央の線は三方向を一貫してさらに外円のごとく十全円満な情操の発達を期す学園の理想を表現し、上部の少しあいているところは、なお無限に向上発展する意を示したものである。

沿革 （梶山女学園のあゆみ）

梶山女学園は、一九〇五年に梶山正式・いま夫妻が開校した名古屋裁縫女学校をその起源とする。

以来、高等女学校、専門学校を設置、そして戦後の学制改革による中学校、高等学校の開校、大学の開学など、多くの困難を乗り越えながら、女性により充実した教育を提供することを理想として、発展してきた。

一九〇五	名古屋裁縫女学校開校
一九一七	梶山高等女学校開校
一九二九	財団法人梶山女学園設立
一九三〇	梶山女子専門学校開校
一九三七	梶山女子商業学校開校
一九四二	梶山女子専門学校附属幼稚園創設
一九四七	梶山中学校開校
一九四八	梶山女学園高等学校開校
一九四九	梶山中学校を梶山女学園中学校に名称変更 梶山女学園大学家政学部開学

一九五〇	梶山女子専門学校附属幼稚園を梶山女学園大学附属幼稚園に名称変更
一九五一	財団法人梶山女学園を学校法人梶山女学園に組織変更認可
一九五二	梶山女学園大学附属小学校開校
一九六九	梶山女学園大学短期大学部開学
一九七二	梶山女学園大学文学部開設
一九七七	梶山女学園大学大学院家政学研究所修士課程開設
一九八七	梶山女学園大学人間関係学部開設
一九九一	梶山女学園大学家政学部に生活社会科学科増設、家政学部を生活科学部に名称変更、同学部食物学科を食品栄養学科に、被服学科を生活環境学科に、文学部英文学科を英語英米文学科に、それぞれ名称変更
一九九九	梶山女学園大学大学院家政学研究所を生活科学研究科に、食物学専攻を食品栄養科学専攻に、被服学専攻を生活環境学専攻に、それぞれ名称変更、また文学部国文学科を日本語日本文学科に名称変更
二〇〇〇	大学院人間関係学研究所修士課程開設、文化情報学部文化情報学科開設、食品栄養学科を再編し、食品栄養学専攻と管理栄養士専攻に専攻分離
二〇〇一	梶山女学園大学短期大学部閉学
二〇〇二	梶山女学園大学大学院生活科学研究科人間生活科学専攻修士後期課程増設、梶山女学園大学人間関係学部臨床心理学増設
二〇〇三	梶山女学園大学文学部を国際コミュニケーション学部（国際言語コミュニケーション学科、表現文化学科）に、生活科学部生活社会科学科を現代マネジメント学部（現代マネジメント学科）に改組し、生活科学部生活環境学科を生活環境デザイン学科に名称変更
二〇〇五	創立百周年
二〇〇七	梶山女学園大学教育学部開設

梶山女学園大学生活科学部食品栄養学科を管理栄養学科に、人間関係学部臨床心理学科を心理学科にそれぞれ名称変更
二〇一〇 梶山女学園大学看護学部開設

学園歌

長谷部親弘作詞 片山颯太郎作曲

ああ業は難し

ああ道は遠し

されど

励まば などが 成らざらむ

到らで やまむ 我ならず

この学園よ

我等が輝ける 希望を

容れて 余りあり

いざやいざ

撓まず 倦まず 朝夕に

真実の道を 踏みわけて

心を磨き 身を鍛ひ

光ある世の 人たらむ

金剛鐘

梶山正式初代学園長がカリフォルニア大学を訪れた際、美しい鐘の音とその響きを聴きながら静かに祈る学生や道行く人々の姿に感動し、「本校にもその鐘を」との思いから、ロンドンのジレット社のカリヨンという楽器を注文した。昭和六年に届いた鐘が覚王山の校舎に設置されたのである。この鐘は、唱歌「金剛石」のメロディを奏でることとなり、「金剛鐘」と名づけられた。以来金剛鐘は山添の各校では学園のシンボルとして奏鳴係の生徒の手で、毎朝八時三十分には奏鳴されている。

る。生徒たちはこれを聴きながら首を軽くたれて沈思黙考する。現在では星が丘キャンパスと日進キャンパスでも毎朝九時に録音されたメロディが流されている。

女子教育について

昭和六十（一九八五）年「男女雇用機会均等法」が成立し、女性に広く活躍の場が保障されるようになってきて、女子高校生の四年制大学志向の傾向があらわれ、大卒女性は就職して社会で活躍することが一般的になってきた。

さてこうした動向の中で今日、女子教育を推進する意義はどこにあるのだろうか。女子教育の意義について、特に女子大学における学生や卒業生の意見のなかで次のような見方が一般的であった。女子大学は女子学生だけの教育集団であるがゆえに女性がのびのびと、しかも主体的に活動でき、女性のリーダーが育つこと、つまり女性が自立的に学び生きていく力を身につけるのには共学校よりも現状において適しているというものである。この点は男女が入り混じっているグループでは、主として力仕事をするのは男の子、お手伝い役にまわるのは女の子という役割分担が自然に成立したりして、女性の真の男女同権がむしろ育ちにくいといわれている。

しかし女子教育についての、この見方は真に男女共同参画社会の内実が満たされるまでの女子教育の存在理由の過渡期論であると批判されたり、保護主義に支えられた女子教育ともみられた。しかしこれに対しては強い反対意見が唱えられている。女子大学は「いずれは共学大学への過渡期としての意味、役割ではなく、女子の高等教育の原点に立ち返って、その存在意義をいまにおいて再確認しながら前進する以外の道はなく、その教育的努力こそ、惜しみなくささげるに値するものと、私は思うに至っている。」（青木生子）つまり男女平等の世界史的な大きな潮流の中で、女子教育の果たすべき役割と意義は、女性の意識を高め、女性の潜在的な能力を開発し、この流れを正しく推し進めて行くことにこそあるという考え方である。

このように男女同権化の世界史的なうねりの中でこの流れを正しく

推し進めていくことに今日の女子教育の存在理由を見出した時、女子教育は今どのような内容の教育を探索していけば過渡期論を克服できるのだろうか。今女子教育に課せられている課題について、①人間教育と教育の中身の向上、②女性の地位向上の教育、③生涯教育の三つの点からみてみたい。

①人間教育は、今日日本の大学全体が課せられている課題であるといえるが、ほとんどの大学ではこの課題にたえずようとはしていないし、実際応えていないのが実情である。しかし「人間になろう」を教育理念として掲げ、人間教育を推進する本学園を始め、女子大学の多くは人間教育を標榜している。そのような女子大学が人間教育の目標を具現していく意味は今日の日本においてきわめて大きいのである。

②欧米やアジアでは女性の大統領や首相が多くみられ、政治や経済の世界でも女性が広く活躍しているが、日本では最近こそ女性の議員が多く登場しているが、女性の首相はまだないし、会社の女性社長もほとんど見られない。日本ではそれだけ女性の社会進出が遅れているのである。女子大学には、その機能を性別役割分業学習の場から、女性の社会進出のための意識改革の学習の場に転じることができる条件があるのであって、その条件を生かす点にこそ、女子教育の一つの重要な存在意義が認められるといえよう。

③生涯教育 女子大学における生涯教育は、もともと今日的な課題であり、生涯教育こそ、今日の女子大学の重要な存在意義があるのではないかとこの考え方である。本来は男女にとられず、生涯学習できる機会が保障されるべきであるが、男性と異なったライフサイクルをたどる女性がまだ多い現状においては、女子大学が生涯教育に果たすべき役割は、特に大きいのである。女子大学では、昼夜開講制、単位制大学・大学院などの制度的整備の措置を講じて女性の生涯学習を支援すべきであろう。

教育理念「人間になろう」

大学の星が丘キャンパスに南北の丘を結ぶ陸橋がかけられている。この橋を「人間橋」という。嵯山正式初代学園長は「橋を渡ったりする間

に自然と識(し)らず識らずに人間ができあがるものだと思う。」と述べて「古人の歌に・人となれ人・人となせ人・というのがある。人間完成、これこそ学園創設の精神であり、学校教育終局の目標である。諸君よ、人間になろう」と呼びかけた。

「人間になろう」とは

私は本学園の教育理念「人間になろう」という言葉について次の三つの視点から追究していくことが重要であると考えている。

まず第一は、「人間になろう」とは何かという理念そのものを追究する視点である。人類は生産手段を発達させ、生産力の向上によって豊かな生活を送ることができるようになった。今日では車、新幹線、航空機、グルメ、高級ファッション、携帯、パソコン、立派な住居など、物質的に豊かな生活を謳歌できる。また美術や音楽など豊かな精神的文化も創造し、観賞している。このような豊かな生活は、人間だけが創り出し、人間だけが享受しているのである。

しかし、突然経済不況に見舞われ、職を失い、生活、時には生命まで脅かされる状況も出てきている。さらに、一方で今、世界には貧しさゆえに飢餓に苦しんでいる人々が多くいるのも事実である。さらに人間は現在、環境破壊、自然災害、テロや戦争の危機、事件や事故など人間の生命さえも脅かされるというさまざまな危機的状況にある。あるいは生命の危機とまではいえないまでも、身体的にも精神的にも、人間らしくない状況におかれている例も少なくない。「人間になろう」は、そうしたいわば人間性の喪失状況から人間性を回復する、あるいは世界中の誰もが人間として豊かな生活を享受できるようにする、あるいは人間性の創出、人間尊重のヒューマニズムの精神を創造する視点であると考える。

第二に、「人間になろう」は人生を生きるにあたって、人と人との協力とつながりが重要であるという視点である。人間は幸福や福祉、平和などといった人類全体のめざすものが本来の目的であるはずなのに、とすると本来の目的が見失われがちな世の中である。だから今こそ私たちが人生を生きる本来の目的を果たすために、人と人とのつながり、つまり人類の協調・連帯という視点が重要であるといえるのである。

第三に「人間になろう」ということは他者からの呼びかけであるが、自らが自主的・主体的に「なろう」とする主体の決意表明を呼びかけられたものとしても理解したいという視点である。

著名な啓蒙思想家ルソーはその著「エミール」の中で次のように述べている。「私たちは弱いものとして生まれてくる。私たちには力が必要だ。私たちは何も持たずに生まれてくる。人間は教育によってつくられる。」つまり私たちは教育的な営みの中で主体的に学習していかなければ人間になることはできないというわけである。また、パスカルは「人間は一本の筆にすぎない。自然のうちでも最も弱いものである。だがそれは考える筆である。」として、人間は考えるからこそ、他の動物や植物とは異なるのだと言っている。つまり、人間は自ら考えることによって、学ぶことによって、はじめて人間になる、ということである。

では人間はどうすれば学びたいという気がわいてくるのであろうか。はじめは不思議だな、と思う気持ちを大切にすることであるし、日常の平凡なことと考えることでもそれを大事にし、そこに驚きと旺盛な好奇心を見出し、その発想から出発して深く考える想像力や創造力を育てたものである。苦勞して考え、それによって得た知は力となり、これを達成できた時の喜びは、苦勞のし甲斐であって、単なる快楽ではなくて真の喜びである。そして人のため、社会のため、人類のために貢献できることを、成し遂げて得る喜びこそは、まさに本来の生きがいであるといえよう。こうした生きがいを獲得した人間ははじめて人に対する思いやりを備えた人間性豊かな「人間になる」ことができるという視点であるといえよう。

「人間になろう」という教育理念は、単に個々人の修養の目標であると解されるだけでなく、人間性の復権、人間尊重のヒューマニズムの精神を、人類の連帯によって達成が目指され、「人間」という目標に向かって自らが実践する自覚と主体性の重要さが理解されてはじめて、「人間になろう」は、その今日的意義が明確化され、未来への課題と展望をきりひらかせるのである。私たちは、「人間になろう」という言葉の積極的意義をいくら強調しても、決して強調し過ぎることはないのである。

相山女学園の教育をたどる
ことば集 創立から現代まで

2011 年 4 月 発行

編集・発行 相山女学園歴史文化館

〒464-8622

名古屋市千種区星が丘元町 17-3 星が丘キャンパス

印刷 (有)三星印刷
